

福岡市

柏原遺跡群 III

— 柏原K・L遺跡・中世居館址と中世水田の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第157集

1987

福岡市教育委員会

福岡市

柏原遺跡群 III

— 柏原K・L遺跡・中世居館址と中世水田の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第157集



遺跡略号 KWK・KWL

遺跡調査番号 8045・8345

1987

福岡市教育委員会

序 文

住宅・都市整備公団は、福岡市南区柏原地区に68ha におよぶ開発事業を計画し、福岡市教育委員会に予定地内の埋蔵文化財の調査を依頼する運びとなりました。

委託を受けた福岡市教育委員会では、数度の現地踏査の上、昭和54年5月から発掘調査を開始し、昭和59年3月に完了しました。

本書は昭和57年3月～58年3月に発掘調査を実施したK、L地区の中世の居館址と水田の遺構と出土遺物を収録したものです。

調査によって『入来文書』に記載された蒙古襲来（弘安の役）の恩賚地である居館址と水田を明らかにし、文書の記載を考古学的に裏付ける重要な調査成果を得ることができました。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となるとともに、研究資料としても活用いただければ幸いです。

発掘調査から出土資料の整理・報告書作製に至るまで、住宅・都市整備公団、調査指導委員の先生方をはじめ、多くの人々のご協力、ご助言に対し深甚の謝意を表すものです。

昭和62年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例　　言

1. 本書は住宅・都市整備公団が計画した柏原地区の団地建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会文化部文化課（現・埋蔵文化財課）が1979年～1984年にかけて発掘調査を実施した柏原遺跡群の調査報告書の第3集である。既報告書は以下のとおりである。
「柏原遺跡群I－縄文時代遺跡F遺跡の調査－」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集）1983
「柏原遺跡群II－柏原古墳群の調査－」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第125集）1986
2. 本書の内容は柏原遺跡群の中でK遺跡の中世遺構と遺物、L遺跡の中世水田の報告である。
3. 本書の執筆には山崎純男、内野正、角浩行があたり、各分担は文末に銘記した。
4. 本書に使用した図の作成は山崎、内野、角、平川祐介、市橋重喜、宮田昌之、前島秀彌、横大路俊明、丸山明宏、福岡大学歴史研究部考古学班があたった。
5. 本書の図の製図は山崎、内野正、角浩行、永田留美によるものである。
6. 本書に使用した写真は山崎、松村道博によるものである。
7. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
8. 本書の編集は山崎がこれにあたった。

本文目次

第1章 序説	1
1. はじめに	1
2. 調査の体制	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. K遺跡の立地	3
3. L遺跡の立地	5
4. 周辺遺跡と歴史的環境	7
第3章 調査の概要	10
第4章 K遺跡の記録	11
1. 調査区の設定	11
2. 調査区の層序	11
3. 遺構分布の概要	11
4. 包含層出土遺物	15
(1)土師質土器	15
(2)陶器	16
(3)磁器	22
(4)石製品	27
(5)鉄製品	29
5. 方形区画溝Iと出土遺物	32
(1)遺構 (SD-01, 02)	32
(2)出土遺物	33
6. 方形区画溝IIと出土遺物	36
(1)遺構	36
(2)出土遺物	42
7. 方形区画溝IIIと出土遺物	53
(1)遺構	53
(2)出土遺物	55
8. 掘立柱建物と出土遺物	57
(1)掘立柱建物の分布概要	57
(2)掘立柱建物 (SB-01~57)	57

(3)出土遺物	90
9. 井戸と出土遺物	93
(1)井戸 (SE-01)	93
(2)出土遺物	95
10. 製鉄遺構	99
11. 土塙と出土遺物	99
(1)第1号土塙 (SK-01)と出土遺物	99
(2)第2号土塙 (SK-02)と出土遺物	117
(3)第3号土塙 (SK-03)と出土遺物	120
(4)第4号土塙 (SK-04)と出土遺物	122
(5)第5号土塙 (SK-05)と出土遺物	122
(6)第6号土塙 (SK-06)と出土遺物	124
(7)第7号土塙 (SK-07)と出土遺物	126
(8)第8号土塙 (SK-08)と出土遺物	128
(9)第9号土塙 (SK-09)と出土遺物	129
(10)第10号土塙 (SK-10)と出土遺物	130
(11)第11号土塙 (SK-11)と出土遺物	131
(12)第12号土塙 (SK-12)と出土遺物	132
(13)第13号土塙 (SK-13)と出土遺物	133
(14)第14号土塙 (SK-14)と出土遺物	134
(15)第15号土塙 (SK-15)と出土遺物	136
(16)第16号土塙 (SK-16)と出土遺物	138
(17)第17号土塙 (SK-17)と出土遺物	139
(18)第18号土塙 (SK-18)と出土遺物	139
(19)第19号土塙 (SK-19)と出土遺物	139
(20)第20号土塙 (SK-20)と出土遺物	140
(21)第21号土塙 (SK-21)と出土遺物	142
(22)第22号土塙 (SK-22)と出土遺物	143
(23)第23号土塙 (SK-23)と出土遺物	143
(24)第24号土塙 (SK-24)と出土遺物	144
(25)第25号土塙 (SK-25)と出土遺物	146
(26)第26号土塙 (SK-26)と出土遺物	146
(27)第27号土塙 (SK-27)と出土遺物	148

箇第28号土塹（S K-28）と出土遺物	150
12. その他の遺物	152
第5章 L遺跡の記録	153
1. 調査区の設定	153
2. 調査区の層序	153
3. 水田遺構	155
(1)水路	155
(2)水田	157
第6章 総括	159
1. 柏原K・L遺跡検出遺構のまとめ	159
(1) 方形区画溝と掘立柱建物	159
(2) 士塙について	165
(3) 製鉄遺構について	165
(4) 柏原L遺跡の水田地	166
2. 出土遺物からみた柏原K遺跡	166
(1) 柏原K遺跡出土土器・陶磁器類の組成について	167
(2) 出土遺物の分布より見た居館地の空間利用について	168
(3) 柏原K遺跡出土の土師質皿について	170
(4) 出土遺物より見た柏原K遺跡の存続期間について	171
第7章 柏原K・L遺跡をめぐる諸問題	173
1. 人来文書と柏原遺跡	173
(1) 人来文書にみられる地名	173
(2) 地名の比較検討	174
(3) 「屋敷」地の検討	177
元寇思賞地としての筑前国早良郡比伊郷(一)	190

挿 図 目 次

Fig. 1 柏原遺跡群の位置と周辺遺跡	4
Fig. 2 柏原遺跡群の立地と遺跡の分布	6
Fig. 3 K遺跡の地形と発掘区	8
Fig. 4 発掘区の設定	12
Fig. 5 遺構全体配置図	14

Fig. 6	包含層出土遺物実測図 I	17
Fig. 7	包含層出土遺物実測図 II	18
Fig. 8	包含層出土遺物実測図 III	19
Fig. 9	包含層出土遺物実測図 IV	21
Fig. 10	包含層出土遺物実測図 V	23
Fig. 11	包含層出土遺物実測図 VI	24
Fig. 12	包含層出土遺物実測図 VII	25
Fig. 13	包含層出土遺物実測図 VIII	26
Fig. 14	包含層出土遺物実測図 IX	28
Fig. 15	包含層出土遺物実測図 X	29
Fig. 16	方形区画溝（堀） I	32
Fig. 17	SD-02出土遺物実測図	34
Fig. 18	方形区画溝（堀） II	36
Fig. 19	SD-03・04・06・08・09断面実測図	37
Fig. 20	SD-10断面実測図	39
Fig. 21	SD-11断面実測図	40
Fig. 22	SD-03出土遺物実測図	43
Fig. 23	SD-04出土遺物実測図 I	44
Fig. 24	SD-04出土遺物実測図 II	45
Fig. 25	SD-04出土遺物実測図 III	47
Fig. 26	SD-05出土遺物実測図	49
Fig. 27	SD-06出土遺物実測図	51
Fig. 28	SD-07・10出土遺物実測図	52
Fig. 29	SD-13出土遺物実測図	53
Fig. 30	方形区画溝（堀） III, SD-14, 15断面実測図	54
Fig. 31	SD-14・15出土遺物実測図	56
Fig. 32	据立柱建物全体配置図	58
Fig. 33	SB-01・02・03・04・05実測図	60
Fig. 34	SB-06・07・08・09実測図	61
Fig. 35	SB-10・11・12実測図	63
Fig. 36	SB-13～18実測図	64
Fig. 37	SB-19・20実測図	65
Fig. 38	SB-21・22・23・24実測図	67

Fig. 39 SB-25・26実測図	69
Fig. 40 SB-27・28・29・30実測図	71
Fig. 41 SB-31実測図	73
Fig. 42 SB-32・33実測図	74
Fig. 43 SB-34実測図	75
Fig. 44 SB-35・36実測図	77
Fig. 45 SB-37・38実測図	78
Fig. 46 SB-39・40実測図	80
Fig. 47 SB-41・42実測図	81
Fig. 48 SB-43・44・45実測図	82
Fig. 49 SB-46実測図	83
Fig. 50 SB-47・48実測図	84
Fig. 51 SB-49・50・51・52・53実測図	85
Fig. 52 SB-54・55実測図	87
Fig. 53 SB-56・57実測図	88
Fig. 54 捩立柱建物柱穴出土遺物実測図	89
Fig. 55 柱穴出土遺物実測図	92
Fig. 56 SE-01(井戸) 実測図	94
Fig. 57 SE-01(井戸) 出土遺物実測図 I	96
Fig. 58 SE-01(井戸) 出土遺物実測図 II	97
Fig. 59 鋼鉄遺構実測図	100
Fig. 60 土器溜土塗(SK-01) 実測図	101
Fig. 61 SK-01出土遺物実測図 I	102
Fig. 62 SK-01出土遺物実測図 II	103
Fig. 63 SK-01出土遺物実測図 III	104
Fig. 64 SK-01出土遺物実測図 IV	105
Fig. 65 SK-01出土遺物実測図 V	106
Fig. 66 SK-01出土遺物実測図 VI	107
Fig. 67 SK-01出土遺物実測図 VII	108
Fig. 68 SK-01出土遺物実測図 VIII	109
Fig. 69 SK-01出土遺物実測図 IX	110
Fig. 70 SK-01出土遺物実測図 X	111
Fig. 71 SK-01出土遺物実測図 XI	112

Fig. 72	SK-01出土遺物実測図 XII	113
Fig. 73	SK-01出土遺物実測図 XIII	114
Fig. 74	土器窯土塙 (SK-02) 実測図	118
Fig. 75	SK-02出土遺物実測図	119
Fig. 76	土器窯土塙 (SK-03) 実測図	120
Fig. 77	土器窯土塙 (SK-04)・出土遺物実測図	121
Fig. 78	土器窯土塙 (SK-05)・出土遺物実測図	123
Fig. 79	土器窯土塙 (SK-06) 実測図	124
Fig. 80	土器窯土塙 (SK-07) 実測図	125
Fig. 81	SK-06・07出土遺物実測図	126
Fig. 82	土塙 (SK-08) 実測図	127
Fig. 83	土塙 (SK-09)・出土遺物実測図	128
Fig. 84	土塙 (SK-10)・出土遺物実測図	129
Fig. 85	土塙 (SK-11)・出土遺物実測図	130
Fig. 86	土塙 (SK-12)・出土遺物実測図	132
Fig. 87	土塙 (SK-13)・出土遺物実測図	133
Fig. 88	土塙 (SK-14)・出土遺物実測図	134
Fig. 89	土塙 (SK-15) 実測図	135
Fig. 90	土塙 (SK-15) 出土遺物実測図	136
Fig. 91	土塙 (SK-16)・出土遺物実測図	137
Fig. 92	土塙 (SK-19) 実測図	138
Fig. 93	土塙 (SK-20)・出土遺物実測図	140
Fig. 94	土塙 (SK-21)・出土遺物実測図	141
Fig. 95	土塙 (SK-22)・出土遺物実測図	142
Fig. 96	土塙 (SK-23)・出土遺物実測図	144
Fig. 97	土塙 (SK-24)・出土遺物実測図	145
Fig. 98	土塙 (SK-25)・出土遺物実測図	147
Fig. 99	土塙 (SK-26)・出土遺物実測図	148
Fig. 100	土塙 (SK-27)・出土遺物実測図	149
Fig. 101	土塙 (SK-28)・出土遺物実測図	150
Fig. 102	その他の遺物実測図 I	151
Fig. 103	その他の遺物実測図 II	152
Fig. 104	L遺跡調査区と水田範囲想定図	154

Fig. 105	L遺跡土層断面実測図	155
Fig. 106	L遺跡水田遺構実測図	156
Fig. 107	第I・II期建物配置図	163
Fig. 108	第III・IV期建物配置図	164
Fig. 109	柏原遺跡群周辺の小字名	175

図版目次

P L. 1	(1) K遺跡調査区西半部	191
	(2) K遺跡方形区画II全景	191
P L. 2	(1) 調査区西端部全景	192
	(2) S B-01 (南から)	192
P L. 3	(1) S B-04 (北から)	193
	(2) S B-04 (北から)	193
P L. 4	(1) S B-06 (南から)	194
	(2) S B-09 (東から)	194
P L. 5	(1) S B-21, 25 (南から)	195
	(2) S B-21 (西から)	195
P L. 6	(1) 方形区画II近景 (南から)	196
	(2) S B-20 (南から)	196
P L. 7	(1) S B-43, 45 (北から)	197
	(2) S B-43 (北から)	197
P L. 8	(1) S B-45 (南から)	198
	(2) S B-46 (北から)	198
P L. 9	(1) S B-43, 46 (北から)	199
	(2) S B-47 (南から)	199
P L. 10	(1) S B-32, 33 (南から)	200
	(2) S B-32, 33, 34 (南から)	200
P L. 11	(1) S B-31 (南から)	201
	(2) S B-31, S K-01 (東から)	201
P L. 12	(1) S B-42 (北から)	202

(2) S B-41 (北から)	202
P L. 13 柱穴断面 I	203
P L. 14 柱穴断面 II	204
P L. 15 (1) S K-27 (北から)	205
(2) S K-27 (西から)	205
P L. 16 (1) S K-26 (西から)	206
(2) S K-26 (東から)	206
P L. 17 (1) S K-24~26 (東から)	207
(2) S K-25 (南から)	207
P L. 18 (1) S K-07	208
(2) S K-19	208
P L. 19 (1) S K-07	209
(2) S K-02 (北から)	209
P L. 20 (1) S K-01 (東南から)	210
(2) S K-01 (北東から)	210
P L. 21 (1) S K-01 遺物出土状況	211
(2) S K-01 遺物出土状況	211
P L. 22 (1) S K-02 遺物出土状況 (北から)	212
(2) S K-02 遺物出土状況 (南から)	212
P L. 23 (1) S K-02 遺物出土状況 (西から)	213
(2) 漆器出土状況	213
P L. 24 (1) 方形区画溝III (S D-14, 15)	214
(2) S D-10~13 (南から)	214
P L. 25 (1) S D-11, 13 (南から)	215
(2) S D-14断面	215
P L. 26 (1) S D-03, 04 (北から)	216
(2) S D-03, 04 (南から)	216
P L. 27 (1) S D-10断面	217
(2) S D-10断面	217
(3) S D-06断面	217
P L. 28 (1) S D-14断面	218
(2) S D-15断面	218
P L. 29 出土遺物 I (青磁器)	219

P L. 30	出土遺物II（黃釉盤，青磁器）	220
P L. 31	出土遺物III（青磁器）	221
P L. 32	出土遺物IV（青磁器）	222
P L. 33	出土遺物V（鐵釘）	223
P L. 34	出土遺物VI（鐵製品）	224
P L. 35	出土遺物VII（硯）	225
P L. 36	出土遺物VIII（石鍋，砥石）	226
P L. 37	出土遺物IX（銅製品，高麗青磁，貨幣）	227
P L. 38	出土遺物X（擂鉢等）	228
P L. 39	出土遺物XI（擂鉢等）	229
P L. 40	包含層出土土師質土器I	230
P L. 41	包含層出土土師質土器II	231
P L. 42	包含層出土土師質土器III	232
P L. 43	S D-02, S D-04出土土師質土器	233
P L. 44	S D-04出土土師質土器	234
P L. 45	(1) S D-05出土土師質土器	235
	(2) S D-06出土土師質土器	235
	(3) 包含層出土土師質土器	235
P L. 46	(1) S E-01出土土師質土器	236
	(2) S K-01出土土師質土器I	236
P L. 47	S K-01出土土師質土器II	237
P L. 48	S K-01出土土師質土器III	238
P L. 49	S K-01出土土師質土器IV	239
P L. 50	S K-01出土土師質土器V	240

第1章 序 説

1. はじめに

1974年、住宅・都市整備公団による柏原地区の広大な面積の開発計画が市に提出された。この時点で、福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係は、計画地内における埋蔵文化財の分布調査を数回にわたって実施した。計画地内は雜木、雜草がおい繁り、また、開発予定面積が約68万m²と広大であり踏査には困難をきわめた。数回の現地踏査で、同地内に古墳20基を確認したが、周辺の遺跡分布状況からみて、雜木、雜草の伐採後はさらに古墳等の遺跡が増加する可能性が強く、文化課では同地内の開発計画の中止を住宅・都市整備公団に進言した。しかし、諸般の事情から住宅・都市整備公団では計画が着々と進められ、1979年より開発計画が具体化し、文化課では造成工事に先立って発掘調査を実施することを余儀なくされた。おりから緊急調査の急増から文化課では充分な調査体制をととのえる間もなく発掘調査に突入した。

遺跡は分布調査時の予想をはるかに上まわり、本報告書の中世居館址をはじめとして、踏査段階から判明していた古墳25基の他、大規模な縄文時代早期遺跡数ヶ所、古代集落など、福岡の歴史を解明するにはかかせない貴重な発見があった。1983年に現地の発掘調査を終了し、現在、鋭意整理中で、一部は報告書を刊行して公にしている。発掘調査および整理にあたっては、住宅・都市整備公団をはじめ地元各位のご協力をたまわった。記して感謝の意を表したい。

(山崎)

2. 調査体制

以下に示す調査体制を組織したが、相次ぐ緊急調査で充分なる体制がとれなかった。しかし関係各位の協力と調査補助員諸氏の多大な協力でその進行が進められてきたことを明示しておきたい。

調査地区 福岡市南区柏原字ゴソ外

調査面積 K遺跡15,000m², L遺跡6,400m²

調査期間 1982年3月～1983年3月

調査委託者 住宅・都市整備公団九州支社

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係（現・埋蔵文化財課第1係）

教育長 西津茂美（前） 佐藤善郎（現） 教育次長 佐藤孝安（前） 志鶴幸弘（前） 草場 隆（前） 野田養一（前） 尾花 剛（現） 文化部長 志

第1章 序 説

鶴幸弘（前） 中田宏（前） 河野清一（現） 文化課長 井上剛紀（前） 甲能貞行（前） 生田征生（前） 埋蔵文化財課長 柳田純孝 埋蔵文化財第1係長 三宅安吉（前） 柳田純孝（前） 折尾 学（現）

調査指導・協力 森貞次郎（九州産業大学教授） 坪井清足（前・奈良国立文化財研究所所長） 岡崎 敬 永井昌文 横山浩一（九州大学教授） 乙益重隆（国学院大学教授） 白木原和美（熊本大学教授） 賀川光夫（別府大学教授） 三島格（肥後考古学会長） 佐原 真（奈良国立文化財研究所） 石野博信 中井一夫 菅谷文則（櫻原考古学研究所） 渡辺 誠（名古屋大学助教授） 西谷 正（九州大学助教授） 甲元真之（熊本大学助教授） 下條信行（愛媛大学教授） 渡辺正氣（前九州歴史資料館参事） 岡本東三（文化庁調査官） 後藤 直（福岡市埋蔵文化財センター所長） 宮小路賀宏（福岡県文化課）

調査担当者 山崎純男（福岡市教育委員会埋蔵文化財課）

事務担当 岡島洋一（前） 古藤園生（前） 岸田 隆 松延好文

調査補助員 原 俊一（現・宗像市教育委員会） 市橋重喜（現・兵庫県教育委員会） 木下尚子（現・梅光女学院大学講師） 横大路俊明 寺師雄二 石本晶義 矢野佳代子（九州大学） 小畑弘己 米倉秀紀 吉武 学（現・福岡市教育委員会） 谷口武範（現・宮崎県教育委員会） 入江久成 西谷 大 辻 満久 馬原和弘 茂山宏美（熊本大学） 妹尾周三 船井向洋 日置公二 植田 広 宮坂孝宏 蒲原 真 前島秀張 土井伸一（別府大学） 白土義実 其畑真二 離波新吾 来嶋久雄 堀川亮二 宮田昌之 片山重明 千々和謙策 倉田浩一 平川祐介 熊崎農夫博 沖 一郎 小井田佳代 武森安代 田端幸代 丸山 隆 牧口 明 池田一郎 日隈英敏 餅田浩治 時松良藏 谷口麻理子 橋野亮司 仲田善則 高木裕之 足立博子 井上隆興 荒川 理 松浦潤一郎 高瀬広之 中野治寿 丸山明宏 宮元香子 門出悦子 塚本邦愛 小口幸雄 堤 季二 片岡葉子 前田 修 錬田次男 小路永智明 他歴史研究部員（福岡大学）

整理補助員 平川祐介（現・小郡市教育委員会） 角 浩行（奈良大学） 今津啓子（九州大学） 内野 正（名古屋大学）

整理補助 澄川アキヨ 野村弥生 竹田洋子 藤アイ子 西 裕子 下河純子 永田留美 堀田富美子 日永田泰子
(山崎)

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

福岡市の平野部は地形的に東の福岡平野と西の早良平野に分断される。この境界をなすのが、背振山系の支脈である油山（標高569.4m）より派生した平尾丘陵（最高位は鴻ノ巣山の標高100.5m）や長尾、飯倉の低丘陵である。この低丘陵は、油山、片綱山（標高292.6m）に源を発する樋井川、一本松川、駄ヶ原川、片江川に開析され、狭小な沖積地を形成する。この小沖積地とそれを囲む低丘陵は、歴史的に一定のまとまりのある地域として把握され、古代には和名類聚抄に記される早良郡毘伊郷に比定されることを諸氏の認めるところである。

遺跡はこの低丘陵を開析する小河川の一つである樋井川の上流域に分布する。調査地区は樋井川の上流域は油山東斜面と油山の支脈である片綱山の北斜面が接する地域にあたり樋井川の支流が枝状に分岐し、舌状にのびる尾根の丘陵を数多くつくり出し、複雑な微地形を形成している。樋井川の本・支流域は小規模な沖積地が存在し、本流域を中心として、三方が山塊、丘陵に囲まれ、小規模な盆地状をなしている。K遺跡はこの盆地の樋井川本流によって解析された。谷部沖積地の最も奥部の河岸段丘上、樋井川右岸に位置する。L遺跡はK遺跡の下流域の沖積地、樋井川左岸に位置している。

遺跡を含めた調査対象区の中心は国土地理院発行の五万分の一の地形図「福岡」の南から5cm、東から19.6cmで、福岡市の中心に所在する市役所から南へ約7kmの位置にあたる。（山崎）

2. K遺跡の立地

K遺跡は開発地域内の北西端に近い、樋井川右岸に位置している。遺跡前面は樋井川の水源である第1支流、第2支流、第3支流、第4支流あるいは四十塚にはいり込む支流が樋井川と合流し、ある程度の広さの沖積地が形成されている。この沖積地は油山山麓に形成された丘陵に囲まれて小さな盆地状になり、樋井川流域のまとまりの中でもさらにひとつまとまりをみせている。

K遺跡はこの沖積地の最奥部にあたる河岸段丘上に位置している。樋井川左岸（西側）は油山よりのびる丘陵（標高65m）によって限られる。この左岸の丘陵と遺跡の間は樋井川の解析によって深くえぐられ、丘陵は約10mの急崖となっている。樋井川と遺跡の比高差は約6mである。また東側にも油山から派生する丘陵がのびてきて、遺跡との間が限定されている。古く

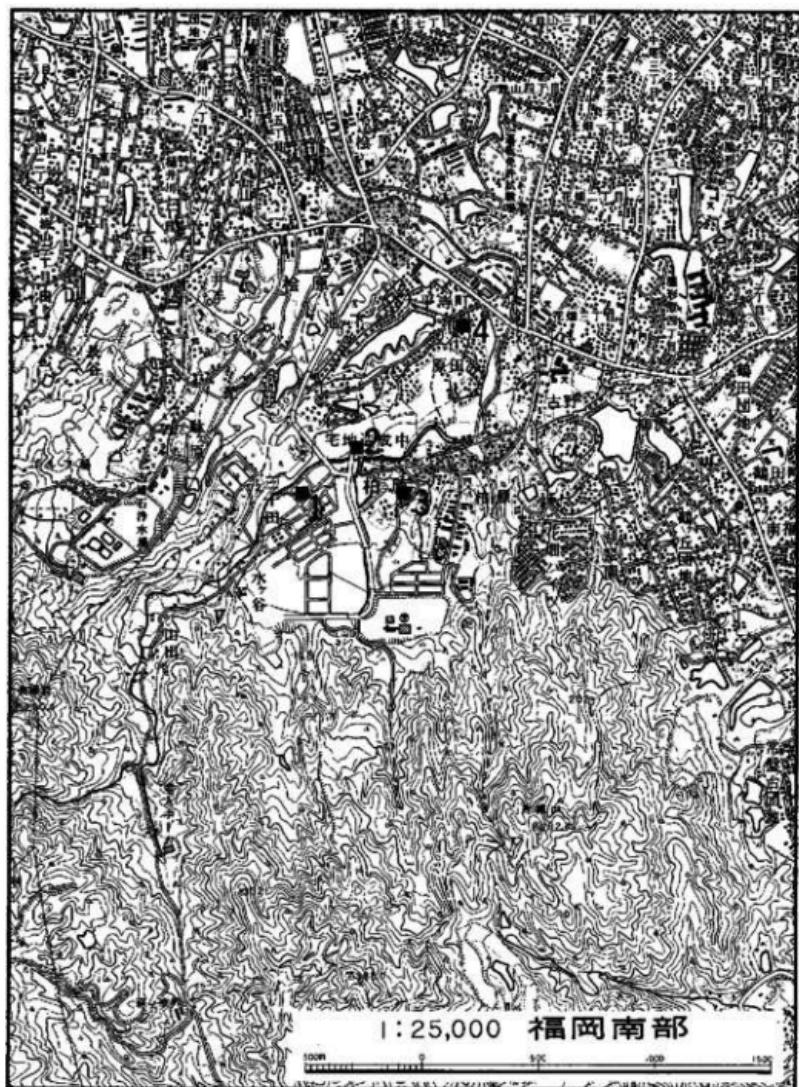


Fig.1 柏原遺跡群の位置と周辺遺跡 (中世遺跡) 1.K遺跡 2.L遺跡 3.城跡 4.太平寺

K遺跡の立地

宅地造成されているが丘陵は標高73m～49mで舌状にのびている。この丘陵と遺跡の間にも旧流路による解釈谷がはいりこんでいる。この谷と東側丘陵の比高差は約8mで丘陵部から谷部へ急崖となっている。谷の幅は25～30mである。谷部と遺跡の比高差は現状で約3m前後である。遺跡前面の沖積地と遺跡の比高差は約5mを測る。

遺跡をのせる河岸段丘は基盤層が砾層と砂層の互層の堆積からなっている。この砂礫層の上には黄褐色土の花崗岩バイラン土が厚さ約50cm前後で堆積するが、この堆積土層の出土遺物には先土器時代のナイフ形石器、縄文時代草創期の刺突文土器、早期・押型文土器、前期・轟式土器、中期・阿高式土器、晩期土器がみられ、この段丘の形成時期が先土器時代をさかのぼることを証明している。また、中世以前におけるこの段丘面における人間生活の足跡を認めることができる。

樋井川の流路は度々この段丘面を横断し、東側の谷部に流れていたことが発掘所見で把握することができた。この流路は黄褐色土の花崗岩バイラン土を切っているが、流路の堆積土からは縄文時代前期の轟B式土器が単純で検出され、この流路が堆積土によって埋没した上に堆積する土層からは縄文時代前期の轟B式土器（流路出土土器より新しい）さらに、その上層から縄文時代晩期土器が単純に出土していて、この流路の時期が限定できる。

遺跡のある河岸段丘面は幅50～70m、長さ220m、舌状をなしており、面積は約15,000m²の広さを有している。標高51.5m～46.5mで、ほぼ平坦な面が続いている。上流部、段丘部分の付け根は急斜面となり油山から派生する丘陵部へと続いている。よって、この段丘面は三方を丘陵に囲まれ、丘陵と遺跡の間は深い谷によって限られている。前面は前述したように沖積地とは約5mの比高差があり、自然地形的にみてもこの段丘面がある程度の防御の機能を備えていたことがわかる。

この河岸段丘面は調査時の現状では、開墾されて斜面部は段々に石垣が築かれ、いわゆる棚田状をなしていた。また、段丘面も開田され、後世におけるかなりの変容、削平があったが、発掘の結果と現状地形を対照した場合、ほぼ中世遺構を踏襲していることがわかる。例えば、後述する第2方形区画溝は、現状で残る水田区画と一致し、また、丘陵上を貫通する直路は中世の通路と思われる部分に一致している。

（山崎）

3. L遺跡の立地

L遺跡はK遺跡の河岸段丘面より一段下位の樋井川流域に展開する小規模な沖積地一帯を占めている。現状では水田（棚田）となっていて、かなりの広さの水田が存在するが、試掘の結果、樋井川の流路を中心として幅100～150mの範囲で沖積地が存在する。標高38m～30mで下



3. L遺跡の立地

流に向って序々に下っている。この沖積地の両岸は山麓から続いた堆積上で、その上層堆積土中には先土器、縄文時代遺跡がのっている。

沖積地は重機によって試掘した結果、沖積地の土層堆積は粗砂層、泥層の互層となっていて数面の水田耕作土を確認した。水田は沖積地の全面に拡大しており、調査期間等の関係によって最も水田の残存状態が良好と思われる上流域に限って実施した。(山崎)

4. 周辺遺跡と歴史的環境

本遺跡の位置する樋井川流域は、和名類聚抄に記される早良郡昆伊郷に比定されることは諸氏の一致するところである。

最近の調査において、この樋井川流域を含めた旧早良郡の地域はめざましい成果をあげていて、旧来の歴史環境を一変させつつある。樋井川流域の最上流域の本調査区でも多大な成果をあげ、その歴史的環境は変更を余儀なくされている。先土器時代、縄文時代、古墳時代の歴史的環境については先の報告において触れているので、本報告では古代～中世における遺跡について概観してみたいと思う。

樋井川流域の古代～中世遺跡については從来から全く知られておらず、空白部分であったが、最近の調査で若干の遺跡が発見されるにいたった。油山山麓に所在する後期群集墳は、その大部分が6世紀代において造墓活動は終焉を迎えるが、一部7世紀にいたっても造墓活動がみられる。柏原B-2号墳、C-2、4号墳、F-3号墳、J-1号墳などが7世紀代の造墓活動による古墳である。追葬例にもみられ、柏原G-1号墳では開元通宝(621年初鋤)2枚と權衡具の權がプライマリな状態で出土している。

柏原M遺跡は6世紀代から古代にかけての居館址が発見されている。主体となる時期は8世紀後半～9世紀前半にかけてで、掘立柱建物31棟以上が確認されている。この他生産活動を示す製鉄炉、鍛冶炉等の製鉄関連遺構と共に多量の輪羽口、ルツボ、鐵滓、炉壁、焼土が発見されていて、古墳に供獻された鉄塊、鐵滓(柏原B-2号墳、J-1号墳など)と共に、同地域が製鉄に大きく関係したことが知られる。この他、出土品には注目されるものが多い。晚唐三彩の曲坏をはじめとする多量の越州窑陶磁器、長沙窑陶磁器等の輸入陶磁器、石帯、硯、墨書土器がある。墨書土器には「郷長」「寺」「山守家」「五月」「佐原補」「東口」等がみられ、この地域に有力な集団が存在したことがわかる。M遺跡については後日、詳細な報告を行う予定である。樋井川流域において柏原M遺跡以外に篠栗遺跡において古代の製鉄遺跡が調査されている。また、樋井川の中下流域に所在する田島京ノ隈経塚において経塚が調査されている程度で、有力な遺跡の存在は知られていない。



Fig.3 K遺跡の地形と発掘区(1/3,000)

中世においてもその実態は古代と同様で不明な点が多い。本報告に収録した柏原K遺跡および沖積地における中世遺跡は特筆すべきものであろう。後述するが、この遺跡は薩摩國入来院家文書の「蒙古合戦勲功賞配分状」ときわめて良く一致し、古文書と遺跡が一体となって分析できることがあげられよう。沖積地水田は地頭職配分の水田と対応し、K遺跡の居館は「行武名内一字、惣検校入道、一字六郎」の屋敷に対応するものと考えられる。K遺跡の字名が「ゾソ」であることは御所を意味し、また方形に区画された溝によって囲まれたそれそれが惣検校屋敷、六郎屋敷に対応するものであろう。また、このK遺跡に先行して存在するM遺跡も重要な意味をもってこよう。

この他、中世遺跡として古墳群中における中世遺物をあげることができる。A-1号墳では、古墳の石室が埋葬の場所として再利用されている。A-1号墳では擾乱されていたものの、人骨一具とそれに副葬された瓦器椀と白磁器椀が出土している。

桶井川流域における中世遺跡は開発がはやかったこともあって不明部分が多いが、さきの『入来院家文書』によってその存在が知られるものが多い。柏原に隣接して所在する太平寺には『泰平寺』という寺が存在しており、『筑前下長尾田地十町相伝系図(岡元家文書)』では、この内のー町歩が泰平寺に寄進されている。現在、寺は存在しないが(天正7年(1579)小田部氏の荒平城籠城を加勢したなどによって、龍造寺に焼かれる)現在の太平寺に比定して間違いない。この他、比伊郷上乙王丸名内に「蓮成房屋敷」、下長尾庄に屋敷4ヶ所があり、うち1ヶ所は『検校次郎屋敷』などが存在し、今後、考古学的調査によって検証されることが期待される。

なお、桶井川流域における中世の問題については後章においてさらにふれることにする。

(山崎)

第3章 調査の概要

発掘調査に先行して1980年4月に第II期工事区の試掘調査を実施し、K遺跡に中世、縄文時代遺跡を確認。さらにL、M区に中世水田、古代遺跡の存在を確認した。

K遺跡の発掘調査は1980年5月より他地区遺跡の発掘調査の合間に表土層の除去作業にかかり、1982年3月より本格調査を開始し、1983年3月までの約12ヶ月を要した。その間調査員の不足、あるいは度重なる悪天候によって遅延し、工事の都合により調査区を移動中断し、調査の完了までには困難をきわめたが、多くの人々の指導と激励によって多大な成果を得てK遺跡の中世遺跡を無事終了することができた。

K遺跡の調査は試掘調査で河岸段丘全面におよんでいることが判明していたので西側表土層から除去を開始した。遺跡が広大であるために耕土の処理に苦慮したが、その大部分は谷部および東側沖積地に運び込み、遺跡全面の調査を実施した。現水田耕作土を除去すると遺物包含層は低い谷部にわずかに残存するのみで、全体に削平を受けていた。遺構は中世の地山面である黄褐色土層および砂層に黒褐色の有機質土が落ち込んだ状態で、その判別は比較的容易であった。一部、地山の黄褐色砂質土が遺構面に厚く被った部分があったが、それらについても下層の縄文時代遺跡の調査において補うことができた。

遺構は平坦面を2ヶ所で大きく方形に区画する溝を検出し、それに伴う多数の柱穴、土塙群がある。柱穴の組み合わせは現地で詳細に検討したもので掘立柱建物57棟を確認した。室内整理において図面で検討を加えたが、現地で検討した以上に建物の組合せは不可能であった。建物として組み合わせられなかった柱穴は多く、今後の問題点として検討を加えたい。土塙には井戸、土器窯、土塙墓が存在する。土器窯の土塙は大型建物の周囲に多く、その使用目的を考える上で示唆的である。土塙墓と考えられるものは比較的少なく、遺跡の南西端に集中する傾向がある。生産面を示唆する遺構として鍛冶炉があるが、大規模なものではない。建物群の分布にはまとまりがあり、大きく区画された溝内には遺構の存在しない広場的なものがあり注目される。

L遺跡については1983年4月から8月の5ヶ月間を要した。中世水田遺構としては水路、畦畔、水田面を確認したが保存状況は良好でない。傾斜面に開田されているために一筆ごとの水田面積は小さく、形も不規則である。水田面には人の足跡や牛の足跡が無数にみられる。

(山崎)

第4章 K遺跡の記録

1. 調査区の設定

発掘区の設定は試掘調査において河岸段丘全面に中世および縄文時代の遺跡が存在することが判明していたので、調査に先立って調査方針を決定してその設定をおこなった。先ず調査方針として、① 中世遺跡の正確な遺構配置図の作成と全面調査、② 中世遺跡における遺物散布と遺構との関連性の把握、③ 縄文時代遺跡における出土遺物の位置とエレベーションを正確に記録する。(柏原遺跡群の他の遺跡、A-2遺跡、E遺跡、F遺跡との比較検討に充分たえる必要性がある。上記遺跡でも遺物の出土位置、エレベーションは正確に記録している。) ④ ②③によって遺物の層位的把握、生活空間および居住のあり方、⑤ 以上を総合した遺跡の性格の把握。の五項目を目的に設定した。この目的を達成するために、地形にあわせて、遺跡全面に5mの方眼を組み、遺跡の北西のコーナーを基準として東に1から45まで、南にAからTまで設定し、各グリットはA-1、A-2のごとく表示することにした。

発掘はまず、遺跡の西半部A～T-1～15グリットから開始し、遺構検出と共に遺構の発掘を実施した。次に順次東に調査区を拡大して遺構の全体像を把握することができた。(山崎)

2. 調査区の層序

調査区の層序は、この地が開田されているために削平され、その状態は良くない。部分的に薄い遺物包含層が遺存していたが良好に遺存するところはない。基本的層位を示すと、第1層は現水田耕作土で厚さ約20cm、灰褐色の砂質土層である。第2層は水田床土で、鉄分、マンガンの沈着層で厚さ約10cm。第3層は遺物包含層で黒褐色粘土質土層であるが部分的に存在する。第4層は黄褐色土層で縄文時代の遺物包含層で、中世の地山となる。中世遺構はこの第4層に掘り込まれたものである。発掘区西半部では第3層と第4層の間に縄文時代晩期の遺物包含層、縄文時代前期の樋井川の流路の堆積土層が介在する。第5層が粗砂層の地山層となっている。

(山崎)

3. 遺構分布の概要

中世遺構は河岸段丘全面に検出した。検出遺構には溝、掘立柱建物、井戸、土塙(土塙基、

第4章 K遺跡の記録

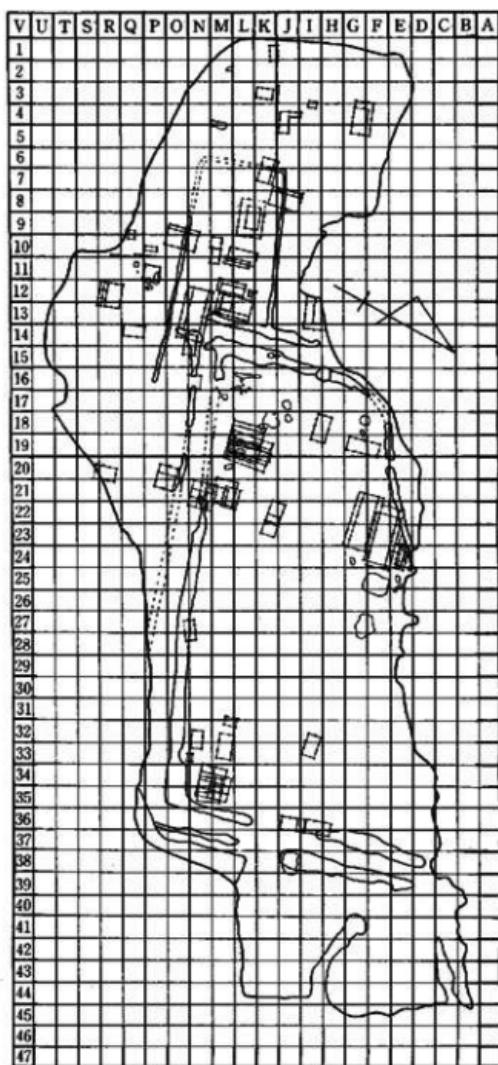


Fig.4 発掘区の設定

3. 遺構分布の概要

土器窯の土塗、不明土塗）製鉄関連遺構が存在する。

溝はこの居館址を限定するもので最も先行する遺構である。調査区の西半部に検出した S D-01, 02は溝幅70cm, 深さ50cmで、一部調査のミスによって破壊されているが、元々は連続する溝でコの字形をしていて、SD-03に接して、一つの方形区画をつくり出している。この方形区画は東西長35m, 西側端での南北長22mを測る。また、調査区中央部に検出した SD-03～SD-13は溝幅1.5～3m, 深さ約0.5mで部分的にとぎれるが、全体として方形に区画する二条の溝を構成している。方形区画の内側で東西の長さ75m, 西側端における南北の長さ29m, 東側端における南北の長さ45mを測る。溝と溝の間は幅3mの空間部が存在し、通路状をなしている。この部分に上墨がめぐっていた可能性もあるが、調査においては確定できなかった。外側の溝の外側で東西長117m, 西側端の南北長47m以上、東側端の南北長70m以上である。調査区東端部に存在する SD-14, 15も後の開田によって破壊されているが、元来は同一の溝と考えられる。溝幅3m, 深さ約1.2m。溝はコの字形区画で、溝内側で東西長20m以上、南北長27mである。以上、3ヶ所の溝によって区画された部分は遺跡の中心的存在である。SD-14, 15によって区画された部分には溝以外に遺構は存在せず、配置された場所等を加味すると他の区画とは若干趣を異にしている。中央部、西側の区画は内部に掘立柱建物や土塗等が存在し、溝の性格として建物群を囲んだ溝であった可能性が強い。入来文書に記載された屋敷に比定することが可能である。中央部の大区画部分が惣檢校入道屋敷、西側の小区画部分が大郎屋敷に相当するのであろうか。

掘立柱建物は大きく4群に分けることができる。溝と対応するものと、溝を切って作られるものがある。第I群は調査区西半部に検出した方形区画の溝より、さらに西に存在する一群である。SB-01～05までの建物で、SB-01の2間×3間の二面廊の建物を最大として、他は1間×3間の小規模な建物群より構成される。製鉄遺構等の存在を考慮すれば、他の建物群とは性格が異なる建物群と考えることができる。第II群は調査区西半部に存在する小区画部分を中心とした部分である。建物は方形区画の内側に存在するもの、溝と切り合い関係のあるもの、溝で区画された外側に存在するものの三種類がある。第III群は調査区中央部の大区画部分の西半部を中心とする地域である。大型の掘立柱建物が多い。大部分は区画内に存在するが、一部、溝と切り合い関係にあるもの、溝の区画外に存在するものがある。第IV群は大区画の東端部近くに存在する一群である。大区画の入口部分に集中しており、居住する建物としての性格は薄いと考えられる。一部溝との切り合いが認められるが、大部分は溝内側におさまる。

土塗は性格が決めがたいが、上塗墓、井戸、土器窯の土塗と用途不明の土塗に分けられる。

土塗墓と考えられるものは土師皿の完形品の副葬を伴うもので、棺材、釘等は検出されていない。分布としては調査区西端部、調査区西半部の小方形区画溝の南側に存在する。

井戸は1基で大方形区画溝を構成する SD-04と重複する。素掘り井戸であり深くない。

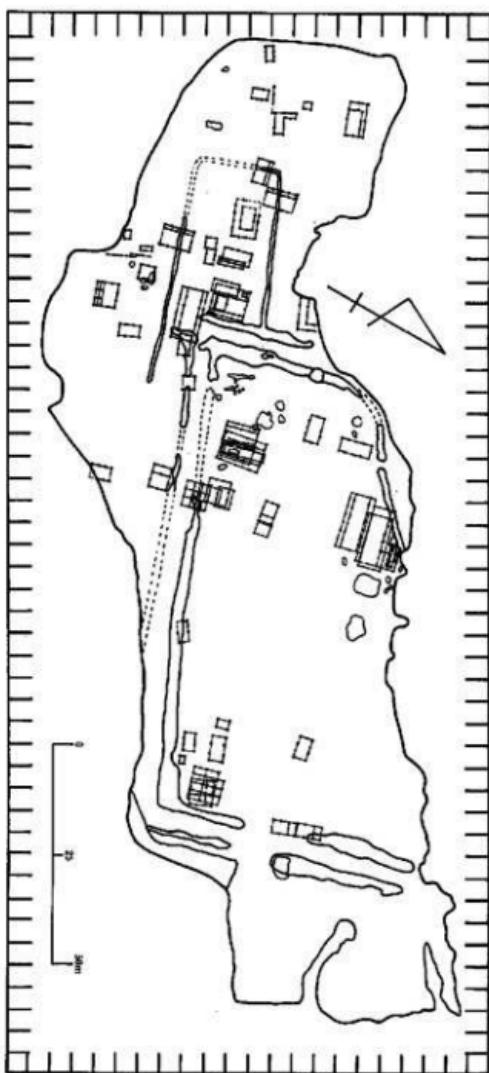


Fig.5 遺構全体配置図

3. 遺構分布の概要

現在は湧水はないが、これは川がより解析されて水位が低下したことに起因していると考えられる。他に井戸らしいものは存在しない。基盤層が砂礫で危険を伴うために井戸の掘削を避け、遺跡の下を流れる樋井川に水を求めたためであろう。

土器窯の土塗は大方形区画内に存在する大型掘立柱建物、SB-31, 32, 34の周辺に多い。特にSK-01は4m×5.5mの方形の窯穴で多くの土器皿が出土した。大型建物の性格と大きくかかわってくることがわかる。

その他の用途不明土塗は大方形区画溝の西半に片寄って分布し、日常生活との関わりの中で理解できるものである。

この他の遺構として先に指摘した製鉄関連遺構が調査区の西端部に存在する。(山崎)

4. 包含層出土遺物 (Fig. 6~15)

溝、土塗、柱穴等の遺構内出土遺物以外を包含層出土遺物として取り扱う。包含層からは土師質土器、陶器、磁器、石製品、鉄製品が出土している。

(1) 土師質土器 (Fig. 6~8, 14)

土師質土器には皿(大・小・特大)、鉢、壺、火舍等がある。

a) 皿(1~44) 包含層より出土した皿の破片は総数約37,800点余になる。全て輪轉成形(右回転)され、外底部に回転糸切痕を残す。また同時に、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものが多く存在する。皿は法量により、大、小、特大の3つに分けられる。

大(1~28)：口径11~13cm、器高2.0~3.5cm、底径6.5~10.0cmの大きさを有する。胎土の特徴(砂粒の精粗・色調)により、およそ3種類に分類したい。1~3は大粒の砂粒を含まず、比較的精良で、黄灰色~白灰色という灰色系統の色調をなす。器面はサラサラしている。次に4~8, 14は1~2mm程度の白い砂粒を多く含み、黄灰色~暗灰色の色調をなす。砂粒のため、器面はザラザラしている。以上前者をA類、後者をB類としておく。9~13, 15~28は先の2種類以外のもので、消極的分類ではあるがC類とする。C類は概して黄褐色~赤褐色の色調をなし、砂粒は含むが、B類程には含まない。A類のうち、1は口縁部が外曲し、2はわずかに内傾する。3は底部片であるが、焼成後、内面より穿孔されている。B類についても、口縁部の外曲するもの(4~6, 14)、内湾するもの(7~9)が認められる。C類は体部が直線的に伸びるもの(12, 16, 19, 21, 22, 24~28)と内湾するもの(9~11, 13, 15, 17, 18, 20, 23)が認められる。27の体部外面は回転ケズリ調整が施されているらしく、明瞭なケズリ痕が残る。8, 14, 15, 21には一部に、16, 28は全面に黒色の付着物が認められ、灯火具とし

て使用されていた可能性が考えられる。

小(29~40)：口径7.5~9.0cm, 器高1.0~1.5cm, 底径5.5~7.0cmの大きさを有する。胎土の特徴により、大皿と同様、A類(31, 32, 36~38), B類(29, 39, 40), C類(33~35)に分類可能である。

特大(41~44)：口径15.4~16.5cm, 器高3.5~4.1cm, 底径10.8~11.1cmの大きさを有する。4個体分が確認できる。何れも僅かに砂粒を含む胎土で、黄褐色~赤褐色の色調をなす。41~42は口縁部が僅かに内傾するのに対して、43, 44は外曲する。内底部はナデ調整が施され、外底部は板目圧痕が明瞭に残る。

b) 鉢(45, 46) 正式名称は不明であるが、仮に鉢としておく。45, 46共に口縁部から体部までの破片である。口縁部直下で大きく内傾するのが特徴で、SD-14, 15出土例より平底で、推定器高は9cm前後になるものと考えられる。45は体部外面の種種目が顕著で、内面は丁寧に回転ナデ調整が施されている。わずかに砂粒を含む胎土で、全体的に暗褐色をなす。一部分黒ずんだ箇所があり、二次的に被熱した可能性が考えられる。46は外部下面下部に回転ケズリ痕が認められる。内面は丁寧な回転ナデ調整が施されている。僅かに砂粒を含む胎土で、明赤褐色をなす。2点ともH-40区出土である。

c) 堀(68~78) 68は口縁部(縁帯)から底部付近まで残存する。ほぼ平底になると思われる底部から、腰を張りながら立ち上がり、縁帯に至る。体部を粘土紐成形したのち縁帯を接合し、さらに回転ナデ調整を施したものと考えられる。外面は櫛状工具により、縁帯直下から体部下半までを縱方向、そして底部を不定方向に調整している。内面はやはり板状工具により、体部を横方向、底部を不定方向に調整している。胎土は1mm前後の砂粒を多く含み、暗赤褐色をなす。外面は底部から縁帯外側面(一部縁帯上面)まで煤が付着しており、内面も底部付近が黒ずんでいる。口径約36.6cm(縁帯内側面で計測)、残存高15.1cmである。L-11区出土である。堀の破片は他にも出土しているが、個体識別の可能な口縁部のみ図示する(69~78)。

d) 火舍(182~191) 口縁部(縁帯)片であり、上面に一定の間隔で巴文のスタンプが押されているのが特徴である。同様の類例が博多出土遺物内に見られるが、これを参考にすれば、本遺跡出土のものは、全体の形状が有足の火舍になると考えられる。胎土は黄褐色で、砂粒を含む。

(2) 陶器(Fig. 7, 9, 14)

a) 摺鉢(47~65) 47, 48および66は瓦質で、胎土は黄灰色をなし、器面は炭素を吸着して黒色を呈する。47は口縁部から体部の破片であり、口縁部を内傾させている。体部外面に指押えによる調整を施し、内面はハケ状工具により横方向の調整を施している。48は体部が底部か

4. 包含層出土遺物

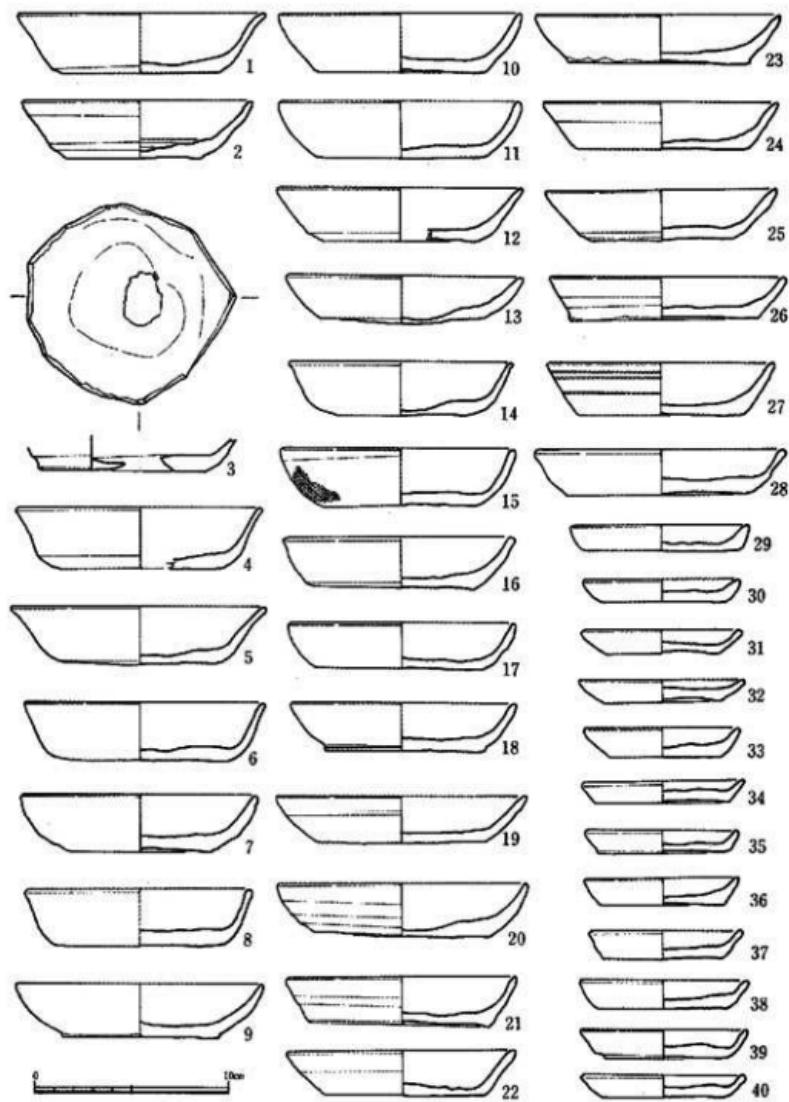


Fig.6 包含層出土遺物実測図 I

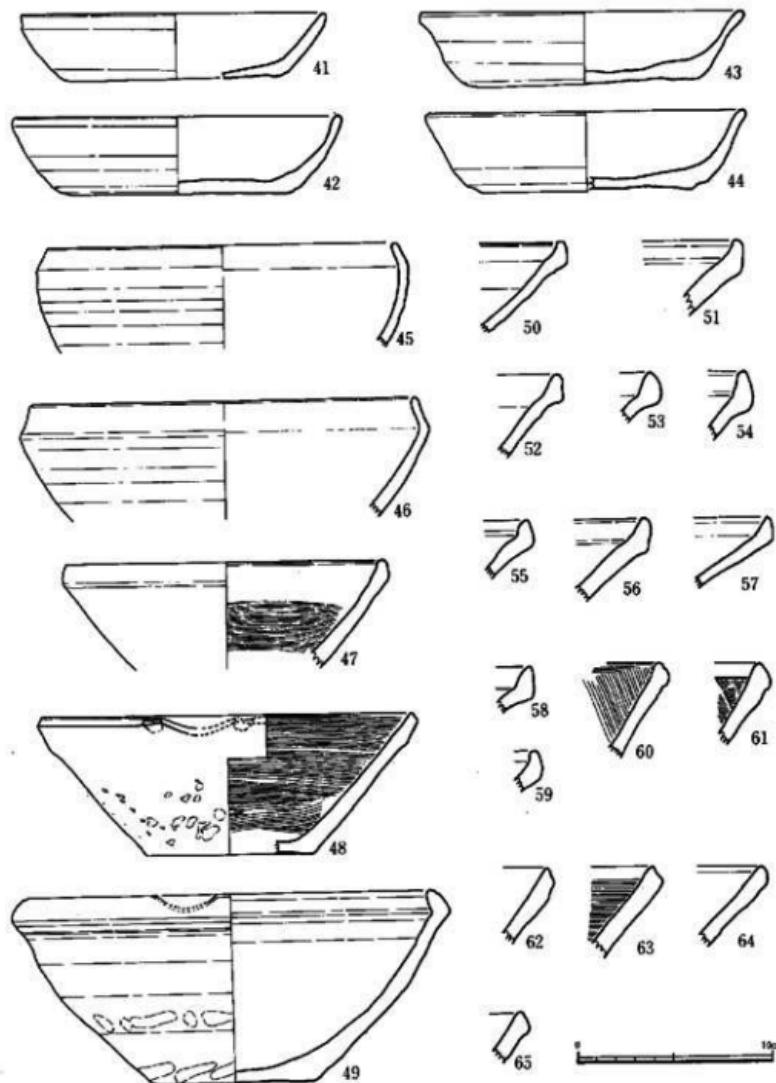


Fig.7 包含層出土遺物実測図 II

4. 包含層出土遺物

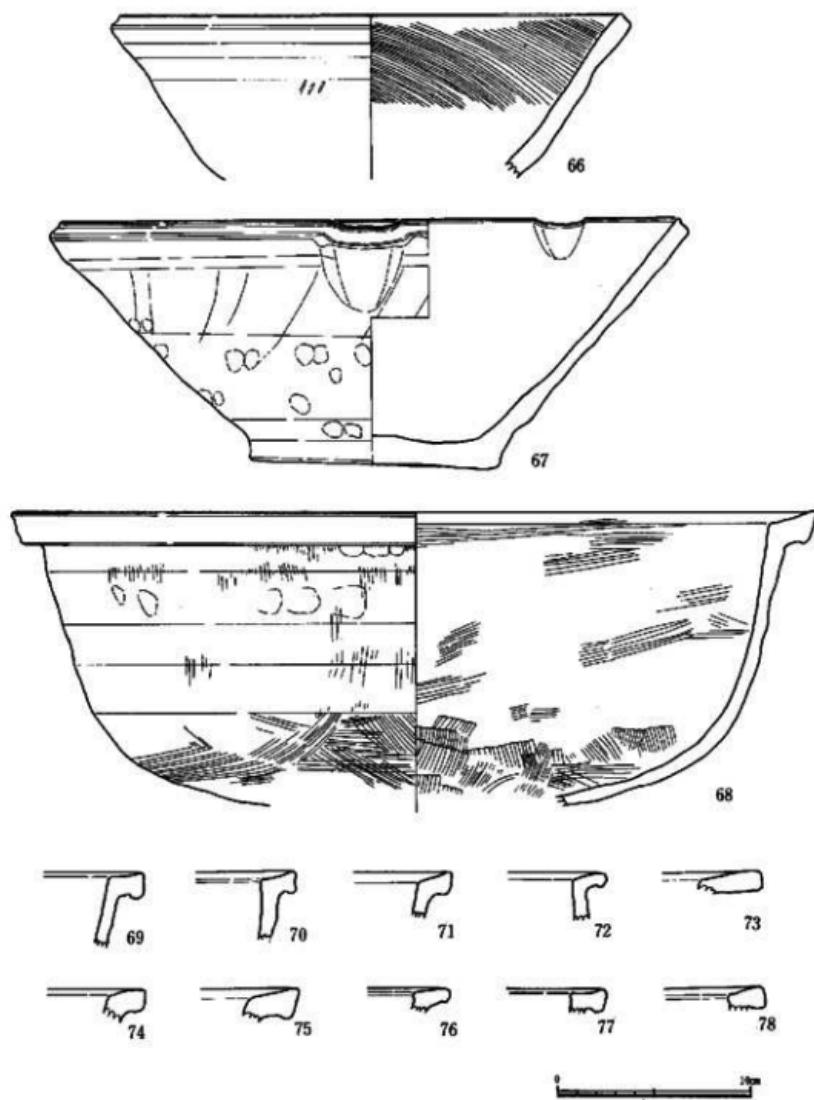


Fig.8 包含層出土遺物実測図III

らほぼ直線的に伸び、口縁部断面は方形をなす。残存部に片口が1ヶ所確認できる。体部外面は指押えによる調整を施しているらしく、凹凸が認められる。底部については磨滅しており、調整方法は不明である。内面は47と同様、ハケ目工具により、横方向の調整が施されている。66は前述の2点よりひと回り大きくなるもので、器壁も厚い。体部は直線的に伸び、口縁部の断面は方形をなす。残存部のみでは片口の有無は確認できない。体部外面は指押えによる調整のうち、口縁部から約3cmの幅で、板状工具によって回転させながらの器面調整が施されている。内面は櫛状工具による斜め方向の調整が施されている。櫛目はだいぶ磨滅しているが、本来は単目の機能も具えていた可能性がある。包含層出土の瓦質擂鉢片は他に多数あるが、個体識別可能な口縁部片を図示する(59~65)。全体的に磨滅しているものが多いが、60、63等は櫛目工具により、内面に調整が施されているのが認められる。49は東播産の製品である。体部はやや内湾気味に広がり、口縁部は内方へ向けて折り曲がる。口縁部断面は丸味を持った二等辺三角形形状をなす。残存部に片口が1ヶ所認められる。粘土紐成形のうち、体部内外面に回転ナデ調整を施す。また、体部外面下半には、指押えによると考えられる凹凸が僅かに認められる。外底部には回転糸切り痕が残る。内面下半は使用による磨滅が著しい。胎土は細かい砂粒を含み、灰色をなす。焼成は良好で、口径20.4cm、器高9.8cm、底径8.0cmである。包含層からは他に東播産の擂鉢片が多数出土しているが、全形を知り得るものはなく、個体識別可能な口縁部片を図示する(50~58)。何れも口縁部断面は三角形形状に肥厚する。胎土は砂質で、灰色~暗灰色をなし、焼成は良好である。10、12、16は口縁外側面に黒く自然落灰が認められる。67は本遺跡中、最大の擂鉢である。体部は直線的に開き、口縁部の断面は方形をなす。口縁部には3つの片口が均等につけられている。外面は口縁端から約2cmの幅で、板状工具を引いたと考えられる擦痕が認められる。擦痕がつく以前に、外面上半に縱方向の細い沈線が2~5cmおきに引かれているが、意味不明である。体部外面下半は凹凸が著しく、指押えによると考えられる。外底部は磨滅が著しい。体部内面について、上半部は回転ナデ調整が施されているが、下半部から底部にかけては使用による磨滅が著しく、調整は不明である。胎土は砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。器壁面は紫色がかかった暗褐色(アズキ色)、器壁内は暗赤褐色をなす。口径31.9cm、器高12.8cm、底径12.9cmで、Q-11区を中心に出土している。

b) 盆(79) 所謂、黄釉盤で鉢載品である。2個体分が出土している。79は復元すると、口径38.2cm、器高10cm、底径31.0cmとなる。底部は僅に上げ底をなし、体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は折り返して玉縁状とする。内面体部から底部にかけて、鉄釉による文様を描き、その上に黄釉を施している。黄釉は内面から外面上半部に及ぶが、口縁部は重ね焼きのため拭き取られている。内面体部には、一条の線の下に波形の文様を配置している。底部は二重圓線の内側に、二重線による方形区画を描き、さらにその内側に文字を書き入れる。また圓線と方形区画の間には、爪形の文様が認められる。文字については、「海」字が判明するのみであ

4. 包含層出土遺物

る。鉄釉文様は大方、剥離してしまい、素地がのぞく。胎土は暗灰色で、0.5~2mm程の砂粒を多く含み。器面はザラつく。焼成は堅緻。M-12区を中心に出土している。他の1個体は細片のため図示しなかったが、砂粒を多く含む、暗灰色の胎土で、釉色は黄緑色である。焼成は堅緻。

c) 麽 (171~181) 何れも細片のため、全体の形状は不明であるが、麽の脇部片と考えられる。外面には格子目叩き調整が、内面は指頭によるナデ調整が施され。凹凸が認められる。全て瓦質で、軟胎である。7, 8は焼成不良のため赤色となるが、他は暗灰色から黒色をなす。

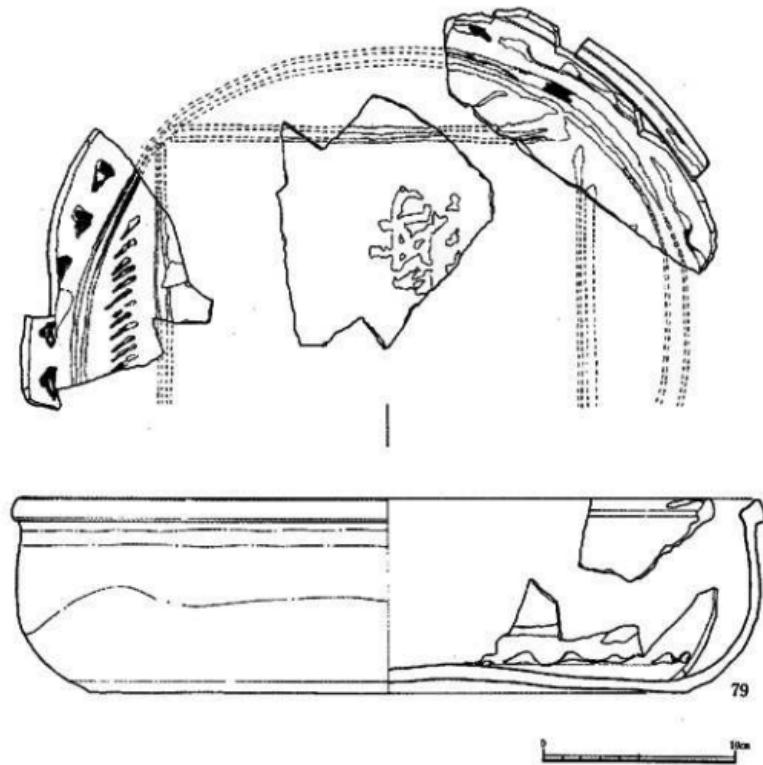


Fig.9 包含層出土遺物実測図IV

(3) 磁器 (Fig. 10~Fig. 13)

青磁、白磁、染付が存在する。

a) 青磁 青磁は所謂、龍泉窯系青磁を主体とし、他に越州窯系、および同安窯系青磁が僅かに存在する。

龍泉窯系青磁の中でも、圧倒的多数を占めるのは、鏽蓮弁文碗(80~89, 94~111, 136)であり、破片数にして298点である。個体識別をすると、少なくとも43個体分は存在する。体部外面に鏽を削り出したのち、ヘラにより蓮弁の輪郭を彫る。底部は削り出し高台で、疊付部を面取りしている。内底部はヘラにより回線を施しただけのもの(93, 108)、回線内にスタンプ文様を押すもの(90, 110, 136)等がある。釉は高台疊付および高台内以外の全体に厚く施されており、暗黄緑色、暗緑色、青緑色と様々な色調を帯びる。胎土は暗灰色~白灰色で、僅かに砂粒が混じる。107は体部器壁が薄く、立ち上がりも強く作られている。外面の鏽は一定の間隔で丁寧に削り出され、蓮弁の輪郭も細く彫られている。底部は残存しないが、131, 132の様に、細く高めに削り出され、先端部(疊付)のみ無釉になる高台が付くものと推定される。胎土は精良で白灰色をなし、釉は厚く、青緑色である。縞を有しない蓮弁文碗も2片存在する。138は外面に最初から蓮弁の輪郭を彫るもので、釉色は淡緑色、胎土は僅かに砂粒が混じり、白灰色をなす。他の1片は図示しなかったが、同様の手法によっており、釉はやや白濁した青緑色をなす。

龍泉窯系青磁のうち、割花文碗片は10点存在する(118, 119, 126)。何れも内面のみに割花が認められるが、細片のため、全体の文様構成は不明である。外面には回転ヘラケズリ調整痕が明瞭に残る。内外面無文の碗の破片は20点存在する(120~122, 137)。細片のものについては、割花文碗の無文部の可能性もある。何れも外面は回転ヘラケズリ調整痕が残る。137は丁寧な作りがなされており、疊付部のみ無釉となる。

龍泉窯系青磁には、碗類の他に、小杯、小皿等が存在する。123は折線小皿で、口縁端部を上方へ折り曲げている。体部外面は非常に薄くなるまで、回転ケズリ調整が施され、内面は菊花状に丸彫りされる。胎土は白灰色精良で、釉色は青緑色である。129は削り込み高台を有する杯と考えられる。体部外面には回転ケズリ調整が施され器壁を非常に薄くしている。胎土は灰白色精良で、青緑色の釉をなす。

同安窯系青磁破片は7点存在し、個体識別をすると少なくとも3個体となる。112~114は何れも、白灰色で、僅かに砂粒を含む胎土を有し、白濁した黄緑色の釉色をなす。体部外面は回転ケズリ調整ののち、模描文を施す。内面は口縁部下方に一本沈線を引き、その下に櫛状工具による花文を配しているものと考えられる。底部は台形状の比較的高い高台をなす。高台部は無釉である。

越州窯系青磁は1点存在する。蛇の目高台碗の底部片で、体部外面は回転ケズリ調整が施さ

4. 包含層出土遺物

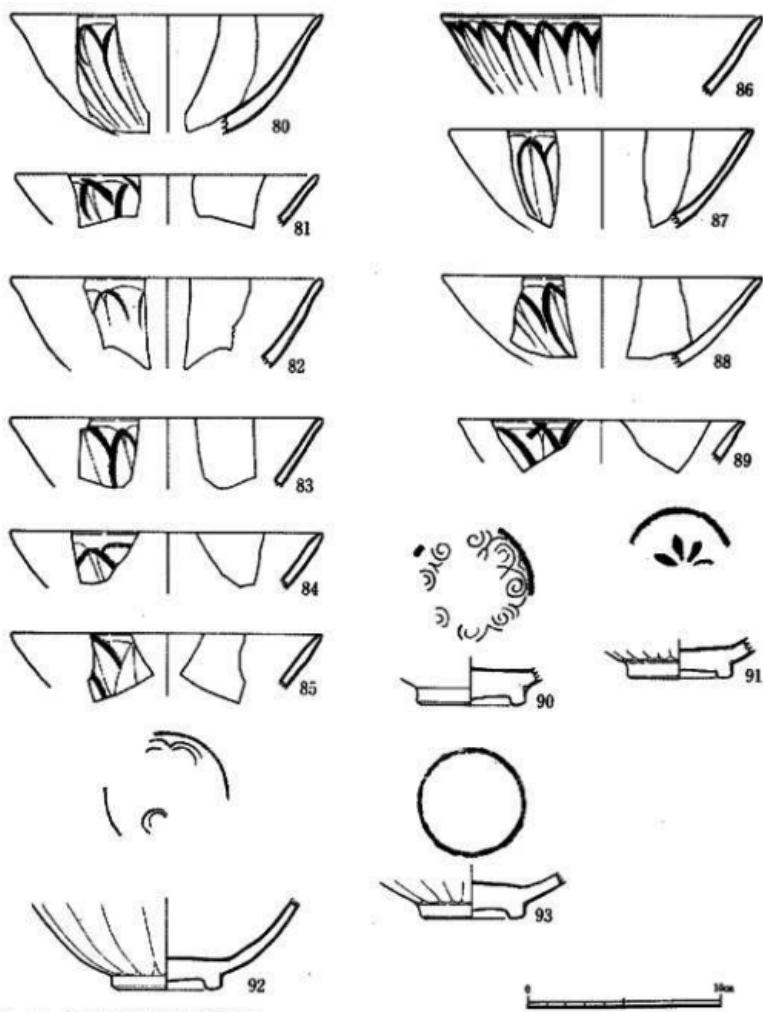


Fig.10 包含層出土遺物実測図 V

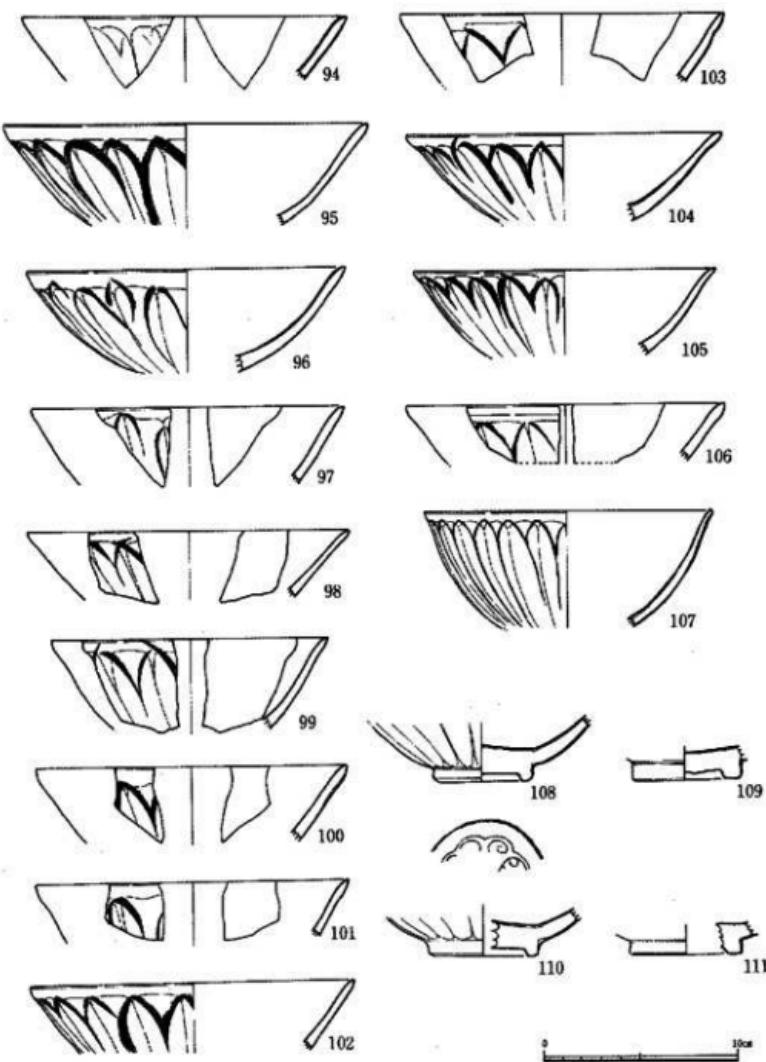


Fig.11 包含層出土遺物実測図 VI

4. 包含層出土遺物

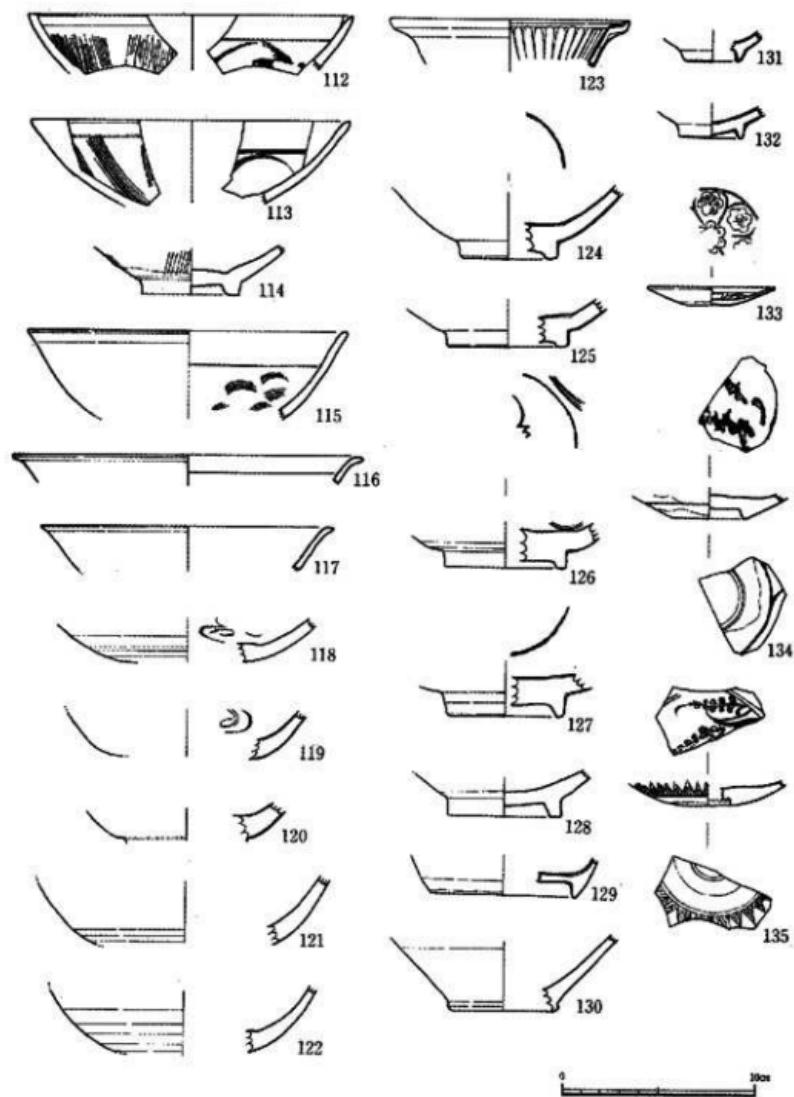


Fig.12 包含層出土遺物夾洞圖四

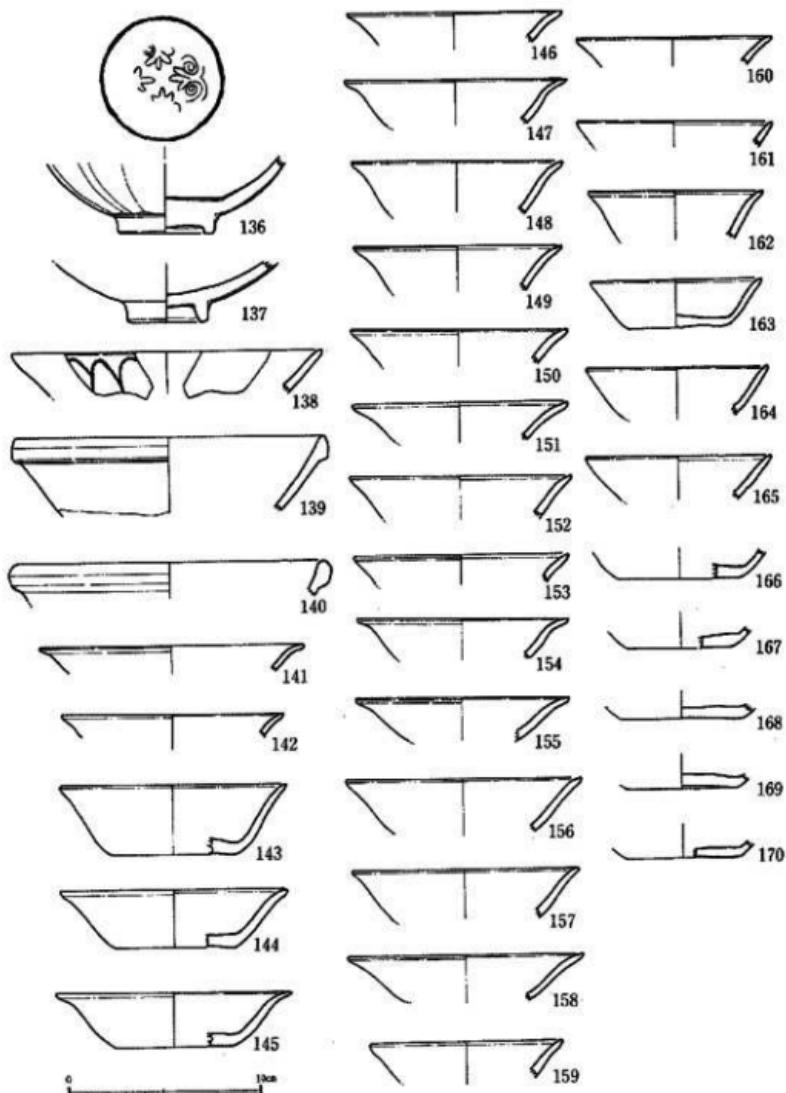


Fig.13 包含層出土遺物実測図

れている。胎土は精良で、残存部については全面に黄緑色の釉がかけられている。

b) 白磁 白磁には碗・皿が存在し、特に皿が目立つ。115~117は、口縁端部を外方に折り、上面を水平にする。胎土は灰白色~白色、精良で、釉色は灰白色~黄白色をなす。115は内面に沈線を入れ、その下方に短い単位の櫛目が施されている。116は内面に沈線が認められる。口縁部が玉縁となる碗の破片は9点存在し、個体識別をすると4~5個体分となる。口縁部を外方に折り返し、断面三角形状の玉縁とし、底部には断面方形の比較的高い高台が付けられる(128, 139, 140)。胎土はわずかに砂粒を含み、灰色~白灰色をなす。釉は内面から、外面高台際約1cmの位置まで施され、黄白色~灰白色をなす。

皿は口縁部の釉を搔き取った、所謂口ハゲ皿が最も多い(141~170)。破片は48点存在し、個体色別をすると、およそ35個体分程になる。胎土は何れも砂粒を僅かに含み、灰白色をなす。釉は灰白色~青白色(空色)である。口縁部の形態は、外曲が大きいもの(141, 145, 147, 154, 155等)、外曲が緩やかなもの(142~144, 146等)、直線的なもの(161, 164, 165等)とある。133は内面に花文のスタンプが押された小皿である。文様はボティプである。白色精良な土で薄作りされ、底部には丁寧に回転ケズリ調整が施されている。釉は内面から外面下半途中まで施され、施釉部分と露胎部分との境は、微妙に橙色を帯びる。釉色は青白色である。

c) 染付(134, 135) 耕作土内より近世~現代までの遺物が出土しているが、その内最も古くなると考えられる染付片のみ図示する。134, 135は削り込み高台の皿で、内外面にコバルトによる文様が描かれている。

(4) 石製品 (Fig. 15)

a) 磨石(192~195) 192は4面を磨面としている。一面の中央部は、何かを打ちつけた様な敲打痕が認められる。193は2面に磨面が認められる。194は表裏の2面に磨面が認められる他、両側面も滑らかなため、ここも磨面として利用されていた可能性がある。195は1面のみに磨面が認められる。磨面の裏側は、のみ状工具で削った痕跡が残る。以上、砥石4点に関して、石質の違いより、192, 193は中砥として、194, 195は仕上砥として利用されていたものと考えられる。

b) 石鍋(196) 包含層からは滑石製石鍋片が数片出土しているが、何れも細片のため、口縁部から鋤まで残存する1点のみ図示する。口径は復元不可能なため推定である。外面はのみで縱方向の削り仕上げを施し、内面は横方向に磨き仕上げを施している。器壁については、鋤上方部分の方が、下方部分よりも厚く作られている。鋤の下半部以下には黒く煤が付着している。

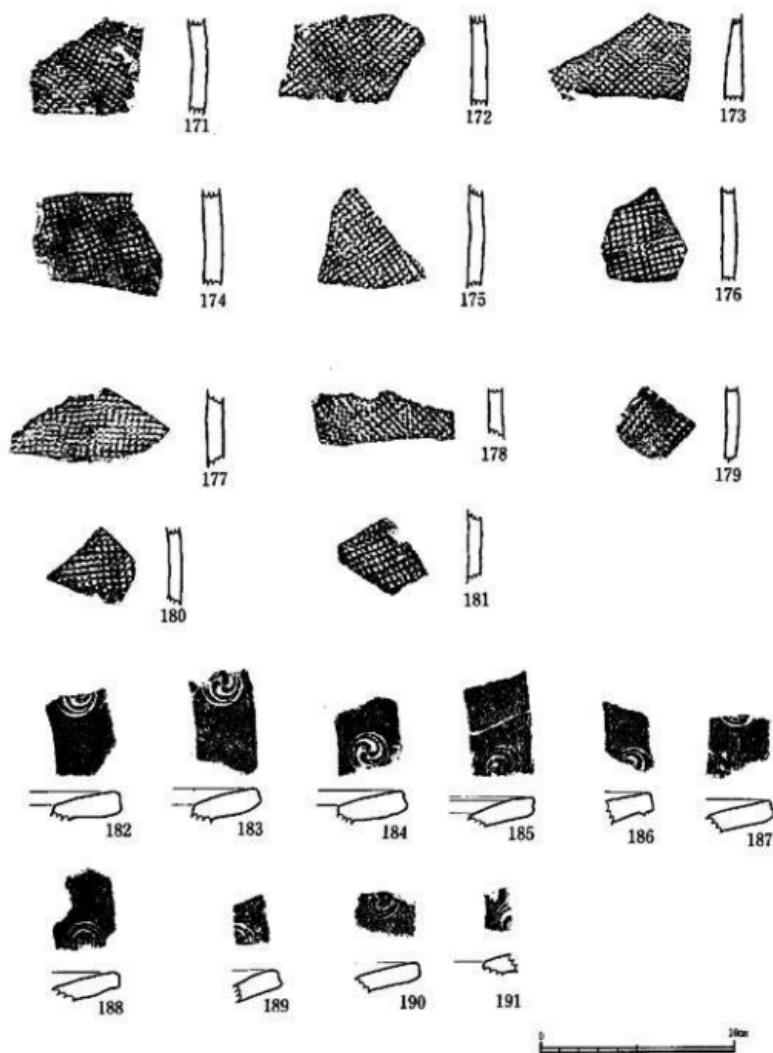


Fig.14 包含層出土遺物実測図Ⅳ

4. 包含層出土遺物

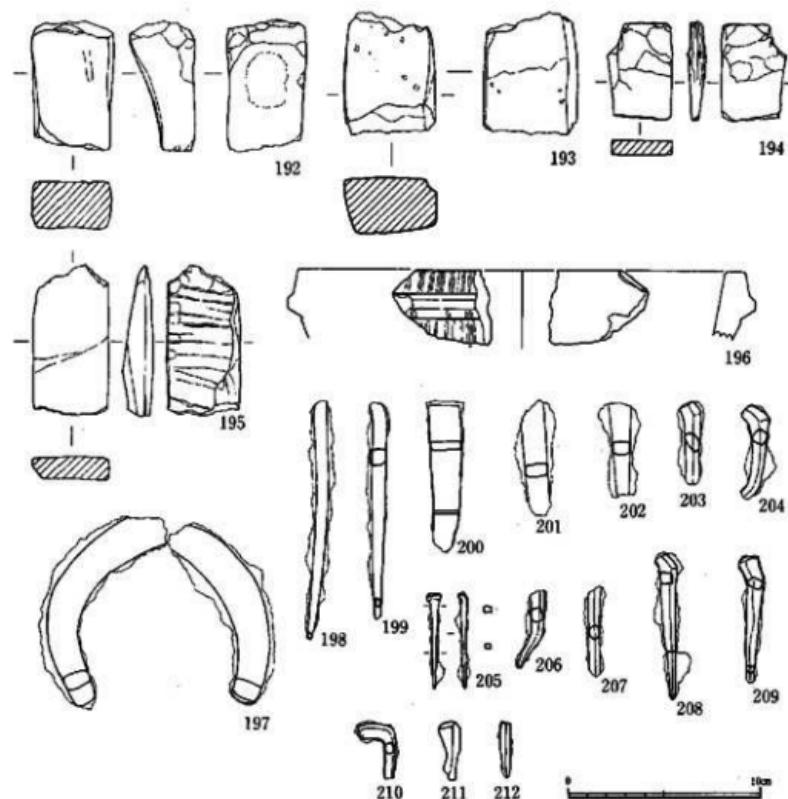


Fig.15 包含層出土遺物実測図 X

(5) 鉄製品 (Fig. 15-197~212)

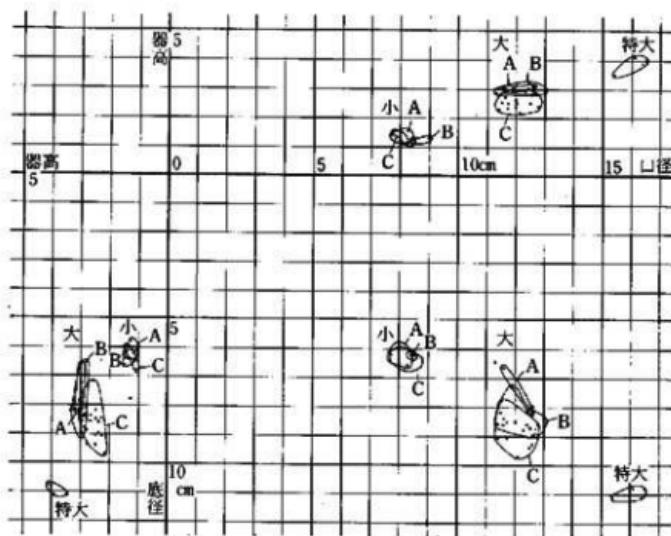
197はその形状からして蹄鉄の可能性がある。200は刀子である。118, 119, 201~212は角釘である。
(内野)

第4章 K遺跡の記録

第1表 包含層出土土師質土器皿法量計測表

遺物番号	口径	器高	底径	分類	グリット	指印え	板目
Fig. 6 - 1	12.6	3.1	8.2	A	E - 26	○	○
2	11.6	3.0	6.6	A	E - 25	○	○
3	-	-	8.6	A	G - 27	○	○
4	(12.4)	3.2	8.2	B	E - 25	?	?
5	(13.0)	2.9	8.4	B	E - 25	○	○
6	12.6	3.0	9.0	B	E - 25	○	○
7	(11.9)	3.0	7.3	B	F - 25	○	?
8	(11.4)	3.0	(8.6)	B	L - 10	○	○
9	12.5	2.8	8.1	C	N - 37	○	○
10	12.4	3.0	8.6	C	J - 23	○	○
11	(12.3)	2.9	8.8	C	G - 26	○	○
12	(12.6)	2.8	8.0	C	E - 28	?	×
13	12.0	2.5	8.5	C	G - 27	○	×
14	(11.3)	2.8	6.5	B	G - 18	○	○
15	11.5	3.0	7.8	C	O - 8	○	×
16	11.6	2.7	8.4	C	L - 11	○	○
17	11.4	2.3	9.1	C	N - 9	○	○
18	11.5	2.5	8.2	C	O - 10	○	○
19	(12.8)	2.4	8.6	C	J - 15	○	○
20	12.7	2.8	8.9	C	E - 25	○	○
21	11.7	2.5	9.1	C	M - 16	?	?
22	11.7	2.3	8.5	C	M - 10	×	×
23	(12.5)	2.5	9.4	C	N - 16	?	○
24	12.0	2.4	9.0	C	O - 18	○	○
25	(12.0)	2.6	7.2	C	M - 14	○	○
26	12.1	2.2	9.7	C	E - 25	?	×
27	(11.6)	2.7	8.6	C	O - 25	?	?
28	12.6	2.8	9.3	C	N-33, O-31		○
29	9.0	1.3	7.8	B	N - 14	○	×
30	8.0	1.2	6.5	C	G - 27	○	×
31	8.0	1.3	5.8	A	N - 14	×	×
32	8.4	1.1	6.1	A	K - 3	×	○
33	8.0	1.5	6.0	C	O - 18	?	×
34	8.2	1.1	6.8	B	E - 21	○	○
35	8.8	1.3	6.4	C	N - 16	○	○
36	7.7	1.4	6.4	A	L - 13	○	○
37	7.7	1.5	6.2	C	O - 9	○	○
38	8.3	1.5	6.6	A	M - 20	?	○
39	8.5	1.5	6.2	B	G - 18	○	○
40	8.4	1.2	6.2	B	G - 18	○	○
Fig. 7 - 41	15.4	3.5	11.1		J-15-1	○	○
42	(16.5)	4.0	10.8		K - 15	○	○
43	16.4	3.9	11.1		J-15-2	○	○
44	(16.1)	4.1	10.8		M - 16	○	○

4. 包含層出土遺物



第2表 包含層出土土師質土器皿法量分布図

5. 方形区画溝 I と出土遺物

(1) 遺構 (SD-01, 02)

調査区の西半部に検出したものである。発掘調査のミスで掘り過ぎた部分があり、現状では SD-01 の L 字形と SD-02 の直線的な溝に二分されている。SD-01 は J-6~11, K-6, 7, 10~14 グリットにかけて検出された。K-14 グリットで SD-03 と重なる。SD-01 と 03 の間では、遺構検出面での切り合い関係は確認できなかった。溝底部では SD-01 が若干深く掘り込まれている。溝の掘削時期に若干の差があるかも知れないが、SD-01 の先端部が SD-03 の東側壁部分でとまっていることや SD-02 の配置と他の溝との配置関係をみると、溝間に有機的な関連性が把握でき、使用時期および廃棄され埋没した時期は同じと考えられる。SD-01 は幅 75~100cm、深さ 40~50cm の断面が U 字形をなす。埋土層は大きな変化はないが、細かく分けると次の 6 層になる。第 1 層は、粘質性の弱い黒褐色土層、厚さ 20cm 前後、第 2 層は砂質の黒褐色土層、厚さ 10~20cm、第 3 層は粘質の淡黒褐色土層、厚さ 10~20cm、第 4 層は粘質の黒褐色土層、厚さ 10~15cm、第 5 層は砂質の灰黄褐色土層、厚さ 10cm 前後、第 6 層は粘質の灰黒褐色土層で厚さ 15cm 前後である。SD-01 は N-66°-E の方向をとり、SD-03 との重複部を入れて東西長 38m を測る。J-6, 7 グリットで南に 94 度の角度でもって屈するが、約 5m が遺存するのみである。現存する SD-01, 02 から掘りすぎによって失われた部分を復原すると、南北長は 19m となる。N-6 グリットで再び東にはば直角に屈曲し、SD-02 に連続する。SD-02 は遺存部分が約 38m の長さであるが、復原値は 52m を測る。SD-02 は N-73°-E の方向をとる。幅 60~80cm で深さ 60~85cm で断面 U 字形をなす。図示したのは SD-02 の断面図で断面図の作成部分は下の平面図において示している。いずれも SD-01 の土層堆積と比べて大きな差はない。a-a' の断面図では、第 1 層が黒灰色粘質土層で、厚さ約 8cm、第 2 層が黒灰

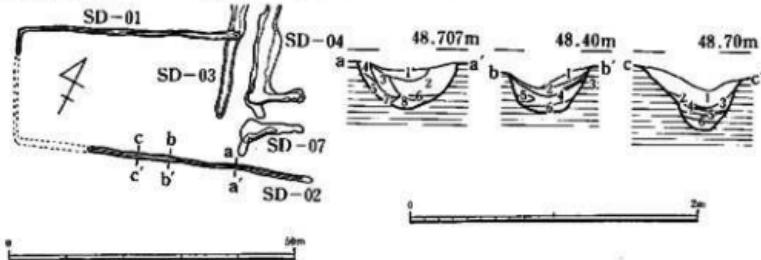


Fig.16 方形区画溝 (堀) I

色砂質土層、厚さ20cm前後、第3層が淡黒褐色土層で、わずかに粘質である。第4層が灰褐色粘質土層、第5層が暗黄灰色の粘質土層、第6層は淡黒灰色砂質土層、第7層が黄灰色粘質土層、第8層が暗黄灰色砂質土層となっている。b-b'の断面では第1層が灰黄褐色砂質土層、第2層が茶褐色砂質土層、第3層が黄褐色砂質土層、第4層が黒褐色粘質土層、第5層が黄褐色粘質土層、第6層が黄褐色土層で粘質が弱い。C-C'の断面では第1層が黒褐色粘質土層、第2層が灰黄褐色砂質土層、第3層が黄褐色粘質土層、第4層が黒褐色砂質土層、第5層が黑灰褐色砂質土層、第6層が黒褐色粘質土層となっている。SD-01, 02の断面は場所によって若干の差異をみせるが全体的には同じで、いずれも流れ込んだ土が自然堆積したものである。

SD-01, 02によって埋められた方形区画は、方形区画IIの溝、SD-03とSD-07とうまく配置されていて、その有機的関連性がうかがえる。方形区画Iは東西長35m、南北長は西端部で19m、東端部で22mを測り、SD-03と07の間に1ヶ所、SD-02と07の間に1ヶ所の出入口状の切れ間が存在する。

(山崎)

(2) 出土遺物

SD-01の出土遺物

SD-01からは特筆すべき遺物の出土はない。土師器皿が若干存在する。

SD-02の出土遺物 (Fig. 17)

(a) 土師質土器 (1~9)

土師質土器では、皿片が179点出土している。その内、溝の底部より出土したほぼ完形の9点について図示する。包含層出土皿の分類に従うと1がB類である他は全てC類である。1は底部から腰を張って立ち上がり、口縁部を外曲させる。内外面とも回転ナデ調整を施し、内底部には横ナデを施す。外底部は回転糸切り痕の上に板目圧痕が明瞭に残る。胎土は砂粒を含み、灰褐色をなす。2~9は口径11.5~12.4cm、器高2.3~2.9cm、底径8.2~9.2cmの法量分布を示す。2~4は体部外面下半の土を回転させながら軽く削り取った痕跡が認められるが5~9は特に認められない。胎土は僅かに砂粒を含み、黄褐色~赤褐色をなす。2の外底部と内底部が黒ずんでおり、特に内底部には黒い付着物が認められる。

(b) 陶器 (Fig. 28-7)

擂鉢片が2点と、鉢が1点出土している。擂鉢片は、細片のため図示しない。

鉢は復元すると、口径20.5cm、器高11.1cm、底径8.2cmである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部直下を内外面から削り、くびれさせている。底部は削り込み高台となる。体部外面は左回転のケズリ調整が施されている。内面はロクロ目が顕著である。赤褐色の胎土で、器面上に暗茶褐色の化粧掛けをしたのち、口縁部内側から外面にかけて、黒褐色の釉が施されている。

第4章 K遺跡の記録

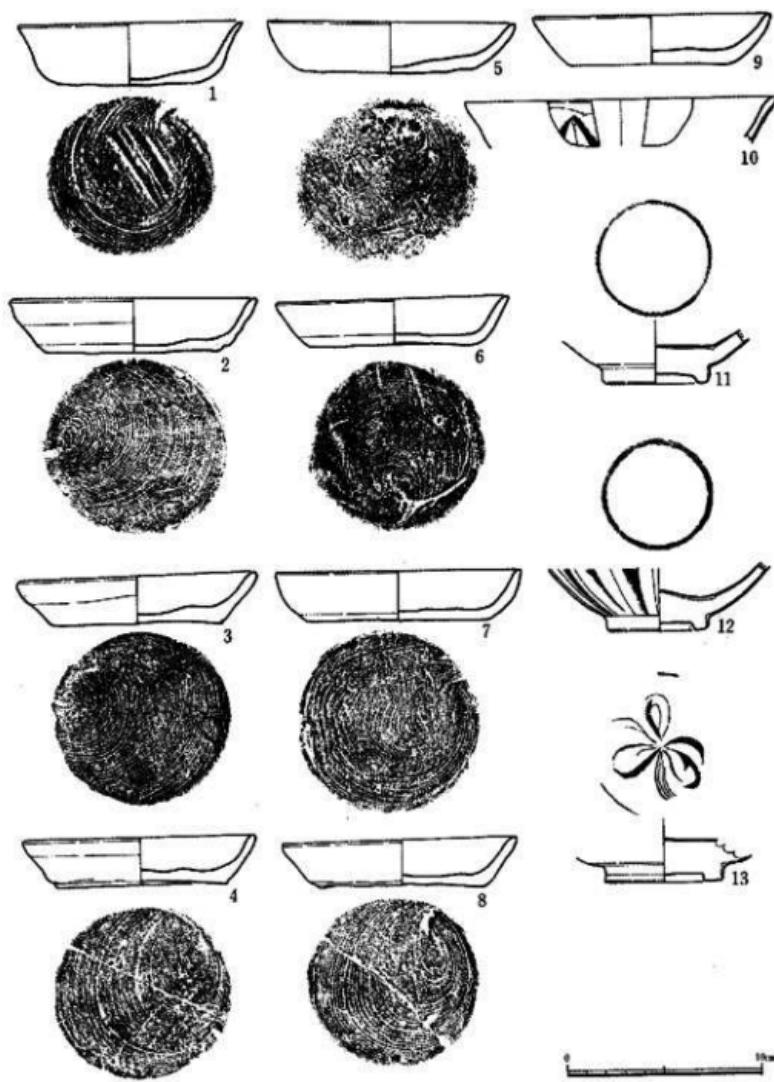


Fig.17 SD-02出土遺物実測図

5. 方形区画溝Ⅰと出土遺物

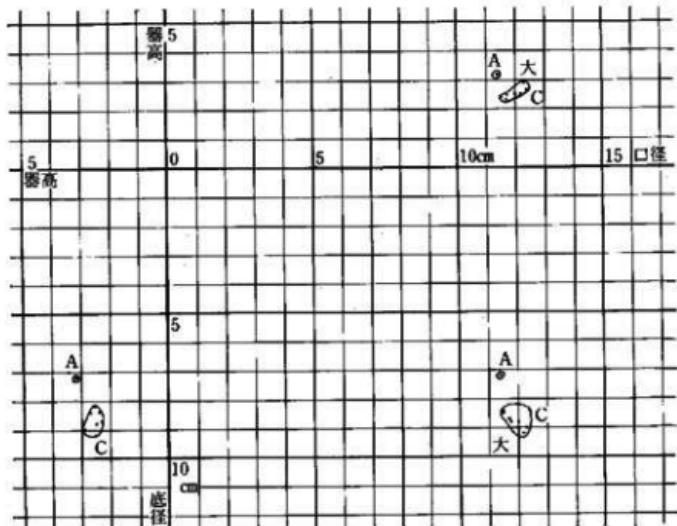
擂鉢は1点が東播産の製品で、他の1点は瓦質の製品である。

(c) 磁器

青磁4点、白磁1点が出土している。青磁は何れも龍泉窯系青磁で、10~12は鶴蓮弁文碗、13は内底部に蓮花文の描かれる割花文碗である。白磁は口ハゲ皿の細片である。(内野)

第3表 SD-02出土土師質土器皿法量計測表

	口 径	器 高	底 径	分 類
1	11.4	3.2	7.2	A
2	12.3	2.9	9.0	C
3	12.0	2.5	8.8	C
4	12.0	2.5	8.8	C
5	12.4	2.7	8.4	C
6	11.5	2.4	8.4	C
7	12.2	2.6	9.2	C
8	11.7	2.4	8.7	C
9	12.0	2.6	8.2	C



第4表 SD-02出土土師質土器皿法量分布図

6. 方形区画溝IIと出土遺物

(1) 遺構

調査区中央部に検出した溝で、遺存状態が悪いため部分的に消滅したところがあるが全体的にみた場合、河岸段丘の最も高い部分は方形に区画する二条の溝が復原できる。遺跡北側は櫛井川が深く解析していく侵蝕されているため溝の有無は明らかでない。しかし、他の溝の配置からするとともと溝の掘削ではなく、櫛井川の流路を代用していた可能性もある。以下、各溝について詳述し、最後に全体的な方形区画について考えてみることにする。

SD-03はI-14, J-14, K-13, 14, L-13, M-13, 14, N-13グリットにかけて検出した溝である。SD-01, SB-21, 25と重複関係にあり、SD-01とは同時期ないし、あまり時期幅のない時期の形成で廃棄時期は同時と考えられる。またSB-21とは同時期の可能性が強い。SB-25はSD-03より後出である。溝は南北方向(N-15°-W)に走り、長さ27mを確認した。溝幅は一定しておらず1~2mであるが、これは削平のためにによるもので、特に北側は著しい。深さ10~20cmで断面は皿状をなしている。Fig. 19-①, ②はSD-03の断面図である。①はK-14グリットの断面で、第1層は黒灰色の砂質土層、第2層は暗茶褐色粘土

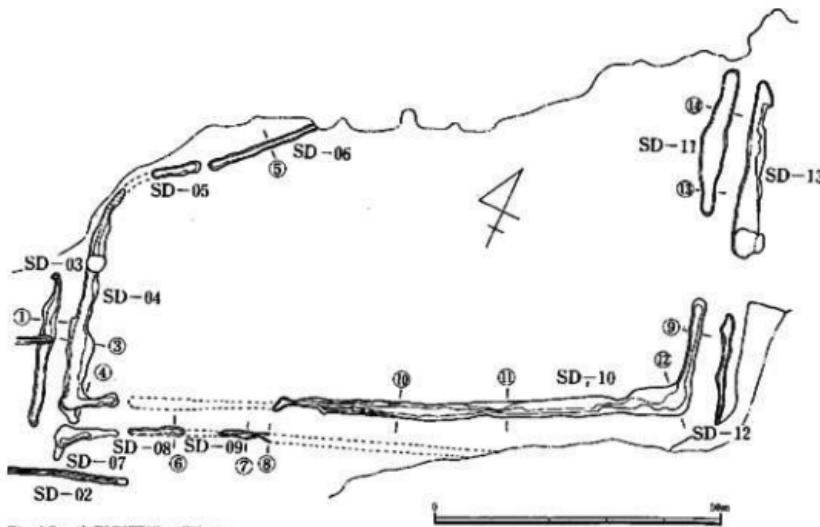


Fig.18 方形区画溝(堀)II

6. 方形区画溝IIと出土遺物

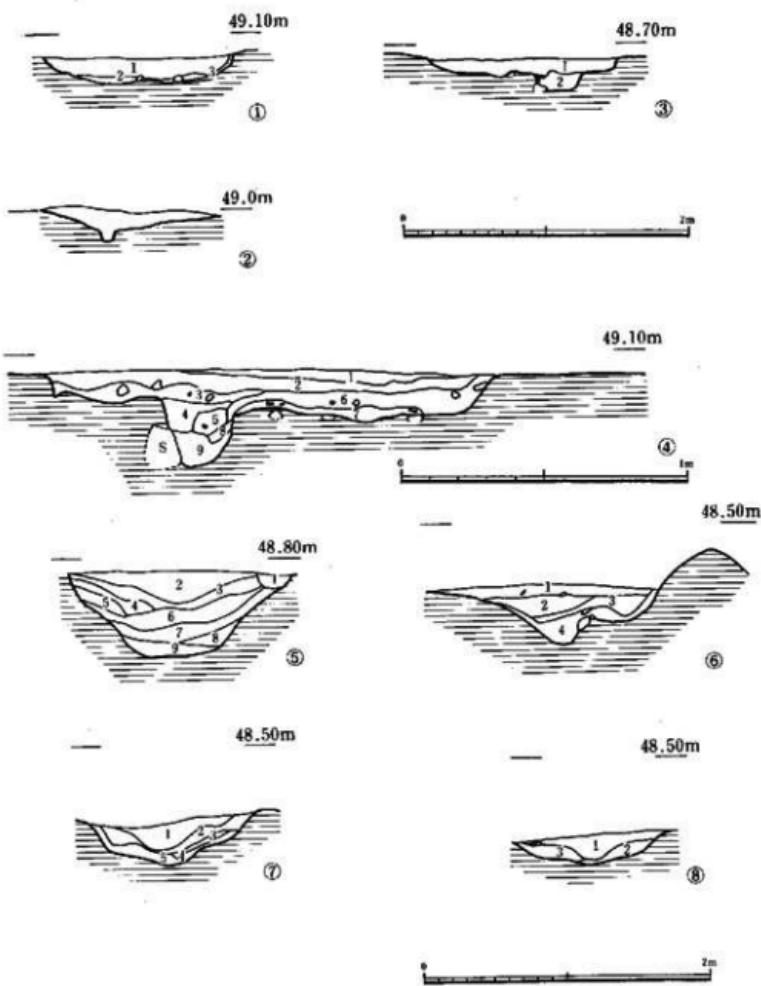


Fig.19 SD-03, 04, 06, 08, 09断面実測図

砂層、第3層は茶褐色砂層で鉄分の沈着がみられる。②はI-14グリットの断面で底面に近く厚さは10cm前後と浅い。黒灰色砂質土層によって埋まる。底に柱穴がみられる。

SD-04はF-16, 17, G-16, H-15, 16, I-15, 16, J-15, 16, K-15, L-14, 15, M-14~16, N-14, 15グリットにかけて検出した溝である。井戸(S E-01)、土壤(S K-19, 20)と重複関係にあり、S E-01, S K-19, 20が後出である。SD-03に平行して走る溝で、G-16グリットから地形にあわせてゆるく東に曲がる。またM-15グリットでは約80度の角度で屈曲し、東西方向に溝の向を変えている。SD-03とSD-04の間には幅3~3.5mの道路状の空間部が存在する。この空間部に柱穴、土塙等の遺構は存在しない。土塙の存在も考えられるが、全地区においてその存在は確認できず、溝内の堆積土からみても土塙の存在は考え難い。溝は南北方向に38m確認し、東西方向に8m確認した。溝幅は南北方向が2~4mで東西方向はややせまくなり1.5m前後である。深さは20~30cmと比較的浅く、断面形は皿状をなしている。Fig. 19-③, ④はSD-04の断面図である。③はM-15グリットの屈曲部の断面で、第1層は擾乱されているが、暗灰茶色土層に地山の褐色土が混入している。第2層は明灰褐色土層となっている。この地区的地山は部分的に礫が多く、構造も整然とはしていない。④はK-15, L-16グリットの境界部分の断面である。第1層は赤褐色土層、第2層は灰褐色土層、第3層は暗灰褐色土層、第4層は明赤褐色土層、第5層は暗赤褐色土層、第6層は暗灰黄褐色土層、第7層は暗灰茶色土層、第8層は灰黄褐色土層、第9層は灰黄褐色土層(粗い)となっている。

SD-05はE-18~20, F-18~20に検出した。東西方向に走る溝で、元来はSD-04と連接していた可能性は強い。主軸方向をN-55°Eにとり、現存長は8mである。東側は完結し、東側に存在するSD-06との間に幅2mの出入口状の空間部が存在する。幅1.5~2mで深さ20~40cmで東に向って深くなる。

SD-06はD-23, 24, E-20~24, F-20、グリットにかけて検出した。SB-31~33と重複関係にあり、SD-06はSB-31より新しく、SB-32, 33より古い。東西方向(N-45°E)に走る溝で長さ15mを確認した。西側はE・F-20グリットで終結し、SD-05との間に幅2mの出入口状の空間部分をつくり出す。幅1.3~1.5mで深さ60cm前後である。断面形はU字形をなしている。Fig. 19-⑤はD・E-23グリットの断面図である。第1層はSB-33の柱穴である。第2層は粗砂を含む黄褐色土層、第3層は粘質の暗灰褐色土層、第4層は黒色土を含んだ暗灰褐色土層、第5層は赤褐色土層、第6層は粘質の暗灰褐色土層、第7層は粘質の暗灰褐色土層、第8層は褐色土層、第9層は灰茶褐色土層となり、いずれもレンズ状の堆積をみせ、自然に流れ込んだ土の堆積状態を示している。

SD-07はN-14~16, O-14グリットにかけて検出した溝である。SB-25, 26, 29と重複関係にあり、SB-29は直接の切り合い関係がないため、その前後関係は不明であるが、配

6. 方形区画溝口と出土遺物

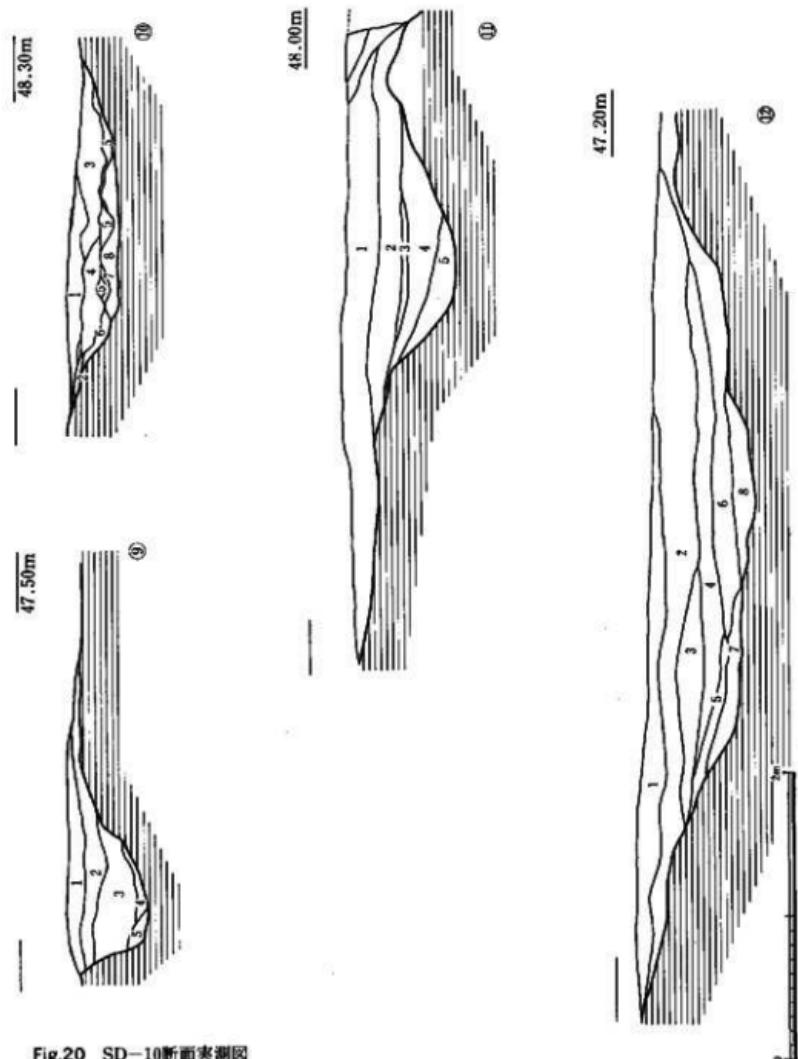


Fig.20 SD-10断面実測図

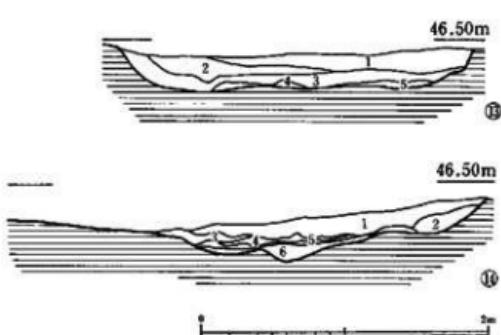


Fig.21 SD-11断面実測図

置等から考えると同時期としてよいと思われる。S B-25, 26はS D-07より後出である。東西方向と南北方向にのびる溝でL字形を呈している。南北方向はS D-04の延長上にのり、S D-04と約2.7mの空間地帯をつくり東西方向に通路状をなしている。溝は南北方向に6.7mを確認した。S D-07の南端部とS D-02の間にも1.5mの空間地帯が存在し、出入口状をなし

ている。東西方向には約8m遺存し、S D-04の東西方向と平行する。東端部の終結部分もS D-04と一致し、S D-08との間に約1.7mの空間部が存在し、陸橋状の出入口部分を形成している。溝は幅1.5m、深さ10~40cmで断面形は皿状をなしている。

S D-08はN-16~18, O-17, 18に検出した溝で、S D-07の延長線上に存在する。東西方向に走向する溝でS B-29と重複関係にある。S B-29はS D-08とほぼ同時期であることは先に指摘した。S B-29は陸橋部につくられた門としての機能が考えられる。遺存長10m、幅1.5~2m、深さ35cm前後、断面形は皿状をなす。地山が砂礫層のため整ったものでない。Fig. 19-⑥は、N・O-18グリットにおけるS D-08の断面図である。第1層は茶褐色砂層、第2層は暗灰茶褐色砂層、第3層は暗灰色粘質砂層、第4層は暗茶褐色粘質砂層となっている。

S D-09はO-19~21グリットに検出した東西方向に走る溝である。S D-08の延長線上にあり、元来はS D-08と連接するものである。また、O-21グリットより東側は水田の段落ちによって完全に削平され消失しているが、元来はさらに東にのびてS D-12と連接すると考えられる。遺存長約9m、幅1~1.2m、深さ20~30cmで、断面形は皿状をなしている。Fig. 19-⑦、⑧はS D-09の断面図である。⑦はO-20グリットにおける断面で、第1層は黒褐色土層、第2層はやや粘質の黄黒褐色土層、第3層は粘質の明黄褐色土層、第4層は粘質の黄褐色土層、第5層は砂質黄褐色土層となっている。⑧はO-21グリットにおける断面で、第1層は黄褐色土層、第2層は暗褐色土層、第3層は暗茶褐色土層となっていて、部分的に若干の違いをみせる。

S D-10はL-36, M-36, N-21~27, 35, 36, O-24~36, P-34, 35グリットに検出した溝で、S D-04の東西溝の延長線上に位置するが、S D-04と陸橋部を境にして、東の約18mの間は水田の段落ちの部分と重なり完全に消滅している。S D-10は東西方向(N-67°-E)に約53m遺存し、O・P-35グリットで約103度の角度をもって東西方向(N-36°-W)に

6. 方形区画溝IIと出土遺物

屈曲し、約16mのびて終結する。溝は幅1.5~1.0mで深さ30~75cmで断面形は皿状をなす。Fig. 20はSD-10の断面図である。⑨はM-36グリットにおける断面である。第1層は明黒褐色土層、第2層は黒茶褐色土層、第4層は明灰黒褐色土層、第5層は灰茶褐色土層をなす。⑩はN-O-25グリットの断面で、第1層は黒色土、第2層はやや粘質の暗黄褐色土層、第3層は黄褐色土層が混入する黒褐色土層、第4層は黒褐色土層、第5層は粘性の弱い黒褐色土層、第6層は粘質の黒色土層、第7層は粘質の黄褐色土層、第8層は暗黄褐色土層となっている。⑪はO-28グリットの断面である。第1層は鉄分の沈着した灰茶褐色土層、第2層は暗茶褐色土層、第3層は粘質の黒色土層、第4層は黄褐色土の混入した明黒色土層、第5層は暗黄褐色土層である。⑫はO-35グリットの屈曲部付近の断面である。第1層は鉄分の沈着した暗赤褐色土層、第2層は鉄分が多い沈着した赤褐色土層、第3層は黄灰褐色土層、第4層は青灰褐色土層、第5層は暗黄灰褐色土層、第6層は青灰色土層、第7層は黒灰褐色土層、第8層は黄灰色土層となっている。

SD-11はD-38、E-37、38、F-37、38、G-37、38、H-36、37、I-36、37グリットに検出した南北に走る溝でSD-10の南北の溝の延長線上に位置し、SD-10との間に約11mの空間が存在し、出入口の機能を果している。SB-55と重複関係にあり、SD-11が先行する。SD-11は遺存長約19m、幅1.5~3m、深さ20~30cmで断面形は皿状をなしている。Fig. 21はSD-11の断面図である。⑬はH-37グリットの断面である。第1層は明黒褐色土層、第2層は粘質の黒褐色土層、第3層は粘質の明茶褐色土層、第4層は黄茶褐色土層、第5層は明灰白色砂層となっている。⑭はE・F-3グリットの断面である。第1層は明黒褐色土層、第2層は黄茶褐色土層と黒褐色土層の混合層、第3層は灰黒茶褐色土層、第4層は明茶褐色土層、第5層は粘質の黒茶褐色土層、第6層はやや粘質の黄茶褐色土層となっている。

SD-12はL-37、M-37、N-36、37、O-36、37、P-36グリットに検出した南北方向の溝で、SD-10とは4~5m幅の空間（通路）をもって平行する。南端部は水田の段落ちによって消滅しているが、元来は屈曲してSD-09と連接するものである。北端部はL-37グリットで終結し、SD-13との間に約10mの空白部が存在し、出入口の機能を果していたと考えられる。溝は遺存長20m、幅1~2m、深さ10cm前後である。

SD-13はD-39、F-38、39、G-38、39、H-38、39、I-37、38、J-37、38グリットにわたって検出した南北に走る溝である。SD-12の延長線上に位置し、SD-11とは幅3mの空白部（通路）を介して平行している。SD-12との間には約10mの間空白部となり、出入口の機能を果している。遺存長約30m、幅2~4m、深さ20~30cmである。

以上の溝によって二条にめぐる方形区画が構成されているが、以下、内側の方形区画を内桝、外側の方形区画を外桝としてまとめてみる。

内桝はSD-04~06、SD-10、11によって区画されるもので若干のひずみはあるが、東西

に細長い方形区画をなす。溝内側で、東西長約101m、南北長は西端部で約34m、東端部で58m以上を測る。東中央部と西端部に近い南、北に出入口状の陸橋が存在する。

外縁は内縁の溝の外側に幅3~4mの通路状の空間地を設えてその外側に溝をめぐらす。SD-03、SD-07~09、SD-12、SD-13によって構成される。一部水田の段落ちなどの削平によって消滅しているが、ほぼ内縁と相似形の方形区画を読みとくことができる。溝内側で、東西長115m、南北長は西端部で47m以上、東端部で68m以上を測る。また、溝外側では東西長約118m、南北長は西端部で48m以上、東端部で70m以上となる。出入口状の陸橋は内縁と一致した所に備えられている。
(山崎)

(2) 出土遺物

SD-03出土遺物 (Fig. 22)

① 土師質土器

皿の破片が327点出土しているが、何れも細片である。

② 磁器

青磁1点、白磁2点が出土している。青磁は龍泉窯系鎌蓮弁文碗、白磁は碗と口ハゲ皿片で、何れも細片である。

③ 石製品

硯が1点出土している。海部、および陸部の一部を欠失している。残存部についてみると、縦幅約12.2cm、横幅約8~9cm、厚さ約2.0cmである。アズキ色の粘板岩質の石材を用いて作られている。海、陸部の外縁付近に裝飾文様として、逆円錐形の孔があけられ、陸部右上端には6本の刻み目が認められる。一度、破損した後、さらに調整を加えて、再利用していたために装飾文様の全体を知ることはできない。石材、文様の特徴より、中国の端溪産の硯である可能性が強い。

SD-04出土遺物 (Fig. 23, 24, 25)

① 土師質土器

土師質土器として、皿(大、小、特大)、壺がある。

(a) 皿(1~34) SD-04より出土した皿の破片は総数約4,250点である。全て輪轉成形(回転)され、外底部に回転糸切痕を残す。また同時に、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものが多く存在する。細片が多いため、31点について図示する。

大(1~26) 胎土の特徴による分類に従うと、1がA類である他は全てC類である。1は口径12.0cm、器高2.8cm、底径8.0cmで、胎土は白灰色、精良である。口縁の一部に煤が付着している。2~26は口径11.3~13.0cm、器高2.2~2.8cm、底径7.3~9.8cmの法量分布を示す。胎

6. 方形区面溝IIと出土遺物

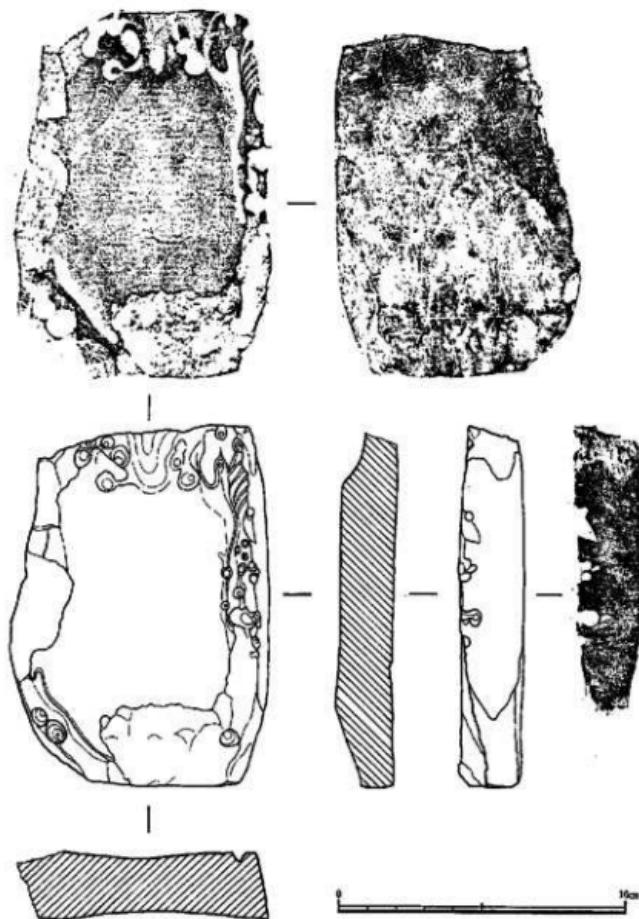


Fig.22 SD-03出土遺物実測図

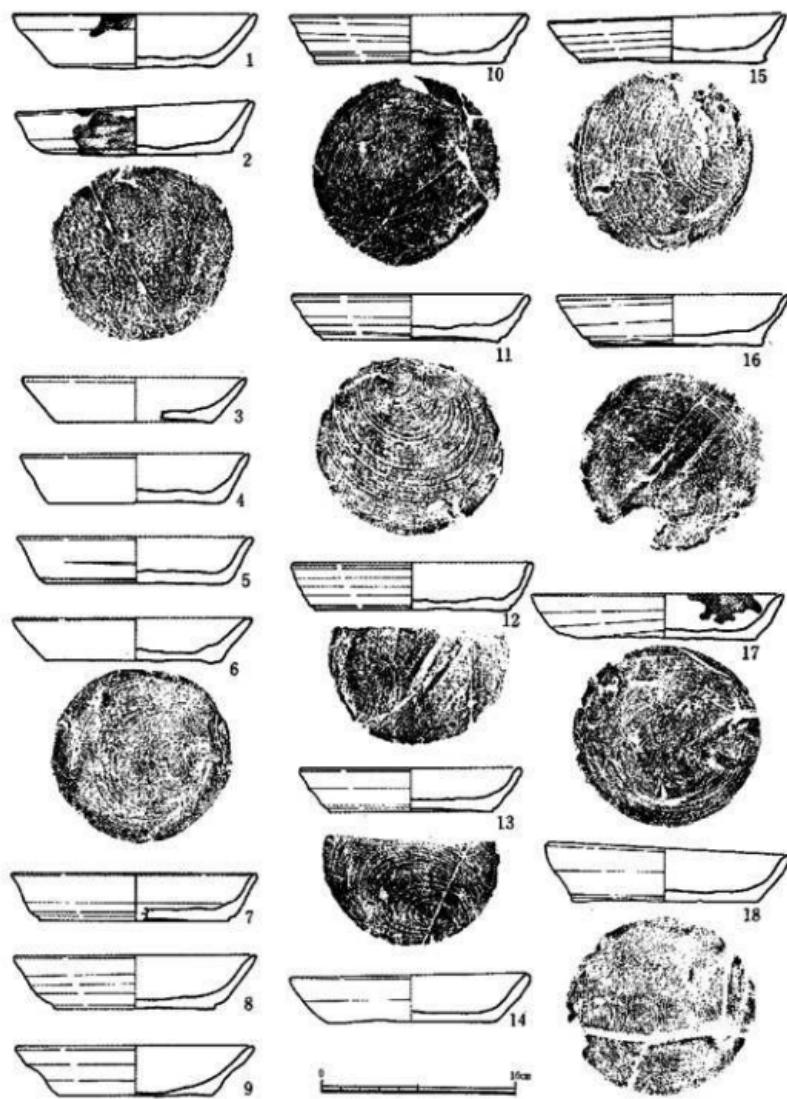


Fig.23 SD-04出土遺物実測図 I

6. 方形区塗溝IIと出土遺物

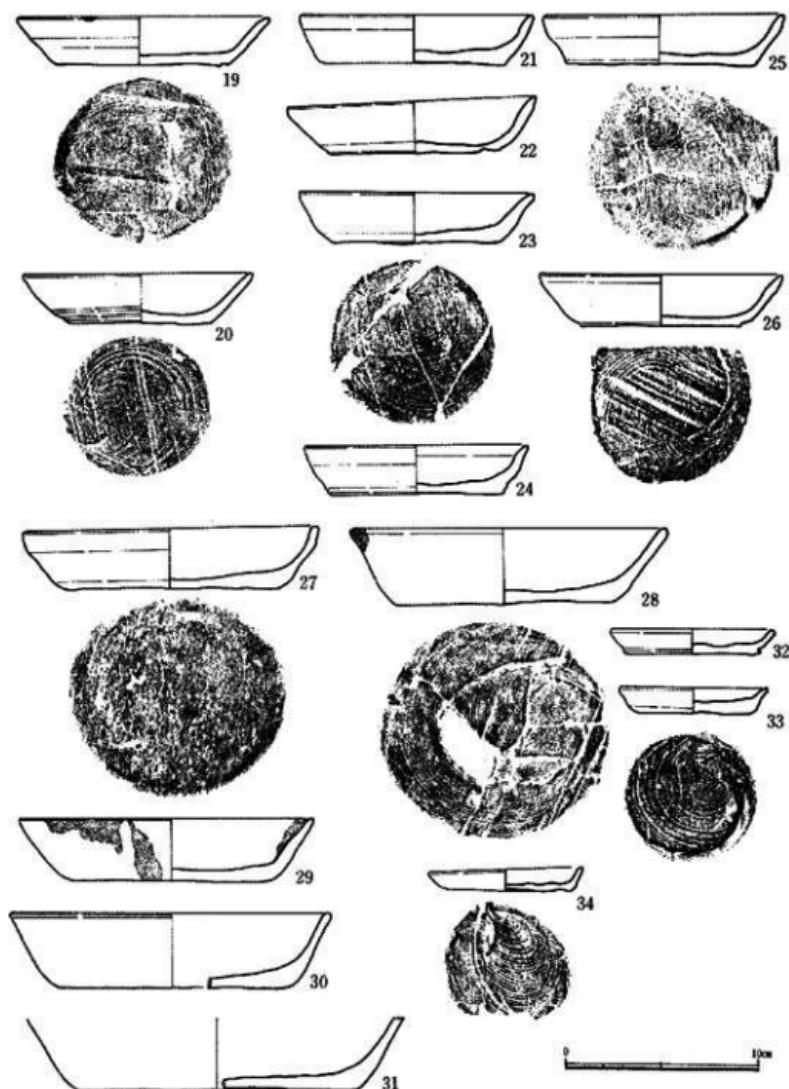


Fig.24 SD-04出土遺物実測図II

土は何れも黄褐色～赤褐色である。2, 10, 17は器面の一部に黒く付着している。

小 (32～34) 胎土の特徴により分類すると、図示した3点は、何れもC類である。口径7.5～8.3cm、器高1.1～1.3cmの法量分布を示す。何れの胎土も赤褐色をなす。

特大 (27～31) 5点存在する。口径14.6～16.0cm、器高3.1～3.9cm、底径10.2～11.4cmの法量分布を示す。31は底部から体部のみの破片であるが、底径14.4cmと比較的大きめである。何れも輪轍成形のうち内底部をナデ調整し、外底部のはみ出した土を丁寧に削り取っている。27, 28の外底部には板目压痕が明瞭に残っている。28は口縁の一部に、29は器面全体に煤が付着している。

(b) 堀 (35, 36) 口縁部から体部中央まで残存する。復元口径(縁帶内側)は24.8cmである。粘土紐成形のうち、口縁部の縁帶を接合し、回転ナデ調整を施している。さらに、体部外面上半は櫛状工具により縦方向の調整が、内面下半には板状工具による斜方向の調整が施されている。胎土は砂粒を含み、赤褐色をなす。縁帶外側面から体部外面にかけて、煤が濃厚に付着している。36は35と同様に、縁帶と体部の外面接合部を櫛状工具で縦方向に調整している。煤は体部外面に濃厚に付着する。

② 陶器 (37)

東播産の擂鉢片が1点出土している。口縁部を垂直方向に折り、断面三角形状をなす。胎土は砂質で、灰色をなし、焼成は良好である。

③ 磁器

第5表 SD-04出土土師質土器皿法量計測表

	口 径	器 高	底 径	分 類
1	12.0	2.8	8.0	A
2	12.0	2.3	9.7	C
3	11.4	2.3	8.1	C
4	(11.6)	2.5	8.9	C
5	(11.8)	2.4	9.2	C
6	11.9	2.2	8.9	C
7	12.5	2.5	9.6	C
8	12.0	2.8	8.0	C
9	12.0	2.6	8.0	C
10	12.2	2.5	9.1	C
11				C
12	12.2	2.5	10.0	C
13	12.2	2.3	8.4	C
14	12.0	2.4	8.5	C
15	11.8	2.3	9.5	C
16	12.3	2.7	8.3	C
17	12.6	2.3	8.2	C
18	12.0	2.8	9.4	C
19	12.7	2.5	8.3	C
20	11.5	2.5	7.3	C
21	11.6	2.6	9.4	C
22	12.6	2.7	8.7	C
23	11.7	2.7	8.5	C
24	11.5	2.5	8.6	C
25	12.7	2.6	9.8	C
26	12.3	2.7	8.3	C
27	14.6	3.2	10.7	
28	15.8	3.9	11.2	
29	15.0	3.2	10.2	
30	(16.0)	3.9	11.4	
31	—	—	14.4	
32	8.2	1.3	6.8	C
33	7.5	1.4	6.0	C
34	7.8	1.1	7.0	C

6. 方形区画溝IIと出土遺物

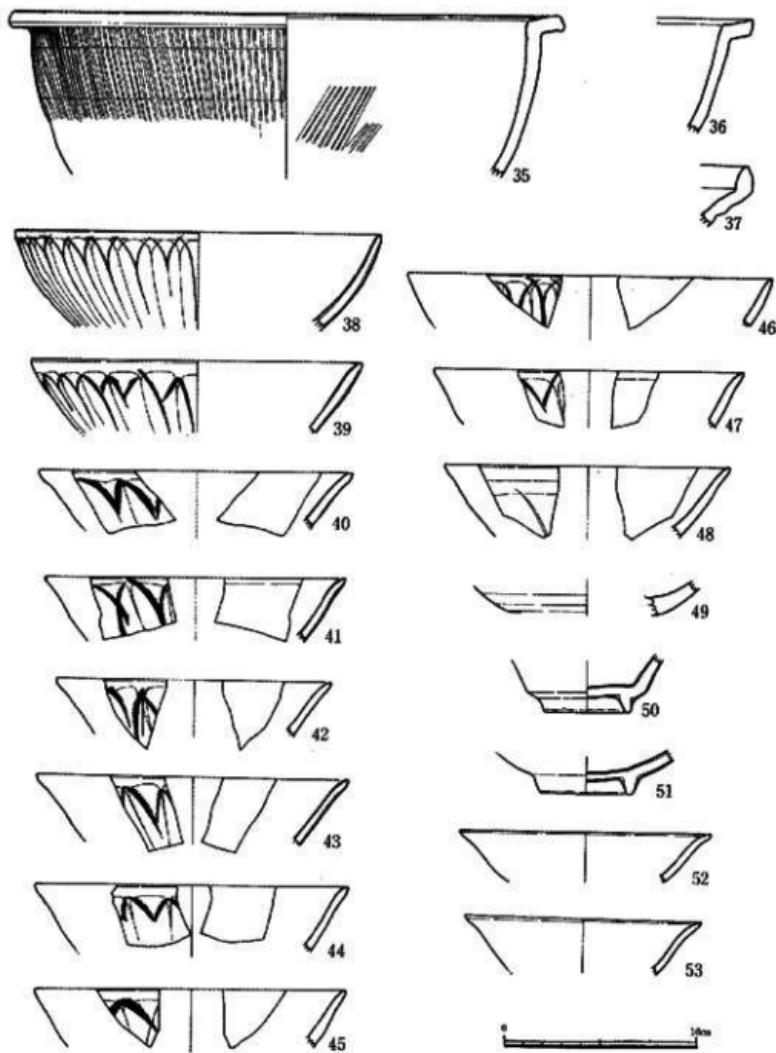
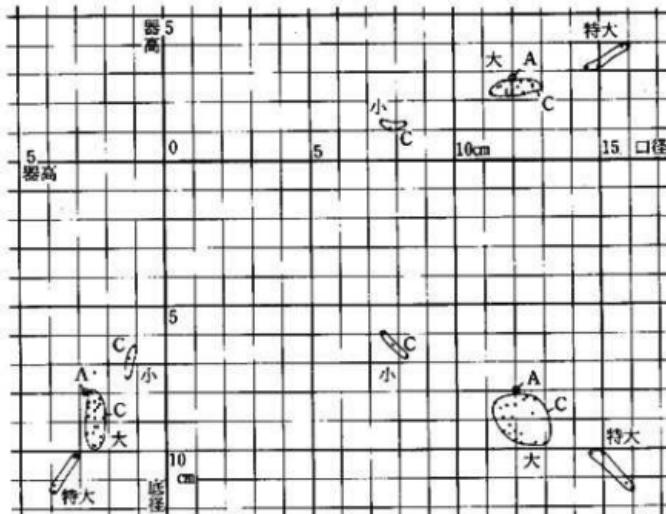


Fig.25 SD-04出土遺物実測図III

(a) 青磁（38～51） 龍泉窯系鎬蓮弁文碗片22点、無文碗片2点、坏片2点がある。38は一定の間隔（約1.5cm）で丁寧に鎬を削り出したのち、ヘラで細く蓮弁の輪郭を入れる。器壁は非常に薄く削られ、釉は内外面に厚く掛かる胎土は白灰色で精良、釉は暗緑色である。39～48は鎬を削り出したのち、ヘラで強く蓮弁の輪郭を彫っている。釉は暗緑色～黄緑色をなす。49は無文碗の体部片である。50、51は何れも坏の底部片である。高台疊付部のみ無釉とし、釉と露胎部の境は赤味を帯びる。胎土は白灰色精良で、50は青緑色、51は淡緑色をなす。

(b) (52～53) 口ハゲ皿の口縁部片が2点ある。口縁部は大きく外曲する。灰白色の胎土で、釉は灰白色である。



第6表 SD-04出土土師質土器皿法量分布図

SD-05出土遺物 (Fig. 26)

① 土師質土器 (1～10)

SD-05より出土した皿の破片は総数約1,940点である。細片が多く、完形品はほとんど存在しない。図示可能な10点について説明する。

大 (1～6) 全てC類である。口径12.0cm、器高2.3～2.9cm、底径8.2～9.6cmの法量分布を示す。何れも黄褐色～赤褐色の胎土をなす。1～5は体部外面の余分な土を軽く掻き取っている痕跡が認められる。

小 (7～9) 口径7.6～8.0cm、器高1.1～1.3cm、底径5.8～6.8cmの法量分布を示す。7、8

6. 方形区画溝IIと出土遺物

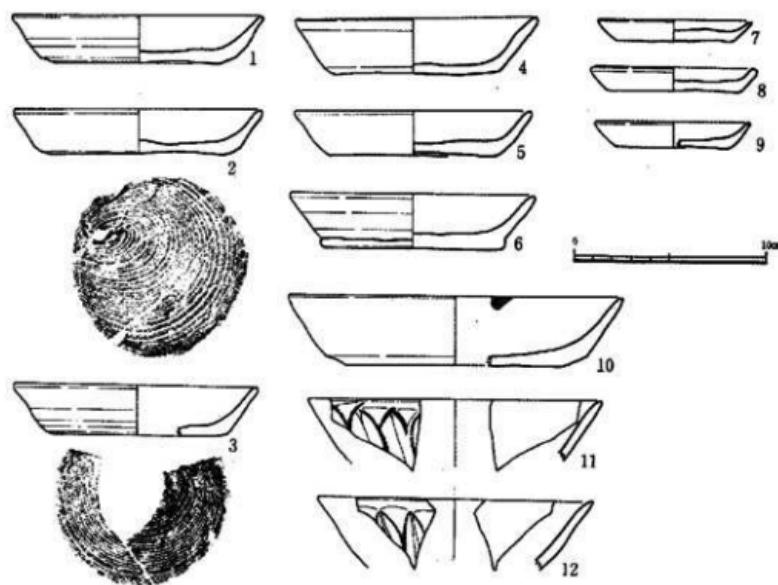


Fig.26 SD-05出土遺物実測図

は灰褐色、9は赤褐色をなす。小皿の場合、砂粒の粗粒がある。

特大(10) 復元すると、口径17.0cm、器高3.6cm、底径11.4cmとなる。体部外表面下部(部際)のはみ出た土を丁寧に搔き取っている。胎土は砂粒を僅かに含み、赤褐色をなす。

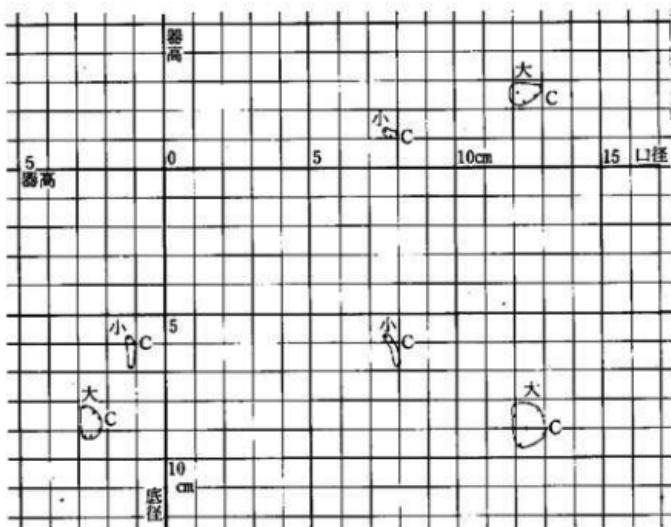
② 磁器(11, 12)

青磁が2点出土している。何れも龍泉窯系築蓮弁文碗で、11は淡緑色、12は暗緑色をなす。

第7表 SD-05出土土師質土器皿法量計測表

	口 径	器 高	底 径	分 類
1	(12.8)	2.5	8.4	C
2	12.4	2.3	9.0	C
3	(12.2)	2.6	9.2	C
4	12.0	2.9	8.2	A
5	12.0	2.3	8.6	C
6	13.0	2.8	9.2	C
7	(7.8)	1.1	6.0	C
8	(8.0)	1.2	6.8	C
9	7.6	1.3	5.8	C
10	(17.0)	3.6	11.4	

第4章 K遺跡の記録



第8表 SD-05出土土師質土器皿法量分布図

第9表 SD-06出土土師質土器皿法量計測表

SD-06出土遺物 (Fig. 27)

① 土師質土器 (1~17)

SD-06より出土した皿の破片は、総数約170点である。全て輪轉成形され、外底部に回転糸切痕を残す。また、同時に内底部にナデ調整痕、外底部に板目压痕を残すものが多く存在する。細片が多く、完形品、準完形品はほとんど見いだせない。図示可能な17点について説明する。

大 (1~9) 1~4はA類、5・6はB類、7~9はC類である。A類は口径11.0~12.8cm、器高2.5~3.2cm、底径6.8~8.6cmの法量分布を示す。

土は精良で黄灰色をなす。4は内面に4本の深い沈線がめぐっている。5、6はそれぞれ口径12.0、12.4cm、器高2.4、3.1cm、底径

	口 径	器 高	底 径	分 類
1	12.8	2.9	8.6	A
2	11.0	3.0	6.8	A
3	12.4	3.2	7.6	A
4	12.0	2.5	7.4	A
5	12.0	2.4	8.2	B
6	12.4	3.1	8.2	B
7	12.2	2.2	9.4	C
8	-	-	-	
9	13.1	2.3	11.0	C
10	8.0	1.6	5.6	A
11	7.8	1.3	5.8	A
12	7.8	1.3	5.6	A
13	7.8	1.3	7.6	C
14	7.6	1.1	5.2	C
15	8.0	1.1	6.8	C
16	8.0	1.0	5.4	C
17	-	-	11.3	C

6. 方形区画溝IIと出土遺物

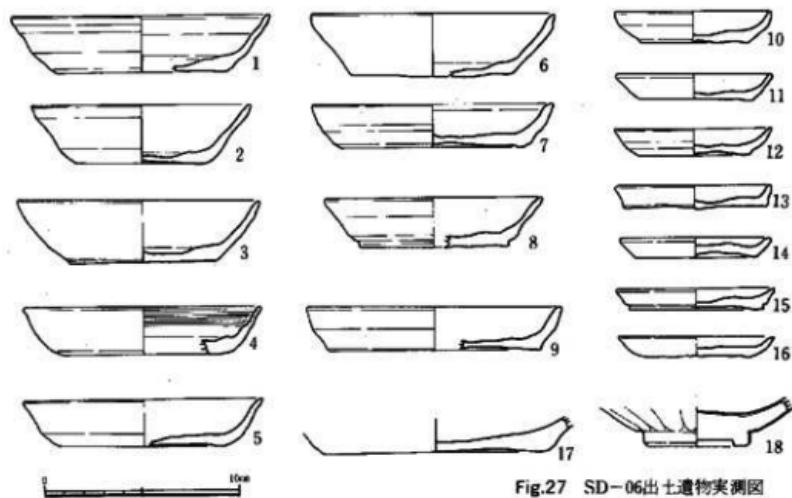
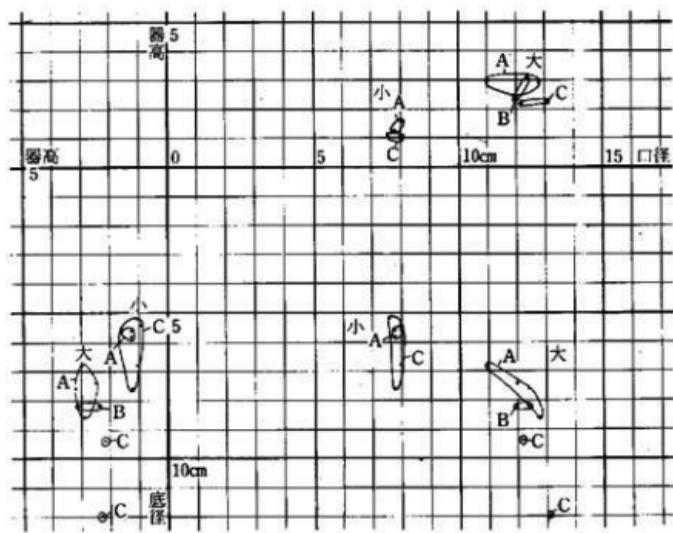


Fig.27 SD-06出土遺物実測図



第10表 SD-06出土土師質土器皿法量分布図

8.2cmである。胎土は白色砂粒を含み、黄褐色をなす。7～9は口径12.2～13.1cm、器高2.2～2.3cm、底径9.4～11.2cmの法量分布をなす。

小(10～16) 口径7.6～8.0cm、器高1.0～1.6cm、底径5.2～7.6cmの法量分布を示す。10～12は土が精良で、灰褐色をなし、12～16は黄褐色～赤褐色。前者はA類、後者はC類である。

特大(17) 底部片が1点ある。底径11.3cmでやや焼成不良気味である。黄褐色～赤褐色の胎土で、白色砂粒を僅かに含む。

② 磁器

龍泉窯系鎮蓮弁文碗の底部片が1点ある。淡茶褐色の胎土で、暗黄緑色の釉をなす。

SD-07, 10出土遺物 (Fig. 28)

① 土師質土器

土師質土器として、皿、壺がある。

a)皿 出土した皿の破片は、総数約520点である。全て輥壓成形され、外底部には回転糸切痕を残す。同時に、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものが多く存在する。細片が多く、図示し得た点について説明する。

1は復元すると、口径12.8cm、器高2.4cm、底径8.4cmである。赤褐色の胎土でC類である。

2～4は口径7.2～8.0cm、器高0.9～1.2cm、底径5.7～6.3cmの法量分布を示す。砂粒を僅かに

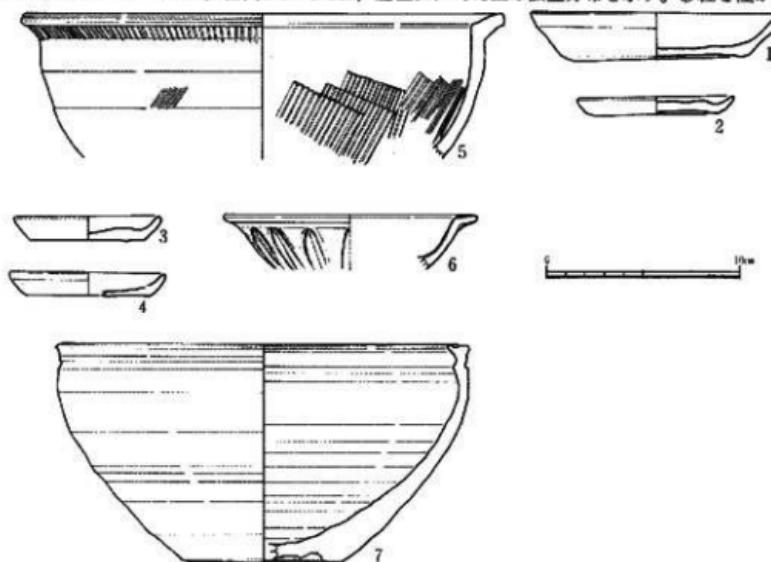


Fig.28 SD-07, 10出土遺物実測図

6. 方形区画溝IIと出土遺物

含む赤褐色の胎土をなし、C類である。

b) 土堀(5)口縁部から体部までの破片である。復元口径(縁帯内側)は24.6cmである。粘土紐成形ののち、口縁部の縁帯を接合している。接合部外面は櫛状工具により縦方向の調整を施し、内面は横ナデ調整を施す。また体部外面には、僅かに板目擦痕が、内面は顯著に、板目による調整痕が認められる。胎土は赤褐色で、白色砂粒を多く含む。口縁部側面から体部外面にかけて、真黒に煤が付着している。

② 磁器

龍泉窯系の青磁折縁皿が1点出土している。器壁は薄く削られ、外面には錦蓮弁文が削り出されている。胎土は白色精良で、釉は厚く、青緑色をなす。

SD-13出土遺物 (Fig. 29)

① 土師質土器

出土した皿片は総数約250点である。細片が多く、図示し得たのは2点のみである。1は口径12.4cm、器高2.2cm、底径9.0cm、2は口径13.0cm、器高2.9cm、底径9.2cmで、何れも僅かに砂粒を含む赤褐色の胎土をなす。C類である。
(内野)

7. 方形区画溝IIIと出土遺物

(1) 遺構 (SD-14, 15)

調査区の東端に検出したものである。SD-14と15は前面の崖によって分断されているが、元来は連接し、コの字形をなすものと考えられる。崖下に存在する段落ちの肩部が、溝の肩部と一致する可能性が強い。そうした場合、この方形区画は、東西長が約23m、南北長が東端部で約27m、西端部(SD-14, 15間の距離)で約16mとなる。またSD-13とSD-14の間は約7mの空間が存在し、出入口の機能を果していたことが察知でき、SD-14, 15の西端部とSD-13の間は幅7mの空間部として存在し、通路状の役目を果していた可能性がある。

このSD-14, 15によって構成される方形区画は前二者とは機能を大きく異にしていたと推定される。他の区画内には掘立柱建物、土塙等の遺構が存在するのに対して、この区画内にはそれらの遺構が全然存在しない。河岸段丘の先端に位置し、後世の開田に際する削平が著しかったことは疑いないが、疑問とする点である。また、他の方形区画の溝が比較的浅いことである。これに対して方形区画III SD-14, 15は東に向って深くなり、他の溝との用途の違いが想

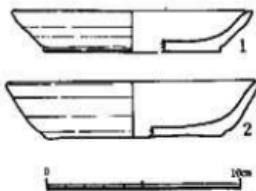


Fig.29 SD-13出土遺物実測図

定される。前述の後世における削平を考慮すれば、さらにその差は明らかである。他の溝が区画を意識した事に対し、SD-14, 15が防御的性格を備えていたことがわかる。仮りに溝と段丘前面にまわる溝底の比高差は約5m前後となる。また、方形区画の設置場所が問題になろう。SD-14の南側は方形区画IIの出入口部に連接する部分であり、地形的な面から推測しても、この部分が、この居館址の主な出入口（大手門的性格）であったことは疑いないところであり、これに対する警固する場所としての位置づけが可能である。以下、SD-14, 15についてみてみる。

SD-14はG-40, 41, H-41~44, I-42~45にかけて検出したもので、段丘の下をまわり、SD-15と連接する可能性が強い。やや南にふくらみ円弧を描く東西方向に走る溝で遺存長は約23mである。幅は3m前後で西から東に向って深さを増している。溝途中での深さ125cmを測る。断面形はU字形をなす。Fig. 30-②はSD-14の断面図である。第1層は鉄分が沈着

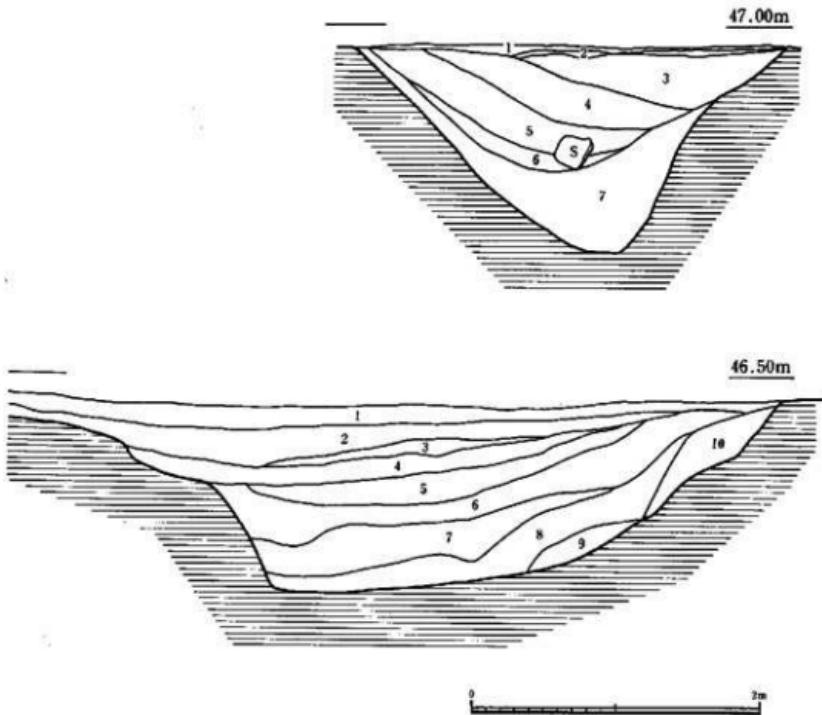


Fig.30 方形区画溝（堀）III, SD-14, 15断面実測図

し、暗赤褐色土層、第2層は黒褐色土層、第3層はやや黒味がかった黄褐色土層、第4層は粘質の黒褐色土層、第5層は黒色土層、第6層は黄褐色土層、第7層は暗黄褐色土層、第8層は黄褐色土層、第9層は暗黄褐色土層、第10層は黄灰褐色土層をなしている。

S D-15はC-41~44グリットに検出した溝である。S D-14と連接する可能性が強い。東西方向の溝で、遺存長17m、幅は0.5~3.8mで東に向って広くなる。溝底も東に向って傾斜し深さを増す。断面形はV字状を呈する。Fig. 30-①はその断面図である。第1層は鉄分の沈着した砂層、第2層は黄白砂層、第3層は黒褐色土層、第4層はやや黒味をおびた黄褐色土層、第5層は黄褐色土層、第6層は黒褐色土層、第7層は黒色土層となっている。(山崎)

(2) 出土遺物

S D-14・15出土遺物 (Fig. 31)

① 土師質土器 (1~4)

土師質土器には、皿、鉢がある。

a) 皿 (1, 2) 系切底を有する皿の破片は総数約237点である。細片が多いため、図示可能な1点についてのみ説明する。1は復元すると口径11.7cm、器高2.4cm、底径8.3cmとなる。赤褐色の胎土でC類である。

2はヘラ切り底を有する皿である。復元口径15.5cm、器高1.8cm、底径11.1cmで、胎土は白色砂粒を僅かに含み、黄褐色をなす。

b) 鉢 (3, 4) 2個体ある。3は底部から口縁部まで残存しており、全体の形状が復元可能である。口径18.0cm、器高8.7cm、底径10.0cmとなる。平底の底部から、体部がほぼ直線的に開き、口縁部付近に至って内傾する。底部は指で丁寧にナデ調整が施され、器面は滑らかである。体部から口縁部までは、内外面とも全て回転ナデ調整によっており、削り調整痕等は特に認められない。胎土は白色砂粒を多く含み、赤褐色をなす。体部外面の口縁部付近に、一部黒ずんだ箇所が認められる。4は3の形態をもつ鉢の下半部と考えられる。底部から体部中央まで残存する。復元底径は8.3cmとなる。底部および体部外面にかけて、きつい回転ケズリ調整が施され、内面は回転ナデ調整が施されている。胎土は砂粒を多く含み、暗赤褐色をなす。外面全体の器表面が黒ずんでいる。

② 磁器 (5)

白磁小皿の底部片が1点出土している。内面に花文がヘラにより描かれている。底部外面は回転ケズリ調整が施されており、それ以外の部分に白色の釉が掛けられている。胎土は灰白色で、極めて精良である。

③ 陶器

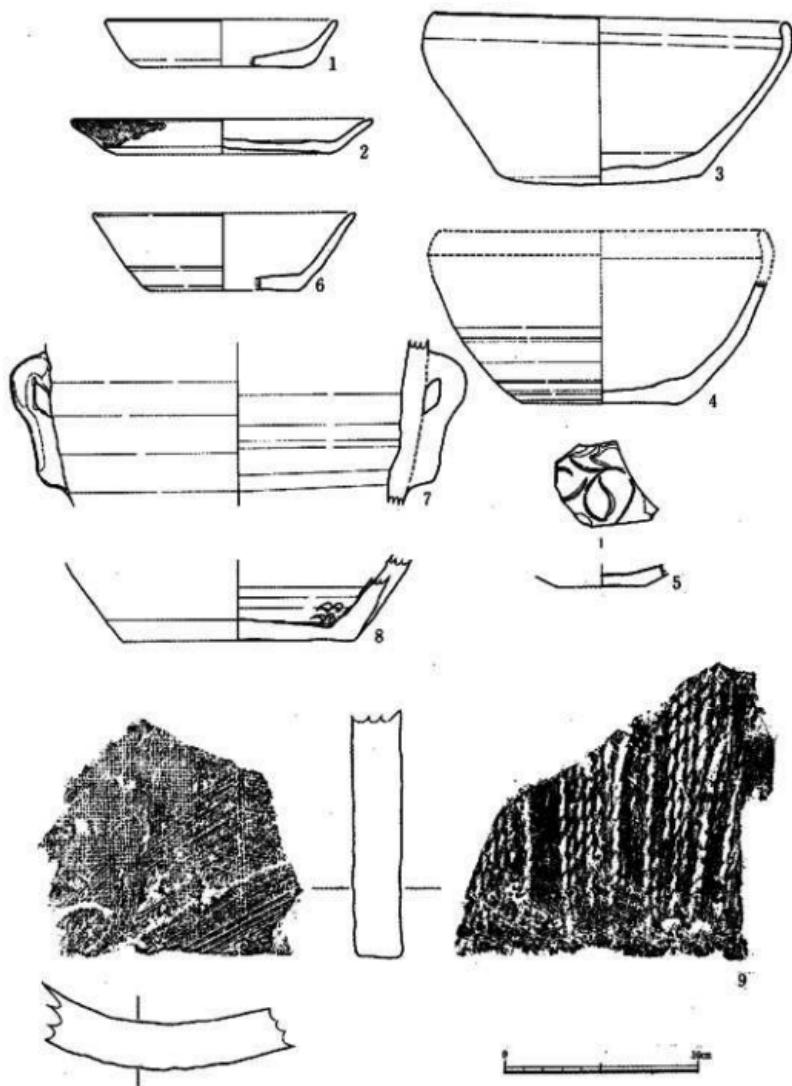


Fig.31 SD-14, 15出土遺物実測図

7. 方形区画溝Ⅱと出土遺物

須恵器壺・双耳瓶がある。

a) 壺(6) 無高台で、復元すると口径13.5cm、器高4.1cm、底径7.5cmとなる。外底部および体部外面下半は回転ケズリ調整が施されている。胎土は僅かに砂粒を含み、色調は青灰色をなす。やや焼成不良気味である。

b) (7, 8) 7は双耳瓶の片耳のついた胴部片で、8の底部片と同一個体と考えられる。8の底部は、立ち上がり部が焼け割れを起している。また内面には、竹管状のものでついた痕跡が認められる。7, 8何れも、胎土はわずかに砂粒を含み、暗灰色をなす。

③ 瓦 (9)

平瓦片が1点ある。白色砂粒を多く含む粘土を使用して、黄褐色に仕上げている。凹面には布目が顕著に残り、凸面には縄目による叩きが施されている。側面はヘラケズリ調整が施されている。

(内野)

8. 掘立柱建物と出土遺物

(1) 掘立柱建物の分布概要

掘立柱建物の分布は先にも指摘したように4群に大別できる。I群は調査区西端部に分布するSB-01~05の建物群である。小規模建物が多く、重複関係はみられない。柵列によって囲まれ、同時併存の建物である可能性が強い。II群は方形区画Iを中心とする一群である。I群に比較し大規模建物が多い。最高に重複する建物は4回である。III群は方形区画IIの西半部を中心とする建物で、北側に大規模建物3棟が重複する。最高に重複する建物は6棟である。IV群は方形区画の東端部に存在する建物群で、主な出入口部があり、それに隣接する建物と考えられる。第III群と第IV群の間には建物その他の遺構は存在せず。広場としての使用が考えられる。

(山崎)

(2) 掘立柱建物 (SB-01~57)

① 第1号掘立柱建物 (SB-01) (Fig. 33)

F-3~5, G-3~4グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構との重複関係はない。二面廂の東西棟建物で主軸をN-67°-Eにとる。身舎は桁行3間、梁行2間で北、東に廂を付ける。桁行6.3m、梁行3.2m、柱間は図示した。北廂は梁行1.2m、桁行4.2m、東廂は梁行1m、桁行6.3m。各柱穴掘り方は30~40cmの円形で深さ25cm程度である。柱根

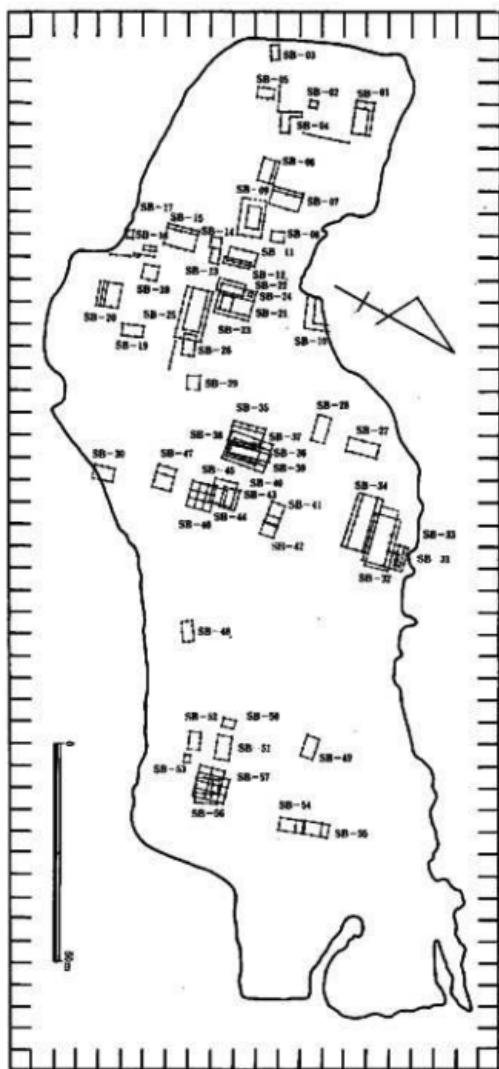


Fig.32 据立柱建物全体配置図

は遺存しないが、身舎の6個の柱穴と廻の2個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径10~20cmの円形である。

② 第2号掘立柱建物 (SB-02) (Fig. 33)

I-3, 4グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構と重複関係はない。東西棟建物で主軸をN-19°-Wにとる。桁行1間、梁行1間で桁行2m、梁行1.7m。各柱穴掘り方は径20~30cmの円形で、深さ20~30cmである。柱根は遺存しないが、3個の柱穴に柱痕跡がみとめられる。柱は径10~15cmの円形をなす。

③ 第3号掘立柱建物 (SB-03) (Fig. 33)

J-1, 2, K-1, 2グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構と重複関係はない。東西棟建物で主軸をN-55°-Eにとる。桁行3間、梁行1間で桁行3.5m、梁行2m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径20~30cmの円形で、深さ30~40cm、柱根の遺存はないが、6個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径10cmの円形である。

④ 第4号掘立柱建物 (SB-04) (Fig. 33)

I-4, J-4, 5グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構と重複関係はない。東西棟建物に南北棟建物を付した曲り屋で身舎は主軸をN-63°-Eにとる。身舎は桁行3間、梁行1間、西端に桁行2間、梁行1間の南北棟を付ける。桁行4.75m、梁行2.3m、柱間は図示した。南北棟は桁行3m、梁行0.9mで、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径25cm、深さ35cm、柱根は遺存しないが、11個の柱穴には柱痕跡がみられる。柱は径10cmで円形である。

⑤ 第5号掘立柱建物 (SB-05) (Fig. 33)

K-3グリットに検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構と重複関係はない。南北棟建物で主軸をN-21°-Wにとる。桁行3間、梁行1間で、桁行3.7m、梁行2.5m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径20~40cmの円形で、深さ20~35cm、柱根は遺存しないが、7個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径8~12cmの円形である。

⑥ 第6号掘立柱建物 (SB-06) (Fig. 34)

J-6, K-6, 7グリットにかけて検出した。SD-01と重複関係にあり、SD-01を切っている。一面廻の東西棟建物で主軸をN-82°-Eにとる。身舎は桁行3間、梁行1間で北廻を付ける。桁行5.65m、梁行3.1m、柱間は図示した。北廻は梁行0.6m、桁行5.65mである。各柱穴掘り方は径20~40cmの円形で深さ10~25cm、柱根の遺存はないが、身舎の4個の柱穴、廻の2個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は身舎が径20cmの円形で、廻が径8cmの円形である。

⑦ 第7号掘立柱建物 (SB-07) (Fig. 34)

I-8, J-7, 8, K-7, 8グリットにかけて検出した。SD-01と重複関係にある。SD-01を切っていて、SD-01より新しい。一面廻の南北棟建物で主軸をN-18.5°-Wにとる。身舎は桁行4間、梁行2間で西に廻を付ける建物と推定できるが、削平によって柱穴が消

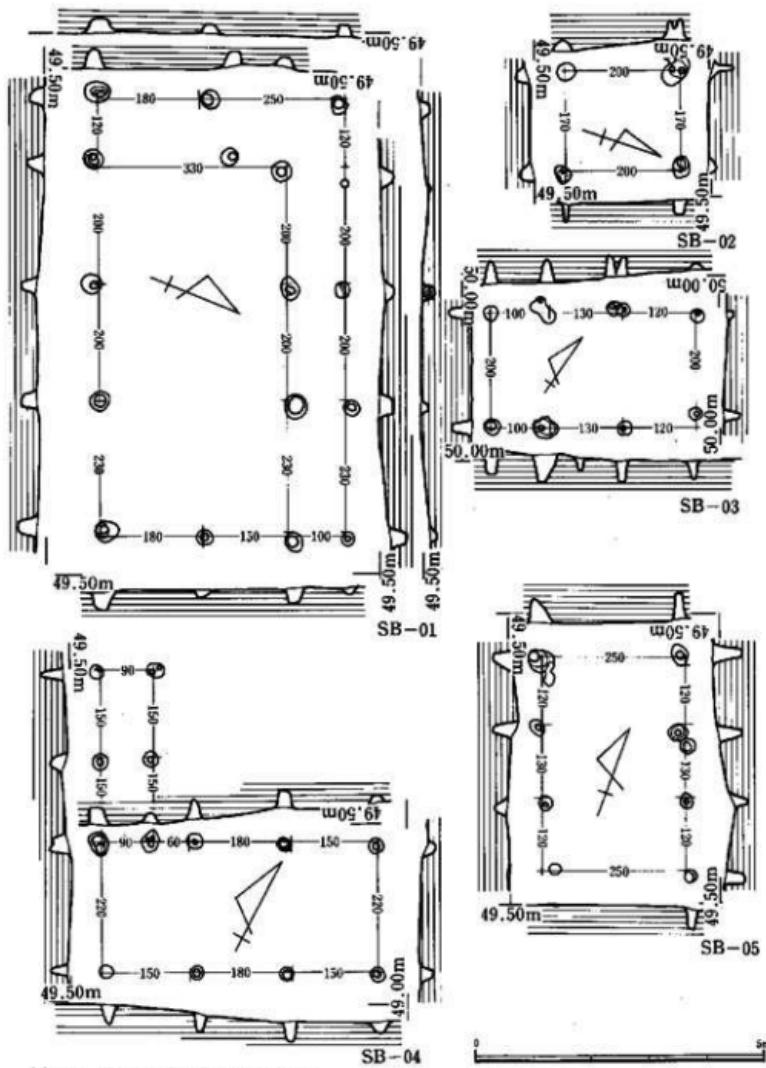


Fig.33 SB-01, 02, 03, 04, 05実測図

8. 挿立柱建物と出土遺物

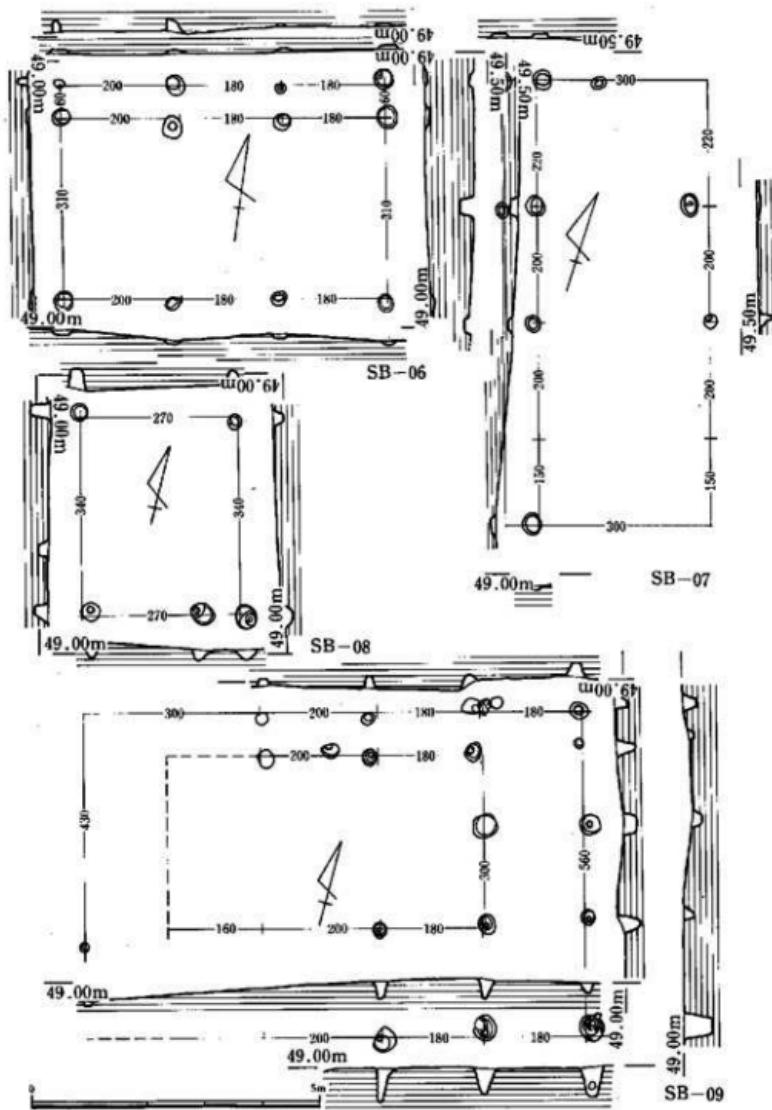


Fig.34 SB-06, 07, 08, 09実測図

失した部分があり明確でない。桁行7.7m、梁行3m、柱間は図示した。西廂は梁行0.6m、桁行4.1m、各柱穴掘り方は身舎が径30cmの円形で深さ10~25cm、廂が径25cm、深さ10~25cmである。柱根は遺存しない。

⑧ 第8号掘立柱建物（SB-08）(Fig. 34)

J-9, 10, K-9, 10グリットにかけて検出した。SD-01と重複関係にある。SD-01をSB-08が切っていて、SB-08が新しい。東西棟建物で主軸をN-14°-Wにとる。桁行1間、梁行1間で、桁行3.4m、梁行2.7m。各柱穴掘り方は径25~30cmの円形で、深さ25~35cm。柱痕は遺存しない。

⑨ 第9号掘立柱建物（SB-09）(Fig. 34)

K-8~10, L-8~10グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構との重複関係はみられない。四面廂の東西棟建物で主軸をN-74°-Eにとる。身舎は桁間3間、梁間2間で東西南北の四面に廂をつけると推定される建物であるが、削平によって消失した柱穴があり、明確にはできない。桁行5.5m、梁行3m、柱間は図示した。北廂は梁行0.7m、桁行8.6m、南廂は梁行1.9m、桁行8.6m、東廂は桁行1.5m、梁行5.6mである。西廂は桁行1.4m、梁行5.6mである。各柱穴掘り方は径20~40cm、深さ20~50cmで、柱根は遺存しないが4個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径10cmの円形である。柱穴には根固めのために石を入れている。

⑩ 第10号掘立柱建物（SB-10）(Fig. 35)

H-13, 14, I-12~14グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構との重複関係はない。二面廂の東西棟建物と考えられるが、北半部と西側が川の侵蝕によって消失している。主軸をN-72°-Eにとる。身舎は桁行3間以上、梁行2間以上で南、東に廂を付ける。桁行5.5m以上、梁行3.2m以上、柱間は図示した。南廂は梁行1.8m、桁行7m以上、東廂は桁行1.5m、梁間4m以上である。各柱穴掘り方は径20~30cmの円形で深さ25~30cm、柱根は遺存しない。

⑪ 第11号掘立柱建物（SB-11）(Fig. 35)

K-10, 11, L-10, 11, M-10, 11グリットにかけて検出した。SB-12と重複関係にある。SB-12との前後関係は直接的な切り合いがないため不明。南北棟建物で主軸をN-22°-Wにとる。桁行4間、梁行2間で、桁行6.8m、梁行3.2m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径25~35cm、深さ10~35cmである。柱根は遺存しないが、5個の柱穴には柱痕跡がみられる。柱は径10cmで、断面形は円をなす。

⑫ 第12号掘立柱建物（SB-12）(Fig. 35)

L-11, M-10, 11グリットにかけて検出した。SB-11と重複関係にある。SB-11との前後関係は直接の切り合いがないため不明。細長い南北棟建物で主軸をN-12.5°-Wにとる。桁行3間、梁行1間で、桁行5.95、梁行1.6m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径20~30cmの

8. 挿立柱建物と出土遺物

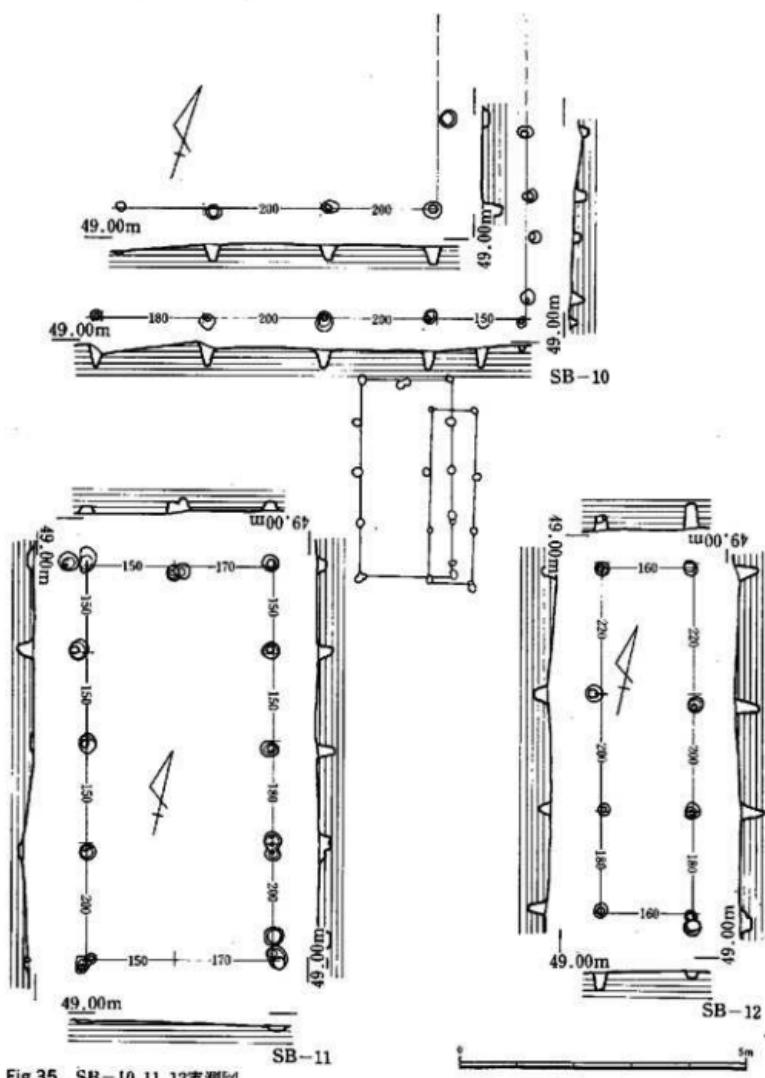


Fig.35 SB-10,11,12実測図

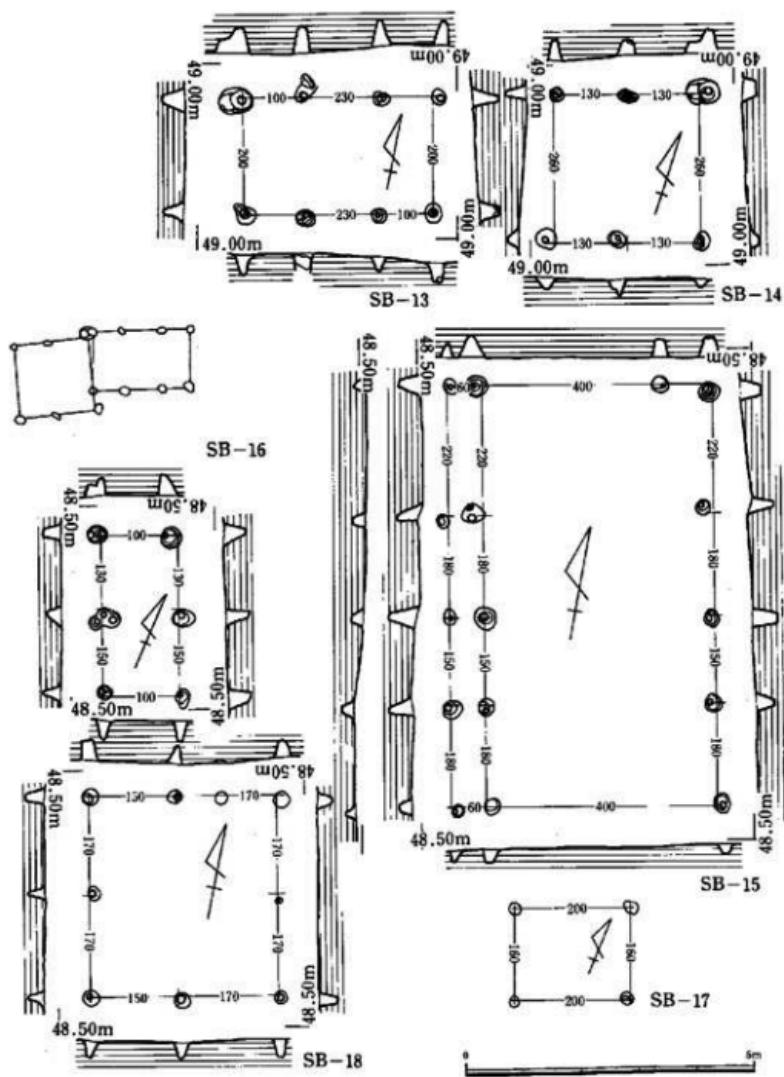


Fig.36 SB 13~18大測図

8. 挖立柱建物と出土遺物

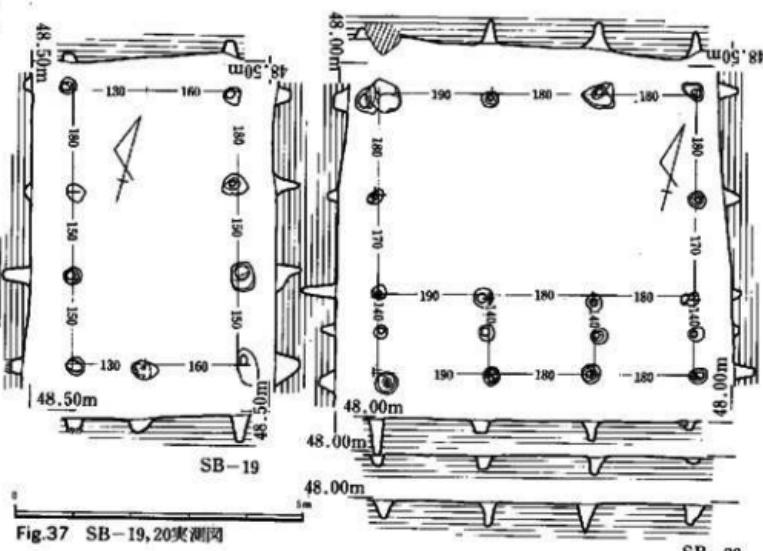


Fig.37 SB-19, 20実測図

SB-20

円形で、深さ20~30cmである。柱根は遺存しないが、4個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15cmで断面形は円形である。柱穴には根固めの石をいたるものがある。

⑬ 第13号掘立柱建物 (SB-13) (Fig. 36)

M-10, 11, N-10, 11グリットにかけて検出した。SB-14と重複関係にある。SB-14との前後関係はSB-14の柱穴と切り合いがあり、SB-13の柱穴がSB-14の柱穴を切っていて、SB-13が新しい。東西棟建物で主軸をN-72°-Eにとる。桁行3間、梁行1間で、桁行3.3m、梁行2m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径25~35cmの円あるいは梢円形で、深さ25~35cmである。柱根は遺存しないが柱穴4個に柱痕跡がみられる。柱は径15cmで、断面形は円形である。柱穴3個には根固めの石が存在する。

⑭ 第14号掘立柱建物 (SB-14) (Fig. 36)

M-10, N-9, 10グリットにかけて検出した。SB-13と重複関係にある。SB-13との前後関係はSB-13の柱穴がSB-14の柱穴を切っていて、SB-13が新しく、SB-14が先行する建物である。東西棟建物で主軸をN-79°-Eにとる。桁行2間、梁行1間で、桁行2.5m、梁行2.6m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径20~35cmの円ないしは梢円形で、深さ20~30cmである。柱根の遺存はないが、柱穴1個に柱痕跡がみられる。柱は径10cmで断面形は円形をなす。柱穴には根固めのために石を入れたものがある。

⑮ 第15号掘立柱建物 (SB-15) (Fig. 36)

N-9, 10, O-9, 10, P-10グリットにかけて検出した。SD-02と重複関係にある。SD-02との前後関係は直接の切り合い関係がないので不明であるが、全体的にみてSB-15がSD-02より後出である。一面廂の南北棟建物で主軸をN-11°-Wにとる。身舎は桁行4間、梁行1間で西に廂を付ける。桁行7.3m、梁行4m、柱間は図示した。西廂は梁行0.6m、桁行7.3mである。各柱穴掘り方は身舎部分が径25~40cmの円形~橢円形、深さ25~40cm、廂部分が径20~30cmの円形、深さ15~20cmで、身舎部分の柱穴よりやや小さい。柱根は遺存しないが、大部分の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径15cmの断面円形である。

⑯ 第16号掘立柱建物 (SB-16) (Fig. 36)

P-10, Q-10グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構と重複関係はない。東西棟建物で主軸をN-24°-Wにとる。桁行2間、梁行1間で、桁行2.8m、梁行1.3m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径25~35cmの円形で深さ30~35cmである。柱根は遺存しないが、柱穴の大部分に柱痕跡がみられる。柱は径15cmの断面円形である。

⑰ 第17号掘立柱建物 (SB-17) (Fig. 36)

Q-9, 10グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構との重複関係はない。東西棟建物で主軸をN-67°-Eにとる。桁行1間、梁行1間で、桁行2.0m、梁行1.6m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径15~25cmの円形~橢円形で、深さ20cmである。柱根は遺存していない。また柱穴には柱痕跡もみられない。

⑱ 第18号掘立柱建物 (SB-18) (Fig. 36)

P-11, 12, Q-11グリットにかけて検出した。SK-24, SK-25と重複関係にある。SB-18の柱穴はSK-24, SK-25の埋土中に掘り込まれていて、明らかにSB-18がSK-24, SK-25より新しい。南北棟建物で主軸をN-11°-Wにとる。桁行2間、梁行2間で、桁行3.5m、梁行3.2m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径20~28cmの円形で、深さ25~32cmである。柱根の遺存はないが、柱穴の大部分に柱痕跡がみられる。柱は径15cmの断面円形である。

⑲ 第19号掘立柱建物 (SB-19) (Fig. 37)

P-14, Q-13, 14, R-14グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構との重複関係はない。南北棟建物で主軸をN-15.5°-Wにとる。桁行3間、梁行2間で、桁行4.7m、梁行2.8m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径30~50cmの円形~橢円形、長方形で、深さ15~50cmである。柱根の遺存はないが、柱穴3個に柱痕跡がみられる。柱は径15cmの断面円形である。柱穴には根固めの石が存在するものもある。

⑳ 第20号掘立柱建物 (SB-20) (Fig. 37)

Q-12, R-12, 13, S-12, 13グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構との重複関係はない。一面廂の東西棟建物で主軸をN-75°-Eにとる。身舎は桁行3間、

8. 鋼立柱建物と出土遺物

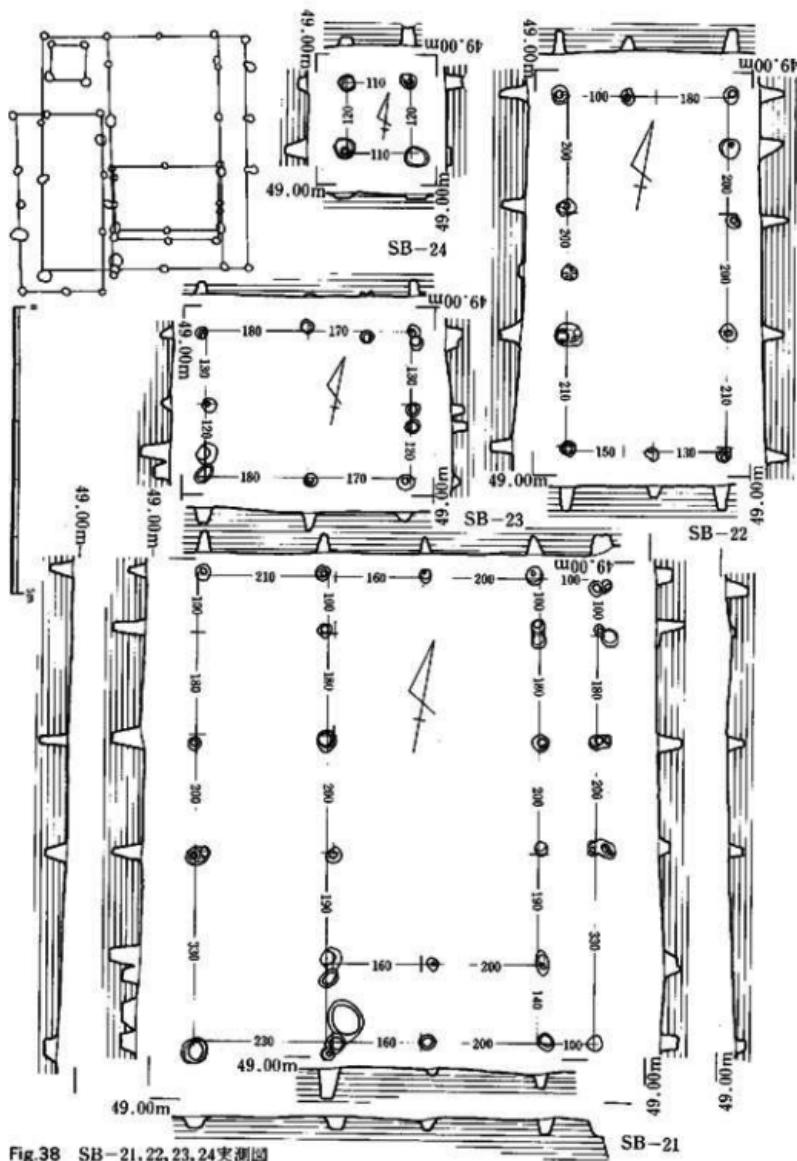


Fig.38 SB-21, 22, 23, 24実測図

梁行2間で南に廂を付ける。桁行5.5m、梁行3.5m、柱間は図示した。南廂は梁行1.4m(0.7m+0.7m)、桁行5.5mであるが、二重に廂がつくようになる。廂にさらに縫縫が存在した可能性もある。また、別個の掘立柱建物が重複しているとも考えられる。その場合は桁行3間、梁行2間の東西棟で桁行5.5m、梁行4.1mを測る建物と、桁行3間、梁行1間の東西棟で、桁行4.1m、梁行1.4mの建物の二棟に分解できる。各柱穴掘り方は径25~55cmの円形~不整梢円形であるが、径30cm前後のものが多い。深さ20~40cm。柱根は遺存しないが、柱穴の大部分に柱痕跡がみられる。柱は径15cm、断面円形である。

⑩ 第21号掘立柱建物(SB-21)(Fig. 38)

K-12、L-12、13、M-11~13グリットにかけて検出した。SB-22~24、SD-03と重複関係にある。SB-22、24との前後関係は直接の切り合い関係がないので不明。SB-23との関係は柱穴に切り合い関係があり、SB-23の柱穴がSB-21の柱穴を切っているので、SB-23が後出である。またSD-03との関係は明瞭にできなかったが、同時期の可能性が強い。SB-21は三面廂の南北棟建物で主軸をN-10°-Wにとる。身舎は桁行4間、梁行2間で東、西、南に廂を付ける。桁行6.7m、梁行3.6m、柱間は図示した。東廂は梁行1.0m、桁行8.0m、西廂は梁行2.2m、桁行8.0m、南廂は桁行1.4m、梁行6.8mである。各柱穴掘り方は径20~40cmの円形で、深さ30~50cmである。柱根の遺存はないが、柱穴の大部分に柱痕跡がみられる。柱は径15cm前後、断面円形である。

⑪ 第22号掘立柱建物(SB-22)(Fig. 38)

L-12、M-11グリットにかけて検出した。SB-21と重複関係にある。SB-21との前後関係は直接の切り合い関係がないため不明である。南北棟建物で主軸をN-10°-Wにとる。桁行3間、梁行2間であるが、東側で1ヶ所、西側で2ヶ所の補助柱が存在する。桁行6.1m、梁行2.8m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径25~50cmで大部分は30cm前後である。深さ35~40cm、柱根の遺存はないが大部分の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径12cm前後で、断面円形である。

⑫ 第23号掘立柱建物(SB-23)(Fig. 38)

L-12、13、M-12、13グリットにかけて検出した。SB-21と重複関係にある。SB-21との前後関係は柱穴の直接の切り合いから、SB-23が新しいことがわかる。東西棟建物で主軸をN-79°-Eにとる。身舎は桁行2間、梁行2間、桁行3.5m、梁行2.5m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径25~30cmの円形で、深さ15~30cmである。柱根は遺存しないが、柱穴の大部分に柱痕跡がみられる。柱は径14cmで断面形は円形である。柱穴には根固めの石が存在するものもある。

⑬ 第24号掘立柱建物(SB-24)(Fig. 38)

L-12グリットに検出した。SB-21と重複関係にある。SB-21との前後関係は直接の切

8. 獨立柱建物と出土遺物

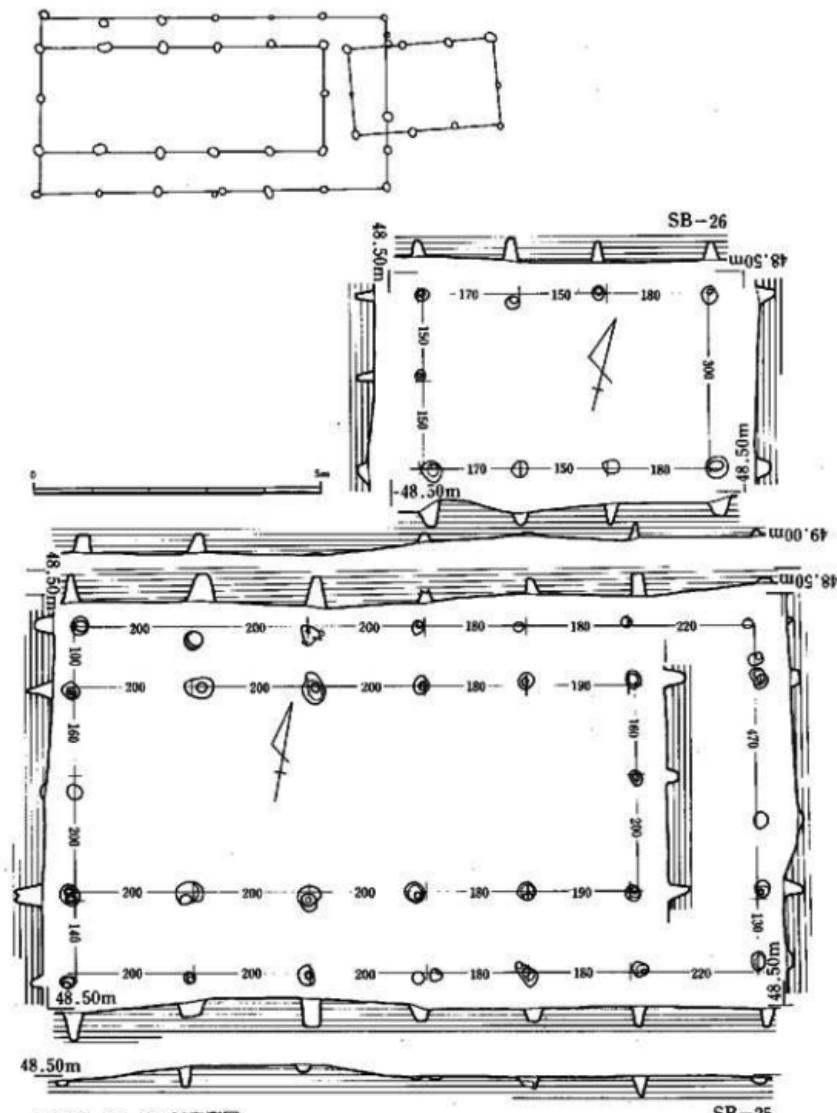


Fig.39 SR-25, 26実測図

り合い関係がないため不明である。しかし、建物の方向性、配置から S B - 21に伴う柱穴である可能性もあるが明確にしがたい。南北棟建物で主軸を N - 6° - W にとる。桁行 1間、梁行 1間で、桁行 1.2m、梁行 1.1m である。各柱穴掘り方は径 28~40cm、深さ 10~30cm である。柱根、あるいは柱痕跡はみられない。柱穴の底に礎板状の石を入れているものが存在する。

㊂ 第25号掘立柱建物 (S B - 25) (Fig. 39)

M - 12, N - 12~14, O - 12~14 グリットにかけて検出した。S B - 26, S D - 03, S D - 07 と重複関係にある。S B - 26との前後関係は直接の切り合い関係がないため不明である。S D - 03, S D - 07との関係では S B - 25の柱穴が S D - 03, 07 の埋土を切っていて、S B - 25 が新出であることがわかる。三面廂の東西棟建物で主軸を N - 80° - E にとる。身舎は桁行 5 間、梁行 2 間で南、北、東に廂を付ける。桁行 9.7m、梁行 3.6m、柱間は図示した。北廂は梁行 1.0m、桁行 11.7m、南廂は梁行 1.4m、桁行 11.7m、東廂は桁行 2.1m、梁行 6.0m である。各柱穴掘り方は身舎部分が径 30~40cm の円形あるいは梢円形で、深さ 30~50cm。廂部分が径 20~30cm の円形で深さ 20~40cm でやや小さい。柱根は遺存しないが、大部分の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は身舎部分が径 20cm 前後の断面円形で、廂部分が径 10cm、断面円形である。

㊂ 第26号掘立柱建物 (S B - 26) (Fig. 39)

N - 14, 15, O - 14, 15 グリットにかけて検出した。S B - 25, S D - 07 と重複関係にある。S B - 25との前後関係は直接の切り合い関係がないので不明である。S D - 07との関係では S B - 26が S D - 07の埋土中に掘り込まれていて、S B - 26が新出である。東西棟建物で主軸を N - 75.5° - E にとる。桁行 3 間、梁行 2 間で、桁行 5.0m、梁行 3.0m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径 20~35cm の円形で、深さ 25~40cm である。柱根の遺存はないが、柱穴の大部分に柱痕跡がみられる。柱は径 10cm 前後の断面円形である。

㊂ 第27号掘立柱建物 (S B - 27) (Fig. 40)

F - 19, 20, G - 19 グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構との重複関係はない。南北棟建物で主軸を N - 10° - W にとる。桁行 4 間、梁行 2 間で、桁行 6.7m、梁行 3.1m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径 20~35cm の円形～梢円形で、径 30cm 前後の円形が多い。深さ 20~30cm。柱根は遺存せず、また柱穴にも柱痕跡はみられない。

㊂ 第28号掘立柱建物 (S B - 28) (Fig. 40)

H - 18, 19, I - 18, 19 グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物など遺構との重複関係はない。東西棟建物で主軸を N - 81° - E にとる。桁行 4 間、梁行 2 間で、桁行 6.8m、梁行 3.4m、柱間は図示した。柱穴が隣接して重複しているので同一場所において二度の建替えも考えられるが、明確にはできなかった。各柱穴掘り方は径 20~30cm の円形あるいは梢円形で、深さ 15~30cm である。柱根は遺存しないが、柱穴の数個に柱痕跡がみられる。柱は径 12cm の断面円形である。

8. 捩立柱建物と出土遺物

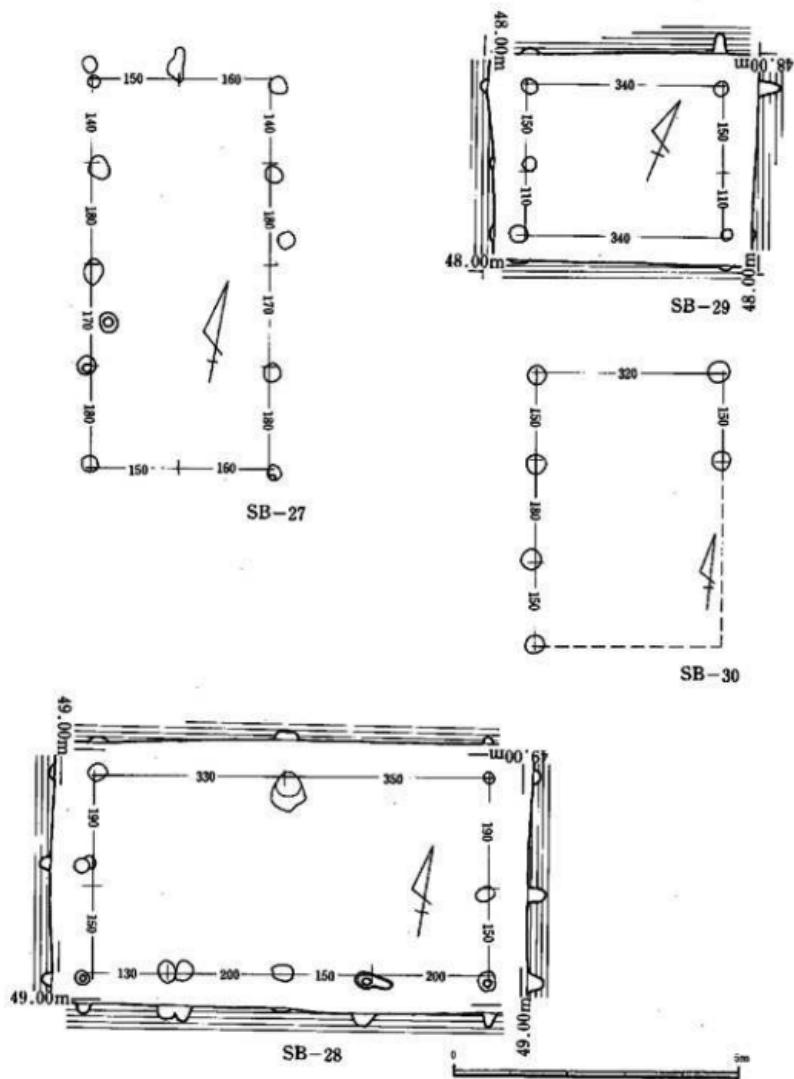


Fig.40 SB-27, 28, 29, 30実測図

② 第29号掘立柱建物 (SB-29) (Fig. 40)

N-16, O-16グリットにかけて検出した。SD-07, SD-08と重複関係にある。SD-07, 08との前後関係は直接の切り合い関係がないため不明であるが、SD-07とSD-08の間がとぎれ陸橋状になっていることから考えればSB-29はSD-07, 08と同時併存と考え、門としての機能をそなえていたと思われる。東西棟建物で主軸をN-68°-Eにとる。桁行1間、梁行1間で、桁行3.5m、梁行2.5mである。各柱穴掘り方は径25~30cmの円形で、深さ10cm程度である。削平によるものか。柱穴には柱根、柱痕跡はみられなかった。

③ 第30号掘立柱建物 (SB-30) (Fig. 40)

R-20, 21, S-20グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構とは重複関係はない。発掘区の南端部に検出した建物の一部発掘区外へのびるが、ほぼ全形を知ることができる。南北棟建物で主軸をN-5°-Wにとる。桁行3間、梁行2間で、桁行4.7m、梁行3.2m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径30cmの円形で、深さ15cm前後である。削平によって浅くなる。柱穴には柱根あるいは柱痕跡はみられない。

④ 第31号掘立柱建物 (SB-31) (Fig. 41)

D-23, 24, E-22~25, F-22~25グリットにかけて検出した。SB-32~34, SD-06, SK-03, 04と重複関係にある。SB-33との前後関係は直接の切り合い関係がないため不明である。SB-32, 34とは柱穴が直接切り合い、SB-31の柱穴が切られている。SB-31がSB-32, 34に先行するものである。また、SD-06はSB-31の柱穴を破壊して作られているので、SB-31はSD-06よりも先行する。三面廂の東西棟建物で主軸をN-81°-Eにとる。身舎は桁行6間、梁行1間の東西棟の北側の東端に2間×2間の東西棟を付した曲り屋で、南、北、西に廂を付ける。桁行11.5m、梁行は西側で3.8m、東側で7.6m、柱間は図示した。北廂は曲り屋部分で梁行1.9m、桁行5.8m、西半部で梁行0.9m、桁行7.7m、南廂は梁行1.0m、桁行11.5m、西廂は桁行2m、梁行4.6mである。各柱穴掘り方は身舎部分が径35~40cmの円形ないし梢円形で、深さ30~50cm。柱根が2ヶ所に遺存したが、保存状態が悪い。すべての柱穴には柱痕跡が明瞭に残り、一部では空洞として存在した。柱は径20cmの断面円形である。廂部分はやや小さくなり、径25~50cmの円形ないし梢円形で、深さ20~30cmである。柱根は存在しないが柱穴の数個に柱痕跡がみられる。柱は径10cm前後で、断面円形である。

⑤ 第32号掘立柱建物 (SB-32) (Fig. 42)

E-22~25, F-22~24グリットにかけて検出した。SB-31, SD-06と重複関係にある。SB-31との前後関係は柱穴が直接切り合い、SB-32の柱穴がSB-31の柱穴を切っているので、SB-32がSB-31より後出である。一面廂の東西棟建物で主軸をN-79.5°-Eにとる。身舎は桁行7間、梁行2間で北に廂を付ける。桁行12.9m、梁行3.8m、柱間は図示した。北廂は梁行0.8m、桁行12.9m。各柱穴掘り方は身舎部分が径30~40cmの円形あるいは梢円形を

8. 振立柱建物と山土遺物

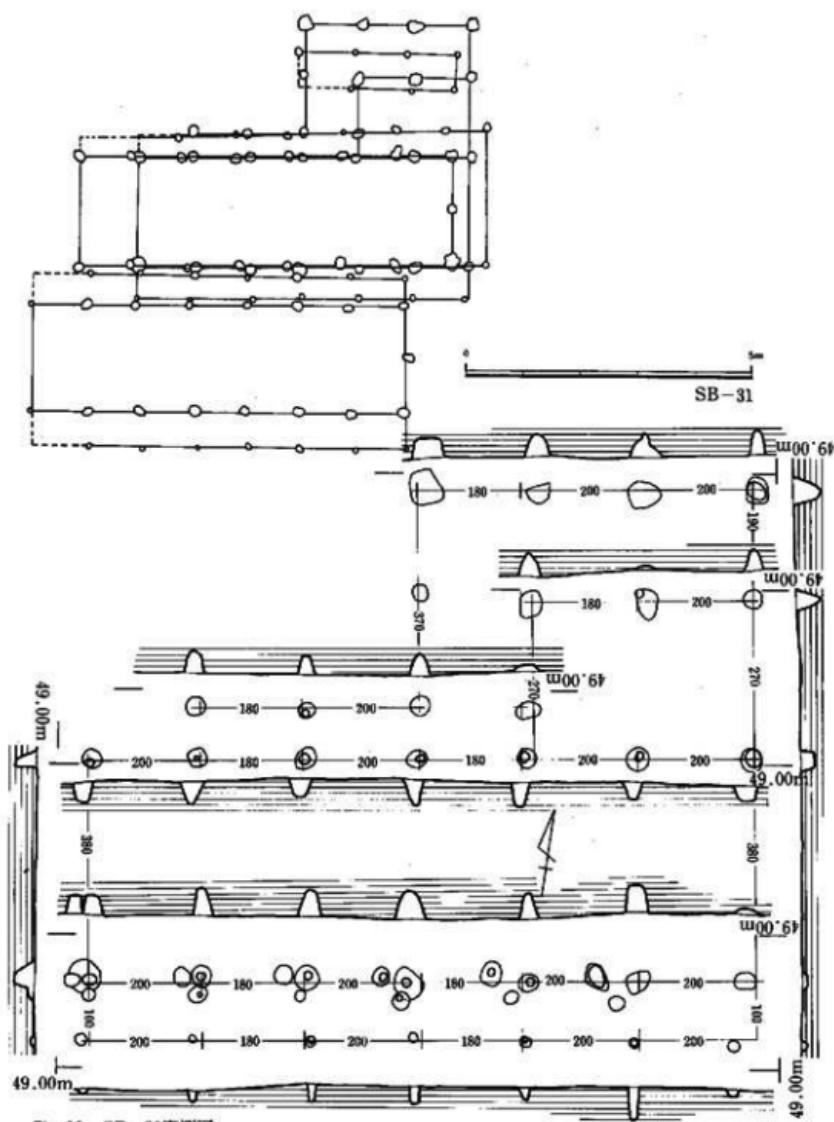


Fig.41 SB-31実測図

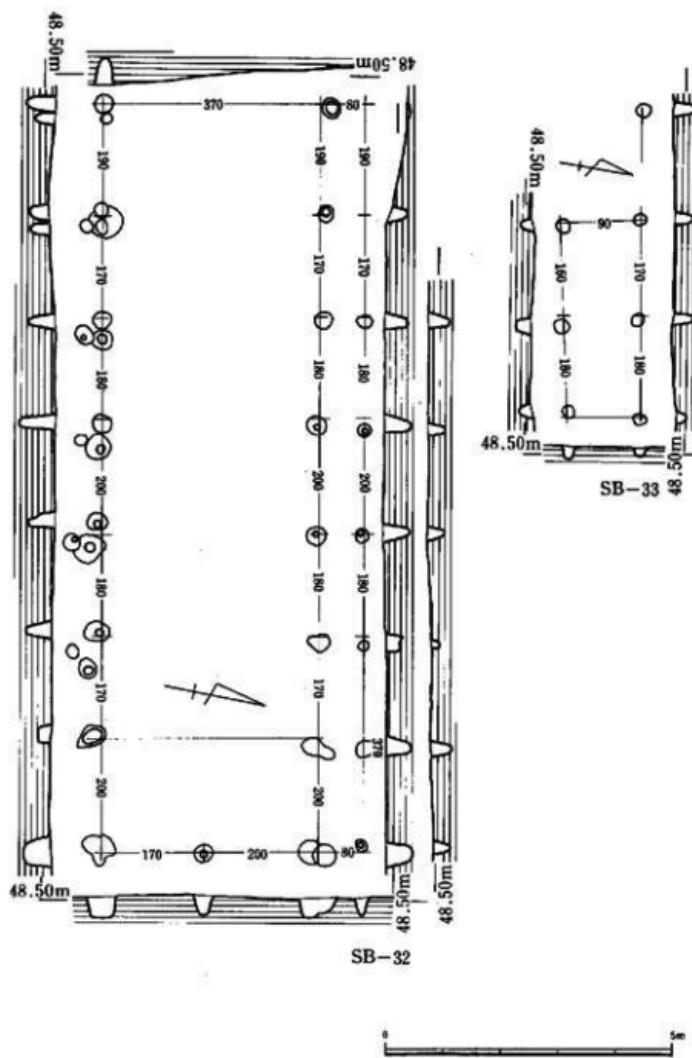


Fig.42 SB-32,33実測図

8. 挖立柱建物と出土遺物

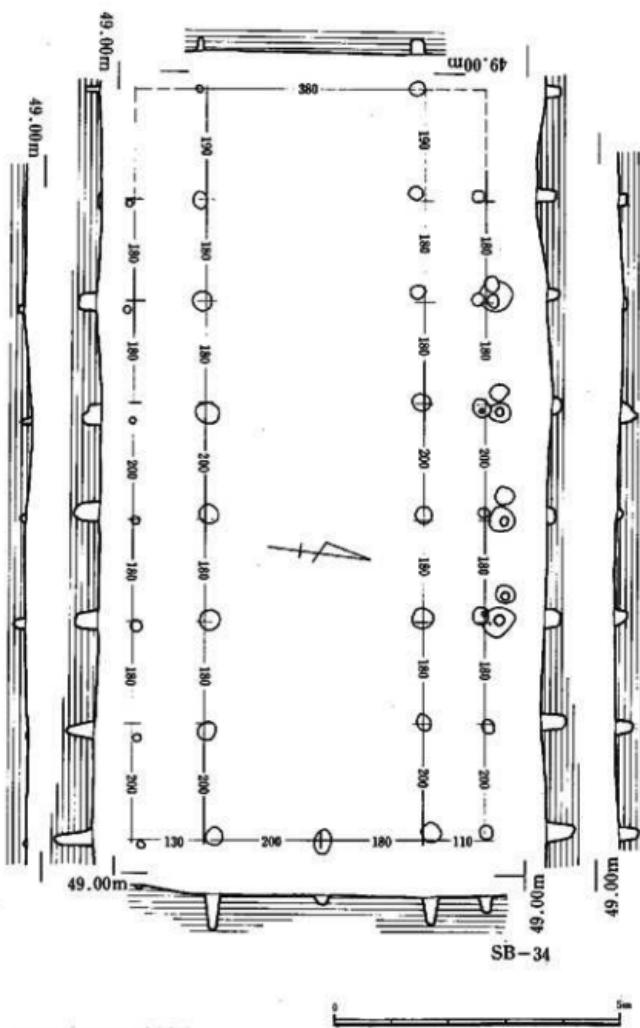


Fig.43 SB-34実測図

なし、深さ30~60cmである。柱根は2ヶ所に遺存するが保存状態は悪い。柱穴の大部分に柱痕跡がみられる。一部には柱根部分が空洞になっているところがある。柱は径15cmの断面円形をなす。廻部分の柱穴掘り方はやや小さく、径20~30cmの円形で、深さ15~35cm、柱根は遺存しないが3個の柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径10cm、断面円形である。

⑨ 第33号掘立柱建物 (SB-33) (Fig. 42)

E-23, 24グリットにかけて検出した。SB-31, SD-07と重複関係にある。SB-31との前後関係は直接切り合い関係がないため不明である。しかし、SD-07とSB-33との関係ではSD-07の埋土中にSB-33の柱穴が掘り込まれていて、SB-33が後出であることが判明する。SD-07とSB-31の関係ではSB-31が先行することは先に指摘した。よってSB-31とSB-33と先後関係ではSB-33が後出である。東西棟建物で主軸をN-80.5°-Eにとる。桁行3間、梁行1間で、桁行5.3m、梁行1.3m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径20cmの円形で、深さ20~30cmである。各柱穴には柱根、柱痕跡はみられない。

⑩ 第34号掘立柱建物 (SB-34) (Fig. 43)

F-21~24, G-21~24グリットにかけて検出した。SB-31と重複関係にある。SB-31との前後関係はSB-31の身舎の柱穴とSB-34の廻の柱穴に切り合いがみられ、SB-34がSB-31を切っていて、SB-34が後出である。両面廻の東西棟建物で主軸をN-83°-Eにとる。身舎は桁行7間、梁行2間で、南、北に廻を付ける。桁行13.0m、梁行3.8m、柱間は図示した。北廻は梁行1.1m、桁行13.0m、南廻は梁行1.3m、桁行13.0mである。各柱穴掘り方は身舎部分で径25~35cmの円形で、深さ25~30cmである。柱根は遺存しないが、柱穴の大部分には柱痕跡がみられる。柱は径15cmの断面円形である。北廻部分の柱穴は径15~30cmの円形で深さ10~30cmで身舎よりやや小さい。柱根は遺存しないが、柱穴の数個に柱痕跡がみられる。柱は径5cm前後の断面円形である。南廻部分の柱穴はさらに小さく、径15~20cmの円形で深さ5~20cmである。柱穴には柱根あるいは柱痕跡はみられない。

⑪ 第35号掘立柱建物 (SB-35) (Fig. 44)

K-18, 19, L-18, 19, M-18, 19グリットにかけて検出した。SB-37~40と重複関係にある。SB-37~40との前後関係は直接の切り合い関係がないために不明である。一面廻の南北棟建物で主軸をN-9.5°-Wにとる。身舎は桁行4間、梁行1間で西に廻を付ける。桁行8.0m、梁行3.7m、柱間は図示した。西廻は梁行0.7m、桁行8.0mである。各柱穴掘り方は身舎部分で径30~40cmの円形ないし椭円形で、深さ40~60cmである。柱根は遺存しないが、柱穴の大部分に柱痕跡がみられる。柱は径15cmで断面円形である。廻部分は径25~30cmの円形で、深さ20~35cmである。柱根の遺存はないが、柱穴に柱痕跡がみられるものがある。柱は径10cmの断面円形である。

⑫ 第36号掘立柱建物 (SB-36) (Fig. 44)

8. 獨立柱建物と出土遺物

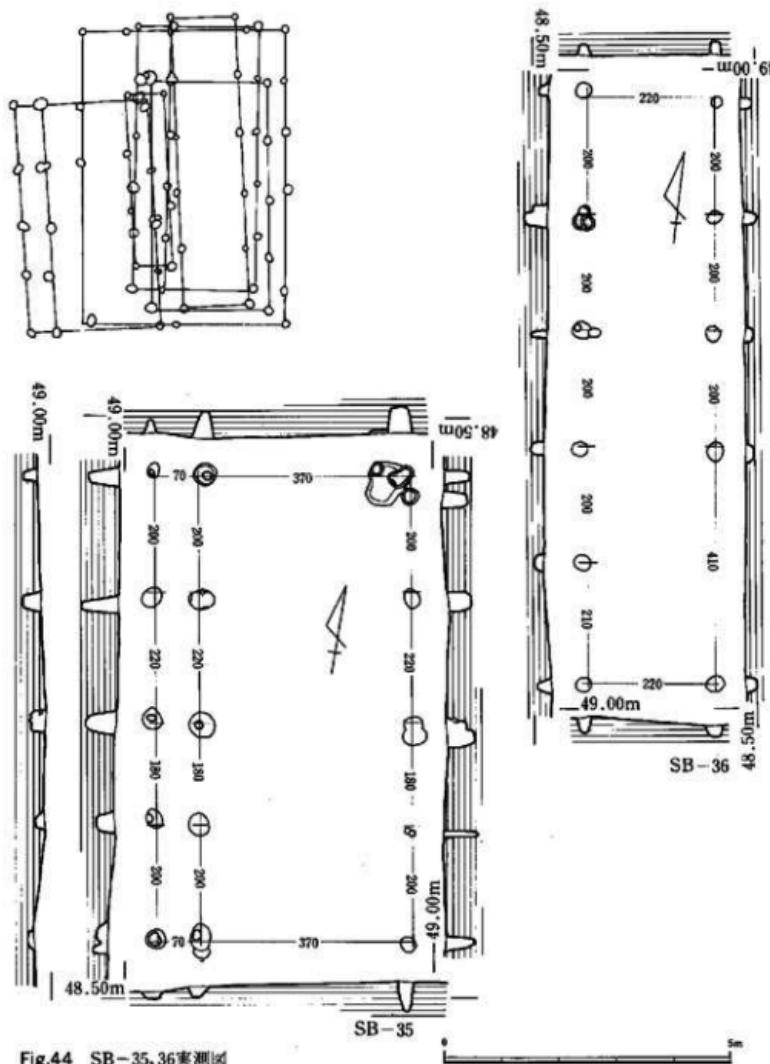


Fig.44 SB-35,36実測図

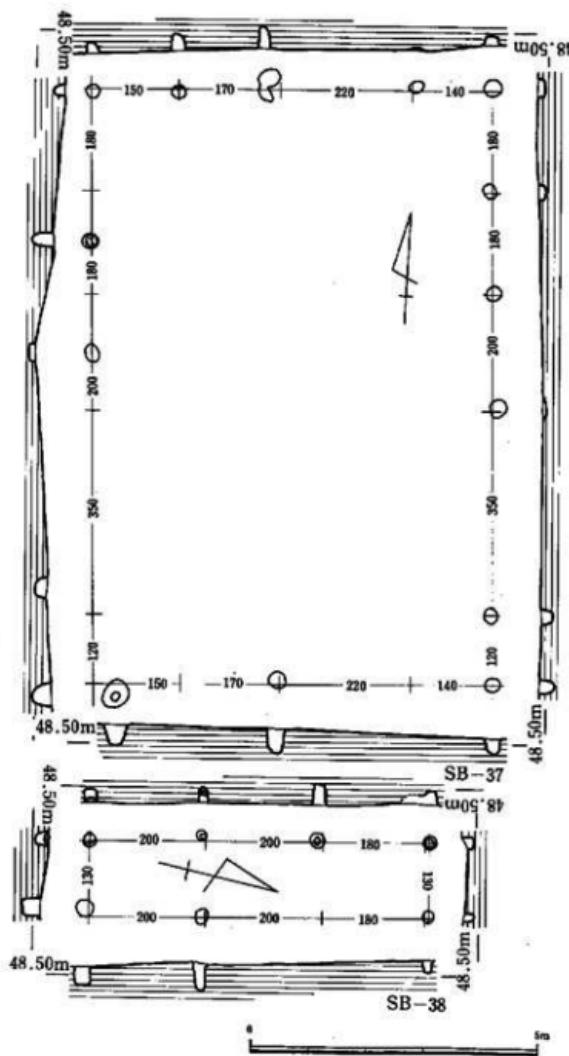


Fig.45 SB-37,38実測図

K-19, 20, L-19, 20, M-19グリットにかけて検出した。SB-37, 39, 40と重複関係にある。SB-37との前後関係は直接の切り合い関係がないために不明である。SB-39とは柱穴が1ヶ所で直接切り合い関係にあり、SB-36の柱穴がSB-39の柱穴を切っていて、SB-36が後出である。またSB-40とは、SB-39, 40の間に切り合い関係があり、SB-40がSB-39に切られておりSB-39がSB-40より新出であり、間接的にSB-36がSB-40より新出である。南北棟建物で主軸をN-7°-Wにとる。桁行5間、梁行1間で、桁行10.1m、梁行2.2m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径25~30cmの円形で、深さ20~25cmである。柱根は遺存しない。また柱穴に柱痕跡が存在するものも皆無である。

⑨ 第37号据立柱建物 (SB-37) (Fig. 45)

K-19, 20, L-18~20, M-18~20グリットにかけて検出した。SB-35, 36, 38~40と重複関係にある。SB-35, 36, 38, 40との前後関係は直接切り合い関係がないために不明である。SB-39とは柱穴に切り合い関係があり、SB-39よりSB-37が新出である。南北棟建物で主軸をN-3°-Wにとる。桁行5間、梁行6間の建物と推定されるが、部分的に柱穴が失われているので明確にできない。また、西側に廂が存在した可能性もある。桁行10.3m、梁行6.9m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径25~30cmの円形で、深さ10~40cmである。柱穴には柱根、柱痕跡はみられない。

⑩ 第38号据立柱建物 (SB-38) (Fig. 45)

K-19, L-19グリットにかけて検出した。SB-35, 37, 39, 40と重複関係にある。SB-35, 37, 39, 40との前後関係は直接の切り合い関係がないため不明である。南北棟建物で主軸をN-13.5°-Wにとる。桁行3間、梁行1間で、桁行5.8m、梁行1.3m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径20~30cmの円形で、深さ20~50cmである。柱根は遺存しないが、柱穴の一部に柱痕跡がみられる。柱は径10cmの梢円形である。柱穴2個には根固めの石が存在する。

⑪ 第39号据立柱建物 (SB-39) (Fig. 46)

K-19, 20, L-19, 20, M-19グリットにかけて検出した。SB-35~38, 40と重複関係にある。SB-35, 37, 38との前後関係は直接の切り合い関係がないため不明である。SB-36, 40とは柱穴に直接の切り合い関係があり、SB-39はSB-36より後出で、SB-40より先行するものである。一面廂の南北棟建物で主軸をN-3°-Wにとる。身舎は桁行5間、梁行1間で、西に廂を付ける。桁行9.2m、梁行3.1m、柱間は図示した。西廂は梁行1.0m、桁行9.2mである。各柱穴掘り方は径20~40cmの円形および梢円形、深さ20~60cmで深さ50cm前後が多い。柱根は遺存しないが、柱穴に柱痕跡がみられる。柱は径10cmの断面円形である。柱穴内に根固めの石が存在するものもある。

⑫ 第40号据立柱建物 (SB-40) (Fig. 46)

K-19, 20, L-19, 20, M-19, 20グリットにかけて検出した。SB-36~39と重複関係

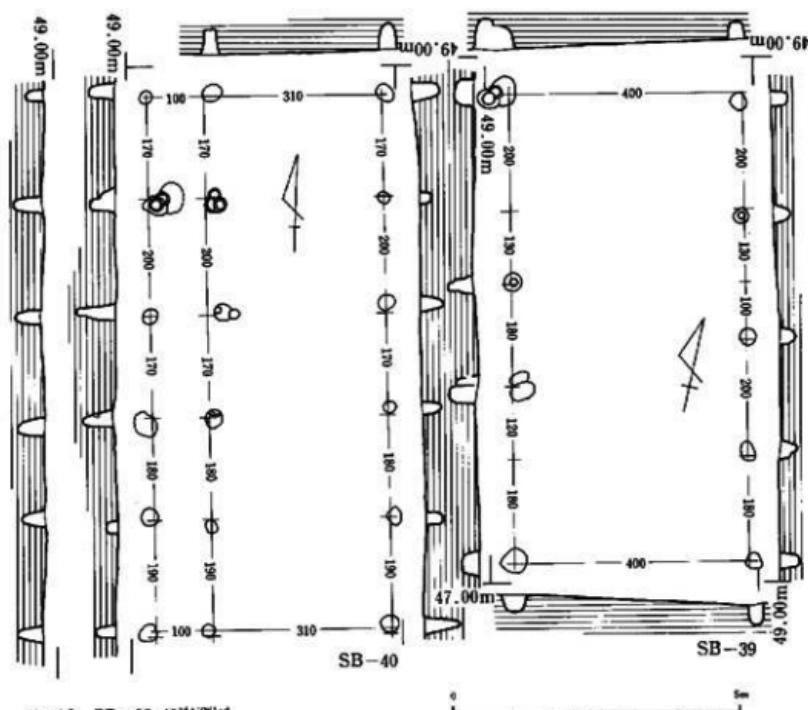


Fig.46 SB-39, 40実測図

にある。SB-36～38との前後関係は直接の切り合い関係がないために不明である。SB-39とは柱穴が直接切り合い、SB-39がSB-40の柱穴を切っていてSB-40が先行する建物であることがわかる。南北棟建物で主軸をN-13°-Wにとる。桁行4間、梁行1間で、桁行8.1m、梁行4.0m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径30～50cmの円形で、径30cm前後のものが多い。深さ30cmである。柱根は遺存しないが、柱穴に柱痕跡がみられるものがある。柱は径10cmの円形である。

④ 第41号掘立柱建物 (S B - 41) (Fig. 47)

J-21~23, K-21~23グリットにかけて検出した。S B-42と重複関係にある。S B-42との前後関係は直接の切り合い関係がないので不明である。東西棟建物で主軸をN-86.5°Eにとる。身舎は桁行2間、梁行2間で、東に扉を付ける。桁行3.5m、梁行3.6m、柱間は図示した。東扉は梁行3.6m、桁行1.7mである。各柱穴掘り方は径25~35cmの円形、深さ5~30cmで20cm前後が多い。柱穴には柱根、柱痕跡はみられない。

との前後関係は直接の切り合い関係がないので不明である。東西棟建物で主軸を N-86.5°-E にとる。身舎は桁行 2 間、梁行 2 間で、東に廻を付ける。桁行 3.5m、梁行 3.6m、柱間は図示した。東廻は梁行 3.6m、桁行 1.7m である。各柱穴掘り方は径 25~35cm の円形、深さ 5~30cm で 20cm 前後が多い。柱穴には柱根、柱痕跡はみられない。

② 第42号振立柱建物 (SB-42) (Fig. 47)

J-23, K-22, 23グリットにかけて検出した。SB-41と重複関係にある。SB-41との前後関係は直接の切り合い関係がないため不明である。南北棟建物で主軸を N-1°-W にとる。身舎は桁行 2 間、梁行 1 間で、桁行 3.3m、梁行 2.5m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径 20~30cm の円形あるいは梢円形で、深さ 10~20cm である。柱穴には柱根、柱痕跡はみられない。

③ 第43号振立柱建物 (SB-43) (Fig. 48)

L-21, 22, M-21, 22グリ

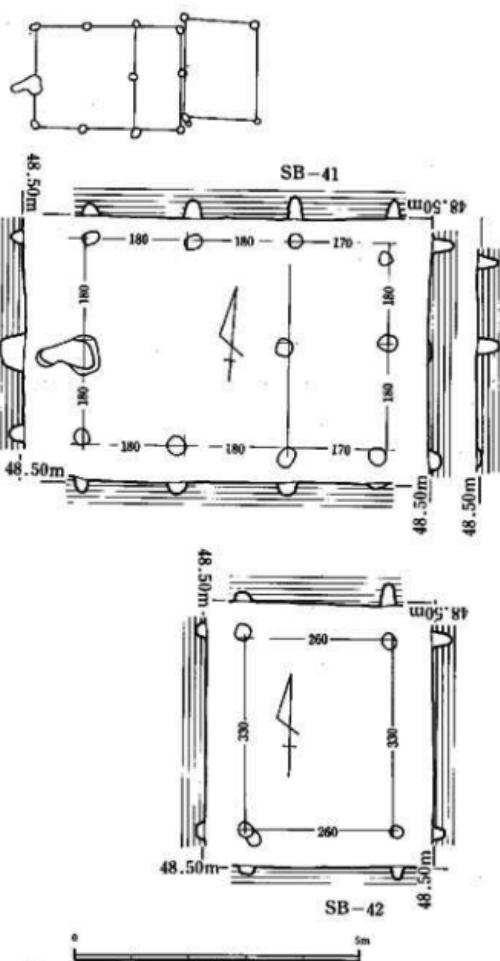


Fig.47 SB-41, 42実測図

ットにかけて検出した。SB-45と重複関係にある。SB-45との前後関係は直接の切り合い関係がないため不明である。東西棟建物で主軸を N-80°-E にとる。桁行 3 間、梁行 2 間で、桁行 4.6m、梁行 2.9m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径 15~50cm の円形で、30cm 前後のものが多い。深さ 10~35cm である。南側の柱穴と北側柱穴の 1 個に柱の抜き穴がみられる。

第4章 K連跡の記録

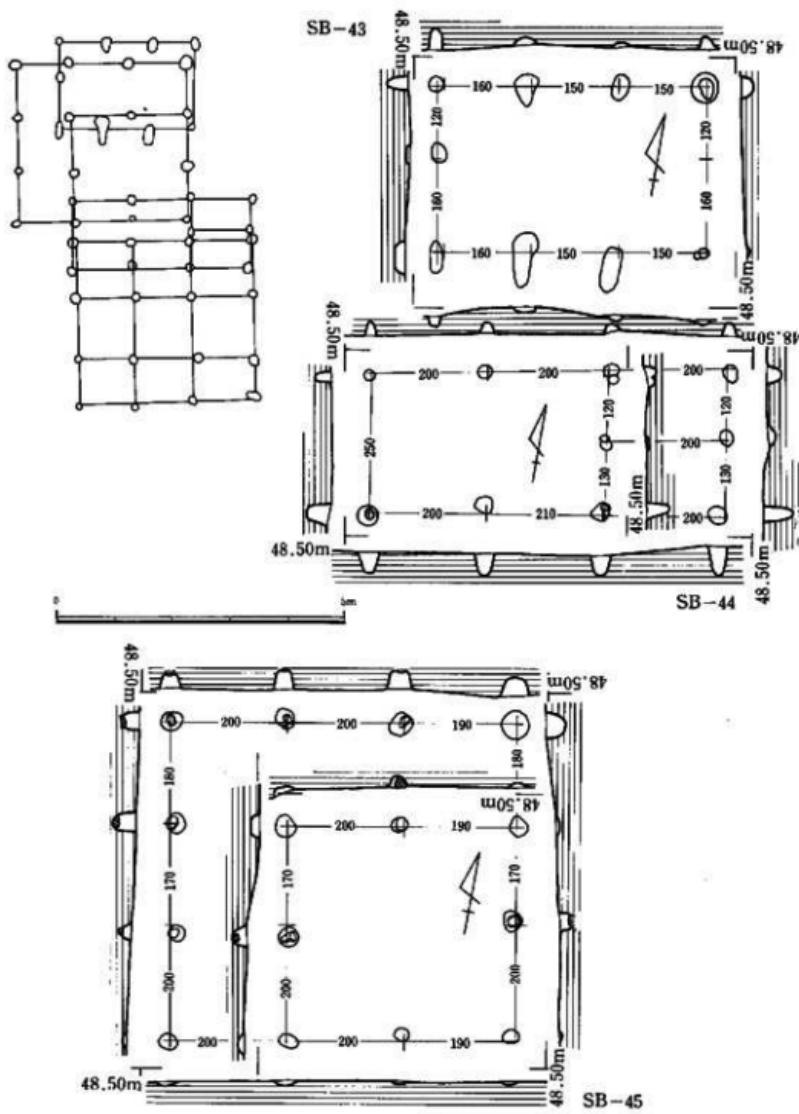


Fig.48 SB-43, 44, 45実測図

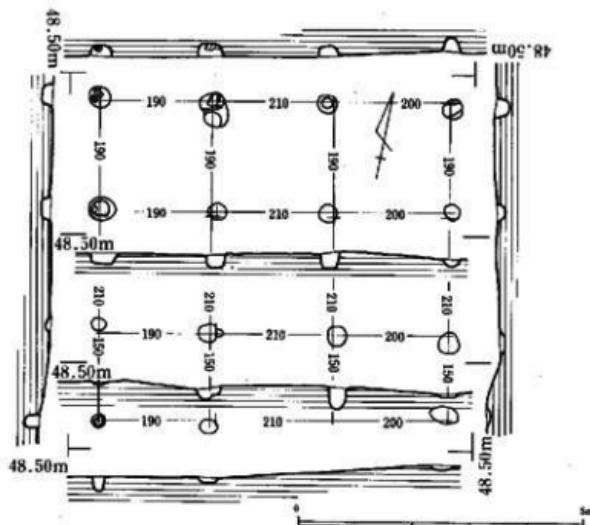


Fig.49 SB-46実測図

④ 第44号掘立柱建物 (SB-44) (Fig. 48)

M-21, 22, L-21, 22グリットにかけて検出した。SB-45, 46と重複関係にある。SB-45, 46との前後関係は直接の切り合い関係がないために不明である。一面廂の東西棟建物で主軸をN-81°-Eにとる。身舎は桁行2間, 梁行1間で, 東に廂を付ける。桁行4.0m, 梁行2.4m, 柱間は図示した。東廂は梁行2.4m, 桁行1.7mである。各柱穴掘り方は径20~35cmの円形で, 深さ30~40cmである。柱穴には柱根, 柱痕跡はみられない。

⑤ 第45号掘立柱建物 (SB-45) (Fig. 48)

L-21, 22, M-20, 22, N-21グリットにかけて検出した。SB-43, 44と重複関係にある。SB-43, 44との前後関係は直接の切り合い関係がないため不明である。二面廂の東西棟建物で主軸をN-80°-Eにとる。身舎は桁行2間, 梁行2間で南, 北に廂を付ける。桁行3.9m, 梁行3.7m, 柱間は図示した。北廂は梁行1.2m, 桁行6.2m, 南廂は梁行5.5m, 桁行2.0mである。各柱穴掘り方は径30~45cmの円形で, 深さ10~35cmである。柱穴には柱根, 柱痕跡はみられないが, 8個の柱穴に根固めの石が存在する。

⑥ 第46号掘立柱建物 (SB-46) (Fig. 49)

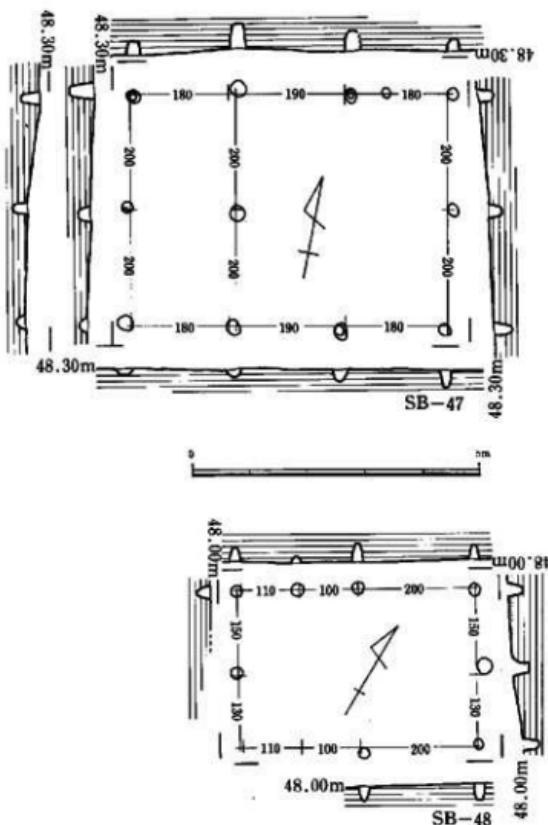


Fig.50 SB-47, 48実測図

M-21, N-20~22, O-20~23グリットにかけて検出した。SB-44と重複関係にある。SB-44との前後関係は直接の切り合い関係がないために不明である。純柱の東西棟建物で主軸をN-78.5°-Eにとる。桁行3間、梁行3間で、桁行6.1m、梁行5.6m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径25~45cmの円形、深さ10~30cmで、大部分は30cmの深さである。柱穴には柱根、柱痕跡はみられなかったが、数個の柱穴に根固めの石が存在する。

⑩ 第47号掘立柱建物 (SB-47) (Fig. 50)

O-20, 21, P-20, 21グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構との

重複関係はない。一面相の東西棟建物で主軸をN-79°-Eにとる。身舎は桁行2間、梁行2間で、西側に廂を付ける。桁行3.6m、梁行4.0m、柱間は図示した。西廂は梁行4.0m、桁行1.8mである。各柱穴掘り方は径20~25cmの円形で、深さ30~50cmである。柱穴には柱根、柱痕跡はみられない。

⑩ 第48号据立柱建物 (SB-48) (Fig. 50)

N-27, 28, O-27, 28グリットにかけて検出した。SD-10と重複関係にある。SD-10の埋土中に柱穴が掘り込まれていて、SB-48がSD-10より後出である。東西棟建物で主軸をN-59°-Eにとる。桁行3間、梁行2間で、一部、未検出の柱穴がある。桁行4.1m、梁行2.8

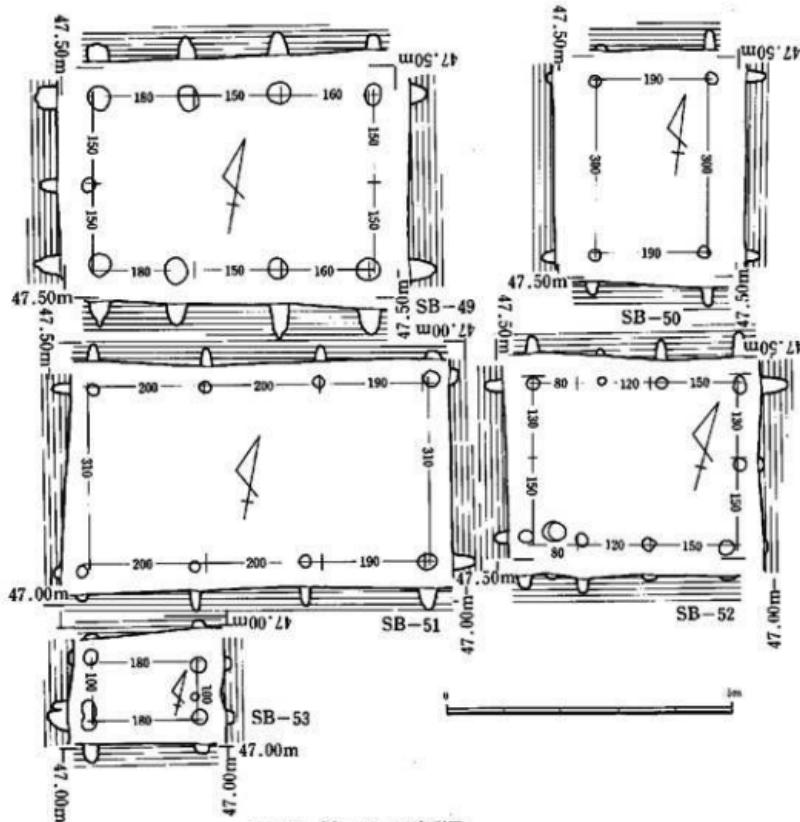


Fig.51 SB-49~53実測図

m, 柱間は図示した。各柱穴掘り方は径25cmの円形で、深さ25cm前後である。柱穴には柱根、柱痕跡はみられない。

◎ 第49号掘立柱建物 (S B-49) (Fig. 51)

I-32, 33グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構との重複関係はない。東西棟建物で主軸をN-80°-Eにとる。桁行3間、梁行2間で、桁行4.9m、梁行3.0m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径20~40cmの円形あるいは橢円形で、深さ25~40cmである。柱穴には柱根、柱痕跡はみられない。

◎ 第50号掘立柱建物 (S B-50) (Fig. 51)

L-31, 32, M-31, 32グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構との重複関係はない。南北棟建物で主軸をN-7°-Wにとる。身舎は桁行1間、梁行1間で、桁行3m、梁行2.0mである。各柱穴掘り方は径20cmの円形で、深さ10~40cmである。柱穴には柱根、柱痕跡はみられない。

◎ 第51号掘立柱建物 (S B-51) (Fig. 51)

L-32, M-32, 33グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構との重複関係はない。東西棟建物で主軸をN-79°-Eにとる。桁行3間、梁行1間で、桁行5.9m、梁行3.1m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径20~30mの円形で、深さ15~35cmである。柱穴には柱根、柱痕跡はみられない。

◎ 第52号掘立柱建物 (S B-52) (Fig. 51)

N-32, 33グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構との重複関係はない。東西棟建物で主軸をN-75°-Eにとる。桁行3間、梁行2間で、桁行5.5m、梁行2.8m、柱間は図示した。各柱穴掘り方は径20cmの円形で、深さ10~30cmである。柱穴には柱根、柱痕跡はみられない。

◎ 第53号掘立柱建物 (S B-53) (Fig. 51)

N-33, O-33グリットにかけて検出した。単独で存在し、他の建物等の遺構との重複関係はない。S B-52のすぐ東に位置している。東西棟建物で主軸をN-76°-Eにとる。桁行1間、梁行1間で、桁行1.8m、梁行1mである。各柱穴掘り方は径25cmの円形で、深さ10~40cmである。柱穴には柱根あるいは柱痕跡はみられない。

◎ 第54号掘立柱建物 (S B-54) (Fig. 52)

I-36, 37, J-36, 37グリットにかけて検出した。S B-55と重複関係にある。S B-55との前後関係は柱穴の切り合い関係によってS B-55が後出であることがわかる。一面廂の南北棟建物で主軸をN-14°-Wにとる。身舎は桁行2間、梁行2間で、北に廂を付ける。桁行4.0m、梁行3.0m、柱間は図示した。北廂は梁行3.0m、桁行2.0mである。各柱穴掘り方は径20~40cmの円形、深さ10~40cmで、深さ40cmが多い。柱穴には柱根あるいは柱痕跡はみられない。

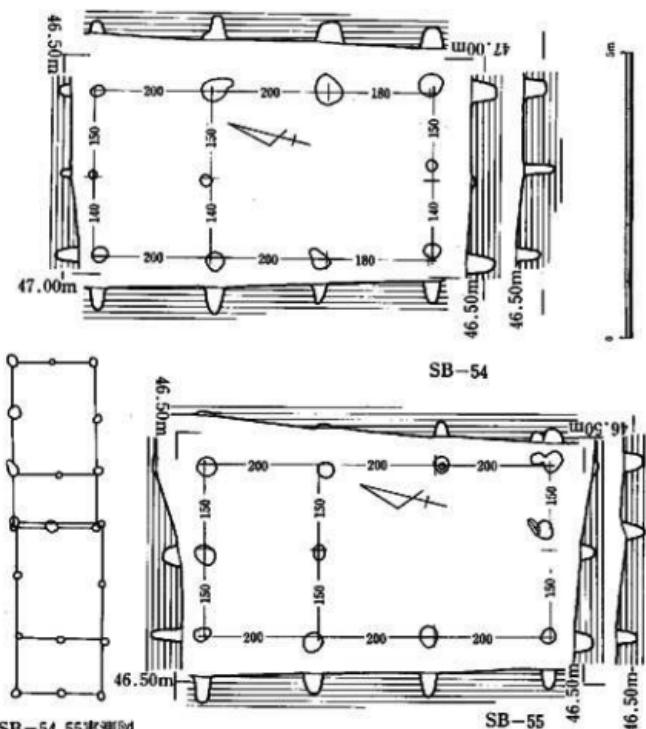


Fig.52 SB-54, 55実測図

◎ 第55号掘立柱建物 (S B-55) (Fig. 52)

H-36, 37, I-36, 37グリットにかけて検出した。S B-54, S D-11と重複関係にある。S B-54, S D-11との前後関係はS B-54との間では柱穴に直接の切り合い関係があり、S B-55が後出である。また、S D-11との関係では、S D-11の埋土中にS B-55の柱穴が握り込まれているので、S B-55が後出である。一面廂の南北棟建物で主軸をN-14°-Wにとる。身舎は桁行2間、梁行2間で、北に廂を付ける。桁行3.8m、梁行2.9m、柱間は示した。北廂は梁行2.9m、桁行2.0mである。各柱穴握り方は径20~50cmで30cm前後の円形が多く、深さ25~35cmである。柱穴には柱根および柱痕跡はみられない。

◎ 第56号掘立柱建物 (S B-56) (Fig. 53)

M-34, 35, N-34, 35グリットにかけて検出した。S B-57と重複関係にある。S B-57との前後関係は直接の切り合い関係がないので不明である。二面廂の南北棟建物で主軸をN-

第4章 K遺跡の記録

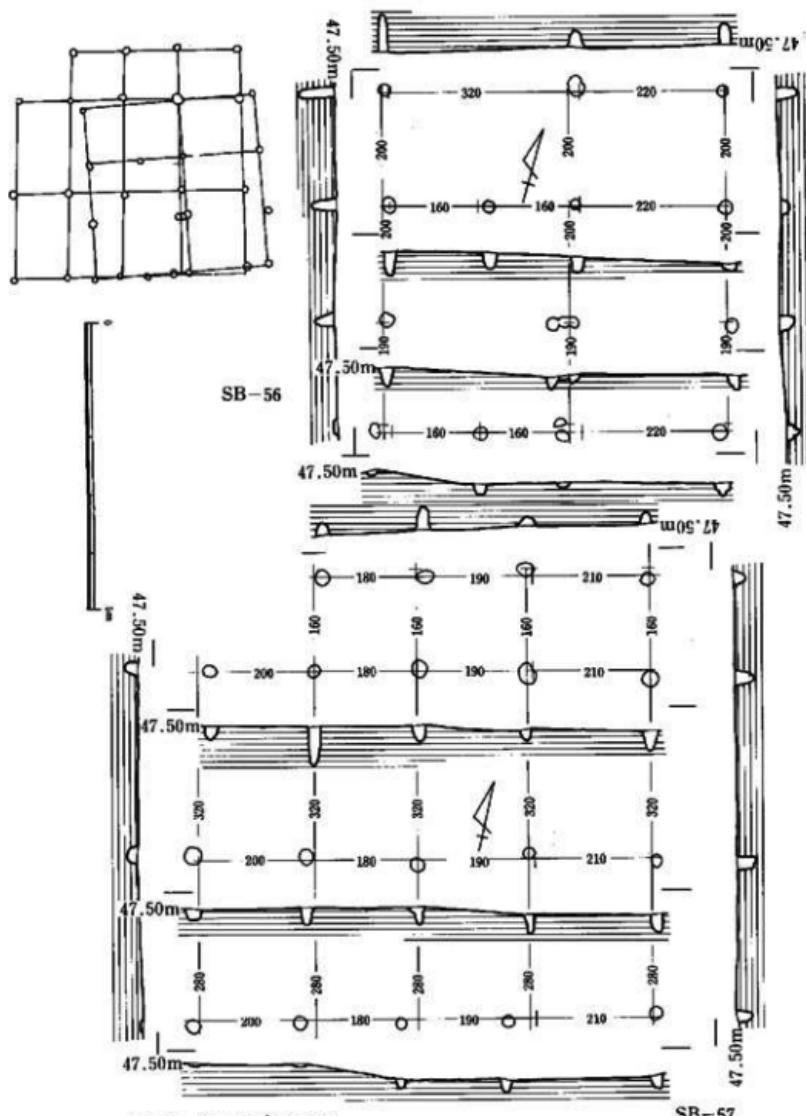


Fig.53 SB-56, 57実測図

SB-57

8. 挖立柱建物と出土遺物

16'-Wにとる。身舎は桁行2間、梁行2間で、北、東に廟を付ける。桁行3.9m、梁行3.2m、柱間は図示した。北廟は梁行5.9m、桁行2.0m、東廟は梁行2.7m、桁行5.9mである。各柱穴掘り方は径20cm前後の円形で、深さ10~60cmである。柱穴には柱根および柱痕跡はみられない。

◎ 第57号掘立柱建物 (S B - 57) (Fig. 53)

M-34, 35, N-33~35グリットにかけて検出した。S B - 56と重複関係にある。S B - 56との前後関係は直接の切り合い関係がないため不明である。二面廟の東西棟建物で主軸をN-77-Eにとる。身舎は桁行3間、梁行2間の純柱建物で北、西に廟を付ける。桁行6.1m、梁行6.0m、柱間は図示した。北廟は梁行1.6m、桁行5.7m、西廟は梁行6.1m、桁行1.7mである。各柱穴掘り方は径20~25cmの円形、深さ10~65cmで20~30cm前後が多い。柱穴には柱根および柱痕跡はみられない。
(山崎、角)

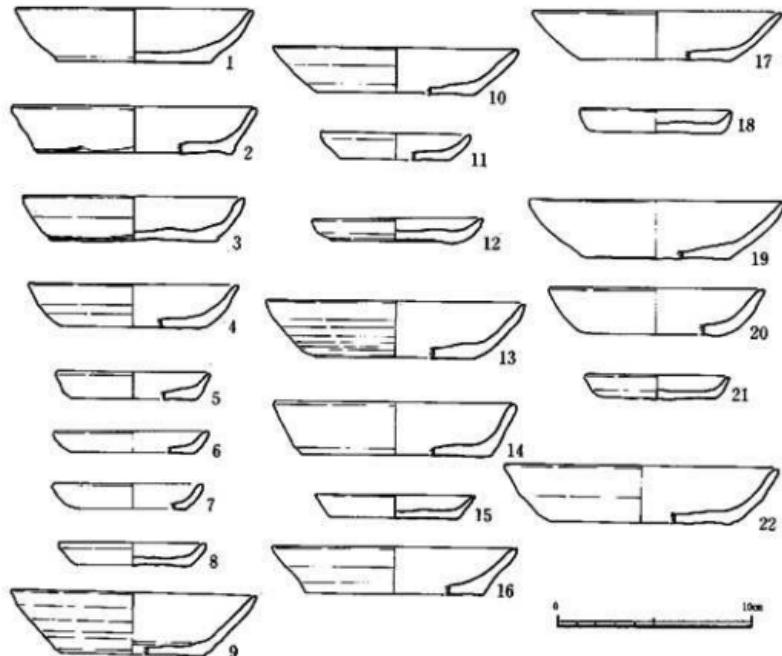


Fig. 54 挖立柱建物柱穴出土遺物実測図

(3) 出土遺物

① 掘立柱建物址出土遺物 (Fig. 54)

掘立柱建物を構成する柱穴のうち、埋土内に遺物を含むものは、147個である。それらの遺物のうち、主なものを図示し、法量、出土柱穴を一覧表にした。尚、一覧表の柱穴番号は遺構原図に記されているものである。

第11表 掘立柱建物址柱穴出土遺物一覧表

1	(12.0)	2.8	8.0	I - 13	Pit 1	C	SB - 10
2	(12.4)	2.4	(10.0)	I - 13	Pit 1	C	SB - 10
3	(11.2)	2.3	(8.6)	L - 12	Pit 4	C	SB - 21
4	(10.6)	2.2	(7.4)	M - 12	Pit 6	A	SB - 21
5	(7.8)	1.4	(6.4)	M - 12	Pit 5	C	SB - 22
6	(7.4)	1.2	5.8	N - 21	Pit 1	C	SB - 46
7	7.6	1.1	6.2	N - 12	Pit 1	C	SB - 25
8	7.5	1.3	5.5	N - 12	Pit 1	C	SB - 25
9	(12.4)	3.2	7.2	N - 12	Pit 2	A	SB - 25
10	(12.6)	2.3	8.2	E - 23	Pit 2	A	SB - 31
11	(7.6)	1.3	(5.6)	N - 13	Pit 3	C	SB - 25
12	8.6	1.2	6.2	N - 13	Pit 3	A	SB - 25
13	(13.2)	2.9	(8.2)	N - 13	Pit 3	A	SB - 25
14	(12.2)	2.8	(9.8)	E - 23	Pit 7	C	SB - 31
15	(8.0)	1.2	6.5	E - 24	Pit 3	C	SB - 31
16	(12.5)	2.4	(10.0)	E - 24	Pit 7	C	SB - 31
17	(14.0)	2.9	(9.2)	F - 24	Pit 16	A	SB - 31
18	(7.6)	1.2	(6.8)	F - 23	Pit 7	C	SB - 31
19	(13.2)	3.0	(7.6)	F - 23	Pit 15	A	SB - 32
20	(11.0)	2.4	(6.6)	F - 24	Pit 13		SB - 32
21	(7.3)	1.2	6.1	L - 22	Pit 1	C	SB - 43
22	(14.0)	2.9	(9.2)	F - 24	Pit 6	C	SB - 31

8. 振立柱建物と出土遺物

② 柱穴出土遺物 (Fig. 55)

振立柱建物を構成できない柱穴出土遺物の内、主なものを図示した。1~24は土師質土器皿で、輪轂成形され、外底部には回転糸切痕を残す。25は龍泉窯系青磁皿の底部で、高台疊付部分が無釉となる。釉は暗緑色である。26は碗の口縁から体部片で屈曲をみせる。胎土は灰白色精良で、灰白色の透明釉が掛かる。体部外面には回転ケズリ調整痕が認められる。27は瀬戸窯産の小仏花器である。完形品で、口径2.8cm、器高11.3cm、底径4.6cmとなる。底部には回転糸切痕(右回り)が残る。淡緑色の灰釉が、まだら状に掛かる。胎土は砂粒を含み、白灰色をなす。28は合子の蓋と考えられる。復元口径は6.0cmである。上面は削り残しによるボディティブな文様が描かれ、側面は縦に連続的な丸彫りが施されている。外面に黄白色の釉が掛かる。29は褐釉陶器の体部片である。体部内外面は輪轂痕が顕著である。暗灰色の砂粒を含む胎土をなし、器面は茶褐色から黒褐色をなす。

(内野)

第12表 柱穴出土遺物一覧表

	口 径	器高	底 径	グ リ ッ ト	分類
1	(12.2)	2.3	(8.8)	E-24 Pit18	C
2	(11.8)	2.4	(8.6)	J-18 Pit 2	C
3	12.5	2.5	8.2	H-18 Pit 1	C
4	14.6	2.7	9.6	I-19 Pit 3	C
5	(12.0)	2.6	8.2	I-19 Pit 9	C
6	11.2	2.6	8.2	I-19 Pit 3	C
7	11.0	2.4	(8.0)	J-9 Pit 1	C
8	(12.6)	2.3	8.6	M-12 Pit	C
9	11.4	2.7	2.9	M-12 Pit	C
10	(12.2)	2.5	9.0	J-9 Pit 1	C
11	(11.2)	2.5	(8.6)	M-19 Pit 6	C
12	(12.0)	2.6	(9.4)	M-19 Pit19	C
13	(10.0)	2.2	(8.0)	O-21 Pit 1	C
14	8.7	1.3	5.7	I-39 Pit 5	A
15	8.0	1.0	6.4	H-18 Pit 2	C
16	8.0	1.3	6.0	J-39 Pit 4	A
17	7.8	1.0	6.2	J-9 Pit 1	C
18	(7.8)	1.2	6.0	M-12 Pit 9	C
19	(8.6)	1.2	7.0	M-12 Pit	C
20	(8.6)	1.6	6.6	N-19 Pit 1	C
21	(8.6)	1.3	(6.6)	N-12 Pit 5	C
22	(7.4)	1.1	(6.1)	N-22 Pit 8	C
23	(7.8)	1.7	(5.8)	O-17 Pit 3	A
24	(6.7)	1.2	(5.6)	O-21 Pit 1	C

第4章 K遺跡の記録

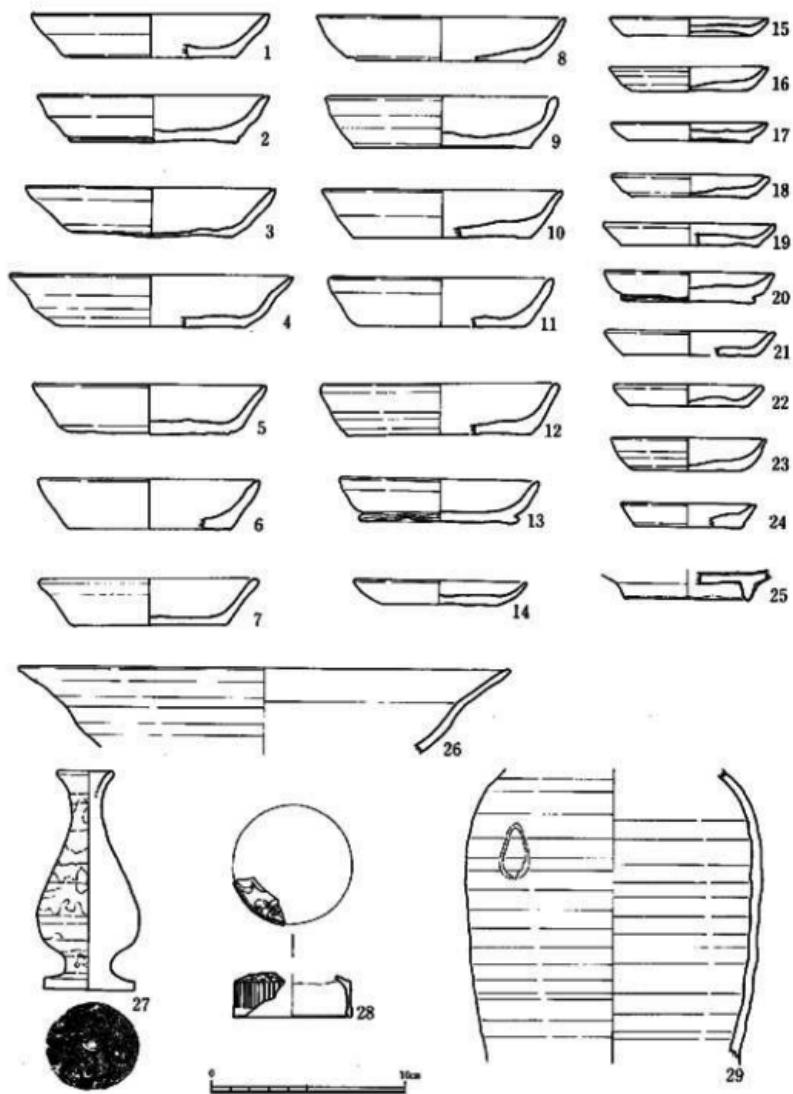


Fig.55 柱穴出土遺物実測図

9. 井戸と出土遺物

(1) 井戸 (SE-01) (Fig. 56)

調査区西半部、中央部を方形に区画する内構の溝、SD-04と重複してH-16グリットに検出した。その切り合ひ関係からみて、SE-01はSD-04が完全に埋没してから掘り込まれてゐることがわかる。平面プランは2.6m×2.0mの梢円形で、検出面から30cmの深さまではゆるやかな傾斜で掘り込まれ、そこからは垂直に近い角度で下方へ掘り込まれてゐる。この部分は1.4m×1.6mのほぼ円形プランである。検出面より約1.4mで底にいたる。底面は径1.45mの円形をなし、一部袋状になる部分もある。井筒等はみいだせず、素掘りの井戸と思われる。唯一の井戸と考えられる、SE-01を埋める埋土は流土によって埋没したことを示している。上より第1層はやや粘質の黄茶褐色土層で鉄分が沈着している。周囲と大きな変化はなく遺構の識別にも困難をきわめた。整地層の可能性もある。第2層は薄い層で鉄分を含んだ暗茶褐色土層である。第3層は粗砂を含んだ灰褐色土層、第4層は第3層との区別はやや困難であるが、やや白っぽい灰褐色土層である。第5層は淡灰色粗砂層、第6層は、岩を含んだ灰褐色土層、第7層はやや粘質の黄褐色土層、第8層は粗砂を含んだ黄灰褐色土層、第9層は炭、粗砂を含んだ暗灰褐色土層で遺物を多量に含む。第10層は黄色の強い灰褐色土層、第11層は黒色土（炭）層、第12層は粗砂を含む暗灰褐色土層、第13層は炭層、第14層は粘質の強い灰褐色土層となつてゐる。この井戸からは多量の上飾貫上器、鉄器、漆塗り椀（被膜のみが残る）。このような例は方形区画の溝にもみられる。漆は黒漆に赤漆で文様を描いてゐる。等の遺物が多量に出土している。

この井戸には現在、湧水はみられないが発掘所見では底部が疊層に達しており、またわざかながらオーバーハングしているので湧水があったことが推測できる。北側を流れる樋井川の川床が侵蝕され低下したことにより、地下水脈が下った結果によるものであろうか。井戸はこのSE-01を除いて他に存在しない。このことが地下水脈の低下と関連するか否かは判断できないが、可能性としては指摘することができよう。また、井戸が少いことは遺跡立地とも大きく関連しているものと思われる。遺跡をのせる河岸段丘の基盤層は砂と疊層の互層をなしており、深く掘り込んだ場合、壁面の崩壊をまねく恐れが強く、深い井戸の掘削には適していなかつたことが指摘できる。多くの危険性をおかして井戸を掘削するよりも、遺跡の直下を流れる川水を利用することがより有利であったことが指摘できる。現在でも、きれいな水が流れしており、当時、上流に人家がないことからも考えられることである。方形区画IIの内構西端部の北側に備えられた出入口状の陸橋は谷川（樋井川）へのおり口の通用出入口であった可能性も強い。

(山崎)

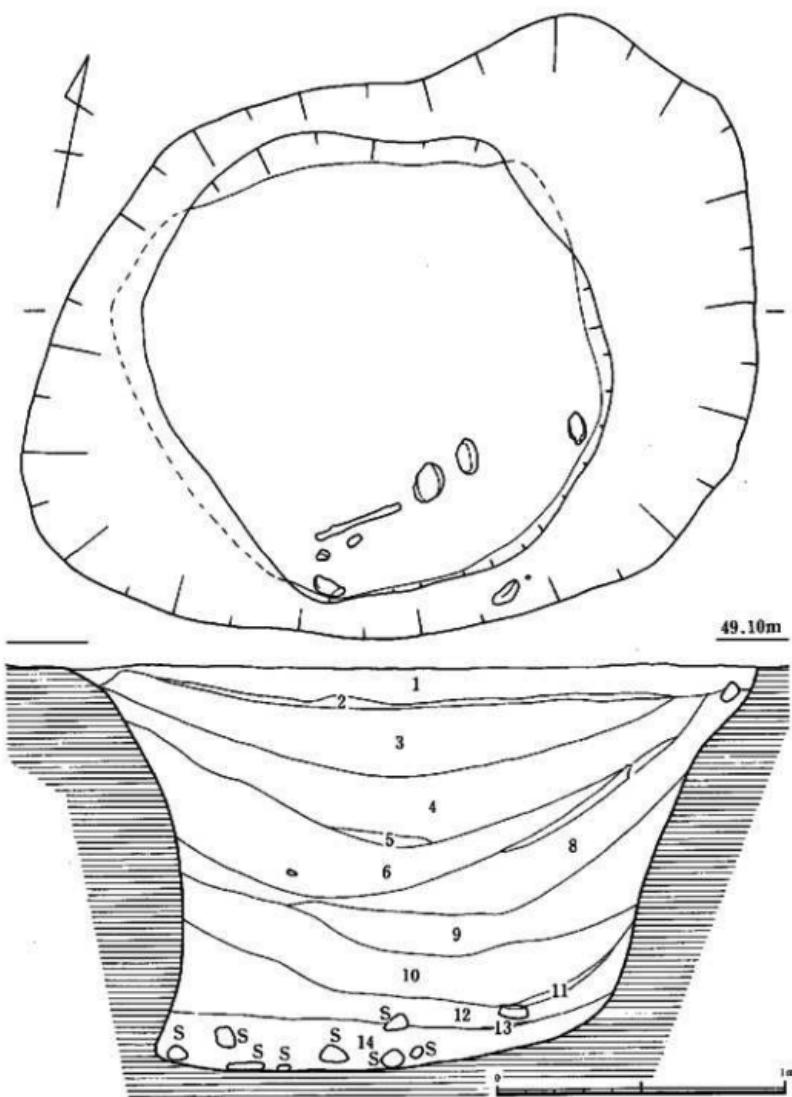


Fig.56 SE-01(井戸)実測図

(2) 出土遺物 (Fig. 57, 58)

① 土師質土器

出土した皿の破片は総数約2,490点である。全て輪轂成形され、外底部には回転糸切痕を残す。また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものが多く存在する。完形品および準完形品は10数点あり、図示可能な破片も含めて説明する。

大 (1~13, 24~33) 胎土の特徴による分類に従うと、何れもC類となる。口径11.8~13.0cm、器高2.2~2.7cm、底径8.2~9.8cmの法量分布を示す。胎土は赤褐色をなし、1, 2は砂粒を多めに含む。1, 4, 5は体部外面下半の土をかるく搔き取っている。1, 3, 6, 7, 10については、外面にまだらに黒い付着物が認められる。

小 (14~23, 34~38) 口径7.2~9.4cm、器高1.1~1.6cm、底径5.4~7.4cmの法量分布を示す。何れも赤褐色の胎土をなし、C類である。19~21は内外面に黒い付着物が認められる。

② 陶器 (41)

擂鉢の口縁部から体部に至る破片が1点出土している。口縁部は肥厚し、調整により余った土を内外面にかぶせる様にしている。内面は板によって、横方向に調整が施されたらしく、擦痕が認められる。外面は磨滅が著しく、調整方法は不明であるが、凹凸があるため、指押えをしている可能性もある。全体に瓦質で、器面は黒色、器壁内は白灰色をなす。

③ 磁器 (39, 40)

龍泉窯系錦蓮弁文碗片が2点ある。39は暗緑色、40は黄土色をなす。

④ 石製品 (42)

滑石製石鏡の口縁部片が出土している。外面には、のみによる縦方向の削り痕が認められる。内面は磨き調整が施され、非常に滑らかになっている。鏡より下方の器壁は上方の器壁より薄く作られている。器面には煤の付着等、特に使用痕跡は認められない。

⑤ 鉄製品

比較的多く鉄製品が出土している。43~45は刀子、46~52は角釘である。

第13表 SE-01出土土師質土器皿法量計測表

	口 径	器 高	底 径	分 類		口 径	器 高	底 径	分 類
1	(13.8)	2.5	(10.8)	B	6	12.4	2.3	9.0	C
2	(12.0)	2.6	(9.6)	B	7	12.1	2.7	8.4	C
3	12.0	2.4	8.8	C	8	(10.2)	2.9	(6.8)	C
4	12.2	2.7	9.2	C	9	12.5	2.4	9.2	C
5	12.2	2.5	8.2	C	10	11.8	2.4	9.0	C

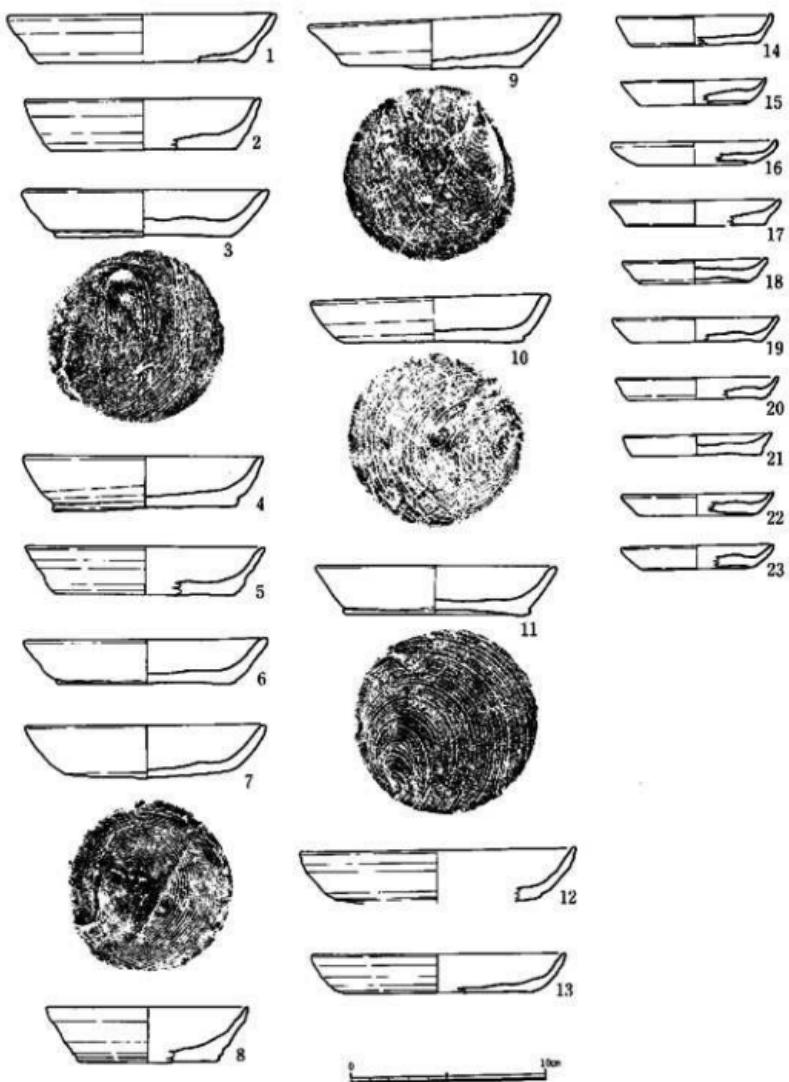


Fig.57 SE-01(井戸)出土遺物実測図 I

9. 井戸と出土遺物

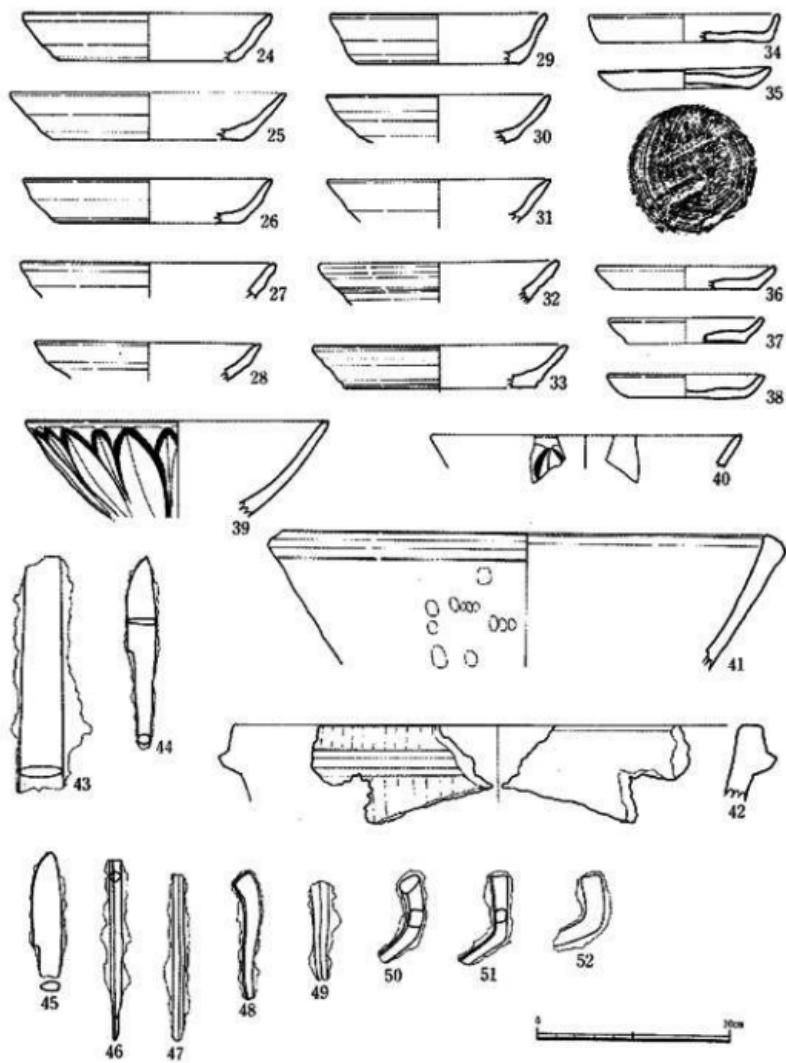
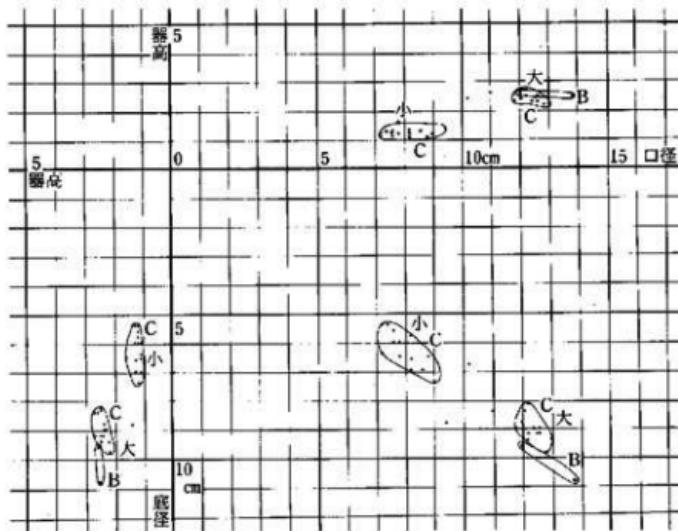


Fig.58 SR-01(井戸)出土遺物実測図II

第4章 K遺跡の記録

	口 径	器 高	底 径	分 類		口 径	器 高	底 径	分 類
11	12.2	2.5	9.4	C	25	(14.0)	2.4	(10.0)	C
12	(14.0)	-	-	C	26	(12.6)	2.3	(9.0)	C
13	(13.0)	2.2	(9.4)	C	27	(13.0)	-	-	C
14	(7.8)	1.6	(6.5)	C	28	(11.2)	-	-	C
15	(7.4)	1.3	(5.4)	C	29	(11.0)	2.6	(8.4)	C
16	(8.2)	1.2	(5.8)	C	30	(11.4)	-	-	C
17	(8.6)	1.3	(7.0)	C	31	(11.2)	-	-	C
18	(7.2)	1.2	(5.4)	C	32	(12.0)	-	-	C
19	(8.2)	1.3	(6.6)	C	33	(12.8)	2.2	(9.8)	C
20	(8.2)	1.1	(7.0)	C	34	(9.4)	1.4	(8.8)	C
21	(7.2)	1.1	(6.4)	C	35	8.8	1.1	6.5	C
22	(7.6)	1.1	(6.0)	C	36	(9.0)	1.2	(7.4)	C
23	(7.6)	1.2	(5.6)	C	37	(7.6)	1.3	(6.0)	C
24	(12.6)	2.5	(9.2)	C	38	(7.8)	1.2	(6.0)	C



第14表 SE-01出土土師質土器皿分布図

10. 製鉄遺構 (Fig. 59)

調査区の西端部M-4, 5グリットに検出した。南北に細長く3m×1mの梢円形状に炉体、鉄滓、灰、木炭、石材が集積したものである。発掘当初はタカラ製鉄に伴う炉体の破壊したものを一括投棄したものと考えていたが、発掘が進むにつれて、同一場所に地山を掘りくぼめた土塗が存在し、炉自体がこの場で崩壊して拡散していることを知った。概略について説明する。まずこれら鉄滓等の下位に検出した土塗は3個連接したもので範囲は上部の鉄滓等と全く一致している。南側の土塗は110cm×70~120cmの不整梢円形をなし、深さ10~15cmで断面形は皿状をなす。中央部の土塗は70cm×45cmの梢円形プランをなし、西側に径25cmの不整形のピットが伴う。断面形は浅い皿状をなし深さ5cm前後である。北側の土塗は120cm×80cmの不整方形の土塗で南側が一段深くなり北側は浅くなる。断面形は皿状で深さ13cm前後である。この連接した土塗を詳細に観察すると中央部の一段高い小型の土塗を中心として両側にやゝ大型の深い土塗が連接し、中央土塗を中心として対称形を示している。これらから想像をたくましくして構造を考えれば中央部が炉体で南北の両側にフィゴを配した構造が考えられるが確証はない。炉体、鉄滓、灰、焼土の分布にも特別のかたよりはみられないでこれ以上の推測は困難である。ただし、この製鉄遺構の存在は重要である。炉体の焼け方、鉄滓から鍛冶炉を考えられるが、今後の検討にまちたい。

この製鉄遺構に近接して存在する一群の掘立柱建物、S B-01~05は他の掘立柱建物と比較し、小規模で、重複がみられず、西端部に位置することからも特殊な用途が考えられる。製鉄との関連で把握することがより可能性がありそうである。
(山崎)

11. 土塗と出土遺物

(1) 第1号土塗 (SK-01) と出土遺物

① 遺構 (SK-01) (Fig. 60)

調査区の中央部、方形区画IIの溝の北端に位置する大形掘立柱建物 S B-31, 32, 34の東側に近接する、E-25, F-25, 26, G-25, 26グリットにかけて検出した。西壁5.35m、東壁5.55m、最大長5.7m、北壁4.15m、南壁4.0m、最大幅4.4mの長方形プランをなす土塗である。深さ25~30cm、床面は平坦である。壁の立ち上がりは垂直でなく、ゆるやかである。一見して堅穴住居址と思われるが、床面には柱穴その他住居址を証明するものはみられない。堅穴の主軸が大形掘立柱建物の梁行線に平行すること、また堅穴内より大量の土師質土器が完形お

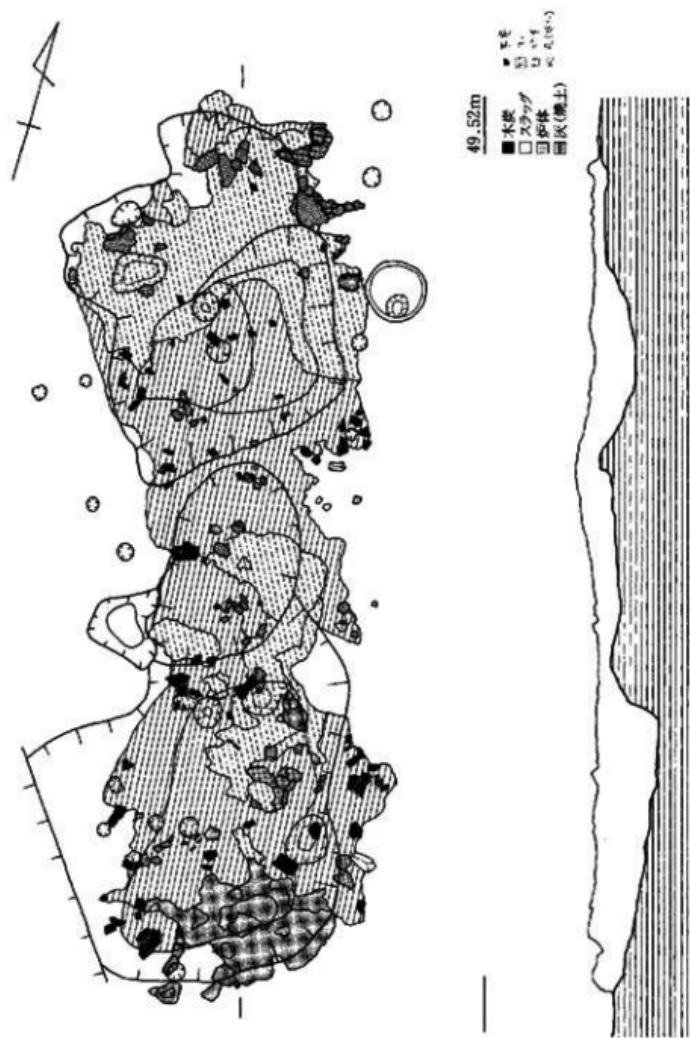


Fig.59 製鉄遺構実測図

11. 土坑と出土遺物

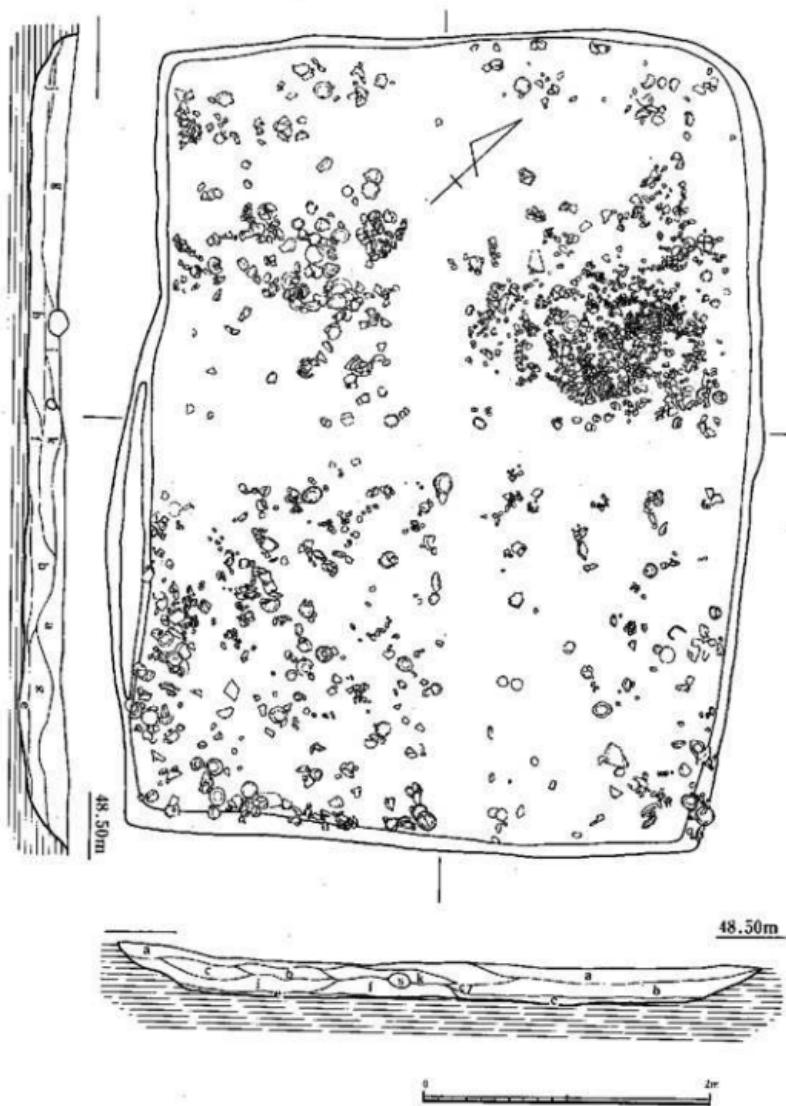


Fig.60 土器類土坑(SK-01)実測図

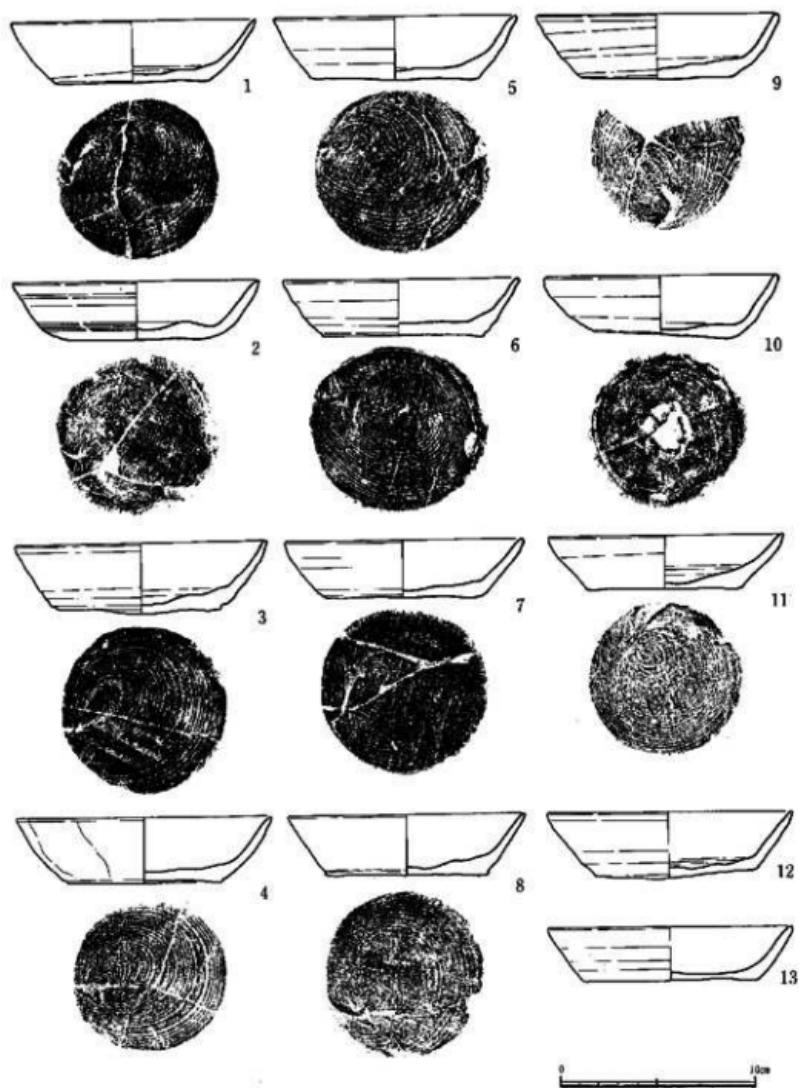


Fig.61 SK-01出土遺物実測図 I

11. 土塗と出土遺物

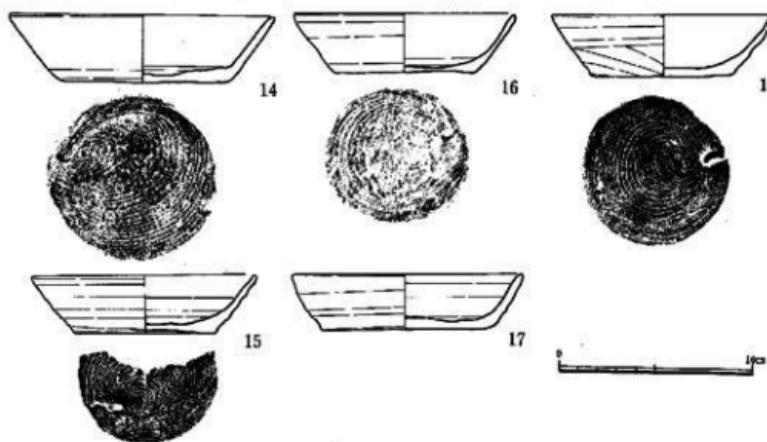


Fig. 62 SK-01出土遺物実測図 II

より破片で多量に出土すること、また、SK-01ほど大規模でないが、大形掘立柱建物の周辺に同様の土器窯り土塗が多数存在することからみて、本竪穴もSB-31, 32, 34の大形掘立柱建物に伴う土器窯り土塗と考えられる。

竪穴内の土層はa層が暗茶褐色土層混入の灰茶色土層、b層が茶褐色土層混入の黄色土層、c層が黄色土層、d層が黄色土層混入の灰色粘質土層、e層が灰色粘質土層、f層が黄灰茶色土層、g層が淡灰茶色土層、h層が灰茶色土層、i層が茶褐色土層、j層が黄色土層混入の灰茶色土層、k層が暗茶褐色土層、l層が黒色土層となっており、縦断面、横断面の土層はこれらの土層が複雑にかうまっており、多方向からこの竪穴に土師質土器と共に投棄されたことがうかがえる。

(山崎)

② 山土遺物 (Fig. 61~73)

i) 土師質土器

出土した皿の破片は総数約11,700点である。全て輪轉成形され、外底部には回転糸切痕を残す。また、内底部にもナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すもの多く存在する。完形品、準完形品が豊富で、当遺跡内遺構中、量的質的に最も良好な資料を提供している。

第4章 K遺跡の記録

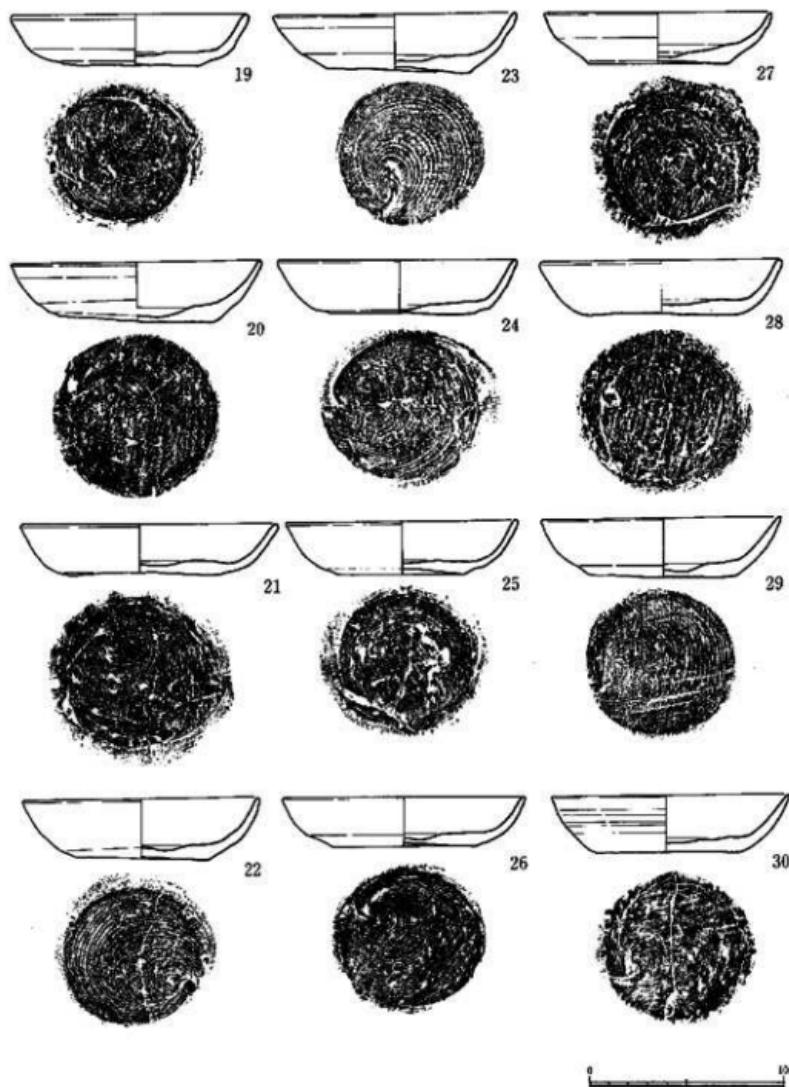


Fig.63 SK-01出土遺物尖測図III

11. 土竈と出土遺物

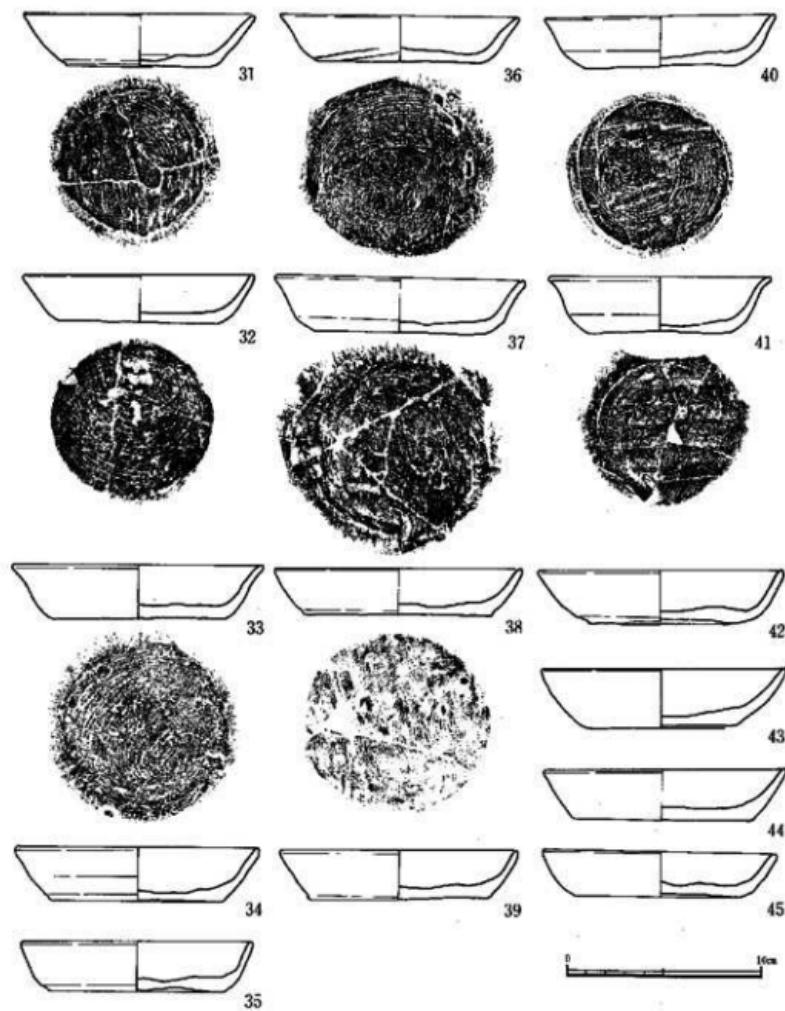


Fig. 64 SK-01出土遺物実測図IV

大 (1~67, 70~91)：胎土の特徴による分類に従うと 1~18がA類, 19~45がB類, 46~91がC類となる。1~18は口径11.3~13.4cm, 器高2.7~3.5cm, 底径7.1~9.0cmの法量分布を示す。胎土は比較的精良で、白灰色から黄灰色をなす。形態的には、体部の広がりが内湾気味のもの、(1, 3, 4等), と直線的なもの (2, 7, 8等) があるが、何れも口縁部に至るに従って、徐々に器盤が薄くなっていくのが特徴である。また、底部際にはみ出した土は少なく、丁寧に削り取るか、ナデ取るかしている。15, 16, 18はとりわけ、器壁が薄作りである。

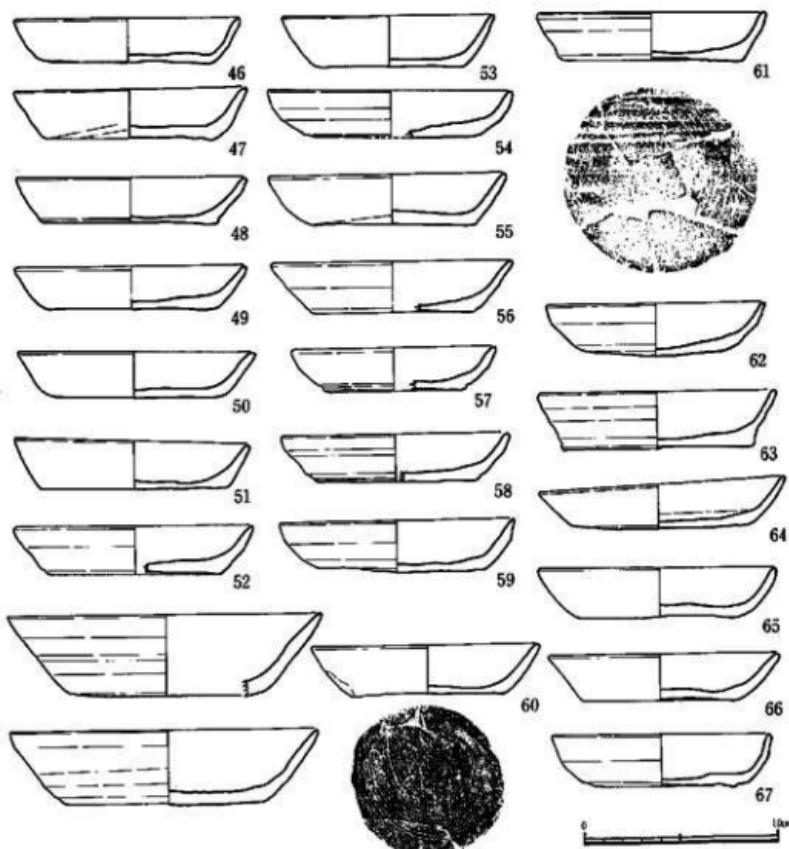


Fig. 65 SK-01出土遺物実測図V

11. 土器と出土遺物

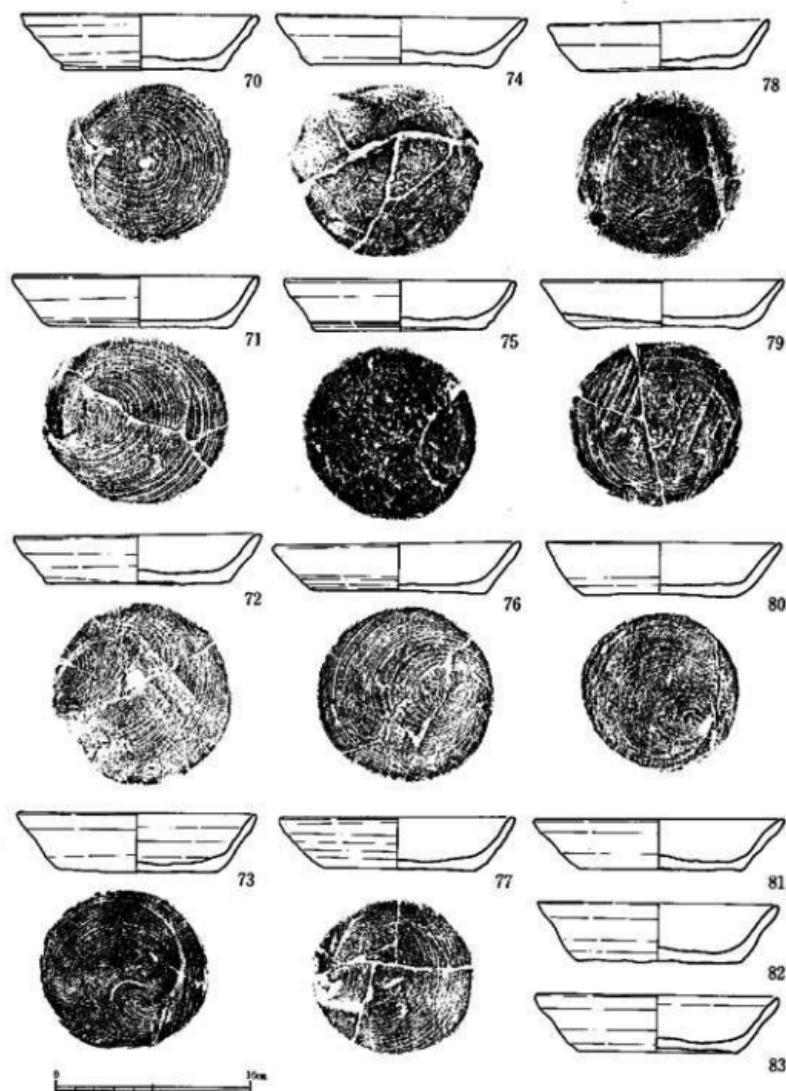


Fig.66 SK-01出土遺物実測図VI

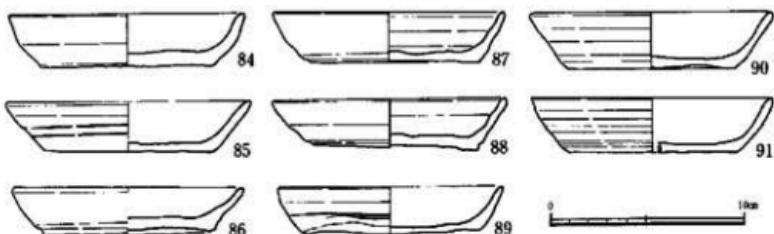


Fig. 67 SK-01出土遺物実測図

19~45は口径11.3~12.8cm、器高2.3~3.1cm、底径6.4~9.6cmの法量分布を示す。胎土は白色砂粒（1~2mm）を多く含み、黄灰色~黄褐色をなす。形態的には、体部が腰を強く張って内湾気味に広がるもの（19~30等）が目立ち、直線的なもの（31, 34, 36等）、外曲するもの（33, 37, 40, 41等）も存在する。底部際にはみ出した上は少なく、断面でみると底部から体部への変換部分は曲線的となる。35, 38, 39, 45は焼成不良のため赤褐色をなす。

46~91は口径10.4~12.8cm、器高1.2~3.1cm、底径6.5~9.7cmの法量分布を示す。胎土は砂粒を僅かに含み、黄褐色~赤褐色をなす。形態的には、体部の広がりが内湾気味のもの、直線的なもの、外曲気味のものとがある。器壁の厚さについては、体部上半部が肥厚するもの、薄くなるもの、均一なものとある。

小（92~143） 小皿の場合、1個体あたりの粘土の使用量が少ないため、破片になってしまふと砂粒の粗密による判別が難しくなるがSE-01の場合は、完形品、準完形品が多いため図示したものについてのみ分類を行った。結果は法量表に示してある。小皿は口径7.2~9.4cm、器高1.1~1.8cm、底径5.1~7.4cmの法量分布を示す。形態的には、概してA類、B類は体部器壁を薄く作るのに対して、C類は厚めに作る傾向があると考えられる。

特大（68, 69） 2点ある。68は復元すると、口径16.2cm、器高4.2cm、底径10.0cmである。胎土は僅かに砂粒を含み、赤褐色をなす。底部際の余分な土は削り取られている。69は口径15.8cm、器高3.8cm、底径9.9cmである。胎土は僅かに砂粒を含み、赤褐色をなす。内底部中央にはナデ調整が施され、外底部は糸切り痕の上に板目圧痕が認められる。底部際の余分な土は丁寧に削り取られている。

ii) 磁器（144~147）

龍泉窯系輪弁文鏡片が4点存在する。何れも白灰色の胎土で、釉色は144~147が淡緑色、147が暗緑色である。147の内底部には花文らしきスタンプが押されている。

iii) 陶器（148~154）

11. 土坑と出土遺物

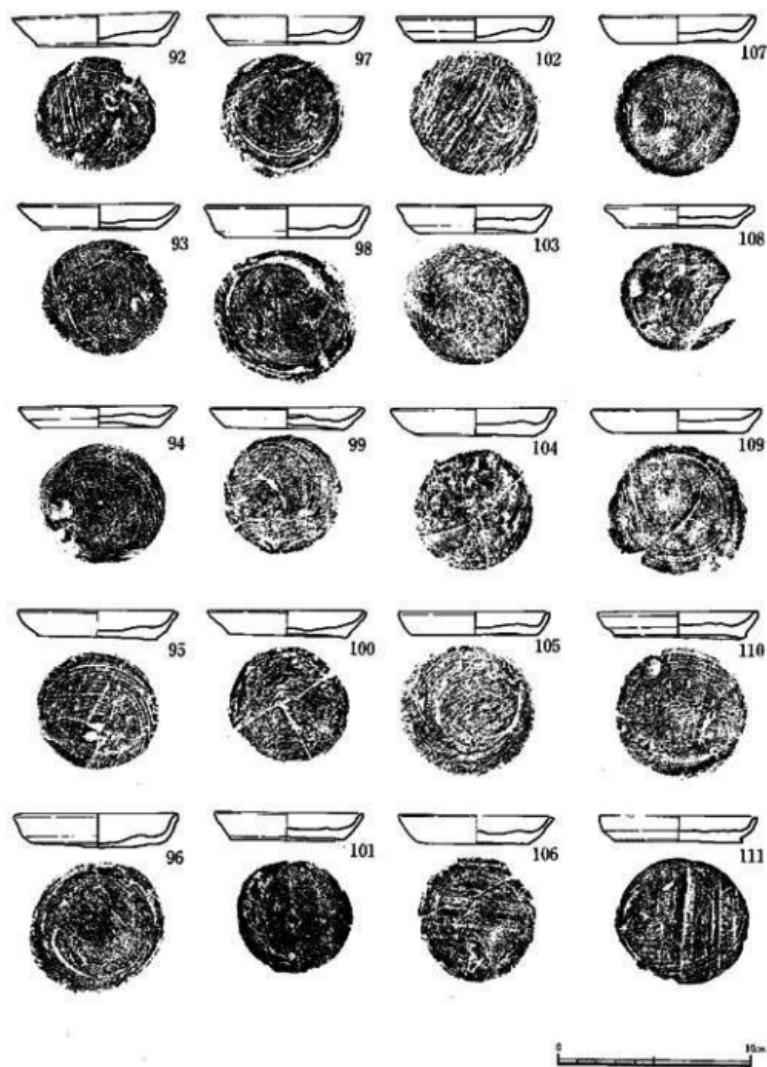


Fig.68 SK-01出土遺物実測図面

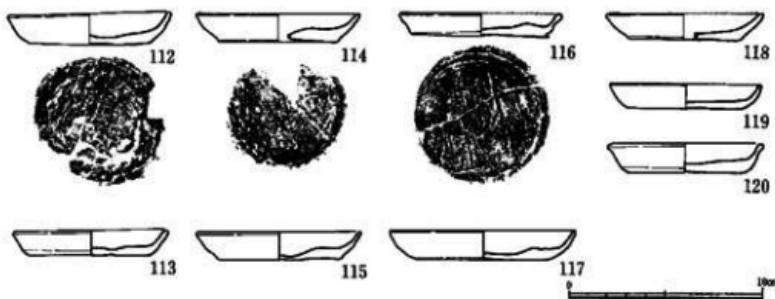


Fig.69 SK-01出土遺物実測図IV

須恵器片が6点存在する。甕および壺の破片である。何れも暗灰色で、焼成は堅緻である。
a) 甕 148は甕の口頸部で、大きく外反する。復元口径22.5cmである。肩部外面は平行線叩き、内面は同心円叩きが施されている。149～153は胴部で、149、153は外面に平行線叩きのうち、カキ目調整を施し、内面には同心円叩きを施している。150、152は外面には櫛格子状叩きを施し、内面には同心円叩きを施している。151は外面には平行線叩きを施し、内面には同心円叩きを施している。

b) 壺 (151) 内底部は不定方向のナデ調整が、外底部はカキ目調整が施されている。他の部分は回転ナデ調整である。
(内野)

第15表 SK-01出土土師質土器皿法量計測表

	口 径	器 高	底 径	分 類		口 径	器 高	底 径	分 類
1	12.5	3.2	7.9	A	13	(12.4)	2.8	9.0	A
2	(12.5)	3.0	(7.1)	A	14	(13.4)	3.5	8.3	A
3	12.8	3.4	8.2	A	15	11.3	3.0	7.2	A
4	13.0	3.3	7.8	A	16	11.4	3.0	7.3	A
5	(12.4)	3.3	8.6	A	17	11.8	3.0	8.5	A
6	12.0	3.0	8.2	A	18	11.4	3.2	7.3	A
7	12.0	3.0	7.7	A	19	11.8	2.7	6.8	B
8	(12.0)	3.2	8.4	A	20	12.8	3.0	8.0	B
9	12.1	3.4	7.5	A	21	12.8	2.5	7.6	B
10	12.0	3.1	7.1	A	22	12.0	3.0	6.8	B
11	11.8	2.8	7.9	A	23	12.3	2.9	7.3	B
12	12.5	3.4	8.2	A	24	11.8	2.7	7.2	B

11. 土器と出土遺物

口 径	器 高	底 径	分 類		口 径	器 高	底 径	分 類
25	11.7	2.7	B	39	11.6	2.5	9.0	B
26	(12.3)	2.6	B	40	(11.6)	2.6	7.5	B
27	(11.6)	2.6	B	41	(11.3)	3.0	7.4	B
28	(12.2)	2.8	B	42	12.3	2.9	7.3	B
29	12.0	3.0	B	43	13.0	3.1	7.6	B
30	12.0	3.0	B	44	12.3	2.7	9.0	B
31	(12.4)	2.8	B	45	12.0	2.3	8.3	B
32	11.4	2.5	B	46	11.4	2.3	8.1	C
33	(12.4)	2.8	B	47	11.5	2.5	8.8	C
34	11.4	2.8	B	48	11.3	2.4	8.8	C
35	(11.8)	2.6	B	49	(11.6)	2.2	(8.8)	C
36	(12.2)	2.4	B	50	11.8	2.3	8.3	C
37	(12.6)	2.9	B	51	11.7	2.5	9.5	C
38	(12.8)	2.4	B	52	12.2	2.5	9.0	C

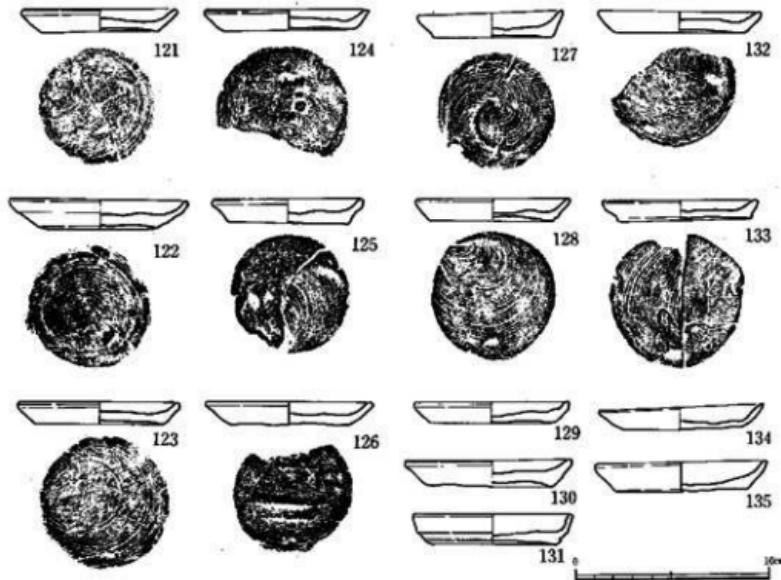


Fig.70 SK-01出土遺物実測図 X

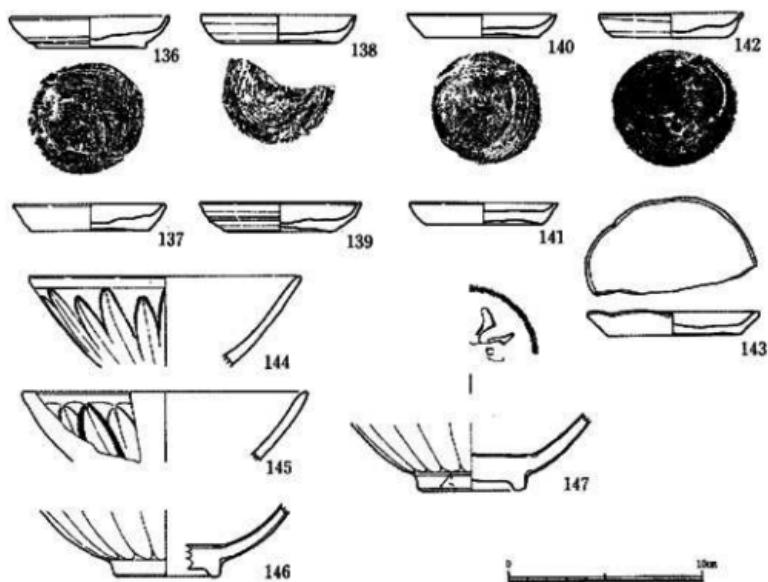


Fig.71 SK-01出土遺物実測図 XI

	口 深	器 高	底 径	分 類		口 径	器 高	底 深	分 類
53	(10.8)	2.6	7.8	C	67	11.0	2.7	6.9	C
54	(12.3)	2.5	9.0	C	68	(16.2)	-	(10.0)	C
55	11.8	2.6	8.5	C	69	15.7	3.8	9.9	C
56	(12.4)	2.7	8.3	C	70	12.0	2.9	8.0	C
57	10.4	2.3	6.6	C	71	12.0	2.7	9.0	C
58	11.4	2.5	7.8	C	72	12.2	2.5	9.1	C
59	12.0	2.7	8.7	C	73	12.0	3.1	8.4	C
60	11.4	2.5	7.7	C	74	(12.8)	2.5	9.0	C
61	11.6	2.5	9.6	C	75	11.9	2.6	8.8	C
62	11.2	2.7	7.4	C	76	12.2	2.6	9.0	C
63	12.0	3.0	9.6	C	77	11.9	2.7	7.6	C
64	12.5	2.2	8.8	C	78	11.2	2.5	8.3	C
65	11.8	2.6	8.0	C	79	(12.3)	2.4	8.8	C
66	11.5	2.5	8.0	C	80	11.8	2.8	8.0	C

11. 土器と出土遺物

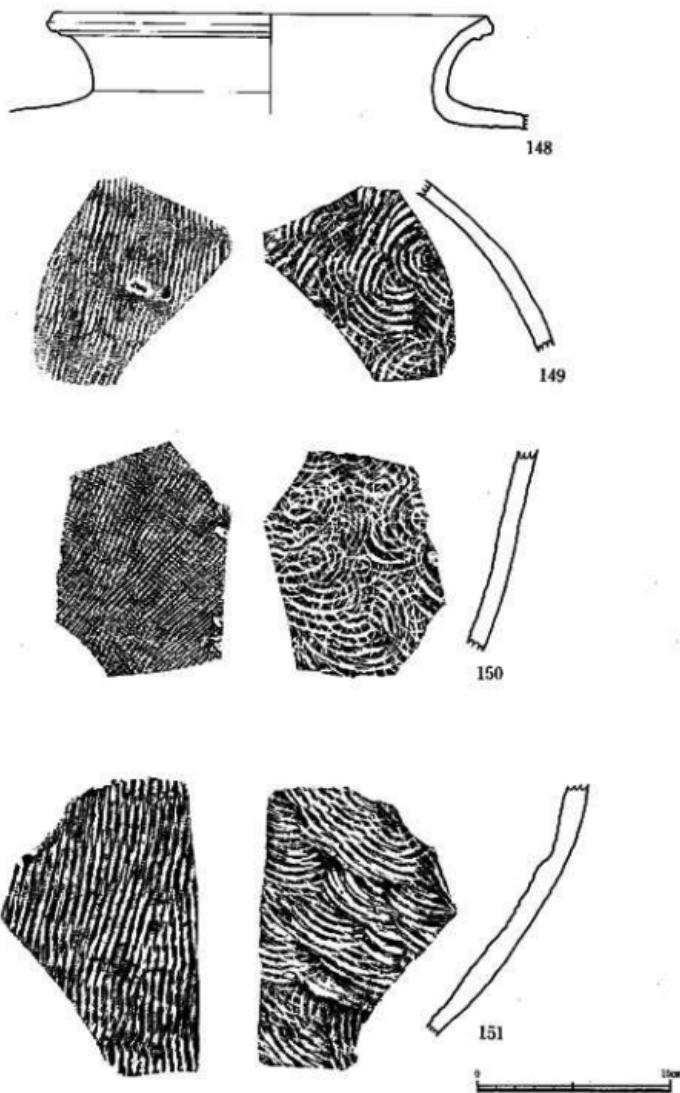


Fig.72 SK-01出土遺物実測図

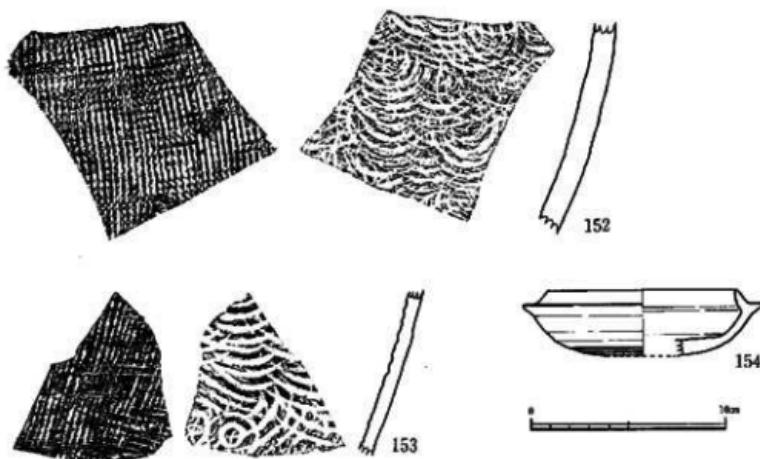


Fig.73 SK-01出土遺物実測図 XIII

	口径	器高	底径	分類		口径	器高	底径	分類
81	12.8	2.6	8.4	C	98	(8.3)	1.7	6.4	A
82	(12.3)	3.1	8.4	C	99	7.8	1.1	6.0	A
83	12.4	3.0	8.3	C	100	8.0	1.3	6.2	B
84	(11.6)	2.7	(9.0)	C	101	7.5	1.5	6.0	A
85	(11.6)	2.7	(9.0)	C	102	(8.0)	1.3	6.2	A
86	(11.6)	2.5	8.6	C	103	7.9	1.5	6.1	A
87	11.6	2.6	8.7	C	104	8.3	1.5	6.0	A
88	11.9	2.4	8.4	C	105	(7.6)	1.2	6.6	B
89	11.2	2.6	9.2	C	106	7.8	1.5	5.5	A
90	(12.2)	3.0	8.5	C	107	7.9	1.5	6.1	A
91	(12.4)	2.8	8.8	C	108	7.6	1.1	6.0	A
92	8.4	1.6	6.0	A	109	8.5	1.3	6.7	C
93	8.0	1.3	6.0	A	110	8.0	1.4	6.5	C
94	8.0	1.1	6.1	A	111	8.0	1.4	6.6	C
95	8.0	1.4	6.1	A	Fig.68				
96	8.0	1.8	6.4	B	112	8.3	1.7	6.2	B
97	7.8	1.5	5.8	A	113	7.8	1.3	6.4	C

11. 土塗と出土遺物

	口 拝	器 高	底 径	分 類		口 拝	器 高	底 径	分 類
114	(8.4)	1.5	6.0	A	130	7.8	1.1	7.4	C
115	8.4	1.5	6.2	A	131	7.8	1.1	6.4	C
116	8.0	1.2	6.8	B	132	7.8	1.4	6.0	A
117	9.4	1.5	6.8	B	133	8.0	1.6	6.4	C
118	8.0	1.4	5.7	A	134	8.4	1.2	6.2	C
119	(7.6)	1.3	5.8	A	135	8.6	1.5	6.8	C
120	7.8	1.5	5.8	B					

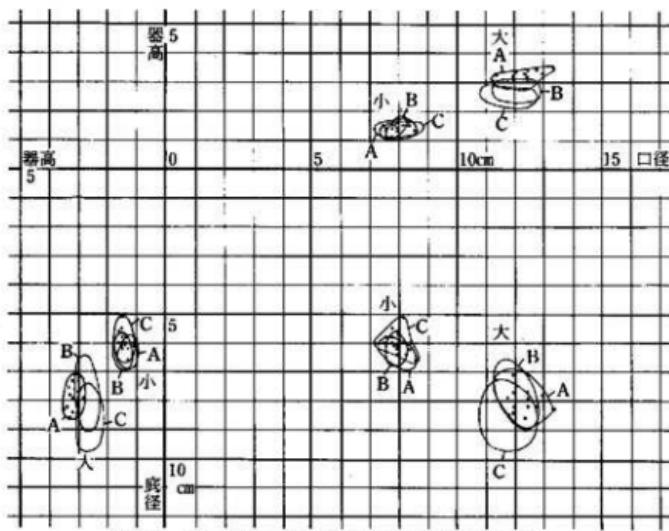
Fig.69

121	7.6	1.2	5.8	C
122	8.9	1.5	5.5	C
123	8.0	1.2	6.6	C
124	8.0	1.1	6.8	C
125	7.4	1.3	6.2	C
126	(8.4)	1.2	6.2	C
127	7.4	1.3	6.1	C
128	7.6	1.2	6.2	C
129	(8.2)	1.1	6.7	C

Fig.70

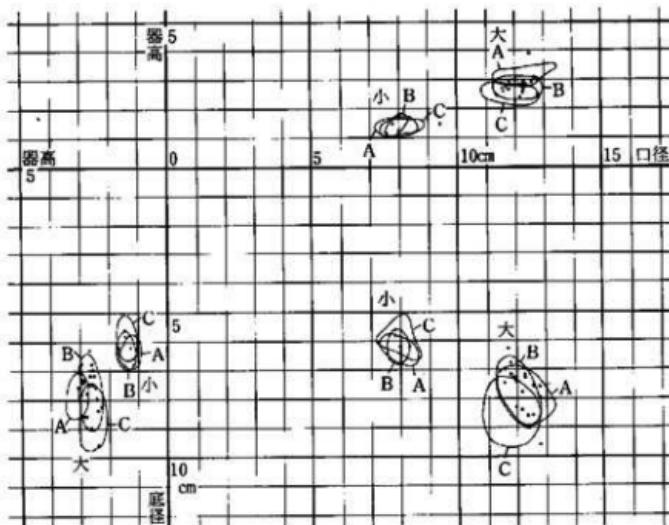
136	8.0	1.6	5.6	A
137	7.6	1.4	6.0	A
138	(7.8)	1.5	5.6	B
139	8.2	1.5	5.1	A
140	7.6	1.2	5.8	C
141	7.6	1.1	6.0	A
142	7.2	1.4	6.0	A
143	(8.6)	1.3	(6.6)	A

Fig.71

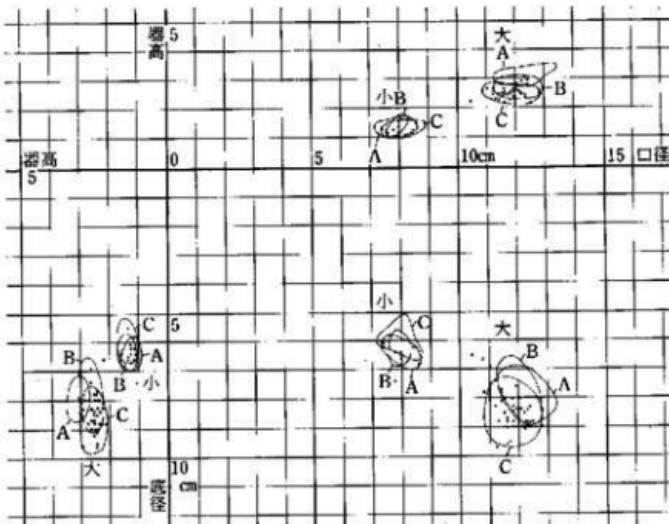


第16表 SK-01出土土師質土器皿法量分布図 (A類)

第4章 K遺跡の記録



第17表 SK-01出土土師質土器皿法量分布図 (B類)



第18表 SK-01出土土師質土器皿法量分布図 (C類)

(2) 第2号土塙 (SK-02) と出土遺物

① 遺構 (SK-02) (Fig. 74)

調査区中央部の北端部、G-24グリットに検出した土器窓の土塙である。大型の掘立柱建物SB-34のすぐ東に位置している。主軸を東北～南北にとる楕円形の土塙である。長軸120cm、短軸62～68cm、深さ28cmを測る。横断面はU字形をなし、縦断面形は舟底形をなす。底面は長軸73cm、短軸48cmの不整楕円形である。内部には土師質土器の壊、皿が完形および破片されて、ぎっしりとつまっている。SK-01同様に大型掘立柱建物、特に最も近接するSB-34との関係が考えられる。

(山崎)

② 出土遺物 (Fig. 75)

i) 土師質土器

出土した皿の破片は総数約4,090点である。

全て輪轉成形され、外底部に回転系切痕を残す。また、内底部にはナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものが多く存在する。細片が多く、図示し得た19点について説明する。

大 (1~11) 胎土の特徴による分類に従うと10がB類である他は、全てC類である。10は復元口径12.0cm、器高2.6cm、底径7.5cmである。白色砂粒を含み、黄褐色をなす。C類は口径11.6~12.6cm、器高2.1~2.8cm、底径7.4~9.6cmの法量分布を示す。胎土は黄褐色～赤褐色をなす。

小 (12~19) 復元して、口径7.2~8.8cm、器高0.9~1.5cm、底径4.8~6.0cmの法量分布をなす。何れも黄褐色～赤褐色の胎土で、C類である。

(内野)

第19表 SK-02出土土器皿法量計測表

	口 径	器 高	底 径	分 類
1	(12.4)	2.5	9.5	C
2	(12.0)	2.5	(9.6)	C
3	(12.0)	2.5	(7.6)	C
4	(11.6)	2.6	(9.2)	C
5	(12.4)	2.4	(9.4)	C
6	(13.4)	2.9	(8.8)	C
7	(12.0)	2.4	(9.2)	C
8	(12.6)	2.8	9.2	C
9	(12.2)	2.5	(9.4)	C
10	(12.4)	2.6	7.4	B
11	(11.8)	2.1	9.0	C
12	7.6	1.5	5.0	C
13	7.4	1.2	5.3	C
14	(7.8)	1.0	5.6	C
15	(7.2)	1.1	(6.0)	C
16	(7.2)	1.3	(4.8)	C
17	(7.4)	0.9	5.6	C
18	(8.4)	1.1	(7.2)	C
19	(8.8)	1.1	(6.7)	C

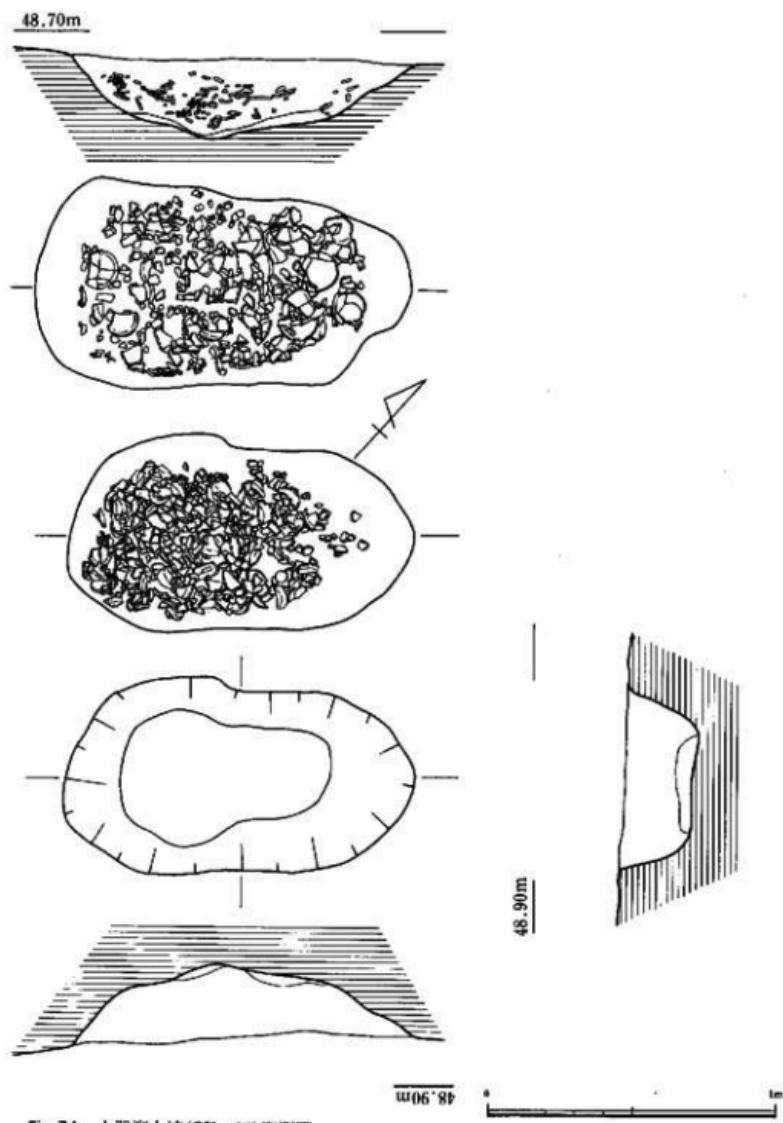


Fig.74 土器窯土坑(SK-02)実測図

11. 土坑と出土遺物

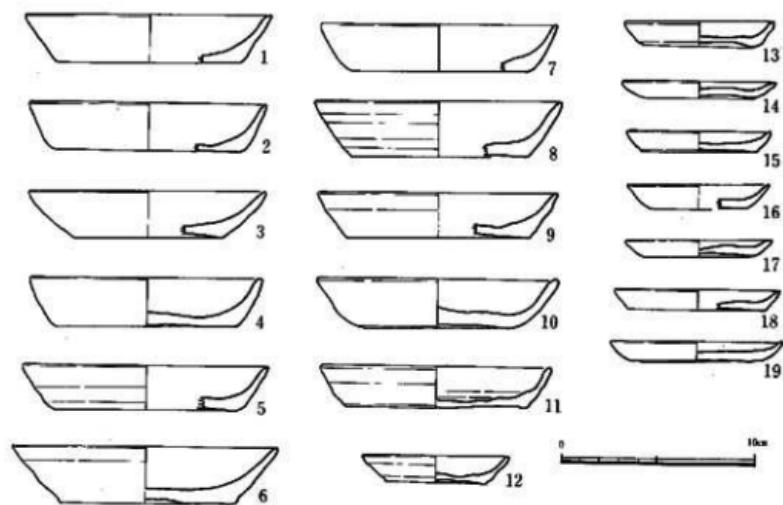
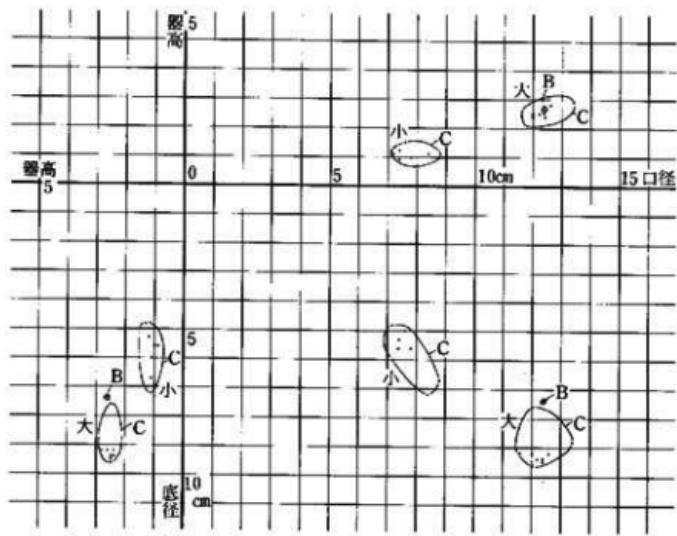


Fig. 75 SK-02出土遺物実測図



第20表 SK-02出土土師質土器皿法分布図

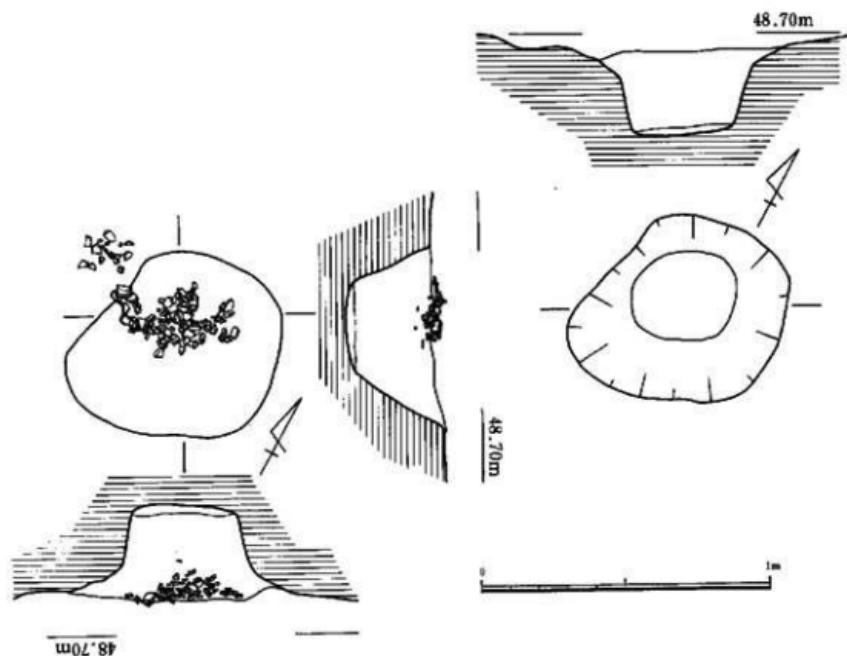


Fig.76 土器窯土塙(SK-03)実測図

(3) 第3号土塙 (SK-03) と出土遺物

① 造構 (SK-03) (Fig. 76)

調査区中央部の北端に近いE-24グリットに検出した土器窯りの土塙である。SB-31, 33と重複関係にあるが直接の切り合い関係がないので前後関係は不明である。長軸76cm, 短軸66cmの不整橢円形をなす土塙で、深さ33cmで、壁は上面はゆるやかな傾斜を示すが、下位は垂直に近いたちあがりをみせる部分と底面からかなりの傾斜でたちあがる部分がある。底は長軸48cm, 短軸33cmの橢円形プランをなしている。土器はすべてが土師質土器で壺、皿であるが破片が多く、完形品は存在しない。土塙上層の北側にのみ密集して存在し、土塙内には存在しない。土塙の埋没直前に土師質土器を破碎して投棄したものであろうか。同時併存を考えた場合、SB-32のすぐ北側に位置し、SB-32との関連性がうかがえる。

(山崎)

② 出土遺物

11. 上板と出土遺物

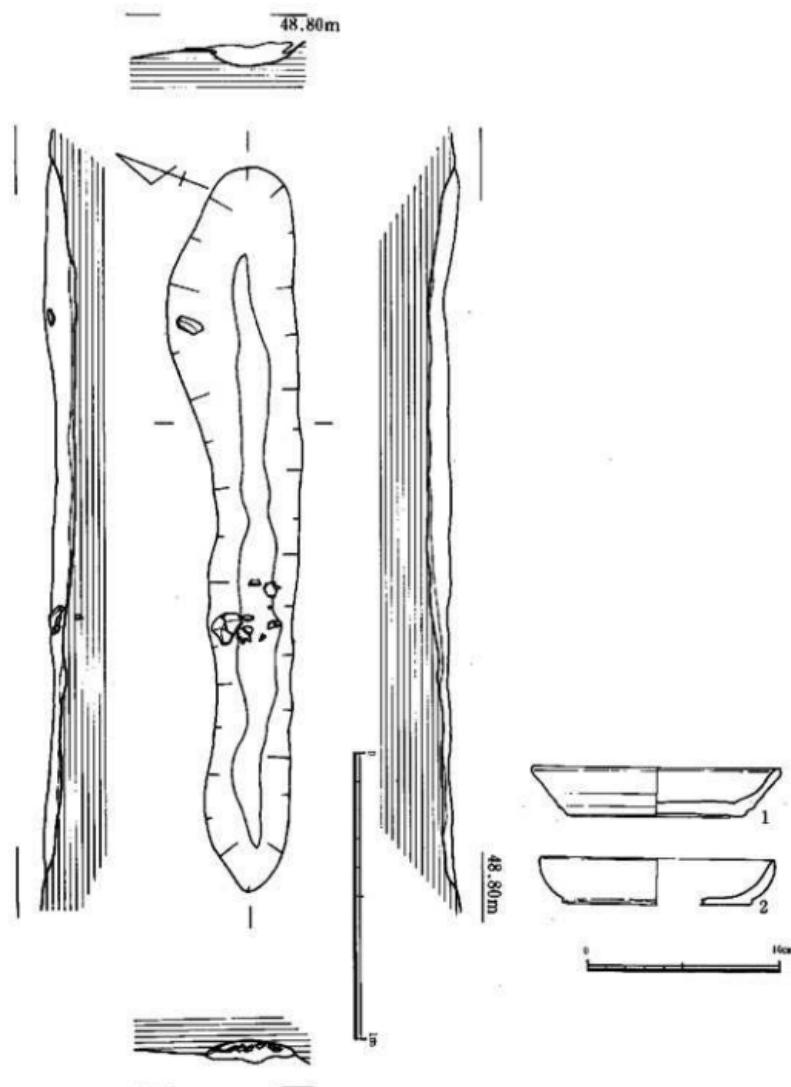


Fig.77 土器湖土塚(SK-04)・出土遺物実測図

土師質土器皿片が総数336点出土しているが、何れも細片のため図示はしない。 (内野)

(4) 第4号土塗 (SK-04) と出土遺物

① 遺構 (SK-04) (Fig. 77)

調査区の中央部、方形区画IIの内側、北端部のE-24グリットに検出した土塗である。大型掘立柱建物SB-31と重複関係にあり、SB-33とは接する形に存在する。SB-31、33とは直接の切り合い関係がないために、その前後関係は不明である。土塗は長さ250cm、幅26~44cmの細長い溝状を呈している。深さ5~10cmで横断面は浅い皿状をなしている。土塗の中央部に土師質土器が数個体存在する。SK-01~03と比較し、土器量は極めて少い。土器窓の土塗とは性格を異にするものであろう。SB-33の雨落ち溝あるいはSB-32と平行関係があるところからすると、SB-32と何らかの関連性があるかも知れない。 (山崎)

② 出土遺物 (Fig. 77)

i) 土師質土器

出土した皿の破片は総数168点である。全て輪縁成形され、外底部に回転糸切痕を残す。また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものが多く存在する。細片が多く、2点についてのみ図示する。

復元すると、1は口径12.5cm、器高2.6cm、底径9.6cm、2は口径12.0cm、器高2.4cm、底径9.6cmである。何れも胎土は砂粒を僅かに含み、赤褐色をなし、C類となる。 (内野)

(5) 第5号土塗 (SK-05) と出土遺物

① 遺構 (SK-05) (Fig. 78)

調査区の中央部、方形区画溝の北端に近いD-24、25、E-24、25グリットにかけて検出した土塗である。大型掘立柱建物のすぐ北側に位置するが、他の遺構との重複関係はみられない。長軸127cm、短軸48~60cmの不整梢円形プランの土塗である。深さは5~10cmで、横断面は浅いU字形をなす。底は長さ98cm、幅10~30cmの長梢円形プランである。土塗の西側に片寄って土師質土器が投棄されている。土器は完形品ではなく、すべてが破片である。SB-31の北側に位置し、SB-31との関連性が考えられる。 (山崎)

② 出土遺物 (Fig. 78)

i) 土師質土器

出土した皿の破片は、総数150点である。全て輪縁成形され、外底部に糸切痕を残す。また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものが多く存在する。細片が多く、5点につい

11. 土器と出土遺物

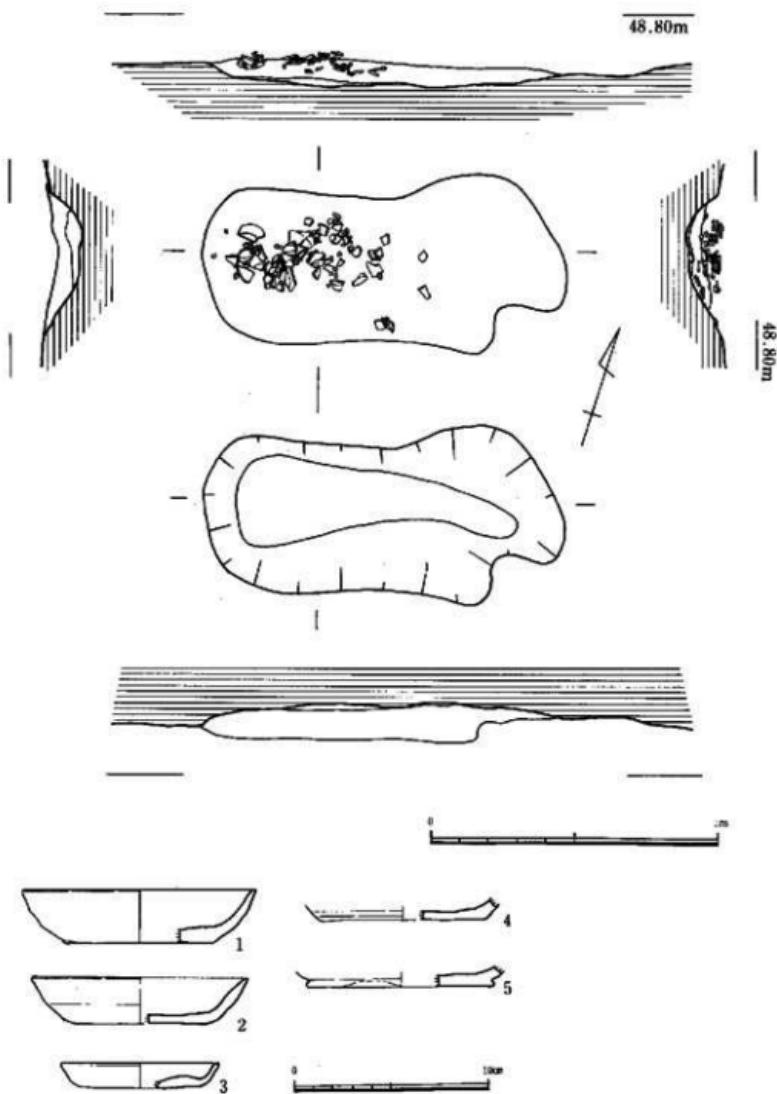


Fig.78 土器窯土塚(SK-05)・出土遺物実測図

てのみ図示する。

胎土の特徴により分類すると、1～3はB類、4はA類、5はC類である。復元すると、1は口径12.0cm、器高2.8cm、底径7.8cm、2は口径11.2cm、器高2.4cm、底径7.2cmである。胎土は白色砂粒を含み、黄褐色をなす。3は口径8.0cm、器高1.3cm、底径6.2cmである。白色砂粒を含み、灰褐色をなす。4は精良で、灰褐色をなし、底部際の土を丁寧に削り取っている。(内野)

(6) 第6号土塙(SK-06)と出土遺物

① 遺構 (SK-06) (Fig. 79)

調査区の中央部、方形区画溝IIの内側の北端近くのE-25グリットに検出した土塙である。大型据立柱建物SB-31のすぐ東に位置する。他の遺構との重複関係はみられない。長軸130cm、短軸97cmの不整橢円形プランをなす。深さ23～35cmである。底面は平坦で、壁の立ちあがりは下位では急傾斜で上位ではゆるやかになる。底面は長さ87cm、幅45～66cmの不整橢円形をなす。土塙内部には土師質土器の壊、皿が完形および破片で存在するが、SK-01、02などの密ではない。SB-31との関連性が考えられる。

(山崎)

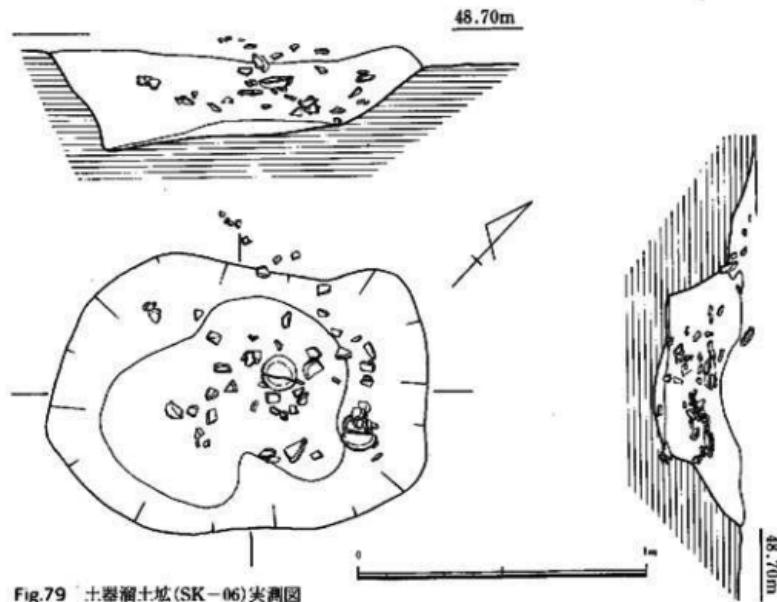


Fig.79 土器窯土塙(SK-06)実測図

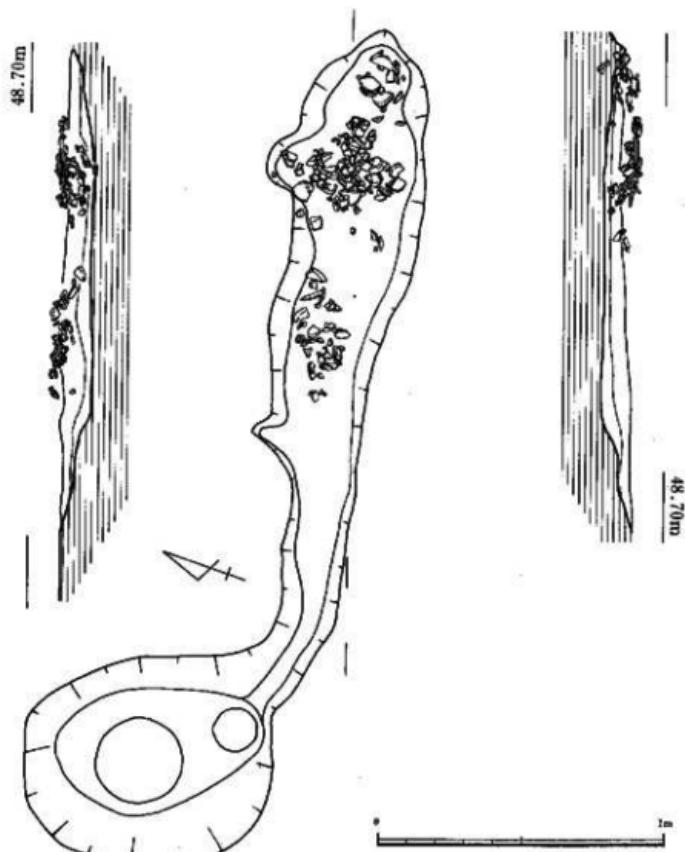


Fig. 80 土器満土塙(SK-07)実測図

② 出土遺物 (Fig. 81)

i) 土師質土器 (1~4, 12~15)

出土した皿の破片は、総数588点である。全て輪轉成形され、外底部に糸切痕を残す。また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものも多く存在する。細片が多く、8点につい

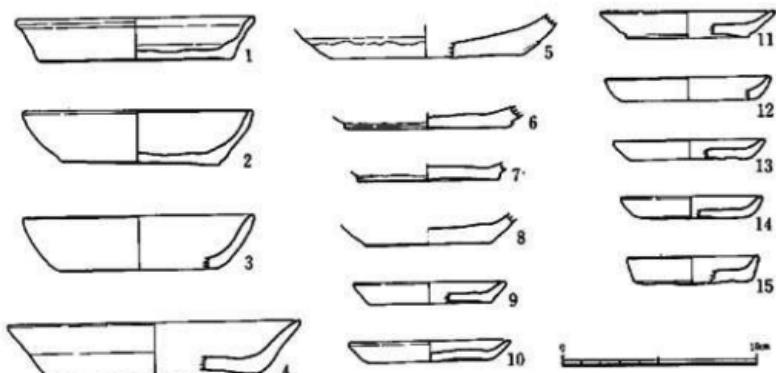


Fig. 81 SK-06, 07出土遺物実測図

てのみ図示する。

大（1～3）何れも砂粒を僅かに含み、赤褐色をなす。C類である。2はほぼ完形品で、口径11.6cm、器高2.7cm、底径8.1cmである。

小（12～15）口径6.6～8.4cm、器高1.0～1.4cm、底径5.8～6.6cmの法量分布をなす。僅かに砂粒を含み、赤褐色をなす。C類である。

特大（4）1点存在する。復元すると、口径14.8cm、器高2.8cm、底径10.4cmである。赤褐色をなし、器面は煤で黒ずんでいる。
(内野)

(7) 第7号土塗（SK-07）と出土遺物

① 遺構（SK-07）(Fig. 80)

調査区の中央部、方形区画溝IIの北端部に近いE-25, 26グリットに検出した遺構である。大型掘立柱建物SB-31の東側に位置し、SK-06はすぐ西側に位置している。他の遺構との重複関係はみられない。長軸85cm、短軸73cm、深さ30cmの横円形の土塗に長さ2.4cm幅、20～55cm、深さ5～10cmの細長い溝状の土塗が連続したものである。溝状土塗の東端部に集中して土師質土器の壺、皿が存在する。完形品ではなく、いずれも破片である。土器は底面よりやや浮いた上層部に多い。溝状土塗の方向はSD-31の北側桁行の柱すじと一致し、SK-01の北壁に平行している。SB-31との関連性が考えられる。
(山崎)

② 出土遺物 (Fig. 81)

II. 土坑と出土遺物

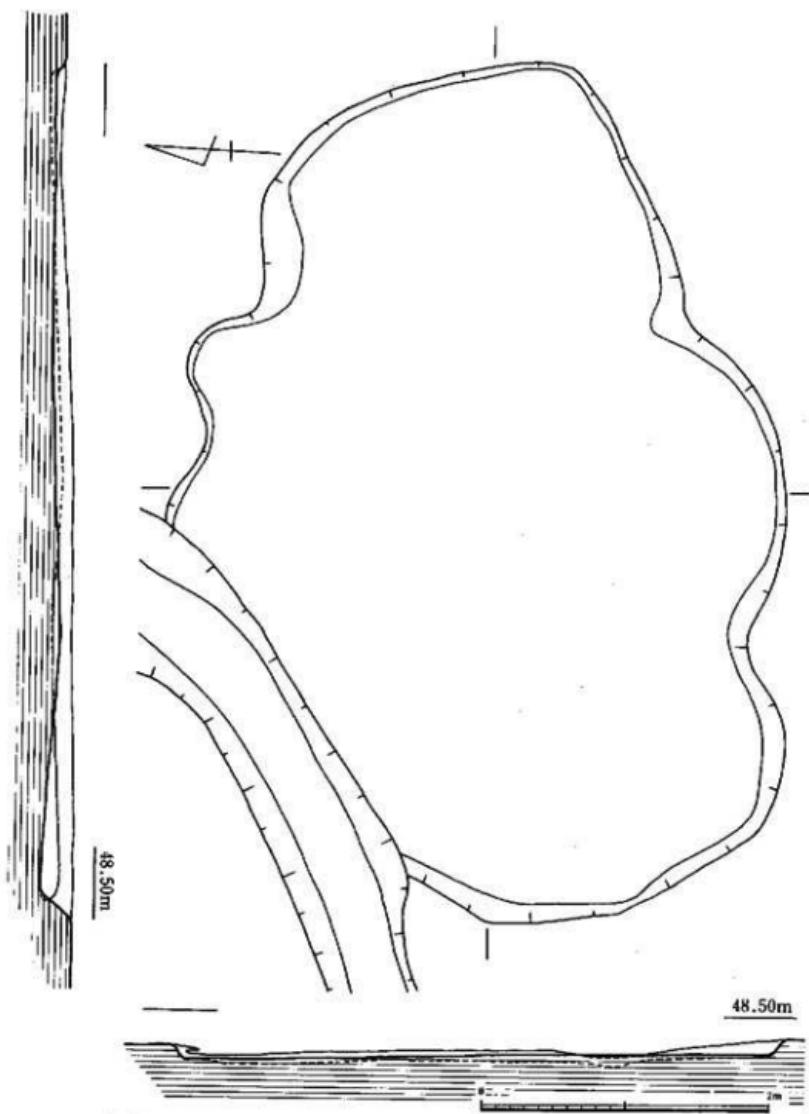


Fig.82 土坑(SK-08)実測図

i) 土師質土器 (5~11)

出土した皿の破片は総数823点である。全て輪轂成形され、外底部に糸切痕を残す。また内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものが多く存在する。細片が多く、底部片も含めた6点を図示する。

大 (6~8) 何れも底部片で、僅かに砂を含み黄褐色～赤褐色をなす。C類である。

小 (9~11) 復元すると、口径7.6~8.6cm、器高1.1~1.4cm、底径6.0~6.2cmの法量分布を示す。僅かに砂粒を含み、赤褐色をなす。C類である。 (内野)

(8) 第8号土塗 (SK-08) と出土遺物

① 遺構 (SK-08) (Fig. 82)

調査区の中央部、方形区画溝IIの中央部の北に片寄ったF-27, 28, G-27, 28グリットに検出した土塗である。SK-01の東に位置し、約5m離れている。長軸5.90m、短軸4.30mの不整橢円形の土塗で、深さは10~20cmで底面は平坦である。検出時はSK-01と同じ用途を有する土塗と考えていたが、土塗内部には土師質土器の小片がわずかに存在するのみで、みるべきものは出土しなかった。土器窯の土塗とは性格の異なるものであろう。 (山崎)

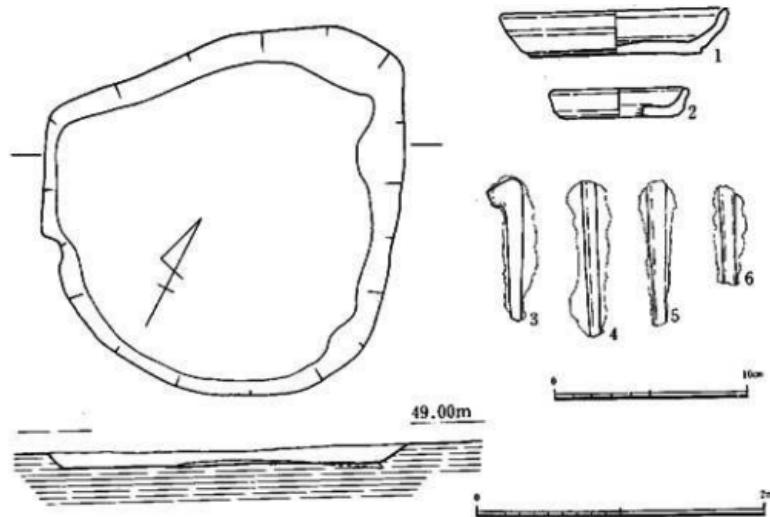


Fig.83 土塗(SK-09)・出土遺物実測図

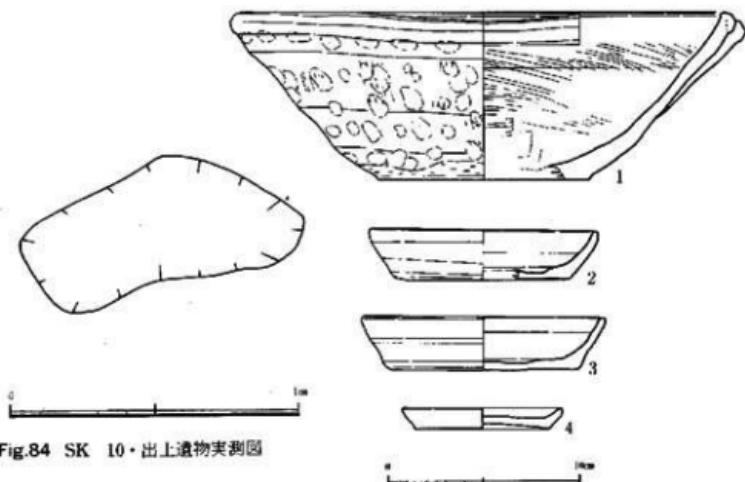


Fig. 84 SK 10・出土遺物実測図

(9) 第9号土塙 (SK-09) と出土遺物

① 遺構 (SK-09) (Fig. 83)

調査区の西半部、方形区画溝の内側の北西コーナー近くのF-18、G-18グリットに検出した土塙である。単独で存在し、他の遺構との重複関係はない。SB-27の西侧、約3mのところに位置している。長軸280cm、短軸270cmの不整規円形プランの土塙である。深さ10cm前後で浅く、底は平坦である。内から土師質土器、鉄釘等が出土しているが、用途不明である。

② 出土遺物 (Fig. 83) (山崎)

i) 土師質土器

出土した皿の破片は、総数763点である。全て輪轂成形され、外底部に糸切痕を残す。また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものが多く存在する。細片が多く、2点のみ図示する。

1は口径11.6cm、器高2.3cm、底径8.8cmである。赤褐色の胎土で、C類である。2は口径6.9cm、器高1.5cm、底径5.1cmである。赤褐色の胎土で、C類である。

ii) 鉄製品 (3~6)

角釘が4本存在する。(内野)

⑩ 第10号土塙 (SK-10) と出土遺物

① 遺構 (SK-10) (Fig. 84)

調査区西半部、方形区画溝IIの内側、北西コーナーに近いG-18, 19グリットに検出した土塙である。単独で存在し、他の遺構との重複関係はみられない。SB-27とSK-09の中間に位置する。長軸100cm、短軸40cmの長梢円形プランを有する土塙で、深さ5cm前後である。遺構としては明確さを欠くが土器が集中している。いわゆる土器窯の土塙である。土師質土器の壺、皿、陶器の擂鉢が出土している。土塙の使用目的等については不明である。 (山崎)

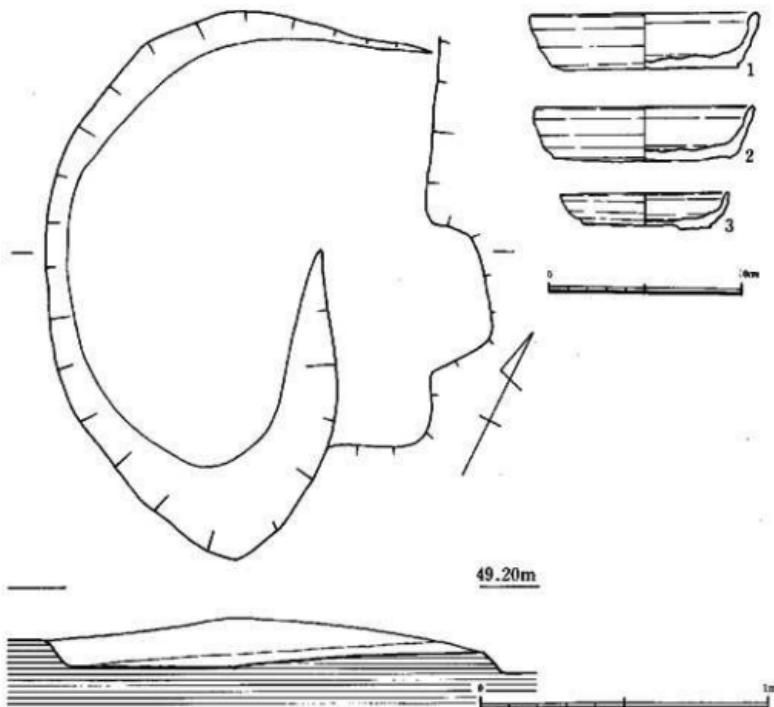


Fig.85 土塙(SK-11)・出土遺物実測図

②出土遺物 (Fig. 84)

i) 土師質土器

出土した皿の破片は、総数881点である。全て輪縁成形され、外底部に回転糸切痕を残す。また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものが多く存在する。細片が多く、3点のみ図示する。

1は口径11.7cm、器高2.6cm、底径8.1cm、2は口径12.2cm、器高2.8cm、底径9.4cmである。胎土は赤褐色をなす。C類である。3は口径8.0cm、器高1.1cm、底径6.8cmである。比較的精良な胎土で、黄褐色をなす。C類である。

ii) 陶器

擂鉢片が1点出土している。口縁部がやや歪んでいるが、およそ口径25.5cm、器8.5cm、底径10.8cmである。体部は内湾気味に広がり、口縁部を外方に折り曲げて、玉縁状にする。体部外面は凹凸が著しく、指押えによる調整が施されていると考えられる。内面は横から斜め方向の、板で施されたと考えられる擦痕が認められる。外底部は残存部に板目圧痕が認められる。底部際のはみ出した土は、回転しながら、搔き取られている。
(内野)

(II) 第11号土塗 (SK-11) と出土遺物

①遺構 (SK-11) (Fig. 85)

調査区の西半部、方形区画溝IIの内側の西端近くのJ-17グリットに検出した土塗である。掘立柱建物が最も重複するSB-35~40の北西約7mのところに位置している。単独で存在し、他の遺構との重複はみられない。長軸190cm、短軸95cm以上の不整脩円形プランをなす。東側は土層が複雑で明確にできず、壁は確認されていない。深さ5~10cmである。底は平坦で、上面と同様のプランをなす。遺物は土塗東側に存在していた。使用目的その他については明らかにできなかった。ただSK-11のすぐ東にはSK-12、SK-13が存在し、また北東側にはSE-01が存在する。掘立柱建物の重複状態からみて、最も生活と密着した場所につくられた土塗である。

②出土遺物 (Fig. 85)

(山崎)

i) 土師質土器

出土した皿の破片は、総数453点である。全て輪縁成形され、外底部に回転糸切痕を残す。また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すもの多く存在する。細片が多く、3点のみ図示する。

1は口径11.5cm、器高2.9cm、底径9.2cm、2は口径11.0cm、器高2.8cm、底径8.8cmである。胎土は僅かに砂粒を含み、黄褐色をなす。C類である。3は口径8.2cm、器高1.7cm、底径5.7cmである。器壁は薄く作られ、胎土は精良で、暗灰色をなす。典型的なA類である。
(内野)

(12) 第12号土塙 (SK-12) と出土遺物

①遺構 (SK-12) (Fig. 86)

調査区の西半部、方形区画の内側の西端部近くのJ-18グリットに検出した土塙である。SK-11のすぐ東に位置する。単独で存在し、他の遺構との重複関係はみられない。長軸1.85m、短軸1.5mの不整橢円形プランをなす。深さ5~10cmと浅く、断面形は皿状をなしている。底面は平坦で長軸1.48m、短軸1.22mの橢円形プランをなす。SK-11同様に位置する場所等から、日常生活に関連の強い土塙とみることができよう。

(山崎)

②出土遺物 (Fig. 86)

i) 土師質土器 (1, 2)

出土した皿の破片は、総数612点である。全て輪廻成形され、外底部に回転糸切痕を残す。また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものが多く存在する。細片が多く、2点のみ図示する。

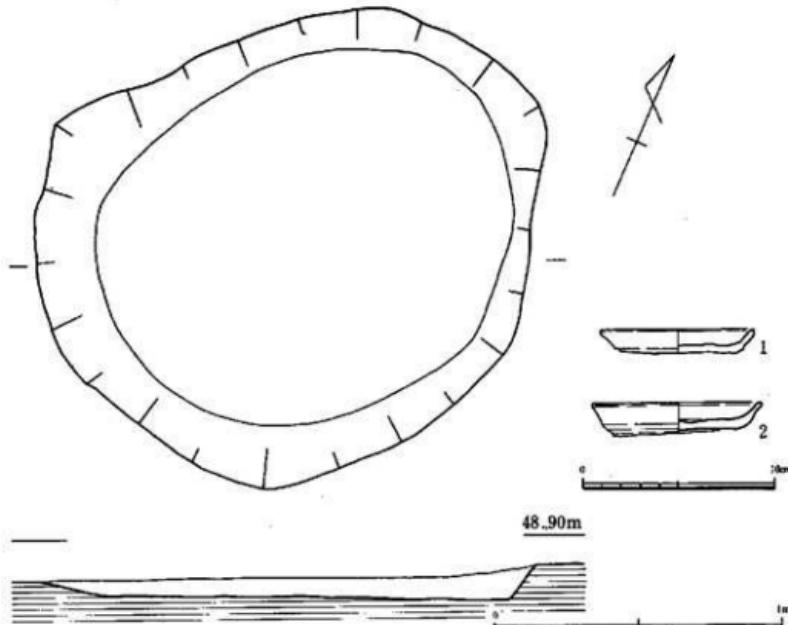


Fig.86 上塙(SK-12)・出土遺物実測図

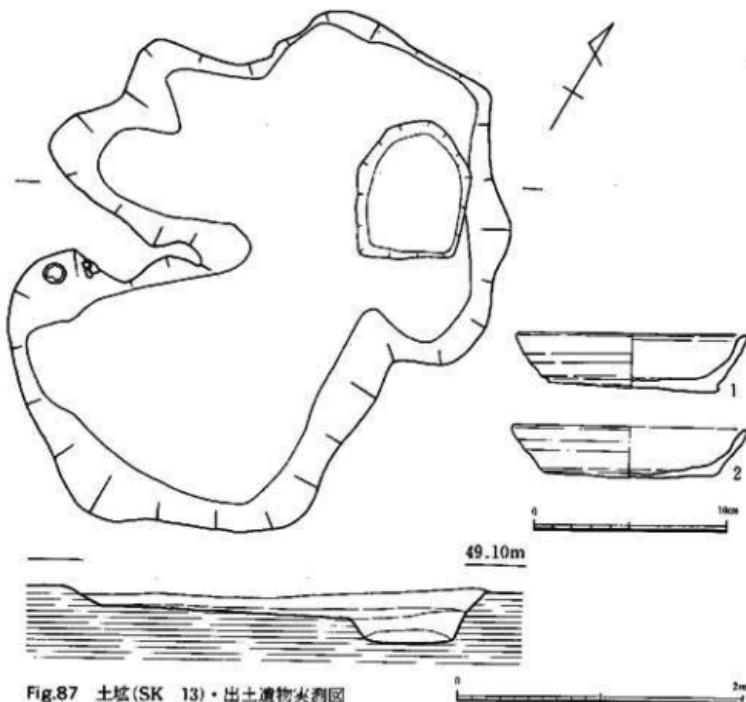


Fig.87 土塙(SK-13)・出土遺物実測図

1は口径7.8cm、器高1.2cm、底径6.0cmで、2は口径8.4cm、器高1.7cm、底径6.3cmである。
胎土は精良で、灰褐色をなす。A類である。

(内野)

(13) 第13号土塙 (SK-13) と出土遺物

①遺構 (SK-13) (Fig. 87)

調査区西半部、方形区画溝IIの内側の西端部に近いJ-18、K-17、18グリットに検出した土塙である。SK-11、12のすぐ東、重複の著しい掘立柱建物群SB-35~40、特にSB-35のすぐ北西に位置する。単独で存在し、他の遺構との重複関係はみられない。大型の土塙で長軸3.9m、短軸2.5m~3mで凹凸の著しい不整形プランをなす。深さ10~20cmと浅く、底面は

外形にそって凹凸の著しい不整形プランをなし、平坦である。東側壁にそって一段深い土塗が掘り込まれている。土塗は長軸95cm、短軸76cmの不整構円形で、深さは17cm前後で底は平坦である。本土塗もSK-11、12と同様に日常生活関連の性格を有していると考えられる。(山崎)
 ②出土遺物 (Fig. 87)

i) 土師質土器 (1, 2)

出土した皿の破片は、純数764点である。全て輥轆成形され、外底部に回転糸切痕を残す。また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものも多く存在する。細片が多く、2点のみ図示する。1は口径11.7cm、器高2.3cm、底径8.8cmで、2は口径11.9cm、器高2.6cm、底径8.8cmである。器壁は上半部がやや厚めに作られている。胎土は、僅かに砂粒を含み、黄褐色をなす。C類である。
 (内野)

(4) 第14号土塗 (SK-14) と出土遺物

①遺構 (SK-14) (Fig. 88)

調査区西半部、方形区画溝IIの内側の西端部に近いK-18グリットに検出した土塗である。SK-11~13と一連の土塗と考えられ、前記土塗のすぐ東に位置している。重複の著しい掘立

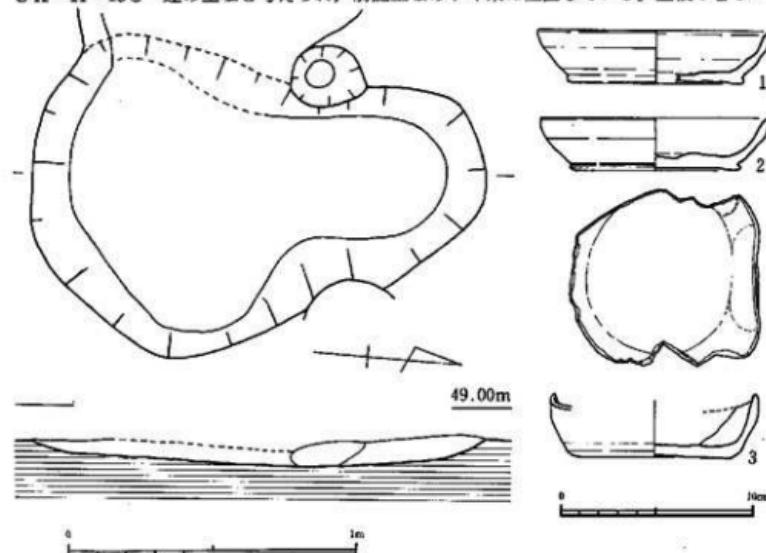


Fig.88 土塗(SK-14)・出土遺物実測図

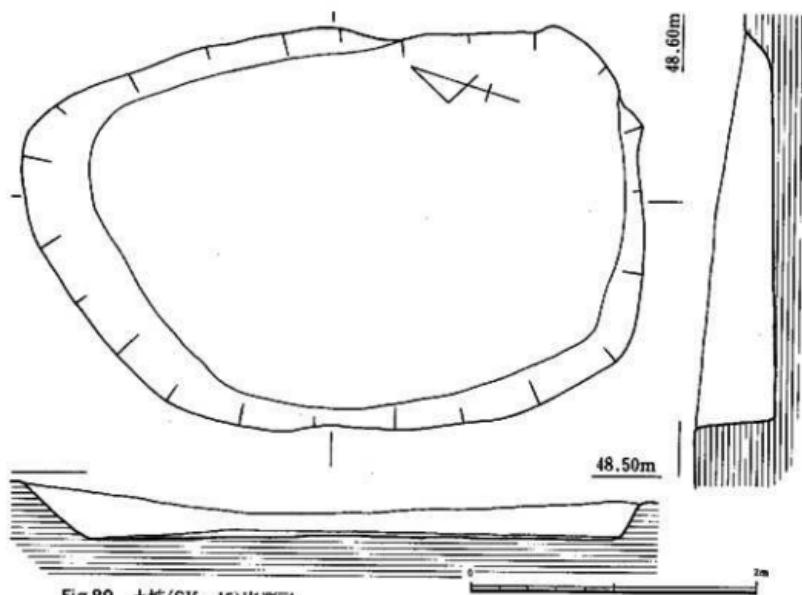


Fig.89 土塙(SK-15)実測図

柱建物群SB-35~40にさらに近くなりSB-35と重複関係にある。SB-35の柱穴掘り方を切っているのでSB-35より後出であることは明らかである。長軸115cm、短軸70~105cmの橢円形プランで、深さは5~10cmと浅く、断面形は皿状をなしている。底面は平坦で、長軸130cm、短軸42~90cmのひょうたん形のプランをなしている。SK-11~13土塙同様に日常生活に関連するものと考えられる。

(山崎)

②出土遺物 (Fig. 88)

i) 土師質土器 (1~3)

出土した皿の破片は、総数319点である。全て輪轉成形され、外底部に回転糸切痕を残す。また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものが多く存在する。細片が多く、3点のみ図示する。

1は口径11.9cm、器高2.2cm、底径9.0cm、2は口径11.6cm、器高2.8cm、底径8.7cmである。胎土は砂粒を含み、赤褐色をなす。C類である。3は体部残存率が4分の1であるが、その形状からして、耳皿になるものと考えられる。口縁部の歪められた部分の径は、復元すると10.4cmとなる。器高3.3cm、底径8.0cmである。底部際のはみ出た粘土は、回転させて丁寧に焼き取

っている。胎土は白色砂粒（1～3mm）を多く含み、焼成不良気味で黄褐色をなす。B類である。

ii) 陶器

瓦質擂鉢の体部片が1点出土している。（内野）

(5) 第15号土塙 (SK-15) と出土遺物

① 遺構 (SK-15) (Fig. 89)

調査区の西半部、方形区画溝IIの内側で、西南端に近いM-20グリットに検出した土塙である。重複の著しい掘立柱建物群SB-35～40とSB-43～46の間に位置する。単独で存在し、他の遺構との重複関係はないが、東側が水田の段落ちによって破壊されている。長軸2.12m、短軸1.4mの橢円形プランをなす。深さ15～20cmである。底面は平坦で長軸1.85m、短軸1.2mの橢円形プランである。使用目的その他については不明。
(山崎)

② 出土遺物 (Fig. 90)

i) 土師質土器

出土した皿の破片は、総数1626点である。全て輪轂成形され、外底部に回転糸切痕を残す。

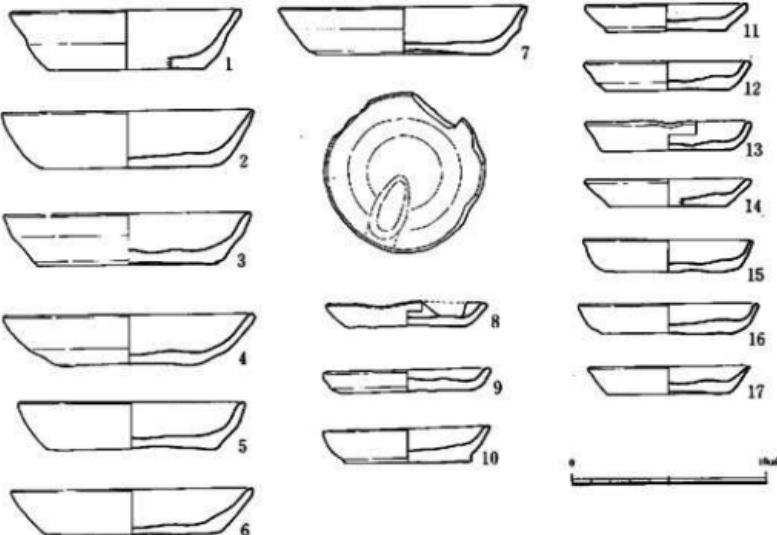


Fig.90 土塙(SK-15)出土遺物実測図

11. 土塙と出土遺物

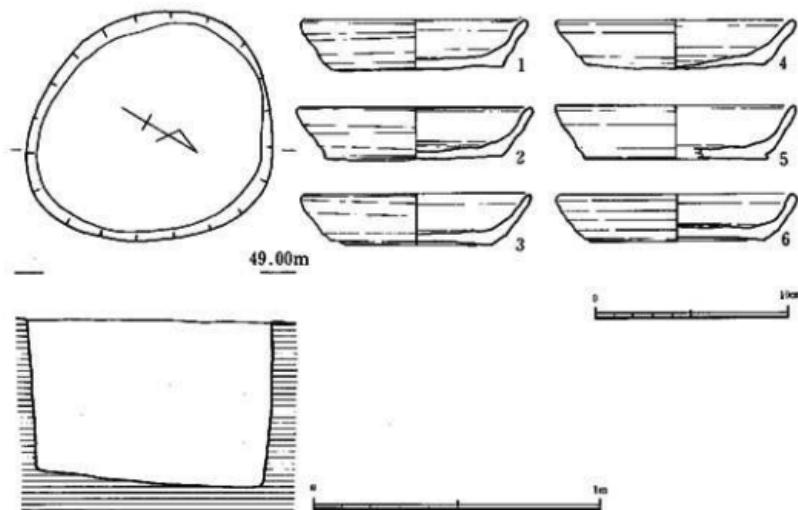


Fig.91 土塙(SK-16)・出土遺物実測図

第21表 SK-15川上師賀上器皿法量計測表

また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目压痕を残すものが多く存在する。細片が多く、17点のみ図示する。

大(1~7) 胎上の特徴から、1, 4はB類、その他はC類である。1, 4の胎土は白色砂粒を多く含み、黄褐色をなす。2~3, 5~7は、口径11.4~12.8cm、器高2.4~3.0cm、底径8.7~9.0cmの法量分布を示す。

小(8~17) 口径8.0~8.7cm、器高1.1~1.8cmの法量分布を示す。8は内底を親指でナデ調整し、さらに親指の移動した先の口縁部を押し下げて片口状にしている。同様の例が、13にも見られる。9, 10, 12~17は灰褐色の胎土で、A類である。他は全てC類である。尚、15の底部には焼成後における径5mm前後の穿孔がある。

	口 径	器 高	底 径	分 類
1	11.6	3.1	8.0	B
2	12.8	3.0	9.0	C
3	12.5	2.7	9.3	C
4	12.5	2.6	7.5	B
5	11.4	2.4	8.7	C
6	12.5	2.4	9.0	C
7	12.5	2.4	9.0	C
8	8.1	1.2	6.2	C
9	8.0	1.1	6.8	A
10	8.1	1.8	6.5	A
11	8.1	1.4	6.2	C
12	8.3	1.5	6.2	A
13	8.3	1.5	6.8	A
14	8.3	1.4	6.0	A
15	8.6	2.6	6.8	A
16	8.7	1.5	6.8	A
17	8.1	1.4	6.0	A

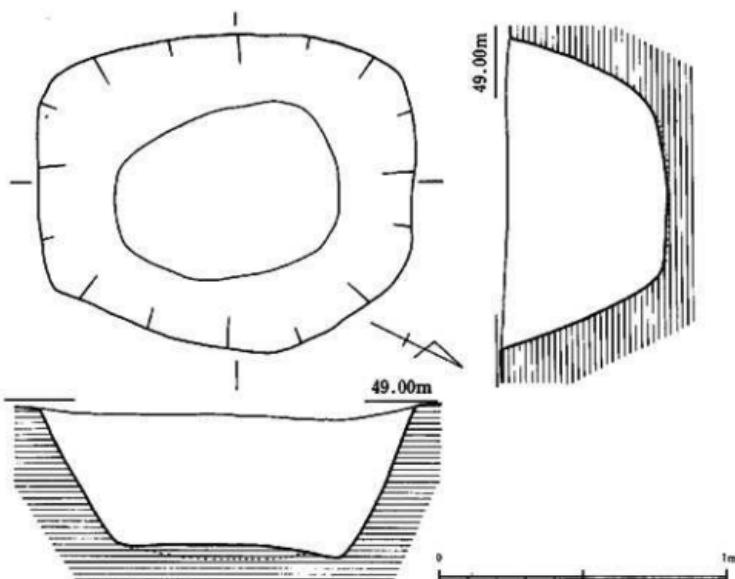


Fig.92 土塙(SK-19)実測図

S K-15からは、土師質土器として、壙の胴部片が3点出土している。

ii) 陶器、鉄製品

舶載品の褐釉陶器片が1点、鉄製品2点がある。(内野)

(16) 第16号土塙 (S K-16) と出土遺物

①遺構 (S K-16) (Fig. 91)

調査区の西半部、方形区画溝IIの内側の南西コーナー近くのV-16, 17グリットにかけて検出した土塙である。掘立柱建物S B-35の西側に位置する。単独で存在し、他の遺構との重複関係はみられない。長軸87cm、短軸77cmの円形プランをなす。深さ55cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。内部より土師質土器が多量に出ている。土塙の性格等については把握できなかった。
(山崎)

②出土遺物 (Fig. 91)

i) 土師質土器

出土した皿の破片は、総数189点である。全て焼成され、外底部に回転糸切痕を残す。ま

た、内底部にナデ調輪痕、外底部に板目压痕を残すものが多く存在する。細片が多く、6点のみ図示する。

何れも黄褐色～赤褐色の胎土をなし、C類である。口径11.5～12.2cm、器高2.4～2.8cm、底径7.7～9.4cmの法量分布を示す。
(内野)

(1) 第17号土塙 (SK-17) と出土遺物

①遺構 (SK-17)

調査区の西半部、方形区画溝IIの内側、南西コーナー付近のL-16、M-16グリットに検出した遺構である。SK-16の西側に位置する。単独で存在し、他の遺構との重複関係はみられない。幅30～70cm、長さ2.7m、深さ5～10cmの浅い溝状の土塙である。内部より土師質土器の細片が出土している。
(山崎)

②出土遺物

土師質土器の皿の破片が若干出土しているが、いずれも細片で図示できない。
(内野)

(2) 第18号土塙 (SK-18) と出土遺物

①遺構 (SK-18)

調査区の西半部、方形区画溝IIの内側、南西コーナー付近のK-16、L-16グリットに検出した遺構である。SK-16の西側に位置する。単独で存在し、他の遺構との重複関係はみられない。幅30～60cm、長さ5.5m、深さ5～10cmの浅い溝状の土塙である。内部より土師質土器が出土している。
(山崎)

②出土遺物

土師質土器の皿が若干出土しているが、いずれも細片のため図示できない。
(内野)

(3) 第19号土塙 (SK-19) と出土遺物

①遺構 (SK-19) (Fig. 92)

調査区西半部、方形区画溝IIの内側を構成するSD-04と重複する土塙で、K-15グリットに検出した。SD-04との関係は検出面では把握できず、その後断面でも検討を加えたが明確にできなかった。SK-19が先行して存在した可能性が強い。長軸153cm、短軸105cmの橢円形プランをなす。深さ45cmで横断面はU字形をなす。底面は長軸78cm、短軸58cmの橢円形プランをなす。形状等は上塙墓に近いが、位置関係等からすれば、SK-11～14に近く、これらの土

塙と同様に日常生活に強く関わった土塙とみることができよう。(山崎)

②出土遺物

出土遺物は少く、特に図示するものはない。(内野)

(2) 第20号土塙 (SK-20) と出土遺物

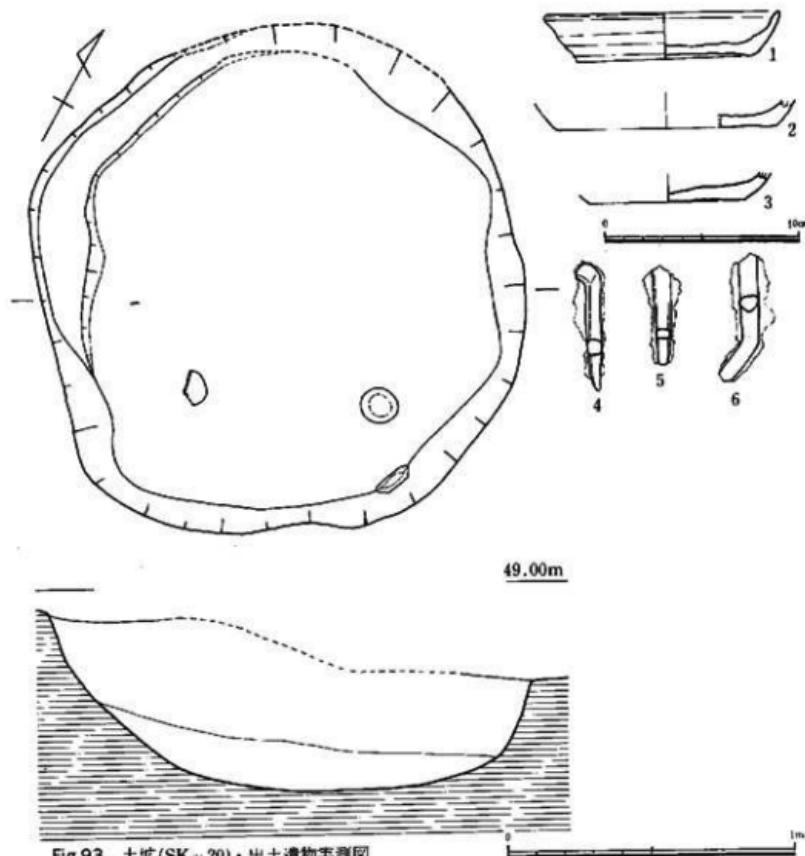


Fig.93 土塙(SK-20)・出土遺物実測図

①遺構 (SK-20) (Fig. 93)

調査区西半部、方形区画溝IIの内側を構成するSD-04と重複する。K-15グリットに検出した土塗である。SD-04との関係はSK-19と同様に検討を加えたが把握することはできなかつた。状況からみて、SK-20がSD-04に先行するものであろう。土塗は長軸172cm、短軸164cmの不整円形プランをなす。深さ35~55cmである。底面は平坦でなく中心部に向って傾斜している。底面は長軸155cm、短軸140cmの不整橿円形をなす。土塗の性格についてはSK-19同様に日常生活に関連した性格が考えられる。内部より土師質土器、鉄釘等が出土している。

②出土遺物 (Fig. 93)

(山崎)

i) 土師質土器

出土した皿の破片は、総数120点である。全て輪轉成形され、外底部に回転糸切痕を残す。また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものも多く存在する。細片が多く、3点の

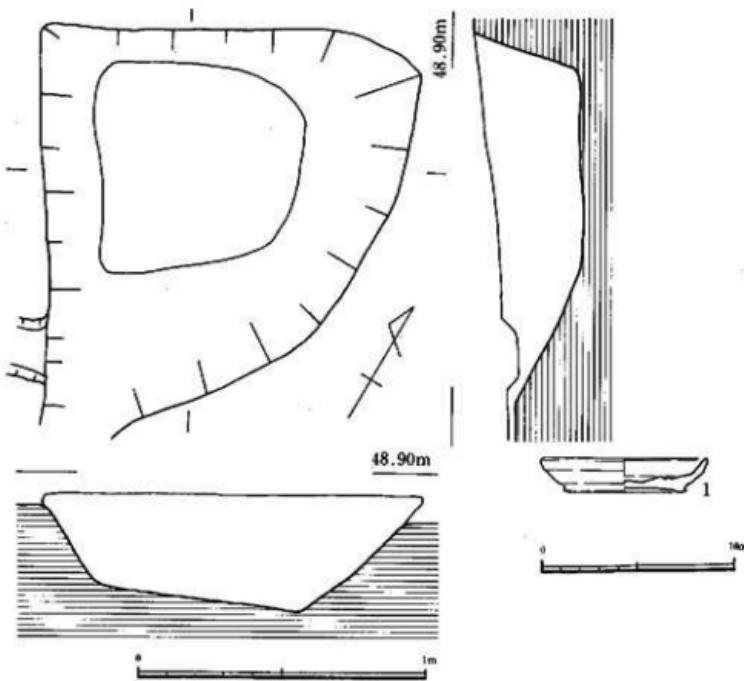


Fig.94 土塗(SK-21)・出土遺物実測図

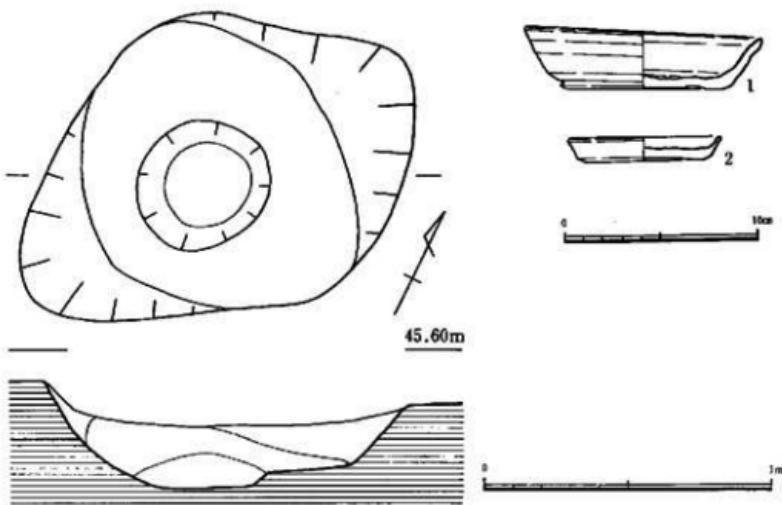


Fig.95 土塙(SK-22)・出土遺物実測図

み図示する。

1は完形品で、口径12.0cm、器高2.4cm、底径9.1cmである。胎土は比較的精良で、黄褐色をなす。C類である。3は底部片であるが、精良な灰褐色の胎土でA類である。2は特大皿の底部片で、胎土は砂粒を僅かに含み、赤褐色をなす。

ii) 鉄製品

角釘が3本ある。

(内野)

(2) 第21号土塙 (SK-21) と出土遺物

①遺構 (SK-21) (Fig. 94)

調査区西半部、方形区画溝IIの内側の南西コーナーに近い、M-17グリットに検出した土塙である。南西出入口のすぐ南側に位置している。単独で存在し、他の遺構との重複関係はみられない。土塙は検出面で長軸140cm、短軸130cmの隅丸の三角形状プランをした土塙である。底面は平坦で長さ70cm、幅70cmの隅丸方形プランをなしている。深さは30~40cmで壁のたちあがりは急傾斜である。土塙の性格については把握できない。内部より土師質土器少量が出土している。

(山崎)

②出土遺物 (Fig. 94)

i) 土師質土器

出土した皿の破片は、総数43点である。全て輪轂成形され、外底部に回転糸切痕を残す。また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものも存在する。細片が多く、1点のみ図示する。

1は復元して、口径8.4cm、器高1.8cm、底径6.2cmである。内底をナデ調整し、外底には回転
(内野)

(2) 第22号土塗 (SK-22) と出土遺物

①遺構 (SK-22) (Fig. 95)

調査区の西半部、方形区画溝IIのSD-04とSD-07にはさまれたN-14、15グリットに検出した土塗である。単独で存在し、他の遺構との重複関係はみられない。長軸150cm、短軸110cmの橢円形プランをなす。深さ30cmで内底部に径48cmの円形のピットが掘り込まれている。内部より土師質土器が出土している。土塗の性格については把握できなかった。(山崎)

②出土遺物 (Fig. 95)

i) 土師質土器

出土した皿の破片は、総数112点である。全て輪轂成形され、外底部に回転糸切痕を残す。また、内底部にナデ調整痕、外底部に板目圧痕を残すものも存在する。細片が多く、2点のみ図示する。

1、2ともほぼ完形品である。1は口径11.9cm、器高3.0cm、底径8.0cmである。胎土は僅かに砂粒を含み、赤褐色をなす。C類である。2は口径7.7cm、器高1.3cm、底径6.0cmである。胎土は僅かに砂粒を含み、赤褐色をなす。C類である。(内野)

(3) 第23号土塗 (SK-23) と出土遺物

①遺構 (SK-23) (Fig. 96)

調査区の西半部、方形区画溝Iの内側の東端中央部のM-13グリットに検出した土塗である。SB-21、SD-03と重複関係にある。SK-23はSD-03を切り、SB-21の柱穴に切られている。すなわちSK-23はSD-03より後出で、SB-21より先行する。長軸161cm、短軸48~63cmの南側がやや幅広い長楕円形プランをなす。深さ24~36cmで南側が一段深くなる。横断面形はU字形をなす。内底部は北側が71cm×36cmの楕円形で北側が一段深くなり63cm×42cmの橢円形をなすが南からゆるやかに傾斜している。土塗には北端に土師質土器の皿が完形で2

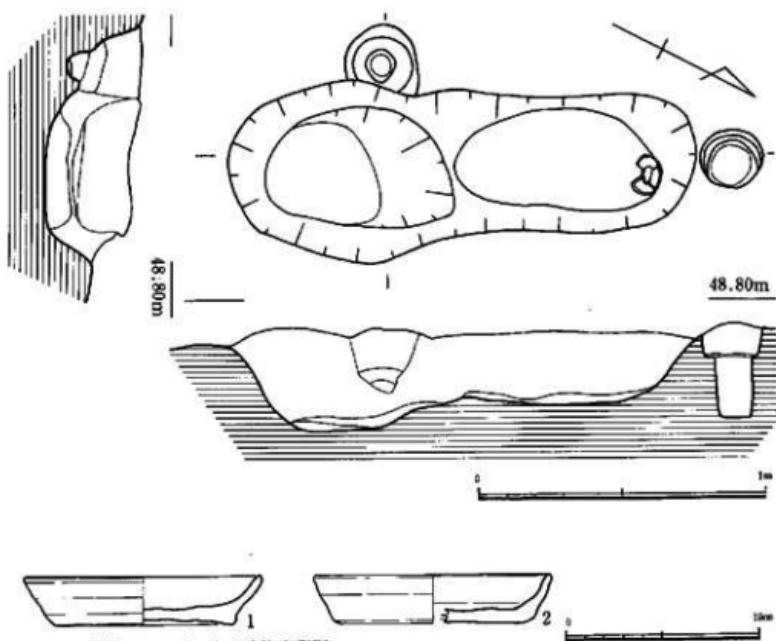


Fig.96 土塙(SK-23)・出土遺物実測図

個重ねられて置かれていた。土塙の形状や副葬品と考えられる土師質土器の皿から、本土塙は
土塙墓と考えることができる。
(山崎)

②出土遺物 (Fig. 96)

i) 土師質土器

出土した皿の破片は、総数23点である。細片が多く、2点のみ図示する。

1は口径12.1cm、器高2.6cm、底径9.0cm、2は口径12.0cm、器高2.5cm、底径9.2cmである。
何れの胎土も僅かに砂粒を含み、赤褐色をなす。2は内外の器表面が一部黒ずんでいる。C類
である。
(内野)

(2) 第24号土塙 (SK-24) と出土遺物

①遺構 (SK-24) (Fig. 97)

調査区の西半部、方形区画溝Iの外側の南にあたるP-11、12グリットに検出した土塙であ

11. 土塙と出土遺物

る。SB-18と重複関係にあり、SB-18の柱穴がSK-24の埋土に掘り込まれており、SK-24が先行してつくられたことは明瞭である。SK-25, 26はすぐ東と南に位置している。長軸3.05m、短軸2.9mの不整方形プランの土塙に幅0.4m前後、長さ14.5mの細長い溝状の土塙が接続したものである。深さ20cm前後で底は平坦である。埋土の状態は、第1層、茶褐色土層、第2層、黄色土を混入した暗茶褐色土層、第3層、黒色土混入の暗茶褐色土層、第4層、黒色

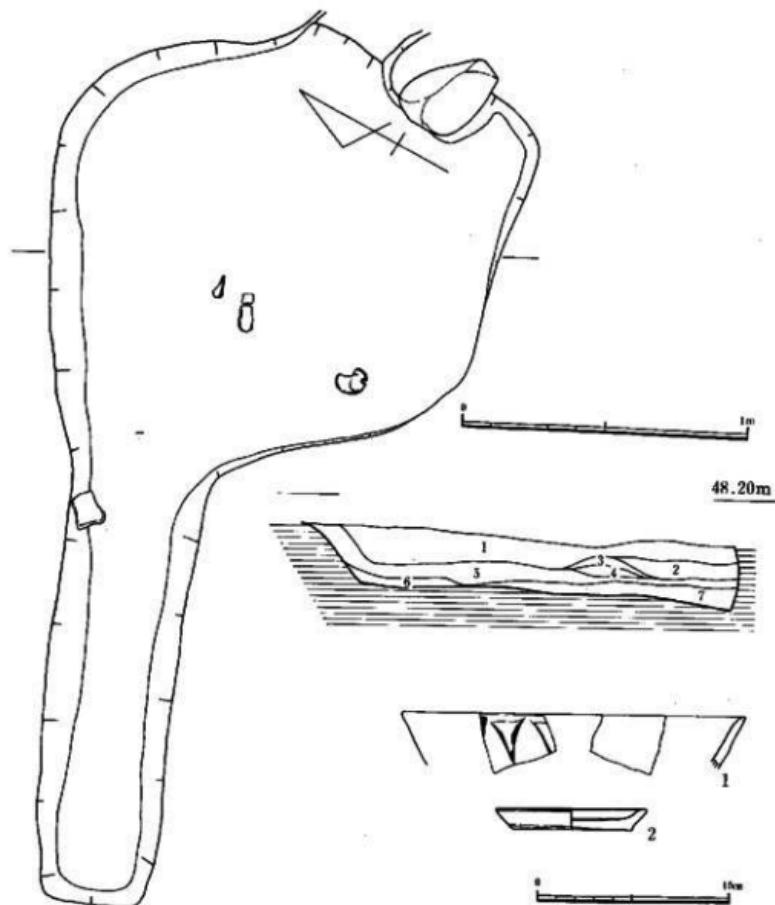


Fig.97 土塙(SK-24)・出土遺物実測図

土混入の黄色土層、第5層、黒色土層、第6層、黒色土混入の茶褐色土層、第7層、暗茶褐色土層となっている。土塗内より青磁器、土師質土器、鉄製品が出土している。
(山崎)

②出土遺物 (Fig. 97)

i) 土師質土器

皿片は4点出土している。復元可能な1点のみ図示する。2は口径7.6cm、器高1.2cm、底径6.0cmで、胎土は砂粒を僅かに含み、赤褐色をなす。

ii) 磁器(1)

龍泉窯系鍋蓋弁文碗片が1点ある。胎土は白灰色精良で、暗黄緑色をなす。

iii) 鉄製品

鉄斧が1点ある。

(内野)

(25) 第25号土塗 (SK-25) と出土遺物

①遺構 (SK-25) (Fig. 98)

調査区西半部、方形区画溝Iの外側の南のR-12グリットに検出した土塗である。SB-18、SK-24、26のすぐ東に位置する。単独で存在し、他の遺構との重複関係はみられない。長軸182cm、短軸116cmの不整円形プランをなす土塗で、深さ約20cm、底は長軸130cm、短軸93cmの不整橢円形である。土塗内にはさらに南西壁に片寄って土塗が掘り込まれている。長軸106cm、短軸68cmの橢円形で深さ25~30cmで断面形は箱形をしている。埋土の状態は第1層、茶褐色土層、第2層、淡茶褐色土層、第3層、淡茶褐色土混入の黄茶色土層、第4層、暗茶褐色土層、第5層、明黄褐色土層、第6層、黄色土層、第7層、黒色土層、第8層、暗茶褐色土層となり、ほぼ水平層をとっている。自然の堆積状況ではない。また、土塗内には径20cm大の石と土師質土器が落ち込んだ状態で出土している。土塗の性格としては土塗墓の可能性が強い。
(山崎)

②出土遺物 (Fig. 98)

i) 土師質土器

皿片は24点出土している。遺構に伴う4点について図示する。何れも底部に回転糸切痕を残す。1は口径11.4cm、器高2.6cm、底径9.0cm、2は底径9.0cm、3は口径12.8cm、器高2.5cm、底径9.4cm、4は底径7.6cmである。何れも赤褐色の胎土で、C類である。
(内野)

(26) 第26号土塗 (SK-26) と出土遺物

①遺構 (SK-26) (Fig. 99)

調査区の西半部、方形区画溝Iの外側の南に位置する。P-11、12、Q-13グリットに検出

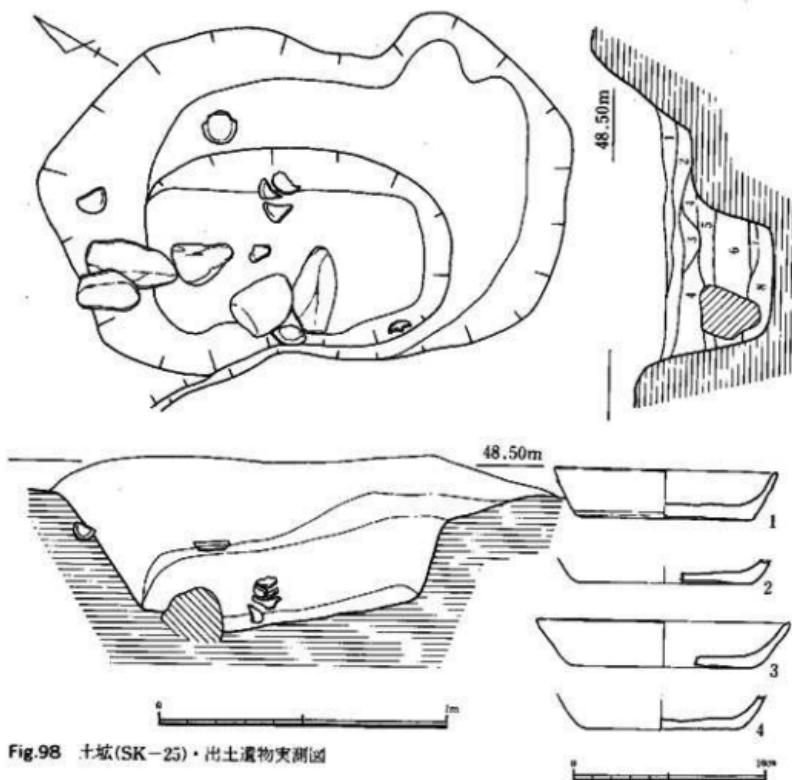


Fig.98 土塙(SK-25)・出土遺物実測図

した土塙である。SB-18と重複関係にあり、SK-24, 25と接している。SB-18との前後関係は、SB-18の柱穴がSK-26の埋土を掘り込んでいるところから、SK-26が先行して作られたことがわかる。SK-24, 25との前後関係は不明であるが、同時期になる可能性もある。土塙は長軸140cm、短軸130cmの不整円形プランをなす。深さ20cmである。底面は平坦で、プランは上面のプランと相似している。底面には東側と南側に片寄って土師質土器がみられる。完形品と一部破片である。土塙内の埋土は、a層が黄褐色土層、b層が灰黄茶色土層、c層が茶褐色土層混入の黄褐色土層、d層が淡黄茶色土層、e層が黒色土層、f層が明黄茶色土層、g層が灰黄茶色土層混入の黒色土層、h層は淡黄茶色土層混入の茶褐色土層、i層は黄褐色土

層混入の黒色土層、j層は淡黄茶色土層混入の黒色土層、k層は黄色土層混入の茶褐色土層となっている。整層に近いが部分的に不自然であり、人為的な埋土と考えられる。土塗の形状、副葬品らしい土器、埋土の状況から土塗墓である可能性が強い。

(山崎)

②出土遺物 (Fig. 99)

i) 土師質土器

皿が3個体分出土している。1は口径12.3cm、器高2.5cm、底径7.6cm、2は口径12.6cm、器高2.7cm、底径2cm、3は口径12.0cm、器高2.7cm、底径8.2cmである。1～3はほぼ同じ形態である。何れも白色砂粒を含み、1は黄褐色、2、3は赤褐色をなす。判断に迷うがB類としておく。1は内外底部、および口縁の一部に、2は口縁の一部に煤が付着し、黒ずんでいる。

(内野)

(2) 第27号土塗 (SK-27) と出土遺物

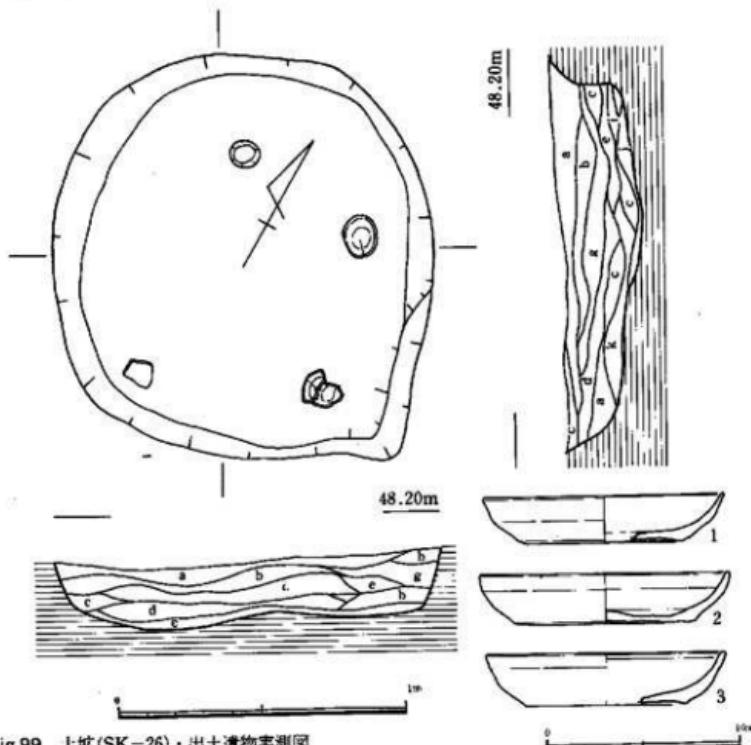


Fig.99 上塗(SK-27)・出土遺物実測図

①遺構 (SK-27) (Fig. 100)

調査区西半部、方形区画溝Iの外側の南に位置するQ-11に検出した土塗である。単独で存在するが、他の遺構との重複関係はみられない。SB-18のすぐ南に位置している。長さ152cm、西端部幅134cm、東端部幅110cmの台形状ぎみの長方形プランをなす。深さ20cmで、底面は平坦である。内底部は長軸127cm、短軸110cmの長方形プランをなす。土塗の中央部の北側に片寄って土師質土器皿1点が完形品で置かれている。埋土はa層が黒色土混入の茶褐色土層、b層が黒色土層である。土層の堆積状態は不自然で人工的に埋められたことを示している。副葬品と考えられる土器、土塗の形状、土層からみて土塗墓と考えてよいものと思う。(山崎)

②出土遺物 (Fig. 100)

i) 土師質土器

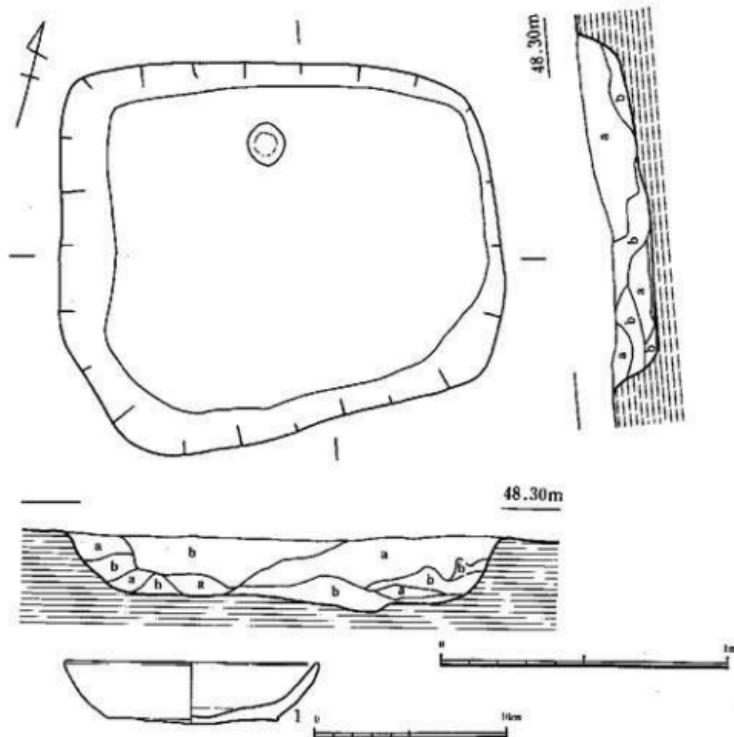


Fig. 100 土塗(SK-27)・出土遺物実測図

皿片は75点出土し、遺構床面に密着して完形の皿が1点ある。完形品のみ図示する。

1は口径13.0cm、器高3.2cm、底径8.9cmである。体部は内湾気味に立ち上がる。内底をナデ調整し、外底には回転糸切痕と板目圧痕が認められる。胎土は白色砂粒を多く含み、褐色をなす。典型的なB類である。
(内野)

(2) 第28号土塙 (SK-28) と出土遺物

①遺構 (SK-28) (Fig. 101)

調査区の西端部、L-2、M-2グリットに検出した土塙である。単独で存在し、他の遺構との重複関係はみられない。土塙は長軸135cm、短軸45~70cmの不整橢円形プランをなす。上面ではゆるやかに掘り込み、深さ20cm前後のところで面を整え、この面からさらに土塙が掘り込まれる。この土塙は長軸100cm、短軸50cmの橢円形プランをなす。底面は平坦で長軸75cm、短軸28cmの橢円形プランをなす。深さ20cmで、全体の深さは30~38cmである。土塙南端部に土師質土器2個と鉄釘1個が存在し、あり方からみて副葬された遺物とみることができる。以上より、本土塙はやや形がいびつであるが、土塙墓としての可能性が強い。
(山崎)

②出土遺物

皿2点がある。1は口径7.8cm、器高1.2cm、底径5.6cm、2は口径8.1cm、器高1.3cm、底径6.4cm、胎土は砂粒を含み黄褐色をなす。C類である。鉄製品には角釘1点がある。
(内野)

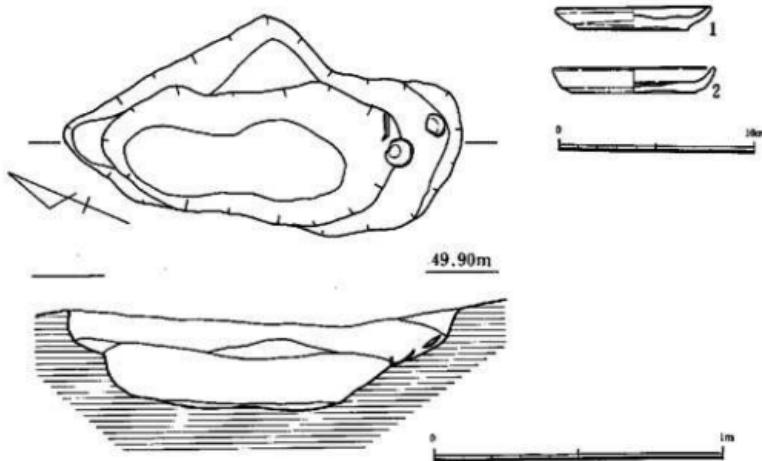


Fig.101 土塙(SK-28)・出土遺物実測図

11. 土器と出土遺物

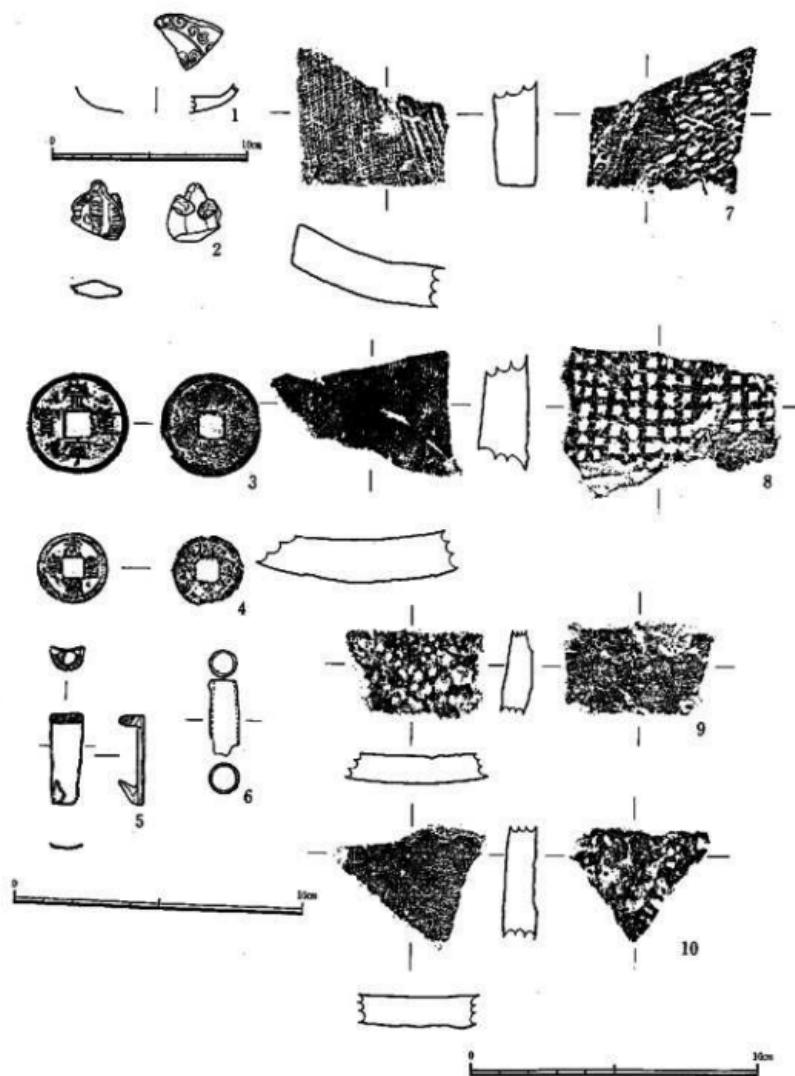


Fig.102 その他の遺物実測図 I

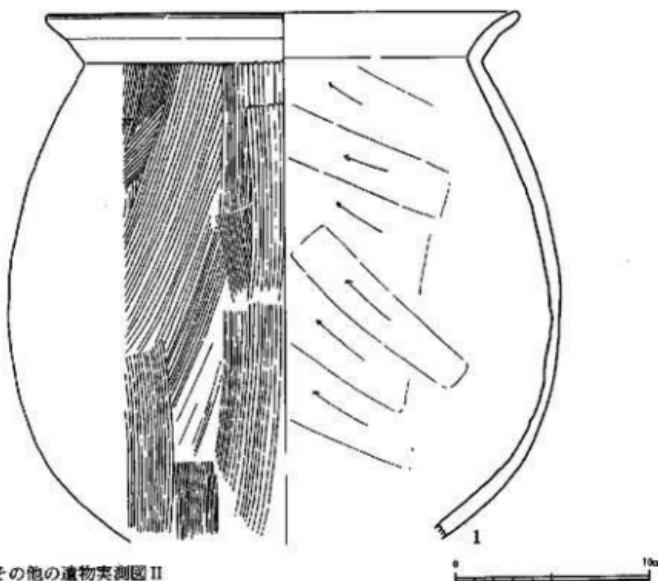


Fig. 103 その他の遺物実測図 II

12. その他の遺物 (Fig. 102, 103)

包含層出土遺物のうち、先に掲載もろのあったものを図示する。Fig. 102, 1は高麗青磁で細片のため全体の形状は明らかではないが、図の様にしておく。内面に象嵌文様が施されている。胎土は暗赤褐色で、暗茶褐色の釉が内外面に掛かる。3は陶製の龜であるが下半部が欠けている。甲羅は沈線によって表現されている。胎土は精良で灰色をなし、全体に茶褐色、暗緑色の釉が施されている。3, 4は銅鏡である。3は「崇寧通寶」で、4は3枚重なって出土しており、1番上は「元豐通寶」(初鑄年次1078年)である。5, 6は銅製品であるが用途不明である。7~10は瓦片である。7は凹面に布目が、凸面に繩目叩きが認められ、8は凹面に布目が、凸面に格子目叩きが認められる。9, 10は剥離が著しく、10の凹面に布目が認められるのみである。

Fig. 103 の 1 は土師器壺である。胴部が膨らみ、口類は外折する。外面上半はハケ目調整が施される。内面は下から上へ斜め方向の搔き上げが行われ、下半は指押えをしたと考えられる凹凸が認められる。砂粒を多く含む、黄褐色の胎土である。復元口径24.0cm、胴部最大径28.5cmである。

(内野)

第5章 L遺跡の記録

1. 調査区の設定

L調査区は試掘調査の結果、水田址が樋井川流域に拡大していることが明らかになった。しかし水田には部分的には水害による粗砂層をはさんで、良好に残存しているところもあるが、大部分は粗砂層が介在していないくて、耕作土のみが識別できる程度であった。そこで、調査区は水田遺構が最も良好に残存していると考えられたトレンチを中心として設定した。調査区は最上流域の水田地域にあたる。調査区の両側には現水田下に埋没していた低段丘面（山麓部からのびている）が存在し、この段丘面には縄文時代前期・轟B式上器の包含層が形成されている。北側も同様に山麓部に形成された平坦面があり、(M区)、縄文時代早期、古代遺跡のがっている。よって中世になんでも水田は開かれていません。水田はこの段丘面より下位の樋井川沖積地に存在する。

水田遺跡の調査区は丘陵の段落ち部分から樋井川の現流路までの南北幅約80m、東西幅60mに設定したが、地形に大きく左右された調査区になっている。また、調査の進展によって水路の延長部分を東西に80m、南北に20m拡大した。よって水田遺構に関する調査面積は約6400m²である。

なお、試掘調査および現在の地形から水田区域に想定される部分は Fig. 104 に示した。水田地域は現在の地形からみても一段低位になっており、明らかに樋井川によって形成された沖積地に限られており、山麓部へ水田が拡大するのは近世以降のことと考えられる。また、造成地内の樋井川の各支流によって形成された小規模な沖積地も、試掘調査の結果現在の水田以外は確認されず、この地域も近世以降の開田によると考えられる。
(山崎)

2. 調査区の層序 (Fig. 105)

遺跡の層序は場所によって若干の変化があり、一定していない。調査区の東端部の断面実測図を Fig. 105 に示した。

第1層は表土（現・水田耕作土）、第2層、鉄分、マンガンが沈着した水田底土、第3層、灰色混砂土層、第4層、黄褐色混砂土層、第5層、淡褐色土層、第6層、暗褐色粘質土層、第5層、第6層が水田耕作土で、各層の下位に鉄分の沈着がみられる。第7層、粗砂層、第8層、細砂層（若干土を混じえる）、第9層、細砂層、第10層、淡褐色砂質粘土層、第11層、暗褐色砂質粘土層、第12層、淡褐色粗砂層、第13層、茶褐色細砂層、第14層、暗褐色細砂層、第15層、



Fig.104 L遺跡調査区と水田範囲想定図 (8,000分の1)

2. 発掘区の層序

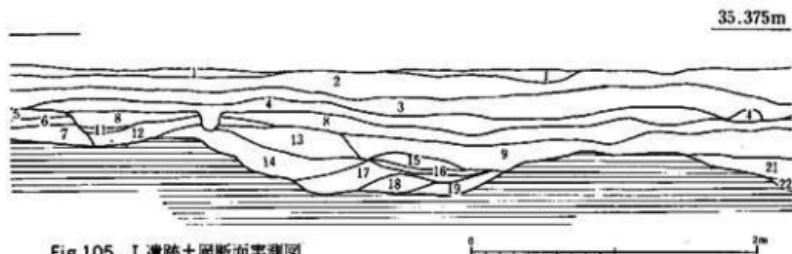


Fig. 105 L遺跡土層断面実測図

粗砂層、第16層、暗褐色砂層、第17層、黒灰色粘質砂層、第18層、黒灰色粘質砂層（上層より明るく、砂の粒が荒い）、第19層、黒灰色粘質砂層、第20層、粗砂層、第21層、灰色砂層、第22層、暗褐色砂質粘土層、第23層、粗砂層となっている。第5、6層が中世水田で、それより下は古代の水路となっている。出土遺物は下層に多いが、いずれもM遺跡からの流れ込みであるため、次報告において述べる。中世水田から少量の土師質土器が出土している。（山崎）

3. 水田遺構

(1) 水路 (Fig. 106)

①自然流路 (Fig. 106)

調査区の南東隅に検出した流路である。一部分を検出したのみでその全体については知ることはできない。水路肩部で水田面との段差は1m以上あり、さらに調査区外に向って深くなりつつある。床面は大きな円礫が多く、現在の谷川の底と同じ状態を呈している。規模や位置からいって樋井川本流の流路とみることができる。現在の樋井川より蛇行が著しいことがわかる。この樋井川の旧流路が中世水田の水源となったことは疑いなく、この自然流路から水を引く井堰は地形等から考えて、発掘区の上流部、K遺跡の近くに設置されていたことが想定できる。

②水路1 (Fig. 106)

発掘区内における水田の幹線水路と考えられる水路である。丘陵の落ち際に掘削されている。水路幅3m、深さ50cmで断面U字形をなす。発掘区西側から南東に向って流れる。発掘区西側壁から約31mのところで流路が二つに分かれ、水田1、2を囲むかたちで約37m流れて合流する。この間の水路幅は約1mで深さ50cm前後である。合流点からは流れを南東方向に変え、約12mのところで南に分岐する水路が付設される。この間の水路幅は約2mである。この分岐点から約8m流れ、水路はここでまた2本に分岐し、水田を囲む形で平行して東に流れている。

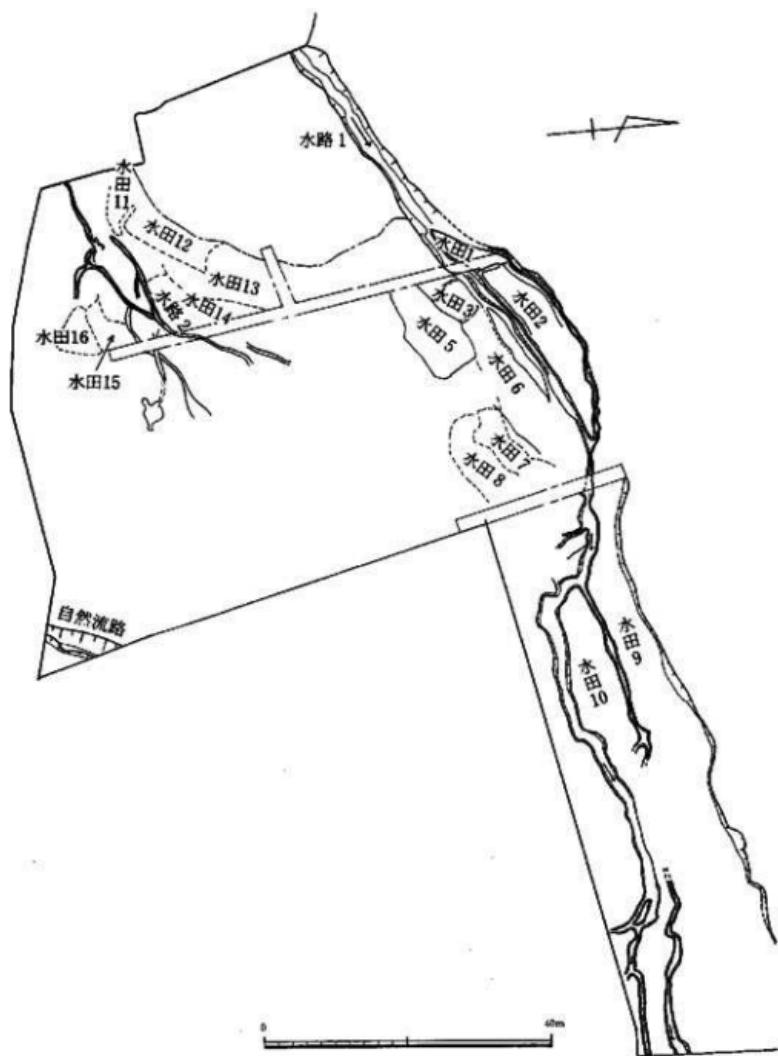


Fig.106 L遺跡水田遺構実測図

北側の水路は幅0.7~1mで、深さ20cm、途中が一部不明瞭になるが約65mを確認した。南側の水路は幅1.5~2mで、深さ50cm前後である。北側の水路とほぼ平行して流れ、約65mを確認した。この水路は東側でさらに分岐する水路が2本認められる。丘陵落ち際の水路としては最も高い部分に存在し、桶井川左岸の水田の幹線水路としての機能をそなえている。

③水路 3

発掘区の南半部に検出した水路群であるが、少くとも4~5条の水路が重なりあっている。水路3として一括して説明する。いずれも水田へ配水するための支線水路である。幅0.8~1mで深さ10~20cmの小規模な水路である。西から東へ向って流れる。数時期の水路が重なりあっていて、かつ部分的に不明瞭な部分があり、連続して検出していないので分析は困難である。幹線水路から約70m南に位置していることからみて、幹線水路と自然流路の間に設置された水まわりを良くするための、補助的な水路と思われる。

(山崎)

(2) 水田 (Fig. 106)

水田区画が畦畔を伴って明瞭に検出できたのは水田1~4で、他は溝による想定および土層変化、段差において水田区画が判明するものである。水田耕作土の表面には人の足跡、牛と考えられる足跡が無数に残っていた。以下、各水田について述べる。

①水田 1

水路1が最初に分岐し、それに囲まれた部分の西側に存在する水田である。三角形を呈し、部分的に畦畔が認められる。畦畔は幅40cm、高さ20cm程度である。東側に水田2への水戻が備えられている。水田面積は小さく、12m²程度である。

②水田 2

水田1の東に位置する水田である。水路に沿った所に部分的に畦畔が認められる。細長い水田区画である。東西長25m、南北長5mで水田面積は120m²程度である。

③水田 3

水田2の南側、水路を介して存在する水田である。畦畔は他の水田と同様である。東西長6m、南北長4mの小区画水田である。水田面積は24m²程度である。

④水田 4

水田2の南側、水路を介して細長い不整形区画を有する水田である。畦畔は他の水田と同様である。東西長15m、南北の最大長2mの小区画水田である。水田面積は25m²程度である。

⑤水田 5

水田3の南側に位置する水田である。区画は段差において明瞭に把握できる。東西長15m前後、南北長4~7mの不整長方形をなしている。水田面積は170m²程度である。

⑥水田 6

水田 4 の南側に存在する。水田 4 に平行する長方形の区画をなすと考えられるが、東側が明確でない。東西長15m以上、南北長約4mで、水田面積は60m²程度が考えられる。

⑦水田 7

水田 6 の南側に存在する水田で段差によって水田区画が想定できる。東側の区画が明瞭でないが、東西長10m以上、南北長3mで、水田面積は30m²以上が考えられる。

⑧水田 8

水田 7 の南側に存在する水田で、段差によって水田区画が想定できる。東側の区画が明瞭でないが、東西長11m以上、南北長5mで、水田面積は50m²以上が考えられる。

⑨水田 9

丘陵の段落ち部分と水路 1（北側水路）にはさまれた水田である。南北長5m前後である。東西長はいくつかに分断されていると考えられるが明瞭にしがたい。

⑩水田 10

水路 1 の北側水路と南側水路に囲まれた水田である。南北長5～7m、東西はさらに区画されたと考えられるが明確にしがたい。

⑪水田 11

発掘区西半部に存在する水田で段差によって区画が想定できる。南北長3m以上、東西長4m以上の三角形をなす区画である。水田面積は12m²以上が考えられる。

⑫水田 12

水田11の東側に存在する水田である。南北長約12m、東西長4mの長方形区画を有する。水田面積は48m²前後が考えられる。

⑬水田 13

水田12の東に存在する。段差によって区画が想定できるが、東南側は不明瞭である。南北長12m以上、東西幅2～7mで水田面積は60m²以上が考えられる。

⑭水田 14

水田13の東に存在する水田で、水田13と水路によってはさまれている。東西長17m以上、南北長5～6mで、水田面積は80m²以上が考えられる。

⑮水田 15

水路 2 の南側に存在する水田で、東西長7m以上、南北長2～5mで水田面積は30m²以上が考えられる。

⑯水田 16

水田15の南に存在する水田区画である。東西長7m、南北長5mの三角形を呈する水田区画である。水田面積15m²前後が考えられる。

第6章 総括

1. 柏原K・L遺跡検出遺構のまとめ

本章では柏原K・L遺跡で検出した遺構について整理し、問題を指摘して、今後にそなえたいと思う。

本調査で検出した遺構は、K遺跡では溝15条（溝は組み合わせによって方形区画溝をなし、方形区画は3ヶ所にみられる）、掘立柱建物57棟、土塁28基（土塁のうちには土塙墓、土器窯の土塁、使用目的不明の土塁等がある）、井戸1基、製鉄遺構1基、棚列4列がある。遺構の年代は出土遺物よりみて、13世紀後半～14世紀前半までの間におさまるものと考えられる。L遺跡では水田遺構の一部を明らかにした。以下、各遺構について検討を加えてみよう。

（1）方形区画溝と掘立柱建物

方形区画溝と掘立柱建物はこの居館址を構成する最も主要なものである。先ず方形区画溝について検討してみよう。方形区画溝はK遺跡の主要部分を区画する溝で、3ヶ所に存在する。発掘調査のミス、後世の開拓やその他において削平され、部分的に消失しているが、全体の復原は可能である。溝には溝相互間に切り合い関係は認められず、溝の掘削当初から綿密な計画性のもとに地割りされていることが考えられる。掘立柱建物との重複関係では、いずれも掘立柱建物が切っていて後出であり、溝は検出遺構の中では最も古い時期に比定される。このことからみて溝はI～II期の段階に存在していた可能性が強い。

次に掘立柱建物について検討してみよう。掘立柱建物は方形区画溝の内外に存在するが、当初は溝（方形区画）内側に建てられ、溝の埋没、機能停止に伴い、方形区画溝と関係が薄れ、その外側にも建物が建てられていったと思われる。掘立柱建物の重複関係をみると、SB-21～24で4棟の重複がみられ、SB-25, 26で2棟の重複、SB-31～34で4棟の重複、SB-35～40で6棟の重複、SB-41, 42で2棟の重複、SB-43～46で4棟の重複、SB-54, 55で2棟の重複、SB-56, 57で2棟の重複となっている。2棟の重複が2ヶ所、4棟の重複が3ヶ所、6棟の重複が1ヶ所で、掘立柱建物についてみれば少くとも4時期～6時期の建物の存在が考えられる。

次に掘立柱建物の規模についてみてみよう。細長い大形建物で1～3面の廊を持つ建物は方形区画溝IIの内側に存在するSB-31, 32, 34、方形区画溝Iの内側に存在するSB-25の4棟がある。2間×4間の建物で1面の廊を持つ建物は方形区画溝Iの溝と重複し、SB-6,

第6章総括

建物 No	グリット	方 向	面 横	窓	重複關係	備 考
SB-01	F-3~5, G-3, 4	N-67°-E	3間×2間	2面(東北)	なし	Fig.33
SB-02	I-3, 4	N-19°-W	1間×1間		なし	Fig.33
SB-03	J-1, 2, K-1, 2	N-55°-E	3間×1間		なし	Fig.33
SB-04	I-4, J-4, 5	N-63°-E	3間×1間		なし	Fig.33
SB-05	K-3	N-21°-E	3間×1間		なし	Fig.33
SB-06	J-6, K-6, 7	N-82°-E	3間×1間	1面(北)	SD-01	Fig.34
SB-07	J-8, J-7, 8 K-7, 8	N-18.5°-W	4間×2間	1面(西)	SD-01	Fig.34
SB-08	J-9, 10, K-9, 10	N-14°-W	1間×1間		SD-01	Fig.34
SB-09	K-8~10, L-8~10	N-74°-E	3間×2間	4面(東、西、南、北)	なし	Fig.34
SB-10	H-13, 14, I-12~14	N-72°-E	3間×2間 以上 以上	2面(南、東)	なし	Fig.35
SB-11	K-10, 11, L-10, 11 M-10, 11	N-22°-W	4間×2間		SB-12	Fig.35
SB-12	L-11, M-10, 11	N-12.5°-W	3間×1間		SB-11	Fig.35
SB-13	M-10, 11, N-10, 11	N-72°-E	3間×1間		SB-14	Fig.36
SB-14	M-10, N-9, 10	N-79°-E	2間×1間		SB-13	Fig.36
SB-15	N-9, 10 O-9, 10, P-10	N-11°-W	4間×1間	1面(西)	SD-02	Fig.36
SB-16	P-10, Q-10	N-24°-W	2間×1間		なし	Fig.36
SB-17	Q-9, 10	N-67°-E	1間×1間		なし	Fig.36
SB-18	P-11, 12, Q-11	N-11°-W	2間×2間		SK-24 SK-25	Fig.36
SB-19	P-14, Q-13, 14 R-14	N-15.5°-W	3間×2間		なし	Fig.37
SB-20	Q-12, R-12, 13 S-12, 13	N-75°-E	3間×2間	1面(南)	なし	Fig.37
SB-21	K-12, L-12, 13 M-11~13	N-10°-W	4間×2間	3面(東、西、南)	SB-22~24 SD-03	Fig.38
SB-22	L-12, M-11,	N-10°-W	3間×2間		SB-21	Fig.38
SB-23	L-12, 13, M-12, 13	N-79°-E	2間×2間		SB-21	Fig.38
SB-24	L-12	N-6°-W	1間×1間		SB-21	Fig.38
SB-25	M-12, N-12~14 O-12~14	N-80°-E	5間×2間	3面(南、北、東)	SB-26, SD-03 SD-07	Fig.39
SB-26	N-14, 15, O-14, 15	N-77.5°-E	3間×2間		SB-25, SD-07	Fig.39
SB-27	F-19, 20, G-19	N-10°-W	4間×2間		なし	Fig.30
SB-28	H-18, 19, I-18, 19	N-81°-E	4間×2間		なし	Fig.30
SB-29	N-16, O-16	N-68°-E	1間×1間	南	SD-07, SD-08	Fig.30

1. 柏原K・L遺跡検出遺構のまとめ

建物 No	グリット	方 向	規 模	面	審 濟 関 係	考 考
SB-30	R-20, 21 S-20	N-5°-W	3間×2間	2面(南、北)	なし	Fig.40
SB-31	D-23, 24, E-22~25 F-22~25	N-81°-E	6間×1間	3面(南、北、西)	SB-32~34 SD-06, SK 03, 04	Fig.41
SB-32	E-22~25 F-22~24	N-79.5°-E	7間×2間	1面(北)	SB-31 SD-06	Fig.42
SB-33	E-23, 24	N-80.5°-E	3間×1間	面	SB-31 SD-07	Fig.42
SB-34	F-21~24 G-21~24,	N-83°-E	7間×2間	2面(南、北)	SB-31	Fig.43
SB-35	K-18, 19, L-18, 19 M-18, 19	N-9.5°-W	4間×1間	1面(西)	SB-37~40	Fig.44
SB-36	K-19, 20, L-19, 20 M-19	N-7°-W	5間×1間		SB-37, 39, 40	Fig.44
SB-37	K-19, 20, L-18~20 M-18~20	N-3°-W	5間×6間	1面(西)	SB-35, 36, 38~40	Fig.45
SB-38	K-19, L-19	N-13.5°-W	3間×1間	面	SB-35, 37, 39, 40	Fig.45
SB-39	K-19, 20, L-19, 20 M-19	N-3°-W	5間×1間	1面(西)	SB-35~38, 40	Fig.46
SB-40	K-19, 20, L-19, 20 M-19, 20	N-13°-W	4間×1間		SB-36~39	Fig.46
SB-41	J-21~23, K-21~23	N-86.5°-E	2間×2間	1面(東)	SB-42	Fig.47
SB-42	J-23, K-22, 23	N-1°-W	2間×1間		SB-41	Fig.47
SB-43	L-21, 22, M-21, 22	N-80°-E	3間×2間		SB-45	Fig.48
SB-44	M-21, 22 L-21, 22	N-81°-E	2間×2間	1面(東)	SB-45, 46	Fig.48
SB-45	L-21, 22, N-21 M-20~22	N-80°-E	2間×2間	2面(南、北)	SB-43, 44	Fig.48
SB-46	M-21, N-20~22 O-20~23	N-78.5°-E	3間×3間		SB-44	Fig.49
SB-47	O-20, 21, P-20, 21	N-79°-E	2間×2間	1面(西)	なし	Fig.50
SB-48	N-27, 28 O-27, 28	N-59°-E	3間×2間		SD-10	Fig.50
SB-49	I-32, 33	N-80°-E	3間×2間		なし	Fig.51
SB-50	L-31, 32 M-31, 32	N-7°-W	1間×1間		なし	Fig.51
SB-51	L-32 M-32, 33	N-79°-E	3間×1間		なし	Fig.51
SB-52	N-32, 33	N-75°-E	3間×2間		なし	Fig.51
SB-53	N-33 O-33	N-76°-E	1間×1間		なし	Fig.51
SB-54	I-36, 37 J-36, 37	N-14°-W	2間×2間	1面(北)	SB-55	Fig.52
SB-55	H-36, 37 I-36, 37	N-14°-W	2間×2間	1面(北)	SB-54 SD-11	Fig.52
SB-56	M-34, 35 N-34, 35	N-16°-W	2間×2間	2面(北、東)	SB-57	Fig.53
SB-57	M-34, 35 N-33~35	N-77°-E	3間×2間	2面(北、西)	SB-56	Fig.53

7, 15と方形区画溝IIの内側に存在するSB-35の4棟がある。3間×3間の方形建物はSB-20, 45, 46, 56の4棟がある。また1間×3間の建物は方形区画溝Iの内側に存在するSB-12, 外側に存在するSB-20, 方形区画溝IIの内側に存在するSB-33, SB-38, SB-44の5棟がある。1間×1間の梁廂を持つ建物は方形区画溝IIの内側にSB-41, 54, 55, 外側にSB-47が存在し、4棟がある。以上のように同一規格の建物は大部分が4棟の存在である。重複関係をも考慮して本遺跡の建物群はIV期に分けることができると考えられる。

6棟の重複、同種建物の5棟の存在は途中における建替えとみられ、例外的である。また建物群は方位に若干の動きがみられ、重複する建物で前後関係が判明するものからみれば、時期が下るにつれて、より東へふれる傾向がみられる。以上の事から建物群を分類すると以下のようにになろう。

第I期 (Fig. 107)

方形区画溝に地割りされた範囲と一致して建てられた一群である。建物群の配置、方向から次の掘立柱建物が考えられる。SB-01~05, 09, 12, 14, 16, 17, 19, 23, 24, 27, 29, 31, 35, 51, 52, 54, 56の21棟で構成される。SB-01~05は方形区画溝とは区別できる建物であるが方形区画溝Iの西側に位置し、SB-01, 05の方向が一致する。また柵列によって区画される区画が方形区画溝と類似するためにI期建物群とした。しかし、この一群は他の建物群とは離れていて、正確には所属期は不明である。方形区画溝Iの内部にはSB-09, 12, 14, 23, 24の5棟が存在したとみられ、建物の方向性が一致し、SD-01に平行ないしは直交する方向性をとる。SD-02の南側にも3棟の建物SB-16, 17, 19が同一方向性で存在し、柵列によって東西に二分されている。方形区画溝IIの内部には、SB-27, 29, 31, 35, 51, 52, 54, 56の8棟が存在する。SB-29, 54はその位置関係から門との関連性で把握できる建物である。方形区画溝IIの中心部は広場としての機能を果していたと考えられ、建物群はみられない。

第II期 (Fig. 107)

方形区画溝と建物配置に亂れが生じてくるが、まだ方形区画溝は存続していた可能性が強い。SB-06, 08, 10, 13, 20, 26, 28, 32, 40, 43, 44, 50, 53, 55の14棟から構成されている。方形区画溝Iの建物群が範囲を越えて広がるが、方形区画溝IIでは前段階の配置を踏襲している。SB-55は配置から門に関係する建物であろう。方形区画溝IIの中心部は前段階同様に広場としての使用が考えられる。

第III期 (Fig. 108)

方形区画溝は完全に埋没したものと考えられ、方形区画溝と掘立柱建物群との間には有機的な関連性は認められない。掘立柱建物の配置は前段階を踏襲し、西半部に大部分が集中する。SB-07, 22, 20', 30, 33, 34, 37, 41, 46, 49の10棟から構成される。遺跡東半部が広場としての機能を果していたと考えられる。

1. 柏原K・I遺跡検山遺構のまとめ

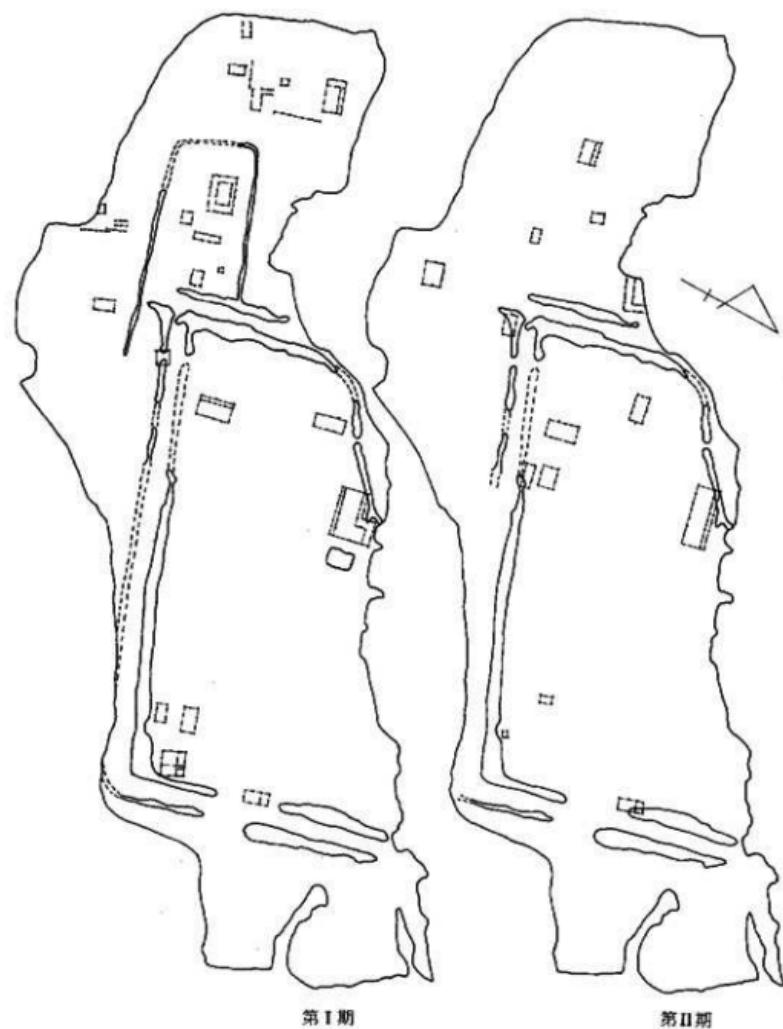


Fig.107 第Ⅰ、Ⅱ期建物群配置図

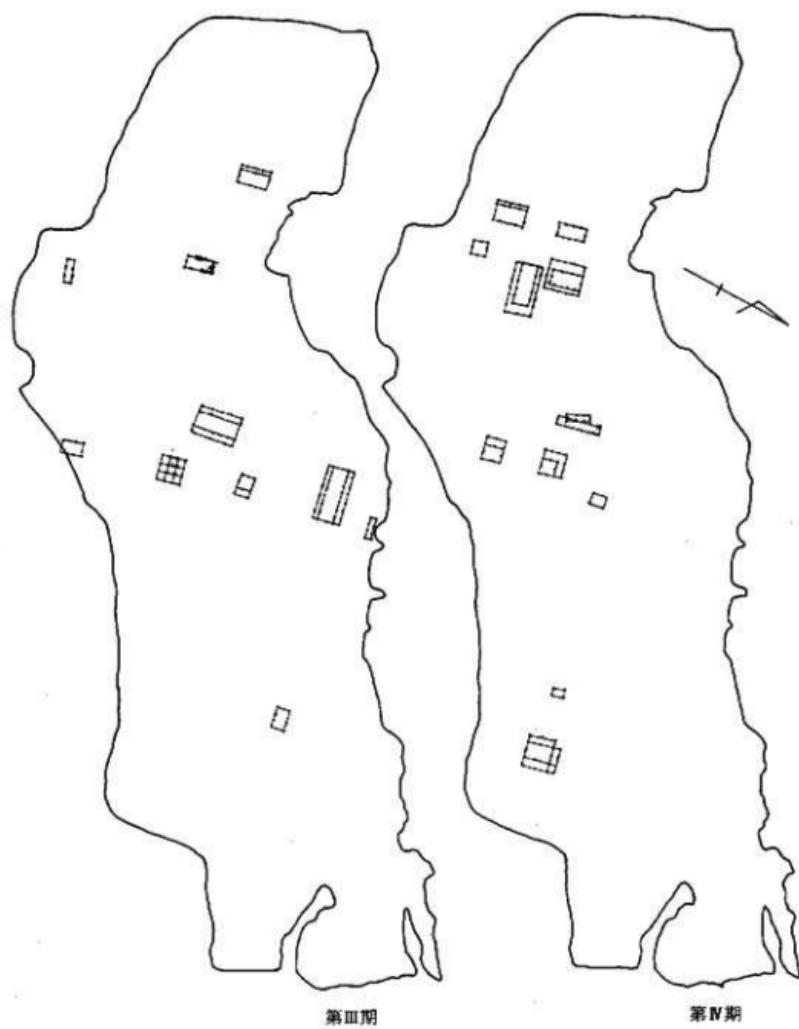


Fig.108 第III、IV期建物群配置圖

第IV期 (Fig. 108)

前段階の建物配置を踏襲するが、前段階よりまとまりがある。SB-11, 15, 18, 23, 25, 36, 38, 42, 45, 47, 50, 57の12棟より構成される。大型建物SB-25を囲む配置がみられる。SB-36, 38に重複がみられるが、途中において、SB-36からSB-38に建替えたと考えられる。遺跡の北側部分が広場として使用されたものであろう。

以上の居館址の変遷は今後さらに検討を加え正確を期す必要があるが、概略の変遷を示していると考えて大過ないと考える。ここで掘立柱建物の機能について若干検討を加えておきたい。先に規模、構造等が一致する掘立柱建物が4～5棟ずつ存在することは指摘した。またそれらが各期それぞれに分離できることも指摘したが、それはとりもなおさず、それぞれの建物の機能を意味していると考えられる。2間×7間前後の廊を持つ建物にSB-25, 31, 32, 34の4棟が存在し、このうちSB-31, 32, 34は同一場所で重複する。これら建物の周囲には土器窯の土塙が集中しており、また、この土器窯土塙には完形品が多く含まれることから、儀式に伴う建物である可能性が強い。また大規模であることから多くの人間が集まることがわかり、これらの建物は供宴等をよくし、客館的要素を備えていると考えられる。次に大規模建物である、SB-09, 10, 21, 37は前記の大型建物とは対峙した位置関係にあるが、第IV期では共存した状態にあり、主屋としての意味あいが強い。3間×3間の方形の建物にSB-20, 43, 46, 56, 57がある。これらSB-46, 56, 57等の建物にみられるように純粋的要素が強く、倉庫としての機能が考えられよう。1間×3間の建物にはSB-12, 20, 33, 36, 38, 44がある。特殊な建物でその機能について検討するには材料が少いが、配置場所、III, IV期に増加、あるいは大規模化することを考えれば馬廐としての機能が与えられる可能性が強い。その他2間×4間、2間×3間、1間×3間の建物があるが、いずれもが大規模建物と対になっていることに注意しておきたい。後章の遺物分布をみてもこれらの建物の機能を良く反映していると考えられる。

(山崎)

(2) 土塙について

土塙は土塙墓、土器窯土塙、使用目的不明の土塙がある。土塙墓はI期に属する可能性が強い。本遺跡に存在する墓はきわめて少く、どのような人々が埋葬されたのかも明らかでない。本遺跡以外にも古墳を再利用した墓も存在し、埋葬者も含めて今後検討を要する問題であろう。土器窯土塙については先に指摘したように大型建物との関連で把握される。不明土塙は日常生活関連で把握した方が良く、いずれも居館を主体とした建物群において多い傾向が把握できる。

(3) 製鉄遺構について

製鉄遺構については調査区の西半部に1基を確認したのみである。遺構は破壊されて、保存状態が悪かったが、構造的には鍛冶炉と考えることができる。遺物には炉壁、鉄滓、焼土等がある。製鉄遺構を含めた建物群が独立していることを考えれば、特殊な立場が考えられる。柏原地区では古墳時代以降、古代までは製鉄に関連した有力な集団が存在した可能性が強く、本遺跡の製鉄関連遺構もこれらの技術的流れをくんでいる可能性もある。今後の検討が必要であろう。

(山崎)

(4) 柏原L遺跡の水田址

柏原L遺跡の水田址は残存状態が良好でなかつたが、その概略は把握することができた。小規模な谷に形成された水田としての状況をみることができる。水田は、K遺跡の周辺部に井堰を整備し、そこより水田への給水をしたことが考えられる。水田への水口が単にK遺跡周辺に求められたとは考えられず、水源池の確保と居館址の強い関係を読みとることができる。

水田は谷部の高いところに幹線水路を導入し、そこから支線水路で各水田へ水を配水するよう整備されている。また排水は樋井川の流路へ直接流し込んだと考えられるが、そのあり方は現代の水田と大きな変化はない。谷に形成された水田であるために水田一区画の面積はきわめて小規模である。入来文書に記された水田と良く一致することは後章で詳述する。ただし、現代の水田範囲と比較した場合、その範囲はきわめて狭く、樋井川流域の限定された地域にのみ水田が認められ、他の谷や周辺に存在する現代水田は近世以降の開田によるものであることがわかった。小規模な谷における開田が意外と遅れて始まるることは弥生時代以降の水田経営を改めて検討する必要性が生じたといえよう。今後の検討に期待したいと思う。

(山崎)

2. 出土遺物からみた柏原K遺跡

柏原K遺跡上面において検出された遺構は、所謂、中世居館址として認定できるものである。また、その存続期間については、後でも述べるが、出土遺物より、13世紀後半代から14世紀前半代の間にあるものと考えられる。

まず、出土遺物についての若干の考察を記す前に、今回検出された居館址について、その重要性を2点程指摘しておきたい。第1点は、柏原K遺跡自体の調査面積が広く、ほぼその全面にわたって、居館址が検出されたことである。調査区のほぼ中央に、方形区画溝が検出され、その内外における建物址をはじめとする遺構群の位置関係を明確につかむことが可能である。最近、全国的に中世居館址の発掘調査事例が増加しつつあるが、その様な中にあっても、居館の中心部から縁辺部まで、ほぼ「まるごと」に近い事例は、数例しか知られていない。当然の

ことながら、全面発掘調査をすれば、検出された遺構、遺物群は、その居館の存続期間内における構成要素（建築物および付属施設、生活用具等）に、最も近づくはずである。この意味からして、柏原K遺跡検出の居館址は、中世居館址の研究を進める上に、重要な資料となり得ると言える。第2点は、検出された居館址の館主がほぼ明らかにされているということである。詳細は別に譲るとして、この居館址は、元寇の際に従軍した、藤原國入来院に地頭職を有する渋谷氏が、鎌倉幕府より恩賜地として授受した、「入来文書」記載中の「筑前国早良郡比伊郷」の「行武名」内に所在する「屋敷」と推定されている。「入来文書」記載中の、水田名と、現在残る地名との比較から、このことは蓋然性が高いと言える。もとより、検出された遺構自体の考古資料としての価値は、古文献記載の有無とは全く別問題であり、それにより価値が変わるものではない。但し、偶然、文献記載と合致した場合は、歴史的考察が展開し易くなることは事実であろう。

居館の全面調査—館主の判明という条件は、中世居館址の性格・特徴を究明する際に、有効である。中世居館址の性格・特徴を究明してゆくためには、全国的に調査事例を集め、分析することにより、中世居館の特定な型式を抽出してゆくことが必要である。中世居館址研究の基礎資料として、柏原K遺跡の居館址を遺物を中心として、若干の考察をしてみたい。

(1) 柏原K遺跡出土の土器・陶磁器類の組成について

柏原K遺跡の出土の土器・陶磁器類の破片数は、77,413点であり、このうち、土師質土器は76,811点、陶器は128点、磁器は474点である。土師質土器、陶器、磁器のそれぞれについて、器種の組成を、個体色別により見ていく。

土師質土器には、皿（大、小、特大合計して、76,702点）、堀（87点）、鉢（12点）、火舎（11点）があり、皿は破片数が多くて、個体色別が不可能であるが、堀は約15個体、鉢は約4個体、火舎は約1個体が確認できる。陶器は、国産品として擂鉢（113点）、甕（15点）があり、舶載品として黄釉盤（15点）、鉢（1点）、褐釉陶器（3点）がある。甕は細片のため個体色別は不可能であったが、擂鉢は約25個体が確認できる。黄釉盤は2個体、鉢は1個体が確認できるが、褐釉陶器は細片のため断定は避けられる。擂鉢については、61点（約11個体）が東播系の製品である他、生産地不明の須恵質の製品が11点（約2個体）、瓦質の製品が31点（約10個体）、陶器質の製品が10点（約1個体）である。磁器は破片数474点で、そのうち青磁は380点、白磁は65点である。青磁の内分けは、まず、龍泉窯系では鍋蓋弁文碗328点（約43個体）、刻花文碗11点（約9個体）、無文碗22点（約6個体）となり、その他の皿、壺等が11点ある。同安窯系では、柳目文碗7点（約3個体）である。越州窯系は、破片が1点のみ存在する。白磁は口ハゲ皿が50点（約35個体）、白磁碗11点（大宰府分類によるIV類約5個体、V類約6個体）、その他

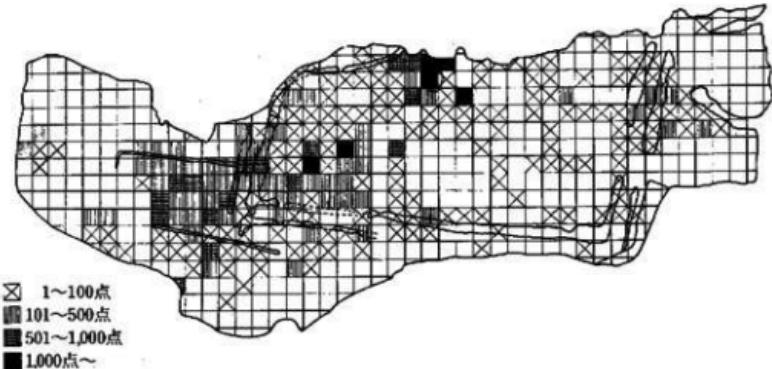
が4点である。

以上、各器種毎の個体数は、居館址の存続期間内において、館主が保有し得た土器、陶磁器類の総数量、および器種相互の比率をある程度、反映しているものと考える。

(2) 出土遺物の分布より見た居館址の空間利用について

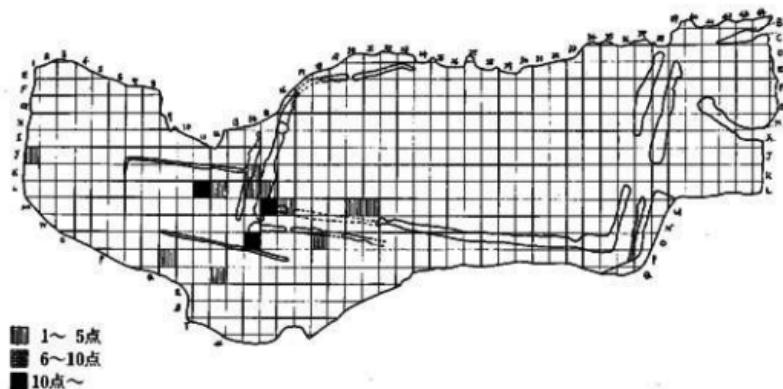
出土遺物中、土師質土器の皿、壺、擂鉢、龍泉窯系青磁鑄蓮弁文碗、白磁口ハゲ皿の出土分布状況を示したのが、第1図～第5図である。土師質土器皿（以下土師質皿とする）については、数量が多いため、包含層からの出土分布のみに留めた。遺構を含めた場合と比べて、分布状況はそれ程、変わらない。

土師質皿、二重の方形区画溝内の西部から、SD-01, SD-02の区画内、そしてSB-31～43の東側に分布密度が濃いことがわかる。前地区は、壺、擂鉢、青磁、白磁の分布密度も濃く、建物址との重なりからも、居館における生活の中心が、この付近にあったものと想定できる。特にSD-01, SD-02の区画内は壺、擂鉢片の出土も目立ち、厨房施設の存在も考えられる。これに対して、SD-31～34東側地区は、土師質皿のみ濃厚に分布し、他の器種との分布の重なりは、非常に少ない。SK-01等、この付近に存在する土器窯遺構の事実も含めて考えると、ここが土師質皿の捨て場所であった可能性が高いと言える。おそらく、SB-31～34で使用した土師質皿を東側（SK-01等）に廃棄していたのではないであろうか。土師質皿のみの出土は、SB-31～34が、酒宴等、何か特別な行事を行う施設であった可能性を思わせる。想像を逞しくするならば、この居館においては、SB-31～34は既にふれた様に、特別な行事を行う為のハレの施設であり、SD-01, SD-02に区画された地区には、日常生活に関連するケの

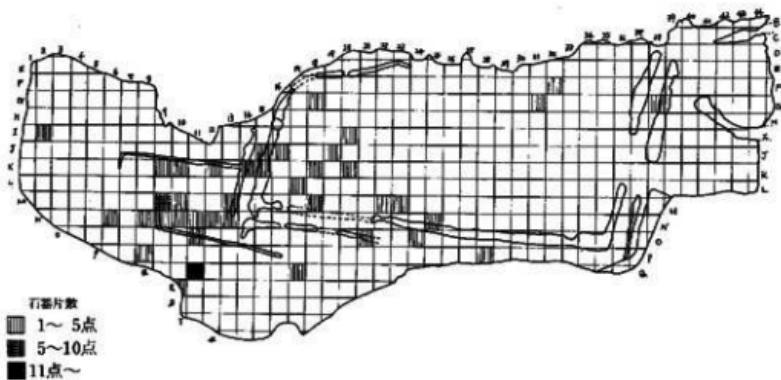


第1図 土師質土器皿分布状況（包含層）

2. 出土遺物からみた柏原K遺跡



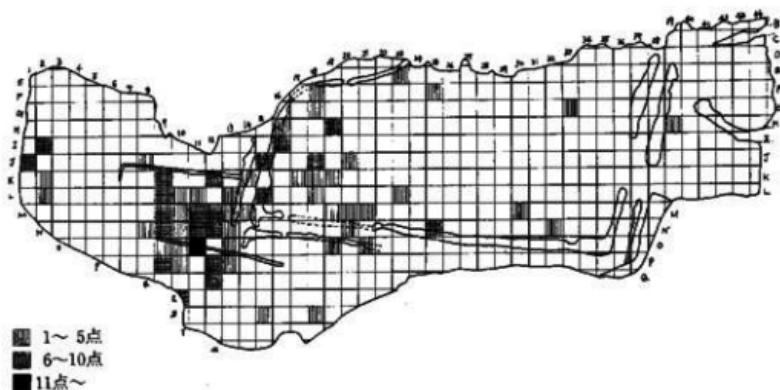
第2図 土器片出土分布図（包含層、遺構）



第3図 石器片出土分布図（包含層、遺構）

施設が存在したと考えられる。居館址の25ライン以西の建物址群については、出土遺物の分布と重なることを既に述べてあるが、SB-48～SB-57については、少数の土師質皿以外は、出土遺物との重なりが、あまり顕著でない。この地区は、溝が切れており、居館の東側の出入口であったと考えられるため、出入口を監視するための施設であった可能性が考えられる。

以上、居館内の空間利用について、2、3述べたが、当然存在すると思われる馬小屋、作業小屋等の位置の問題に關しても、検討の余地があり、今後の課題である。



第4図 龍泉窯系青花磁出土分布図（包含層、遺構）



第5図 白磁口ハゲ皿出土分布図（包含層、遺構）

(3) 柏原K遺跡出土の土師質皿について

既に遺物説明の中でも記した様に、柏原K遺跡出土の土師質皿は、胎土の特徴により、3類に分類可能である。もう1度、まとめておくと、「A類は比較的精良な胎土を用い、焼成後は、暗灰色～黄灰色という灰色系統の色調をなす。B類は1～2mm程の白色砂粒を比較的多く含み、焼成後はA類と同様、暗灰色～黄灰色の色調をなす。胎土が暗灰色～黄灰色をなし、砂粒を通

2. 出土遺物からみた柏原K遺跡

度に含み、A, B類どちらとも分け難いものも存在する。C類は、出土土師質皿より、A, B類を除いたもので、適度に砂粒を含み、焼成後は黄褐色～赤褐色をなすものが多い。」と言うことになる。

遺物説明とともに、主な遺構の出土土師質皿の法量分布図をあげておいたがこれらを見ると、大皿については、A, B, C類の間に、胎土の違いとともに、法量上の違いも認められることがわかる。A, B, C類の良好な資料を出土した、SK-01の場合をとてみると。口径については、A～C類まで、大きな差は見られないが、器高をみると、A類はやや高く、3.0cm前後を示すのに対して、B類はやや低く、C類に至っては、約2.5cm前後を示す。底径についてみると、C類がやや大きめの値の分布を示すのに対して、A, B類は小さい値の分布を示す様である。また、法量の問題とは別に、A, B類は底部際の土を搔き取ったりして、作りに丁寧さを見せるが、C類では、ほみ出した土は、そのままのものが多い。

A～C類の違いは、SK-01をはじめ、他の遺構においても、共存している場合が多いため、時期差とは認め難い。おそらく、生産地が異なるものと考えられる。A, B類は先にもふれたとおり、砂粒の精粗の違いであり、形態的には似ているものもあり、生産地は同一の可能性もある。A～C類それぞれの土師質皿の分布範囲を押え、土師質皿の共給圏をわむことにより、中世の手工業製品の流通を解明する手懸になると考えられる。

(4) 出土遺物より見た柏原K遺跡の存続期間について

K遺跡出土の土師質皿は、SD-14出土の1点を除いて、全て、ロクロ成形され、外底部には、回転糸切り痕を有するものである。北部九州地方において、回転糸切り痕が出現するのは、12世紀中葉頃であるから、居館の造営が、それ以降であることは間違いない。大皿の口径は、約12～13cm、器高は約2.5～3cm、小皿は口径約7.0～9.0cm、器高約1.0～1.5cmであり、土師質皿の年代は、ほぼ13世紀から14世紀前半におさまるものである。中国陶磁のうち、最も出土量が多いのは、龍泉窯系錦蓮弁文碗青磁（I-5類）で、次いで、白磁口ハゲ皿（IX類）である。これらは13世紀後半代に多く搬入されることが知られている。またこれより、時期的に古く考えられる遺物として、白磁碗（IV, V類）、龍泉窯系劃花文青磁碗（I-2類）が存在するが、量的に少なく、主体にはならない。従って、居館の造営の時期は、13世紀中葉から後半代に求めることが可能と考えられる。柏原K遺跡においては、表探として、染付が見つかっている他は、14世紀後半代から、15世紀代にかけての遺物はほとんど見つかっていない。従って、柏原K遺跡の居館の廃絶時期は、遅くとも14世紀中葉頃までに求められると考える。

第7章 柏原K・L遺跡をめぐる諸問題

1. 入来文書と柏原遺跡

柏原地区の造成範囲における中世遺跡はK遺跡の居館址をはじめ、その下流域において居館址と同時に存在していたと考えられるL遺跡の水田址を確認した。居館址については全面調査を実施し、ほぼその全容を知ることができた。また、水田址についてはその範囲を確認し、諸般の事情から一部を調査し、小区画の水田が広がることを確認した。これらの中世遺跡の存在する本調査区は先にも指摘したように油山から派生してくる丘陵によって限られ、盆地状をなし、一定のまとまりのある地域として理解できる。また、最近まで開発の手からのがれて、地形・地名に旧状をよく残していた。

この地域が蒙古襲来の弘安の役の恩賜地であることは、すでに渡辺文吉氏によって指摘されているが、ここで改めて、今回の調査結果も含めて考察を加えてみたい。

(1) 入来文書にみられる地名

入来文書に、弘安の役で戦死した渋谷有重の勲功賞として筑前国早良郡比伊郷の地頭職配分状がある。

四九 蒙古合戦勲功賞配分状

○コノ文書、上部ニ白界アリ、
弘安四年蒙古合戦勲功賞筑前國早良郡比伊郷
地頭職配分事
一人渋谷平四郎有重法師跡

田地拾町

行武名
横枕
一所一反半
松本
一所九反
齒
一所九十步
月田
一所三反
下河原田
一所二反大
桿田
一所一丁一反

坂本
一所六反
フルモ
一所小
フツ原
一所六一歩
裏本
一所一反小
ツカミカ下
一所一丁三反
中ツサ田
一所八反
石崎
一所三反
春田
一所二反小
西大手出
一所三反
東田
一所三反
柳田
一所八反半内二反三百步東依
屋敷四ヶ所

	行武名内	
板本	一字	惣検校入道
一所五反半	一字	六郎
タウシタ	長瀬庄内	
一所二反大	勢三	
打越北	一字	米光名
一所半	一字	同名
打越	畠地一所八段	
一所三反	若國名内	
同上	中島	
一所五十歩	一所四反	
今山入道	ヤカタカ浦	
一所六十歩	一所二反	
若國名内	長瀬庄内	
打越	南田	
一所三反	一所七反一丈	金丸
同上	<small>八尺内</small>	
一所三百步	一所四反四丈	元下河原
フル道	<small>八尺内</small>	
一所小	右、就孔子配分如此。有限仏神事・本所年	
ヤカタカ浦	貢、守先例不可有懈怠之状如件、	
一所四反	正應元年十月三日	
同上		(少貳經實)
一所一反		沙弥(花押)
ナソエ		(大友賴泰)
一所半		沙弥(花押)
キハナ		
一所二反		
カキソイ		
一所半		
門出		
一所二反		
河原田		
一所三反		

この配分状にみえる地名は本調査区内に残る地名（大字、小字名）ときわめて一致している。以下、配分状の地名と現在の地名の比較検討を行ってみよう。

(2) 地名の比較検討

配分状の地名を順に検討してみよう。

田地拾町のうち行武名内の「横枕」はL調査区よりやや上流に位置する水田一区画の地名として現存している。水田想定地と一致しており、L調査区の水田遺構も横枕に包括される可能性が強い。「月田」については不明。「松本」は樋井川の右岸の小字名として存在し、水田の想定区域と一致している。「下河原田」は樋井川が大きく屈曲し流れを北流させて柏原の盆地を出る所の樋井川をはさんだ西岸にまたがって河原という小字名が存在し、それに相当すると考えられる。この部分も水田想定区域と一致している。「柿田」は河原の南に存在し、樋井川が大きく屈曲する左岸の小字名として残存しており、ここも水田想定区域と一致している。「坂本」については現在、小字名その他に見い出すことはできない。ただし、坂本が地形の状況を示す名

1. 入来文書と柏原遺跡



Fig.109 柏原遺跡周辺の小字名

であると考えれば、小字名の松本～寺篭の一部に相当する可能性がある。ここも水田想定区域と一致する。「タウシタ」については不明。「打越北」「打越」は樋井川右岸の柿田の対岸にあたる小字名に中島があり、その一部は中島打越とよばれている。四十塚から流れる水路が樋井川と合流するすぐ上流にある橋は打越橋とよばれており、橋の名前としても現存している。「今山入道園」は地名としては類似したものはないが、樋井川左岸の林崎と柿田にはさまれた小字名の中園の可能性を考えておきたい。ここも水田想定区域と一致している。次の「若国名内」では「若国」が樋井川右岸の中島の北側一帯に小字名として現存している。また、この地区には数年前までは若國明神という神祠があった。「打越」は先に指摘したとおりである。「フル道」は地名としては現存しないが、弥生時代以降のルートとして現在の大野一二丈線に近いものが想定され、遺跡はそれに呼応していることから、フル道もこのルートにそった部分が想定できる。「ヤカタカ浦」も大野一二丈線ぞいに大字名として「屋形原」があるので、それに対応するものと考えられる「ナソエ」「キハナ」「カキソイ」「門田」については現存地名を見い出すことができない。「河原田」は先に指摘したように小字名に河原がある。「坂本」も地名としては存在しないが先に指摘したとおりである。「フル河」は河原の北に小字名として古川がありそこに比定できる。ここも水田想定区域と一致する。「ツツ原」は不明。「基本」はやや本地区と離れているが、大野一二丈線の検原に小字名として墓の下がある。想定される中世水田の面積や、大野一二丈線ぞいに考えられる他の水田の位置関係からみて、本地に想定することは可能であろう。「シカミカド」については手がかりはない。「中ヲサ田」については柿田の北に位置する下原田の中の畠の名前として「中ヲサ」がある。ここは丘陵地の上になっているが、谷状になり、水田が開かれている可能性は否定できない。「石崎」については古川の北に「石橋」の小字名があり、ここに比定できそうである。水田想定地と一致している。「春田」については樋井川流域に展開する中世水田をみおろす丘陵上に上原田、下原田の小字名がある。ただし、この地は調査の結果でも水田遺構は認められない。よって、他の地に春田を求める必要がある。ちなみに小字下原田の北側の畠の名前として原田が存在する。この地は先の「中ヲサ田」に比定した中ヲサの連続した谷部にあたり、ここに春田を求める方がより可能性が強く、中ヲサ、原田を含めた谷部に谷水田が存在した可能性は強い。「西大手田」については「西大半田」の誤読、誤書と考えられるが、確認していない。もし「西大半田」であれば若國の南に存在する小字名大半田に比定できるが水田想定区域とは一致せず、また、同所に水田可耕地の存在はみい出せず、他の地域に求める必要があるかもしれない。「麦田」「柳田」については現在手がかりはない。

畠地の若國名内の「中島」は樋井川右岸に小字名として存在する。先の打越と重複する関係にある。水田想定地内と一致するが、谷の奥部には畠地をとるには充分な広さを有している。「ヤカタカ浦」は先に指摘したように屋形原が比定できよう。

以上のように『蒙古合戦歎功賞配分状』にあげられた地名の比定はかなりの高率で一致をみ

る。行武名内の配分地については10ヶ所の地名があげられているが、そのうちの6ヶ所が地名の一一致をみ、2ヶ所がその可能性があり、不明なのは2ヶ所のみである。また、若国名内では若國の地名の一一致をみるとばかりでなく、19ヶ所の地名のうち、8ヶ所の地名が一致し、3ヶ所がその可能性を指摘でき、不明なのが8ヶ所である。両者を合わせても約50%の地名の一一致があげられ「蒙古合戦勲功賞配分状」の恩賞地が柏原一帯の地域であることは間違いないことであろう。

(3) 「屋敷」地の検討

「蒙古合戦勲功賞配分状」には水田、畠地の地頭職配分以外に行武名内に2ヶ所の屋敷がみられる。1ヶ所が懇検校入道屋敷で、他の1ヶ所が六郎屋敷である。詳細な記載がないのでその内容については不明であるが、柏原K遺跡の居館址との関係が注目される。以下、検討を加えてみる。

先ず屋敷の所在地として行武名内と記載されていることである。名が一円所領でないことは、配分状にも重複がみられることから明らかであるが、行武名内の配分をみると横樋、松本、月田、下河原田、柿田、坂本、タウシタ、打越北、打越、今山入道園の地名があげられているが、いずれも若国より西側の櫛井川上流域に介在し、屋敷地もこの地域に存在する可能性が大きい。また、柏原K遺跡の所在する小字名が「ゴソ」であり、これは「御所」を意味していて、地名の残存率からみて、当時、屋敷を御所とよんでいた可能性が強い。さらに、柏原を含めた周辺部には太平寺跡と想定される所を除いて、中世遺跡、特に居館址と考えられるような遺跡が存在しないことなど、柏原遺跡が入来文書にいう屋敷に相当する可能性は大きい。

屋敷は2ヶ所となっているが、K遺跡で最も早い時期に存在したと考えられる遺構に方形区画溝があり、掘立柱建物を伴う方形区画溝I、IIがその2ヶ所にあたると考えられる。なお屋敷名の懇検校入道屋敷・六郎屋敷から考えて、懇検校入道屋敷がより大規模で、六郎屋敷が小さいことが想像される。方形区画溝Iが $30m \times 20m$ の規模であるのに対し、方形区画溝IIは二重に溝をめぐらし、通路状の空間を備え、 $120m \times 65m$ の規模を持っていて、規模的にもよく対応している。方形区画溝IIが懇検校入道屋敷、方形区画溝Iが六郎屋敷と考えられる。

柏原K遺跡の居館址、柏原L遺跡の水田址の調査は、入来文書の「蒙古合戦勲功賞配分状」の記載を考古学的に証明した意義は大きいものがある。櫛井川流域すなわち比伊郷内にはこの他に水田、畠地、屋敷の存在が記載されている。今後、それらが考古学的に証明されることにより、この地域の中世史がさらに深く掘りきげられることは疑いなかろう。

(51) 清色鬼籠七号では「筑前国早良郡長尾郷内田屋敷」
と記されている。

(52) 濑野氏注(1)論文三三六頁。

(53) 相田氏注(2)著書三〇一二三頁。

(54) 入来院家文書八四号。

(55) 注(53)。

- (15) 渡辺文吉「郷土の地名を残そう——ゆれ動いた中世の勢力圈」入来院波谷氏と筑前福井郷所領』(『ふるさとの自然と歴史』六五号)。地名の比定については板橋和子の御教示によるところが大きい。なお、これらの地名の現地比定については、本報告書山崎純男氏執筆分を参照のこと。
- (16) 入来院家文書六九号。
- (17) 同前六八号。
- (18) 同前五八号。
- (19) 同前八三号。
- (20) 同前一八四号。
- (21) 同前一九四号。
- (22) 同前八六号。
- (23) 同前八七号。
- (24) 同前八五号。
- (25) 同前四七号。
- (26) 「正任記」文明十年十月一日条(『大日本史料』八編之十)。
- (27) 同前文明十年十月十八日条。
- (28) 同前文明十年十月十三日条。
- (29) 同前文明十年十月十八日条。
- (30) 文明三年三月三十日宗實園免行状(『長崎県史』史料編一)。
- (31) これについては拙稿「大内氏の筑前国支配—義弘期から政弘期まで—」(『九州中世史研究』第一輯) 参照。
- (32) 入来院家文書八三号波谷重門議状。
- (33) 潤野氏注(1)論文三三五~六頁。
- (34) 岡元家文書三三号。
- (35) 同前二九号。
- (36) 同前五号。
- (37) 同前二九号。
- (38) 「入来院氏系図」の弥陀童の箇所に「重基室、後為尼、号顯心」とある。
- (39) 入来院家文書六八号。
- (40) 岡元家文書七一号。
- (41) 入来院家文書九号。
- (42) 岡元家文書二九号。
- (43) 「筑前國統風土記」卷之二十一、早良郡下、太平寺址。
- (44) 岡元家文書一二号。
- (45) 「入来院氏系図」では「重尚」と出ているが、重久と同一人物であろう。
- (46) 相田氏注(2)著書三〇五六六頁。
- (47) 入来院家文書四八一一号。
- (48) 同前八四号。
- (49) 同前九八号および寺尾家文書一〇号。
- (50) 清色龟鑑七号。

どうかはこの史料からでは確定できない。弘安蒙古戰恩賞

地の田地の規模は、十町、五町、三町の三段階があつたこと
が知られている⁽¹⁾が、田数二町というのは他に類例がない。渋

谷惟重領注進状案に「田地拾町内」あるいは「屋敷四ヶ所
内」とあることから、この恩賞地は元來、弘安合戦第二回配

分恩賞地の最大規模にある田地十町・屋敷四ヶ所・畠地一
町八反に準ずるものであった。つまり、この注進状に書き上

げられた惟重領田地二町・畠二反・屋敷一所はその一部に
あたるのである。瀬野氏のようによく解釈するならば、田地二町・

畠二反・屋敷一所以外の、田地八町・畠地・屋敷三所は、当
時不知行となっていたか、あるいは別人に譲与されていたか
のいずれであろう。しかし、これについては別の解釈也可能
である。先に検討したように、渋谷致重跡恩賞地下長尾十
町のうち、弥陀童（願心）および定円の知行分計六町は庶流
岡本氏に伝来し、一町は長尾太平寺に寄進された。残る辰童

（明心）分三町は、一町がその女子虎光に譲られたが、残る
二町分は誰に譲与されたかは不明であった。今まで検討して

きた惟重領田地・町がこれに相当すると考えることも可能
であろう。すなわち惟重領下長尾庄田地二町以下は、何ら
かの事情によって致重跡十町の一部を相伝したという解釈で
ある。いずれの解釈が妥当であるかは、今後の検討をまたね
ばならない。

注

(1) 瀬野精一郎「鎌倉御家人と元寇恩賞地」（同氏「鎌西御

家の研究」第四章第一節）三一八—三三四頁。

(2) 相田二郎「蒙古襲来の研究」第八章および注(1)瀬野
論文。

(3) 同前。

(4) 石井進「九州諸国における北条氏所領の研究」（竹内理
三博士選考記念会編「莊園制と武家社会」）。

(5) 「筑前國風土記」巻之二十一、早良郡下、幡井郷。

(6) 入来院家文書四九号（朝河貞一編「入来文書」）所收。
以下、入来院家文書・岡元家文書・寺尾家文書・清色鬼
鑑等の渋谷氏関係文書は全て本刊による。

(7) 弥陀童（願心）および定円の知行分計六町は庶流
岡本氏に伝来し、一町は長尾太平寺に寄進された。残る辰童

(8) 入来院家文書二八号。

(9) 瀬野精一郎氏注(1)論文。

(10) 阿蘇文書応永二十四年九月三十日渋川道鎮書下「阿蘇
文書」一。

(11) 入来院家文書四九号。

(12) 岡元家文書三三号「渋谷氏系図」。

(13) 同前。

(14) 本文書によると、畠地は「一所八段」とあるが、若固
名内の畠地は二筆分計六反であり、いずれかの数字が誤
りと考えられる。

寄進状のよう、渋谷氏から太平寺へ田地を寄進したものではなく、寺院への寄進以前に寄進することを承諾した文書である。

この史料にみえる四郎太郎重久は、「入来院氏系図」による

と有重・致重の弟であり、兄有重と共に弘安の役で戦死したという。相田二郎氏は、蒙古合戦歴功地が寺社に寄進される事例が多いことを指摘され、こうした寄進行為は、勲功賞拝領を神祇へ祈願するためや、拝領者・職務者の菩提を弔うためになされたとされた。⁽⁴⁾ この渋谷氏によってなされた致重跡恩賞地の太平寺への寄進は、後者の典型的な事例である。

しかし、この一町地がこの時完全に太平寺領となり、太平寺の進止下に入つたわけではない。文中に「若又御口入僧不法之時者、□可改候」とあるように、進止權はあくまでも領主渋谷氏側に留保されていた。貞和五年(一二三九)閏六月二十三日の虎一丸(重進)宛重勝譲状⁽⁵⁾にみえる「筑前國比伊鄉修理免禪俊比丘尼跡」は、太平寺の修理免であつたかもしきない。

(三) 渋谷惟重遺領

嘉慶三年十二月二十一日渋谷惟重遺領注進状案⁽⁶⁾に下長尾庄

が出ていている。

一、筑前國早良郡下長尾庄

田地拾町内

武町 当知行分
島式段 当知行分

屋敷四ヶ所内
当知行分

一所検校次郎

この注進状は惟重の子重広によって作成されたものであるが、翌嘉慶四年五月にその弟重名によって作成された渋谷惟重遺領等注進状案⁽⁷⁾にも、

一、筑前國早良郡下長尾庄内

田地二丁

島二段

屋敷一所

というように、同様の記載がある。当時、重広と重名が惟重遺領をめぐって相論中であつたために、両者によつて遺領注進状が作成されたのである。この注進状から、渋谷氏の庶家寺尾氏の一族惟重が、下長尾庄田地十町内二町・島地二反・屋敷四ヶ所内一ヶ所を知行していくことがわかる。瀬野精一郎氏は、この所領を「渋谷惟重が蒙古合戦歴功賞として正應元年十月三日配分されたものに間違いないであろう」とされた。⁽⁸⁾ たしかにその可能性は高いが、いま一つの可能性もあることを指摘しておきたい。

この所領が蒙古合戦恩賞地であることは瀬野氏の指摘される通りであろう。しかし、恩賞の被給者が渋谷惟重であるか

貞和三年三月六日

平重勝在判

尼顕心

沙弥定円在判

つまり、一旦重勝に譲られた致重跡恩賞地下長尾水田のうち一町七反と刑部次郎屋敷一字は養子の若王丸に譲与されたのである。この史料から、致重跡恩賞地は田地十町だけではなく、刑部次郎屋敷という屋敷地を含んでいたことが明らかになつた。しかし、觀応二年（一二五二）七月三十日には、足利直冬から重勝が、亡母惠心・亡父重基の謹状に任せて氣前國下長尾田畠屋敷地頭職等を安堵されている。⁽²⁾一族内部では譲与していくも、その所領に対する進止権は惣領重勝が留保していたのである。その翌年の觀応三年、重勝は次のようない文⁽³⁾を出した。

第前国早良郡比伊郷下永尾事、亡父定円存生之時、重勝安堵中給事、任定円・顯心譲状、拾町分内院町所邊也、仍為後日状如件

觀応三年四月十九日

重勝（花押）

渋谷九郎左衛門尉殿

惣領の重勝は、下長尾を重基の生存中に安堵されていたが、定円・顯心の譲状に任せて下長尾六町を重興に通り渡したのである。おそらく、定円・顯心の譲状に、下長尾十町内六町つまり両者の配分地各三町を合わせた所領を重興に譲る旨の記載があつたためと考えられる。あるいは、先に引用した貞

和三年三月六日定円・顯心・重勝連署譲状の宛所若王丸は重興かもしれない。この遺文によって、致重跡恩賞地下長尾十町内六町は渋谷氏惣領の手を離れ、庶家岡本氏領となつた。しかし、当時は遠隔地所領の知行が実質を失いつつあつたので、遊り渡した重勝にとって実質的な損失はなかつたと考えられる。以上の考察から、致重跡恩賞地のうち六町は、惣領重勝を経て、庶家岡元重興、その子尚重へと伝来したことがわかつた。尚重以降どのように伝来されたかは不明であるが、これ以降の史料に下長尾六町が見出せないので、南北朝期に退転して不知行となつたものと推定される。

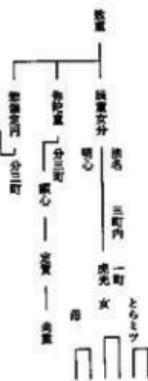
次に、長尾太平寺（太平寺）に寄進された致重跡恩賞地一町について検討しよう。太平寺は早良郡桧原村にあつた禪宗寺院であるが、近世の宝永期にはすでに廃絶して、その跡が残るばかりであった。⁽⁴⁾この寺院に致重跡一町が寄進されたのは、次の史料から推定できる。

「寄進狀」

蒙仰候四郎太郎重久⁽⁵⁾孝義筑州比伊郷内水田老町事、何僧⁽⁶⁾可令遣給候□⁽⁷⁾若又御□⁽⁸⁾入僧不法之時者、□□可改候、恐惶謹言

延慶二年十二月廿九日 平重⁽⁹⁾
進上 岡本殿

この文書は端裏書に「寄進狀」と書かれているが、通常の



重氏一 女子
重氏二 関本義理堂 母親の女

いう系譜關係になり、虎光は母明心から三町のうち一町分を譲得したのである。この下長尾一町は、虎光が渋谷(岡本)重興の妻となつたため、渋谷氏の庶流岡本氏に伝來したと考えられるが、詳細は不明である。

これに対し、阿陀堂（禪心）および碧領定円に伝來した各三町は、相伝系図によるといすれも定質（重興）を経て尙尚に伝來した。これは、顯心が定円の妻となつたために、両者の恩賞地が合^一したためであろう。總領定円に伝來した下長尾三町は、貞和二年（一一四六）十一月二十六日の重勝宛死印と見え、子の重勝に一旦譲与されたが、翌年次のような文書が出された。

讓與
所領事

若王丸斎

筑前国相良郡内下長尾水田式町七段・同刑部次郎屋敷

致重跡への配分状には、有重跡への配分状と同じく、相続人の名前が記されただけで、各人への配分数は記されていなかつたと考えられる。

姉辰童の相続分三町のうち一町は虎光女に譲与された。「入院氏系図」によると、辰童（明心）は重氏の室となつていて、

右所領者，依為弘安合戰勳功、令相傳之間、養子若王丸所讓與也。至諸御公事者、任先例、可令勳仕之狀如件。

でに安定したものではなかつたことが推定である。

室町期以降の渋谷氏の譲状にも柏原水田・屋敷は見え、応永十三年（一四〇六）十一月十五日に重長から子息菊五郎丸（重長）⁽²⁾へ、同三十年（一四三三）八月十六日に重長から子息初五郎丸（重茂）⁽²⁾へ、嘉吉元年（一四四一）二月二十七日に重長から孫の菊五郎丸（重豊）⁽²⁾へ、永伝元年（延徳二年！一四九〇）八月二十一日には重豊から子息又五郎重義⁽²⁾へ、それぞ他の重代相伝の所領とともに譲られた。この延徳一年以降の史料には柏原水田・屋敷の記載は見えない。それでは、

この延徳二年まで同所の知行が渋谷惣領家によつてなされていたかというと、その可能性は極めて低いと考えられる。以上の渋谷氏重代の譲状には、薩摩国内の所領のほか、筑前、筑後、甲斐、美作、相模などの相伝の所領が記されているが、この時期にこれらの遠隔地所領の知行がなされていたとは考えがたい。応仁文明期にはすでに、柏原の近隣にある片江村⁽²⁾、片江郷⁽²⁾、比原⁽²⁾（桜原）村、比原郷⁽²⁾、長尾などが大名領國の知行制の中に包摶され、大名家臣への知行地と化している。⁽¹⁾おそらく柏原も同様であったと考えられる。また、これらの建築二年の重門譲状から延徳二年の重慶譲状までは、文言が画一的で、「重門以後所領之事、雖有數聲之兄弟、守其器用、惣領一人」⁽²⁾「不殘可譲与之也、若背此旨、所領、分與數子之輩者、不可有重門之子孫」⁽²⁾というような文言が必ず見られる。これは、渋谷氏が惣領制の危機を乗りきるために、從来

の分割相続から惣領単独相続への転換を宣言したものである。これらの「重代相伝」の敷在所領は全てが当知行であつたわけではなく、惣領の優越性を象徴する意味があつたと考えられる。つまり、弘安合戦恩賞地である渋谷有重跡の比伊郷内所領の知行は、南北朝期には動搖し、渋谷氏側は九州探題を頼つて所領の確保を図つたがそれも安定せず、南北朝後期から室町期にかけて、その知行は有名無実となつたと考えられる。

（二）渋谷致重跡恩賞地

次に有重の弟致重への比伊郷内恩賞地の動向をみよう。致重に対する恩賞地配分状は現存しないが、瀬野精一郎氏も指摘されるように、致重に対して筑前国下長尾の田地が配分された。次の史料はその伝來の状況を示している。

〔藤原〕
「下長尾系図」

筑前国下長尾田地十町相伝
系図

渋谷平五郎
弘安合戦討死毛三給

この配分状を表にしてみた。これによると、三名の有重勝に与えられた比伊郷内の配分地は田地十町・屋敷二ヶ所・畠地六反である。田地を耕地片毎に集計すると、行武名は計十二筆三町九反一四〇歩、若国名は計二十一筆六町一八〇歩で、合計すると九町九反三三〇歩となり、約十町ということになる。耕地片の平均畠数は約三反であり、この恩賞地は、散在する零細な耕地片を多数集積したことがわかる。また屋敷は行武名内に二字あり、畠は逆に若国名内に二筆六反ある。この配分状の坪付に見える名・ホノケのうち、若国・松本・河原(こうら)・柿田・打越・フル河(ふるこう)・春田(原田)・大牛田・中島・横枕などの地名が、小字名その他で残っており、それは現在の福岡市南区柏原一帯に分布している。⁽¹⁾

次に、三名の有重勝に配分された比伊郷内の恩賞地がどのように伝来したかを検討したい。この配分状に記された田地十町、屋敷四ヶ所、畠六反および長瀬庄内畠地が被給者三名によつてどのように分割され、知行されたかはわからない。また、これらの所領が鎌倉期にどのように伝来されたかも不明である。ただし、この三名の中の公重後家の夫公重は渋谷氏の惣領であり、有重勝賞地の一部が渋谷氏の惣領家に伝來したことは確実であろう。それは、渋谷氏の惣領で公重の子定円(重基)が承永二年(一三四三)二月八日に子息重勝に与えた譲狀⁽²⁾に、

一所 筑前國柏原内惣領校屋敷田畠

と見え、また、貞和二年(一三四六)十一月三十日重勝死定

と見え、また、貞和二年(一三四六)十一月三十日重勝死定 円譲狀⁽³⁾にも、

一所 筑前國佐波良郷内長尾・柏原西村定円知行分

一所 筑前國長瀬庄島地

井上清門

と見えていることからも裏付けられる。渋谷惣領家には、有重勝賞地のうち、柏原・長瀬の田畠屋敷が伝来したのである。先に引用した正応元年の配分状では、比伊郷内の田畠屋敷が行武名・若国名の両名に散在していたが、南北朝前期には「柏原内惣領校屋敷田畠」「柏原村」と記載されているようにな、名が消滅し、かわって村が成立していることが注目される。管見の限り、この承永二年二月八日の定円譲狀が、「柏原」の地名の初見である。

その後、渋谷惣領家が知行する比伊郷内の有重勝賞地の「筑前國柏原水田・屋敷」は、貞和五年(一三四九)閏六月二十三日、渋谷重勝より子息虎松丸(重門)に譲られた。同所は建德二年(一三七二)十月十五日、重門より子息虎五郎丸(重頼)に譲られ、至徳三年(一三八六)正月六日には、渋谷一族中のものもつ筑前國比郷内本知行分が九州探題今川了俊から安堵された。同年四月三日には筑前國比郷地頭職が今川了俊によつて安堵されている。この正月六日付了俊安堵状には、「如元令遵行」という文言が見えることから、当時渋谷氏の遠隔地所領支配が危機におちいり、比伊郷柏原の知行もす

渋谷有重跡恩賞配分地

(1) 田 地

a 行武名

横 枕	1 反半
松 本	9 反
蘿	90 歩
月 田	3 反
下 河 原 田	2 反大
柿 田	1 町 1 反
坂 本	5 反半
タウシタ	2 反大
打 越 北	半
打 越	3 反
同 上	50 歩
今 山 入 道 蘿	60 歩

b 若国名

打 越	3 反
同 上	300 歩

フル道	小
ヤカタカ浦	4 反
同 上	1 反小
ナソエ	半
キハナ	2 反
カキソイ	半
門 田	2 反
河 原 田	3 反
坂 本	6 反
フル河	小
フツ原	60 歩
基 本	1 反小
ツカミカ下	1 町 3 反
中ヲサ田	8 反
石 鮎	3 反
春 田	2 反小
西 大 手 田	3 反
麦 田	3 反
柳 田	8 反半内 2 反 300 歩

(2) 屋 敷

a 行武名

-- 宇	惣檢校入道
一 宇	六郎

(3) 岛 地

a 若国名

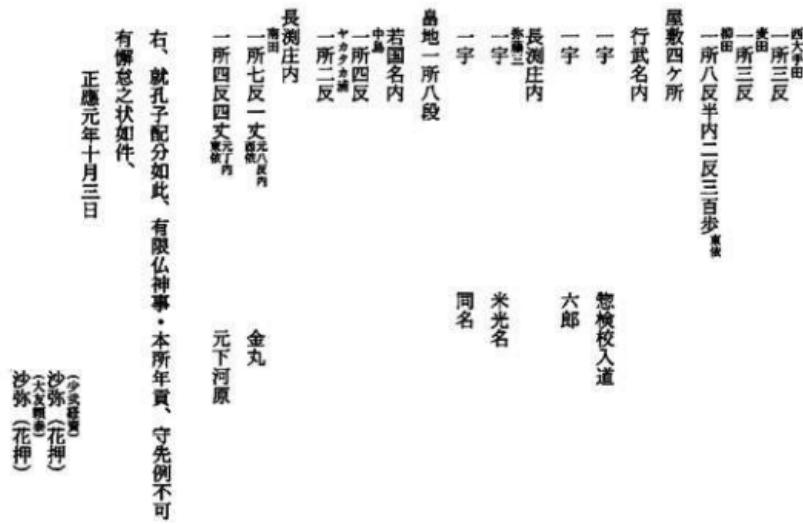
中 島	4 反
ヤカタカ浦	2 反

b 長 澄 庄

一 宇 (弥 蘿)	米光名
三) 一 宇	同名

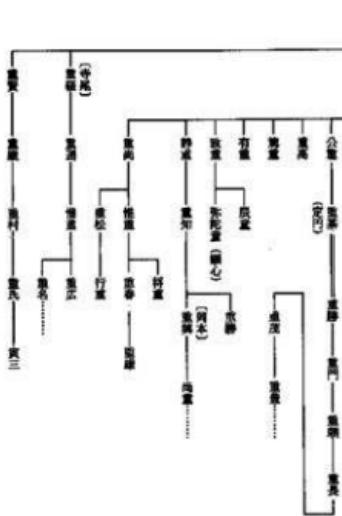
b 長 澄 庄

南 田	7 反 1 丈	金 丸
	4 反 4 丈	元 下 河 原



渋谷有重が弘安四年の蒙古合戦で戦死した歴功によつて、⁽¹⁾
その跡である孫子龜王・龜鶴および養子平次公重法師後家の
三名に恩賞地が与えられたのである。龜王・龜鶴の両名は「孫
子」とあるばかりで、具体的な系譜関係は不明である。平次
公重は「渋谷氏系図」によると、有重の兄で慈願である。こ
の「養子」を公重にかけて理解するならば、この系図の記事
は誤りとなるし、この系図が正確であるならば、「養子」は公
重後家にかかると解釈しなければならない。

渋谷氏略系図（入来文書）より作成



一、渋谷氏への恩賞地の検討

(一) 渋谷有重跡恩賞地

薩摩國御家人渋谷有重跡に對して恩賞地が配分されたのは、相田二郎氏が弘安の役後第二回配分にあたるとされた正応元年（一二八八）十月三日である。その史料を掲げよう。

弘安四年蒙古合戰勳功賞筑前國早良郡比伊郷地頭職配分事
一人渋谷平四郎有重法師跡

田地拾町

行武名

横代

一所一反半

松本

一所九反

月田

一所三反

下河間田

一所二反大

春出

一所一丁一反

坂本

一所五反半

タツシク

一所二反大

打越

一所半

打越

一所三反

今山入道

一所六十步

若國名内

打越

一所三反

一所三百步

フル通

一所小

キハナ半

カツシイ

一所二反

西上

一所四反

フル通

一所一反小

ナノエ半

カツシイ

一所二反

西上

一所二反

打越

一所三反

石崎

一所二反

春田

一所二反小

中坂田

一所一反小

フク原

一所六十步

坂本

一所一反小

フク原

一所一丁三反

カツシイ

元寇恩賞地としての筑前国早良郡比伊郷(一)

—渋谷氏知行分—

佐伯弘次

はじめに

一度にわたる蒙古襲来は当時の日本に多大の衝撃と影響を与えた。鎌倉幕府が、襲来後に対処しなければならなかつた縣家の一つが恩賞問題であった。新たな恩賞地の創出に苦慮した幕府は、文永の役後は、建治元年から弘安元年にかけて恩賞分配を行ひ、弘安の役後は、計七回にわたりて分配を行つた。分配地は筑前・筑後・肥前・肥後・薩摩の各國に及んでいるが、その対象地は、開所地のほかは関東御領や関東口入地であつた。関東御領であつても、実質的には得宗領化していたという指摘もある。⁽⁴⁾

これら蒙古合戦歴功地いわゆる元寇恩賞地の中に、今回の

発掘地を含む筑前国早良郡比伊郷がある。比伊郷は、「和名類聚抄」には「比伊」と記される和名抄綱であり、近世においては、樫原(柏原・桧原・東油山・堤・片江・長尾・田島・鳥飼・龜原・荒江の橋井川流域の十ヶ村が「橋井郷」を形成

していた。この比伊郷は、正応元年十月三日に、薩摩国御家人渋谷有重勝孫子龜王・龜鶴・養子平次公重法師後家らに田地十町・屋敷二字・島地八段が⁽⁵⁾、大陸国御家人称森清親に田地五町・屋敷一字・島地二段四丈⁽⁶⁾、薩摩国御家人武光節兼に屋敷一字⁽⁷⁾が分配されている。また、分配状は現存しないが、肥前国御家人龍造寺家益・渋谷惟重・渋谷致重らにも郷内の田地・島地・屋敷等が分配されていた⁽⁸⁾。このほか、肥後国御家人阿蘇氏に対しても「筑前国早良郡比伊郷内勲功之賞田地」が分配されていたことが推定できる。⁽⁹⁾

以下、これらの早良郡比伊郷内の元寇恩賞地について、御家人ごとに、その分配および伝來の状況を検討し、恩賞地としての比伊郷が惣領制の中でどのように相伝されたか、またこれら薩摩・大隅の在地領主たちの邊境地所領支配がいかなる変遷をとげたかを明らかにしたい。

図 版

PLATE



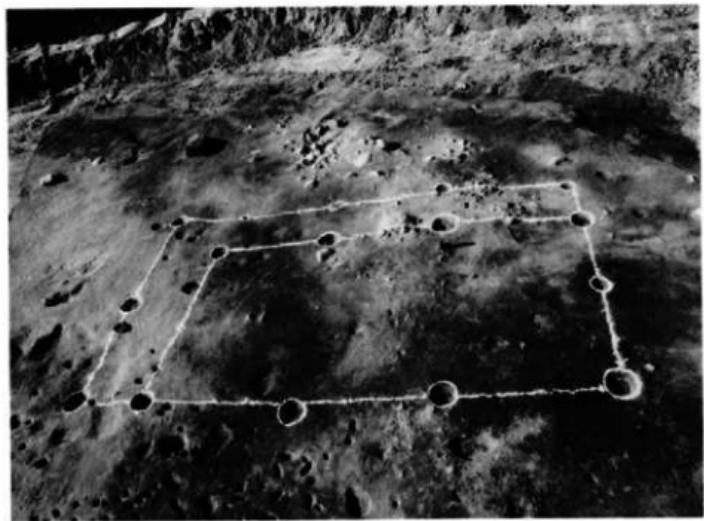
(1) K遺跡調査区西半部



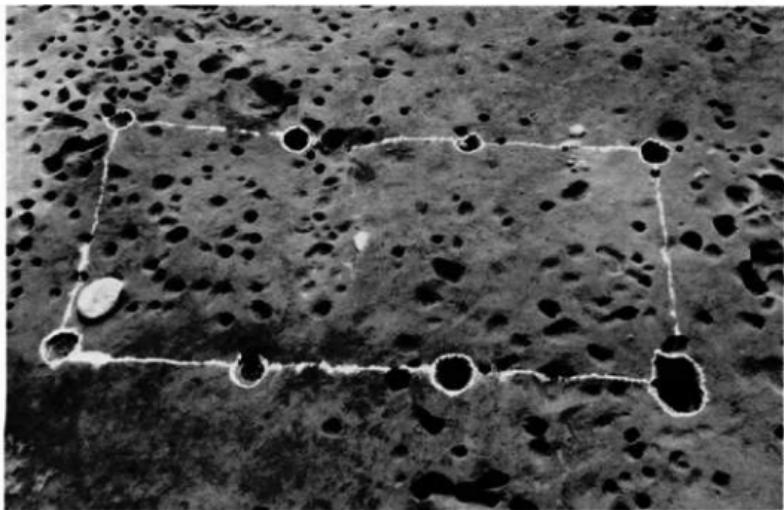
(2) K遺跡方形区画II全景



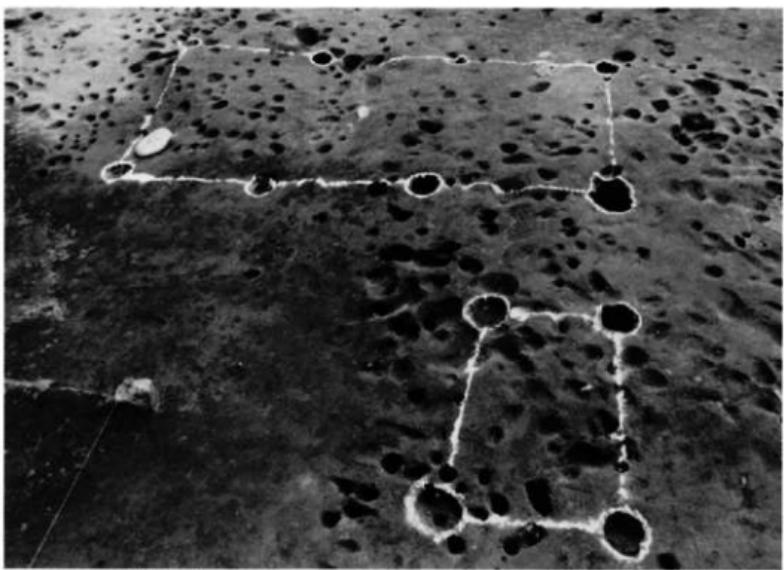
(1) 調査区西端部全景



(2) SB-01 (南から)



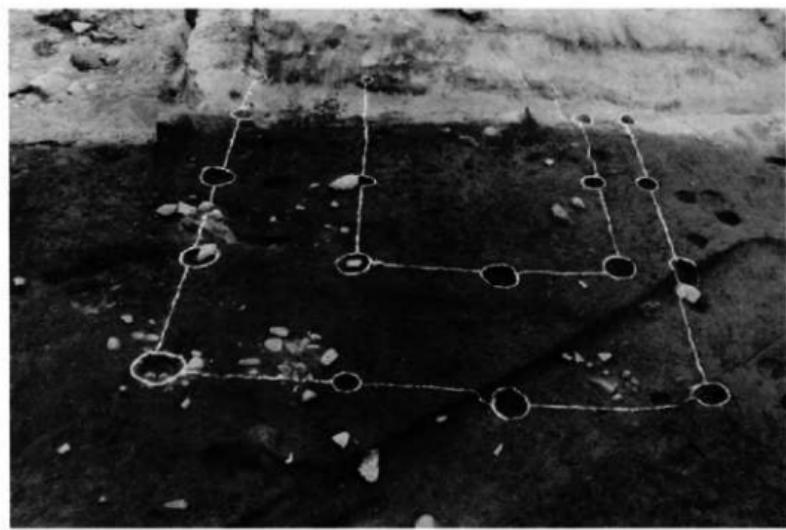
(1) SB-04 (北から)



(2) SB-04 (北から)



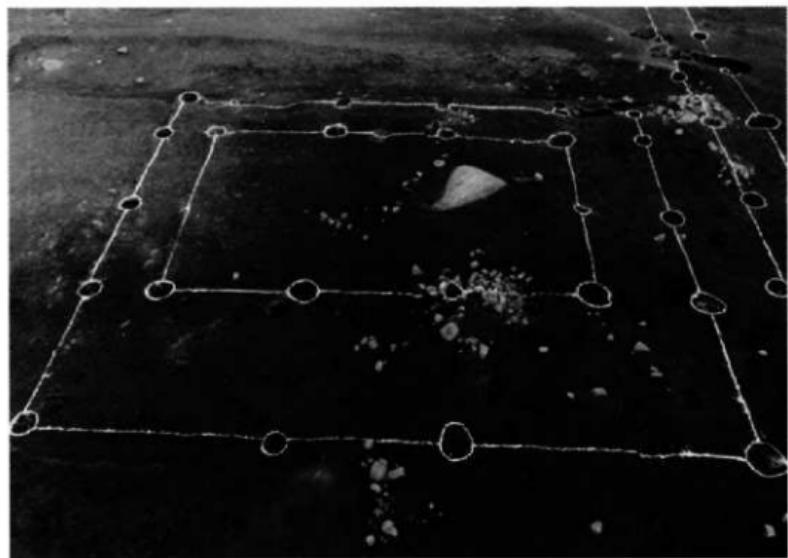
(1) SB-06 (南から)



(2) SB-09 (東から)



(1) SB-21、25 (南から)



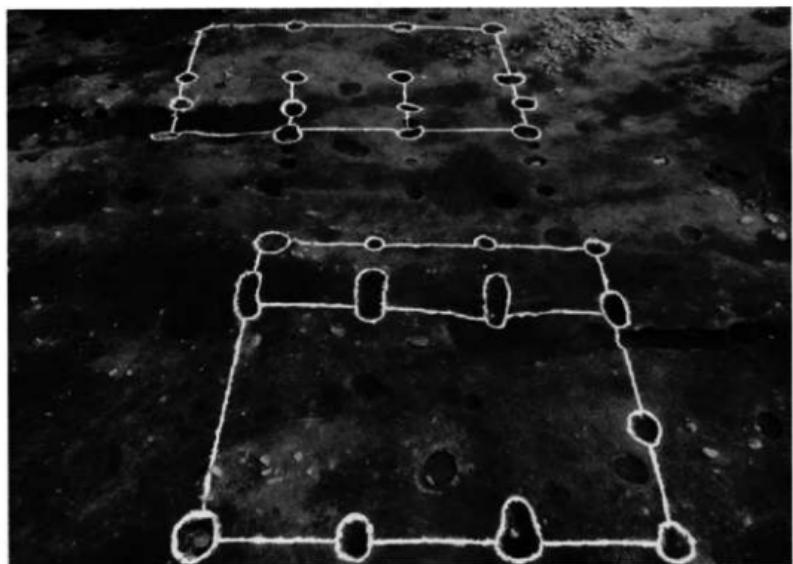
(2) SB-21 (西から)



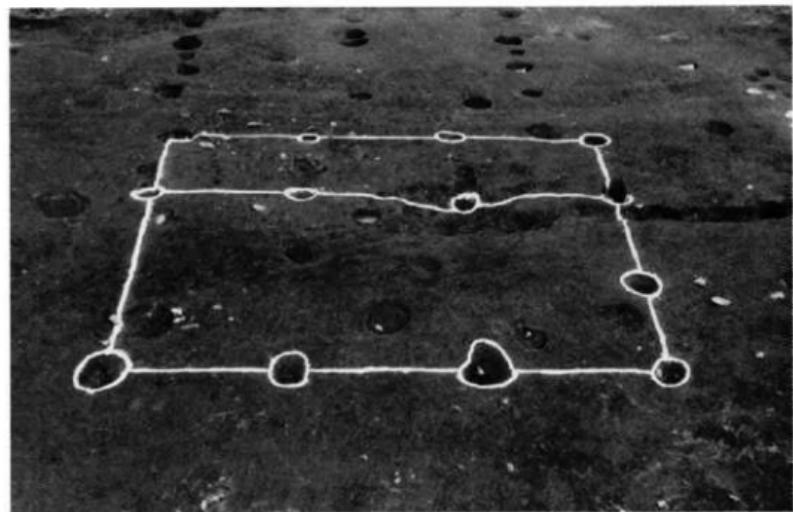
(1) 方形区画II近景 (南から)



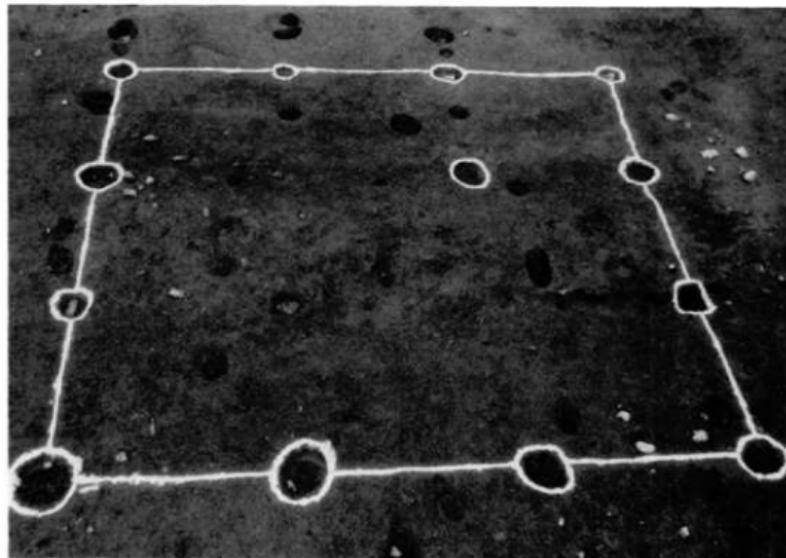
(2) SB-20 (南から)



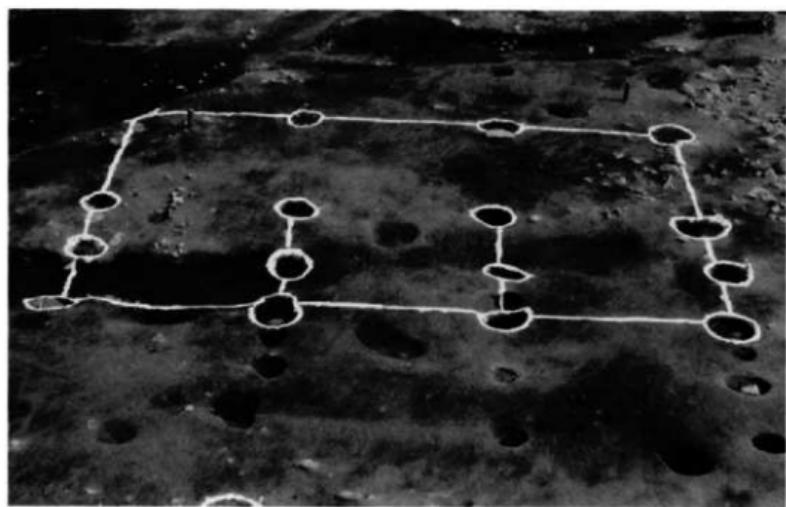
(1) SB-43、45 (北から)



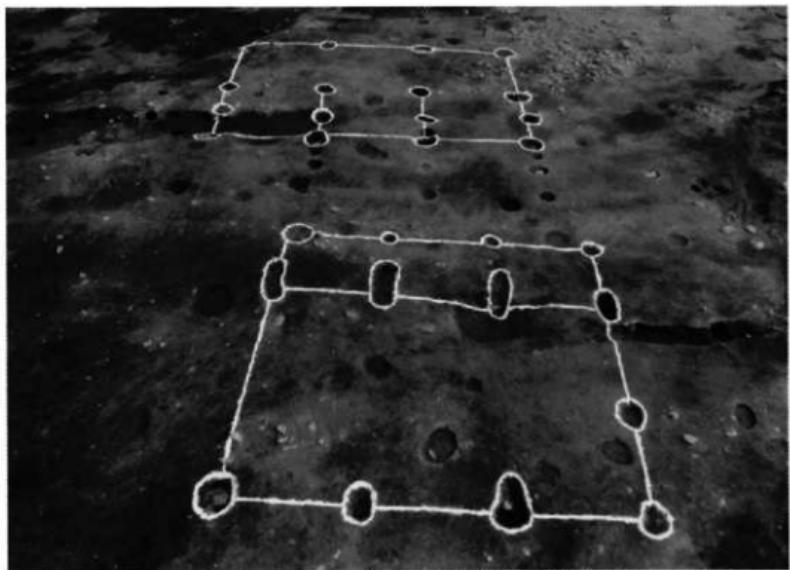
(2) SB-43 (北から)



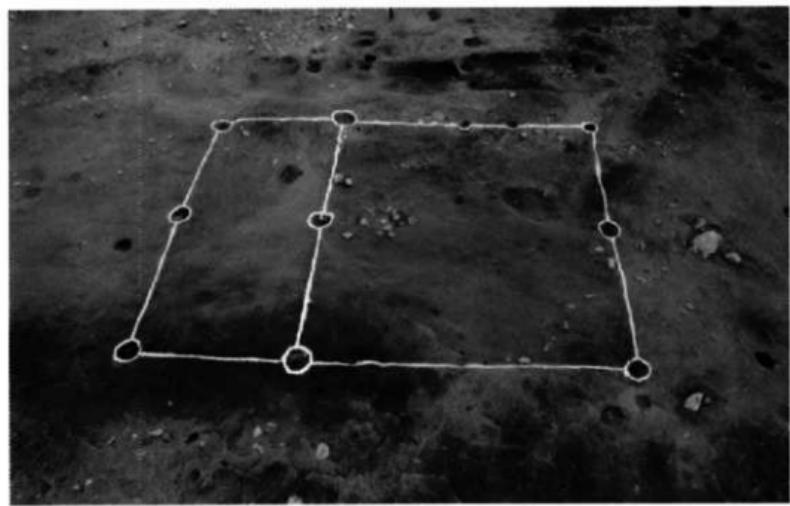
(1) SB-45 (南から)



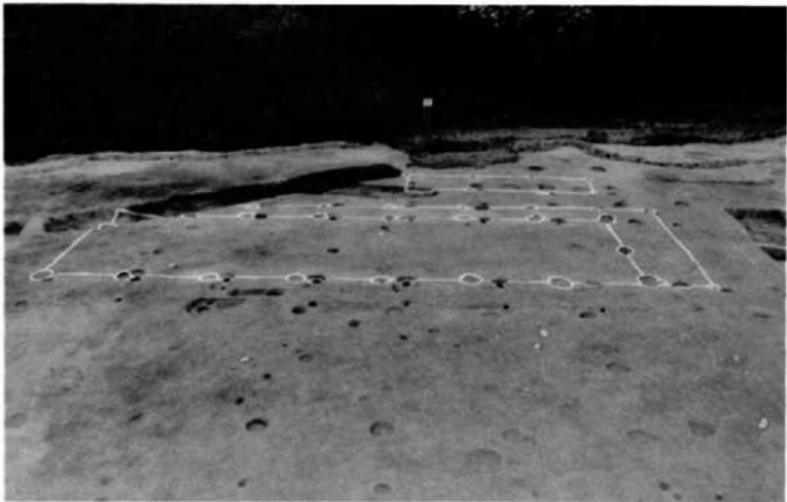
(2) SB-46 (北から)



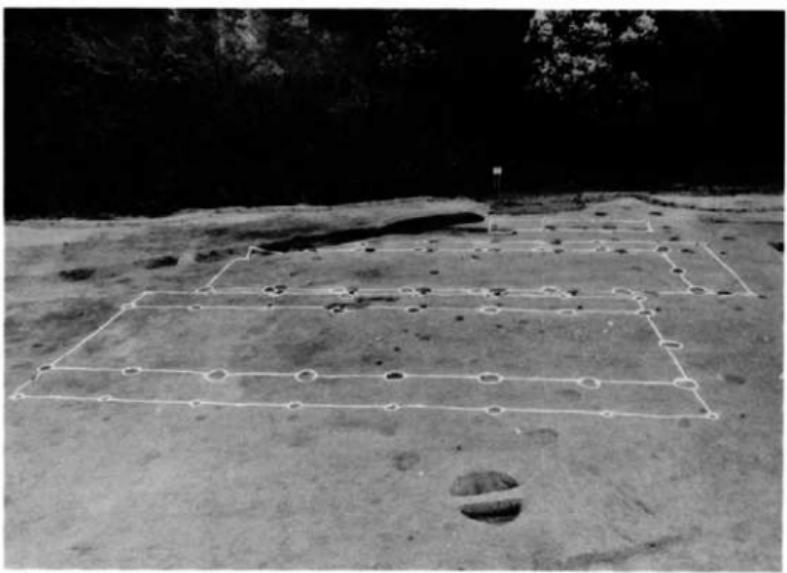
(1) SB-43、46 (北から)



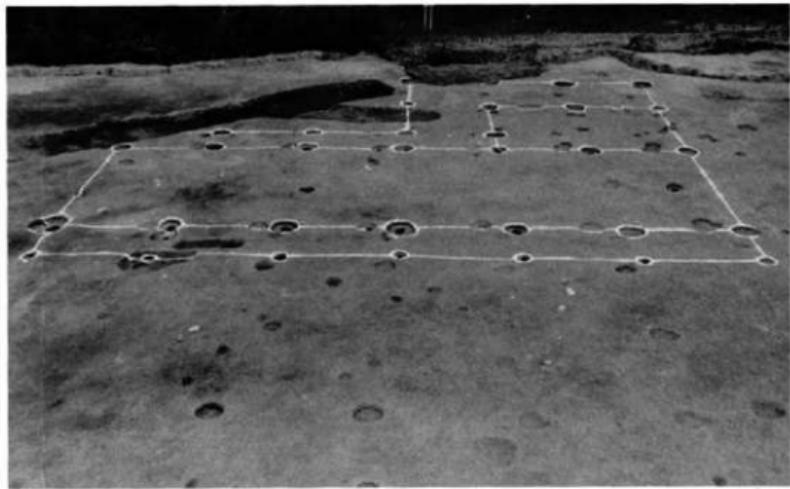
(2) SB-47 (南から)



(1) SB-32, 33 (南から)



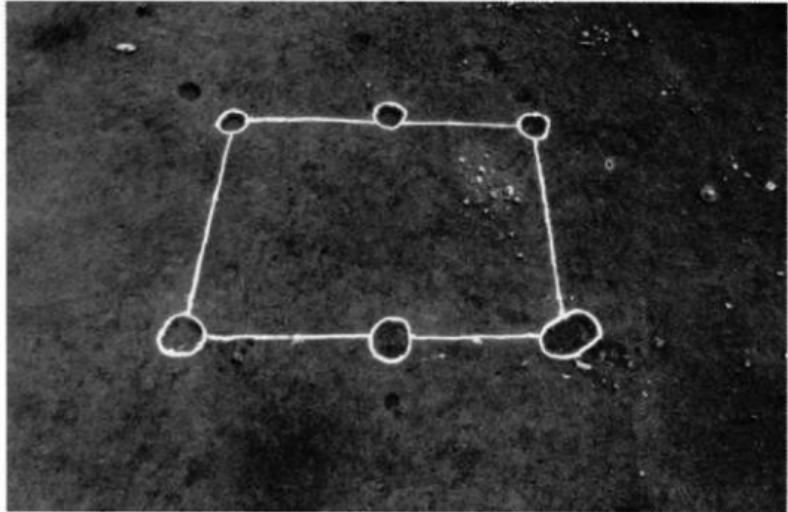
(2) SB-32, 33, 34 (南から)



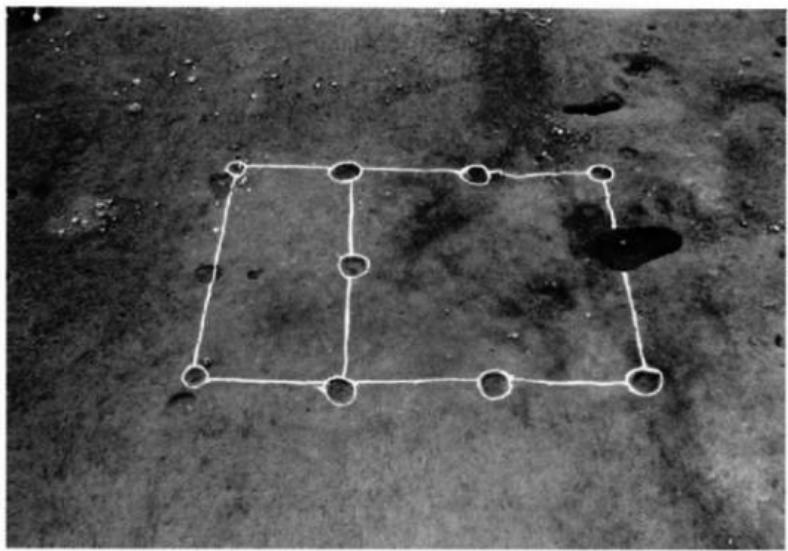
(1) SB-31 (南から)



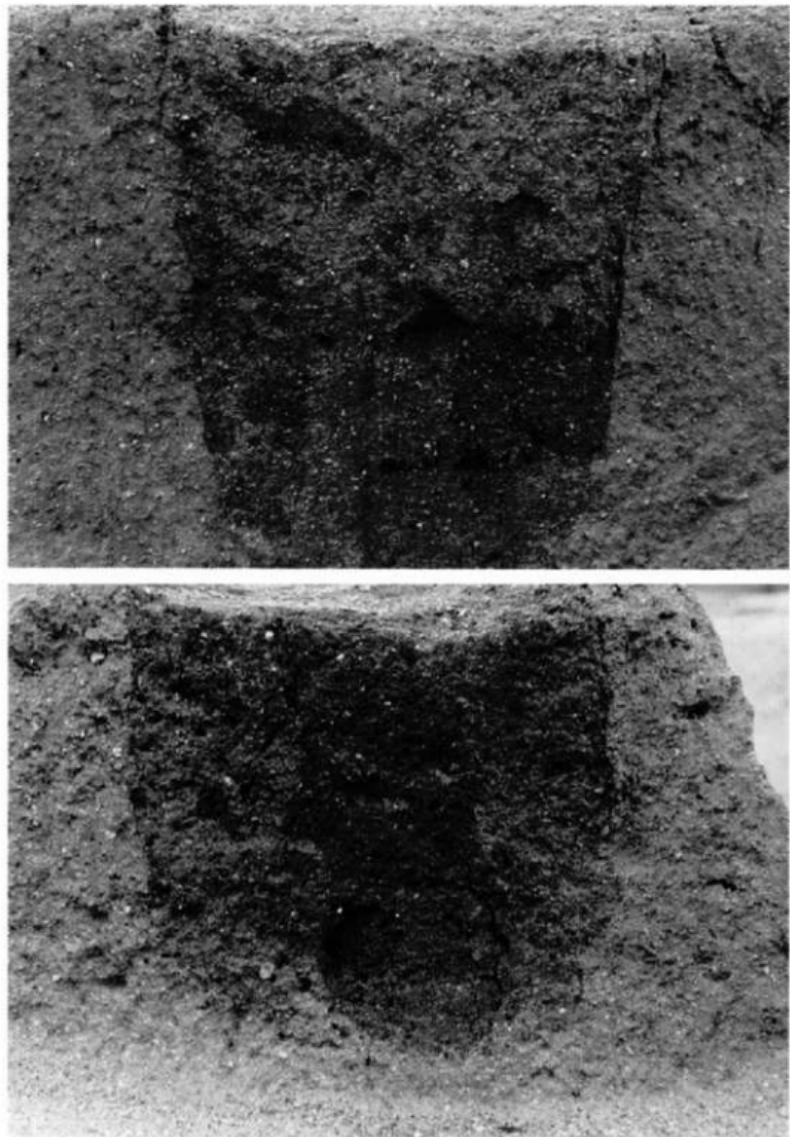
(2) SB-31, SK-01 (東から)



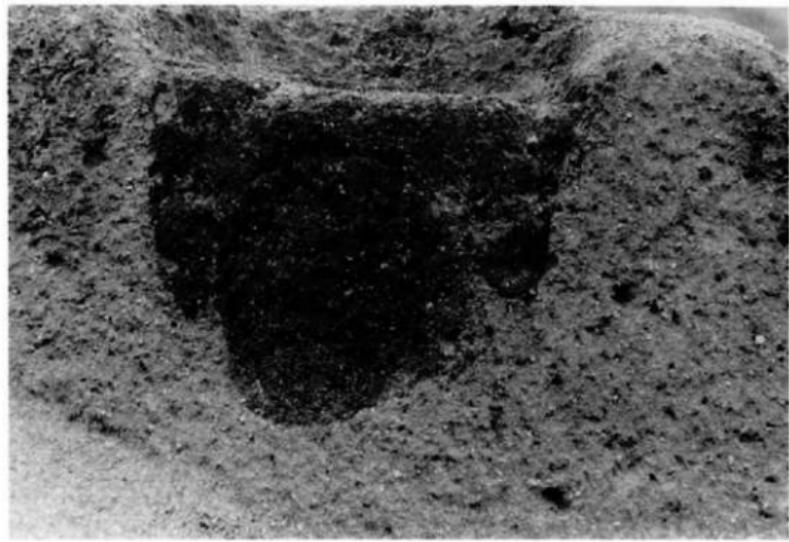
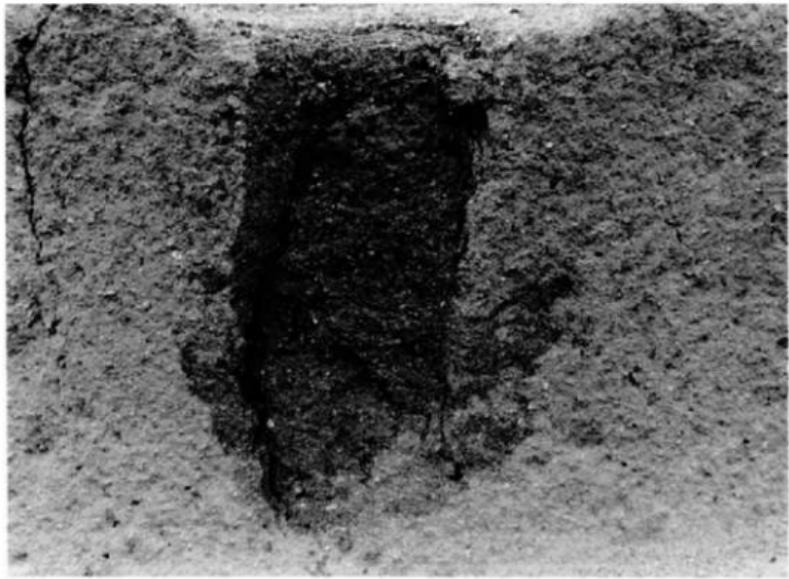
(1) SB-42 (北から)



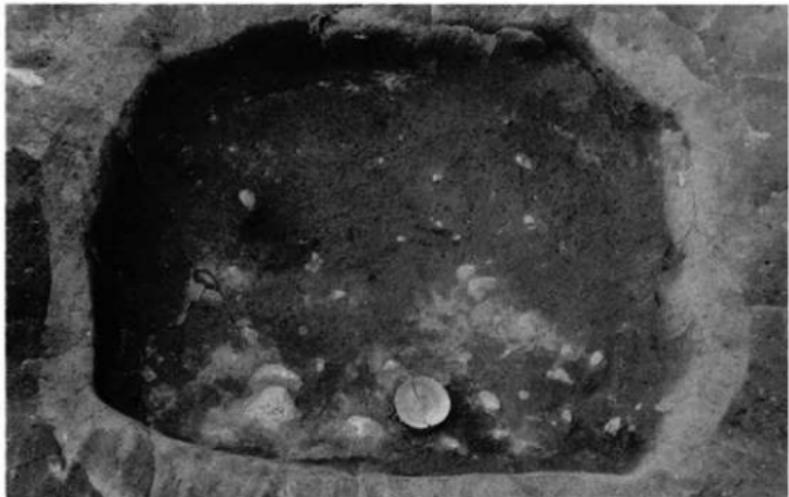
(2) SB-41 (北から)



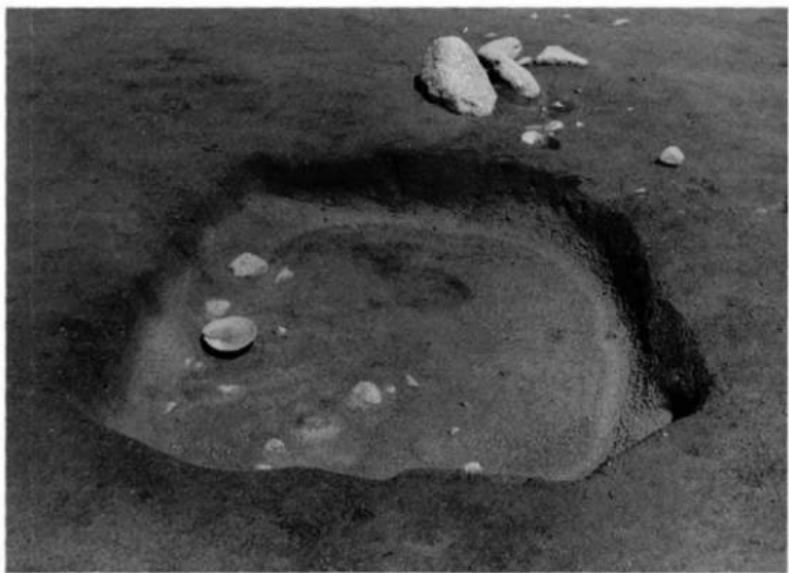
柱穴断面 I



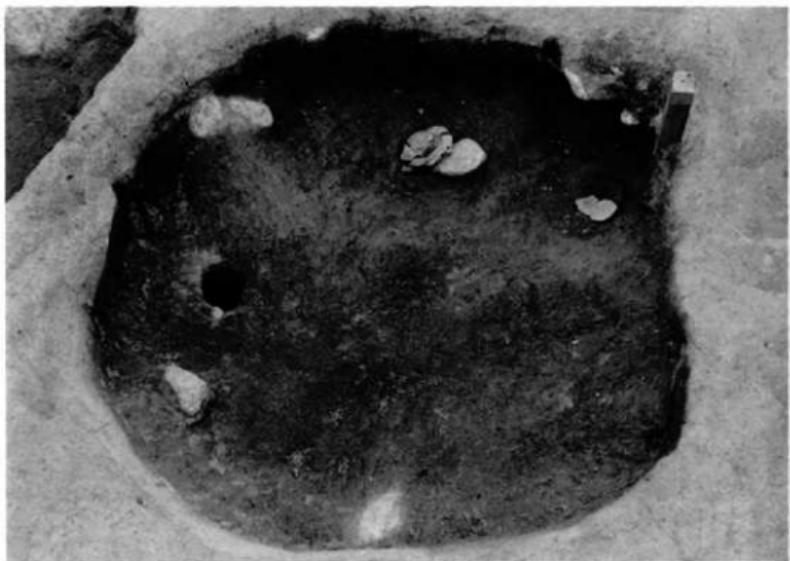
柱穴断面 II



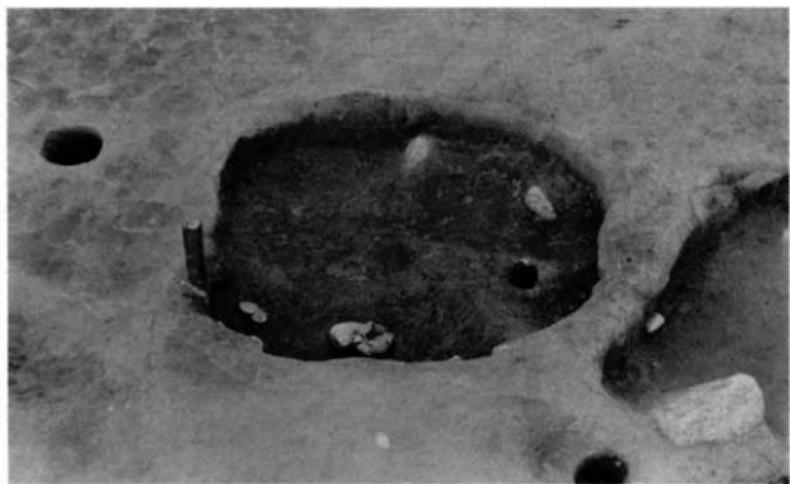
(1) SK-27 (北から)



(2) SK-27 (西から)



(1) SK-26 (西から)



(2) SK-26 (東から)



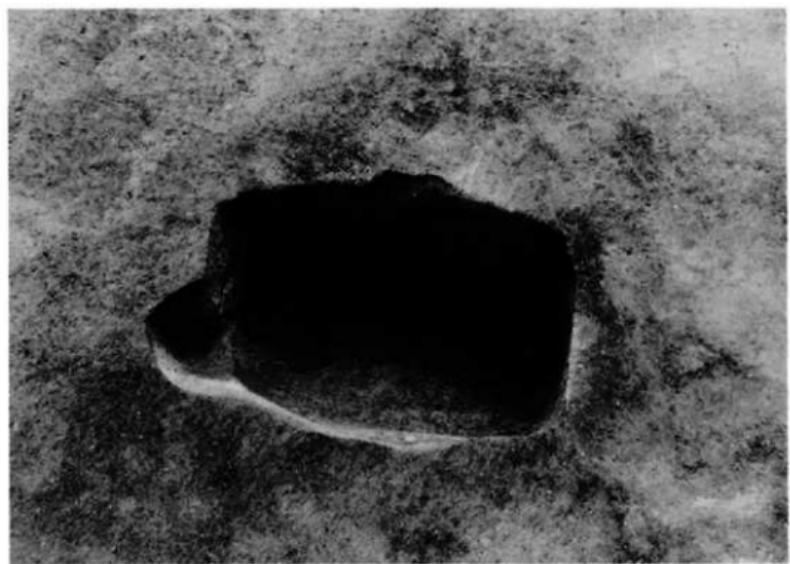
(1) SK-24~26 (東から)



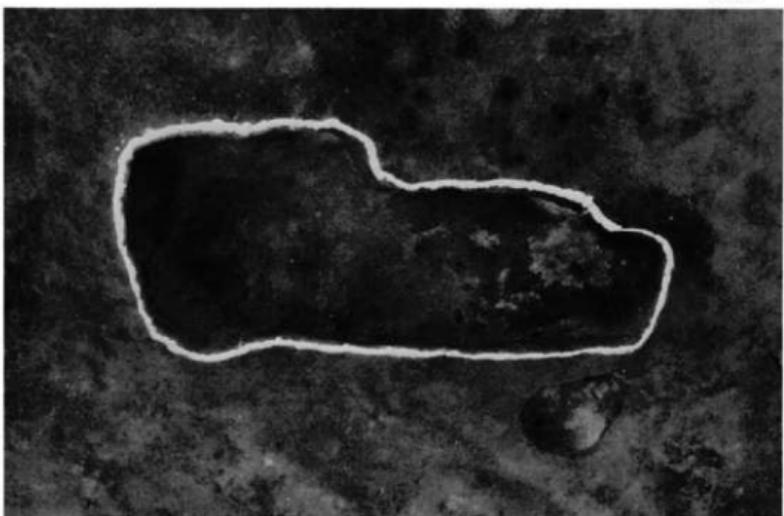
(2) SK-25 (南から)



(1) SK-07



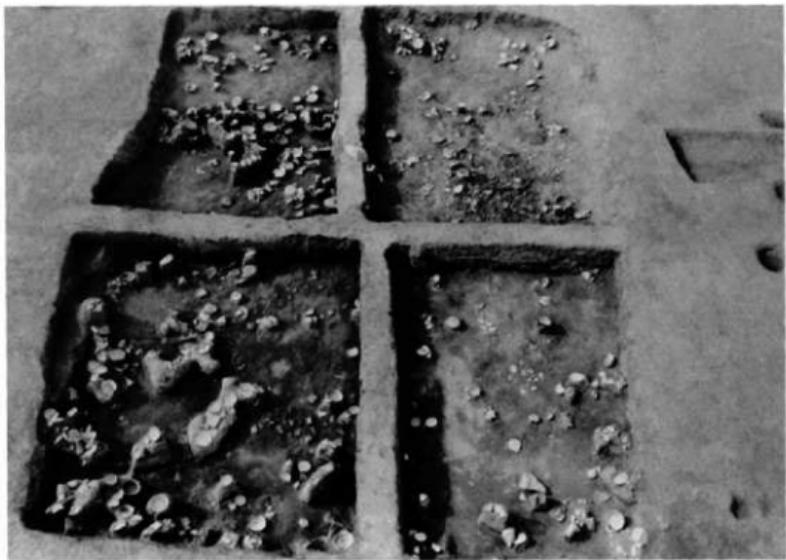
(2) SK-19



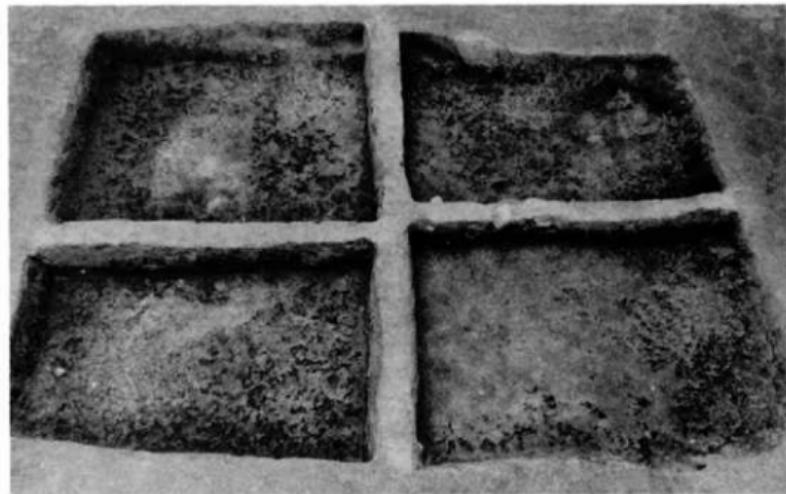
(1) SK-07



(2) SK-02 (北から)



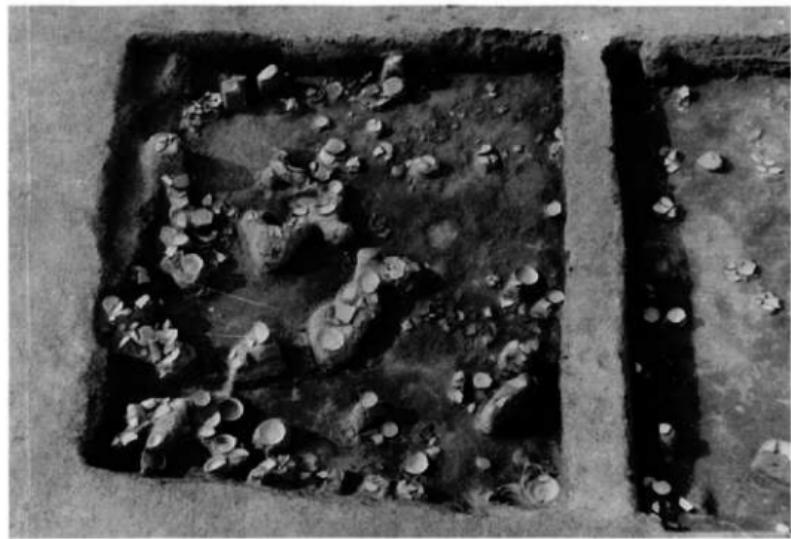
(1) SK-01 (東南から)



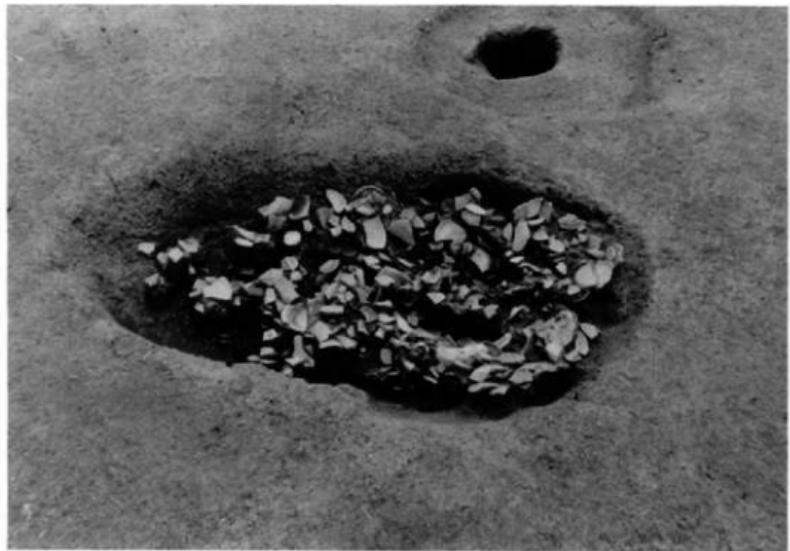
(2) SK-01 (北東から)



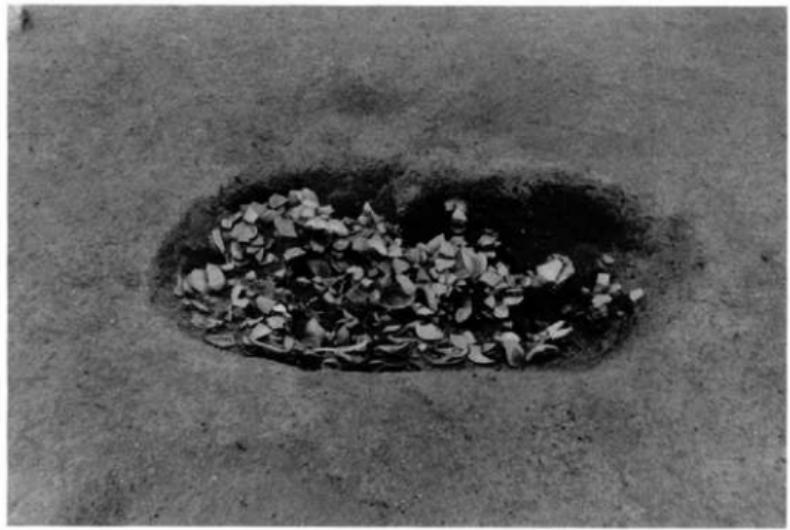
(1) SK-01遺物出土狀況



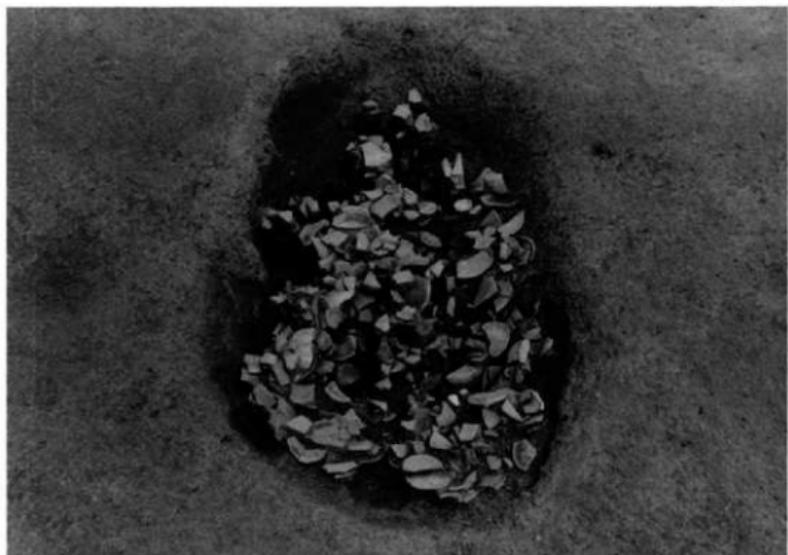
(2) SK-01遺物出土狀況



(1) SK-02遺物出土状況（北から）



(2) SK-02遺物出土状況（南から）



(1) SK-02遺物出土状況（西から）



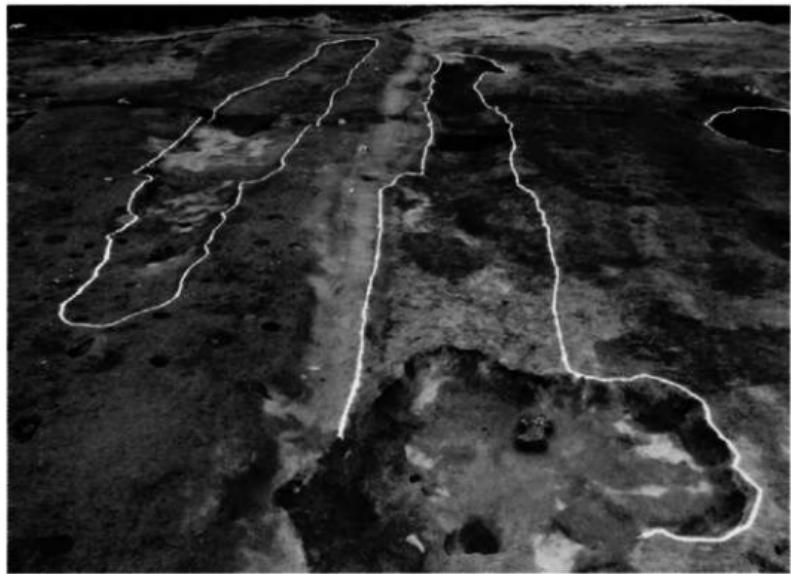
(2) 漆器出土状況



(1) 方形区画溝田 (SD-14、15)



(2) SD-10~13 (南から)



(1) SD-11、13（南から）



(2) SD-14断面



(1) SD-03、04 (北から)



(2) SD-03、04 (南から)



(1) SD-10断面



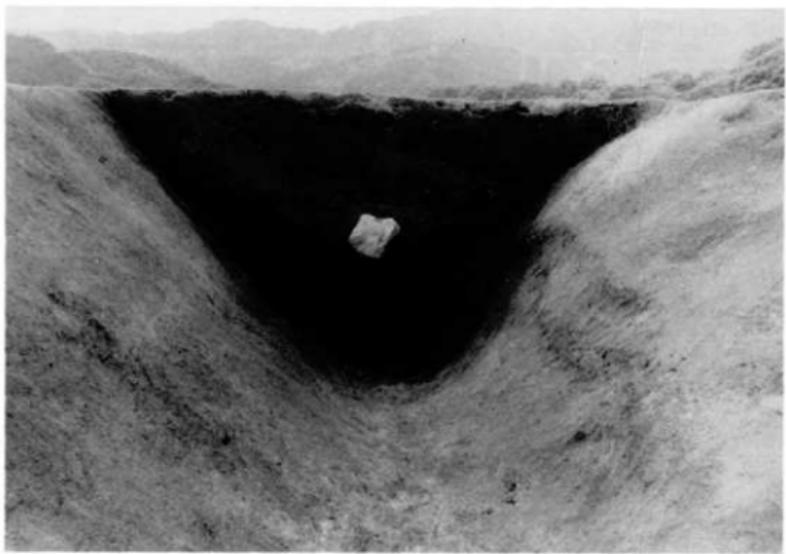
(2) SD-10断面



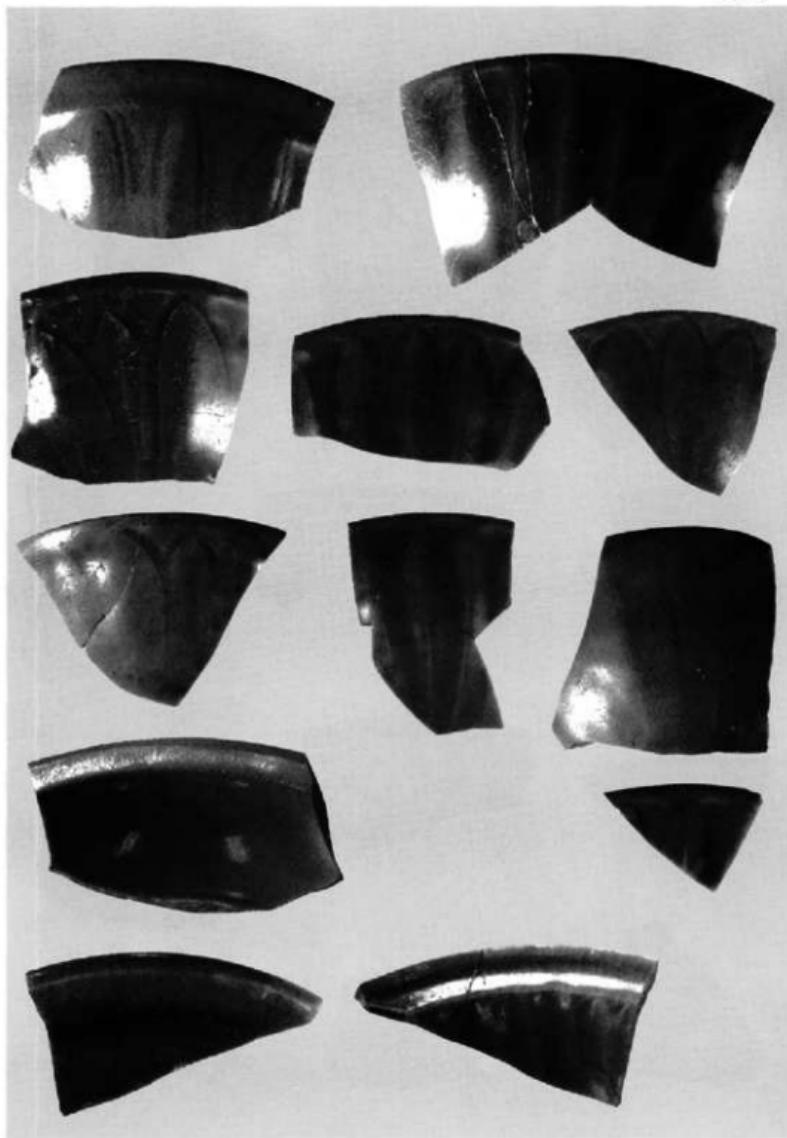
(3) SD-06断面



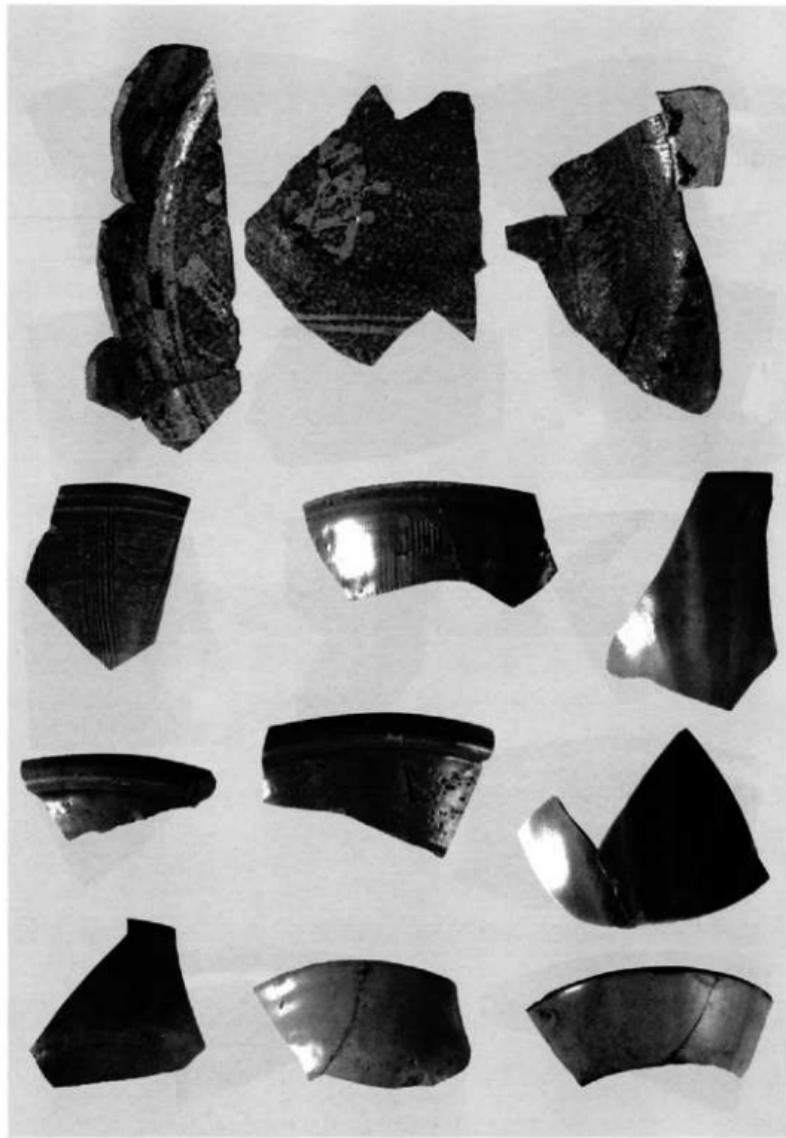
(1) SD-14断面



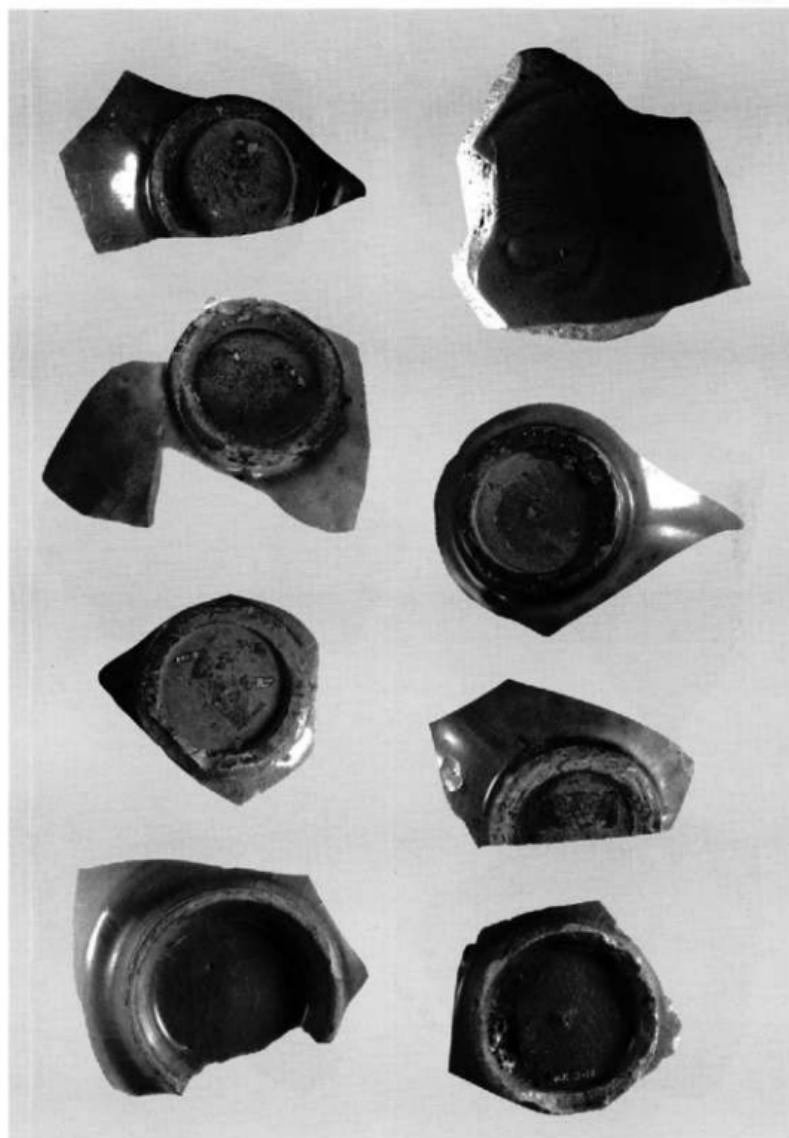
(2) SD-15断面



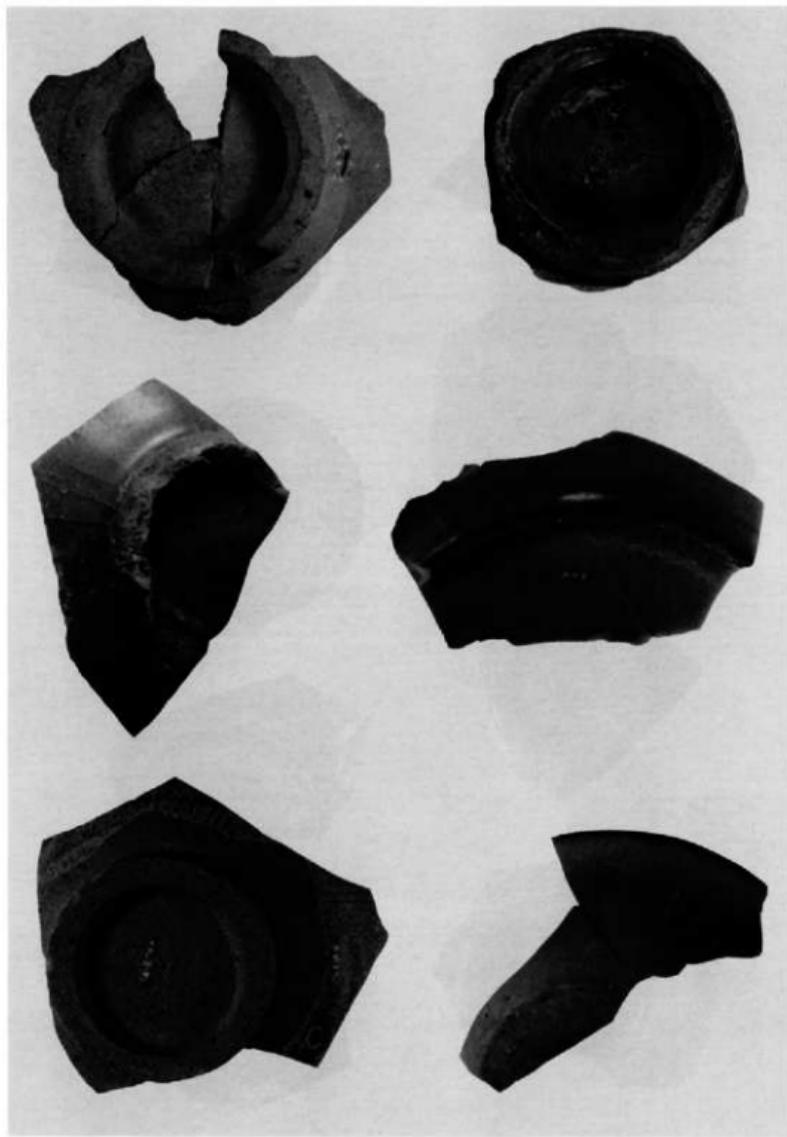
出土遺物 I (青磁器)



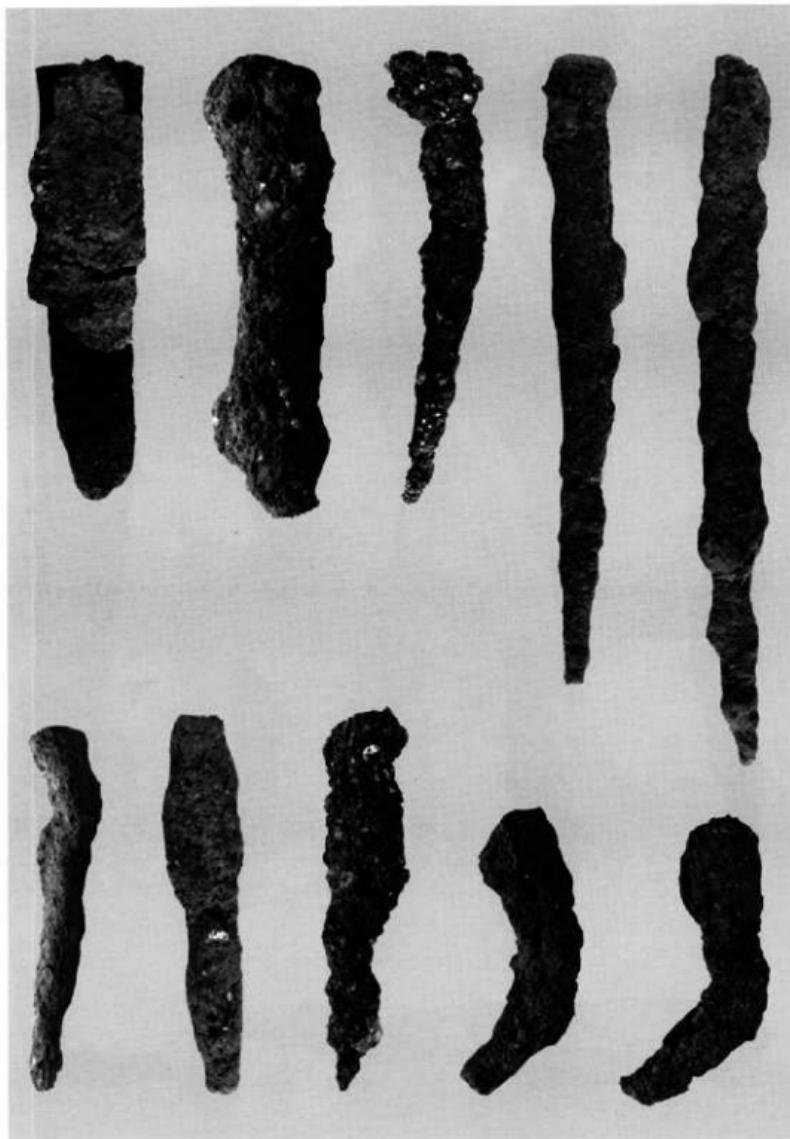
出土遗物II（黄釉盘、青瓷器）



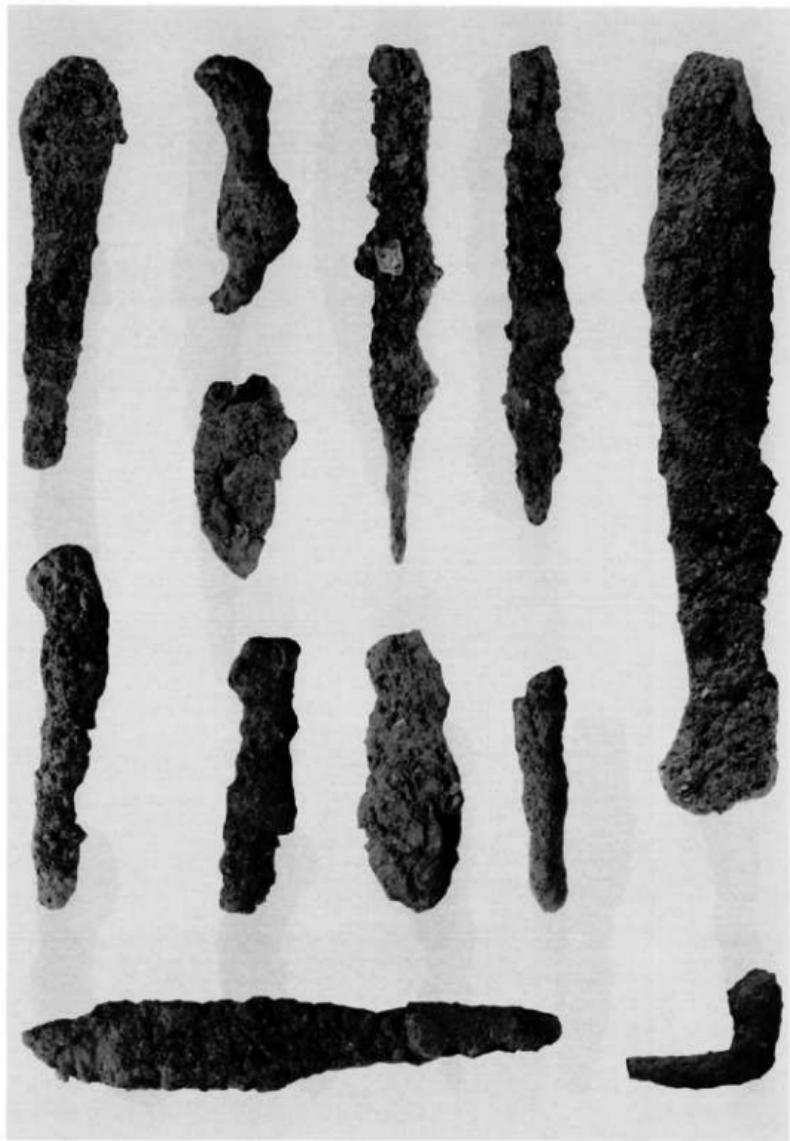
出土遺物III（青磁器）



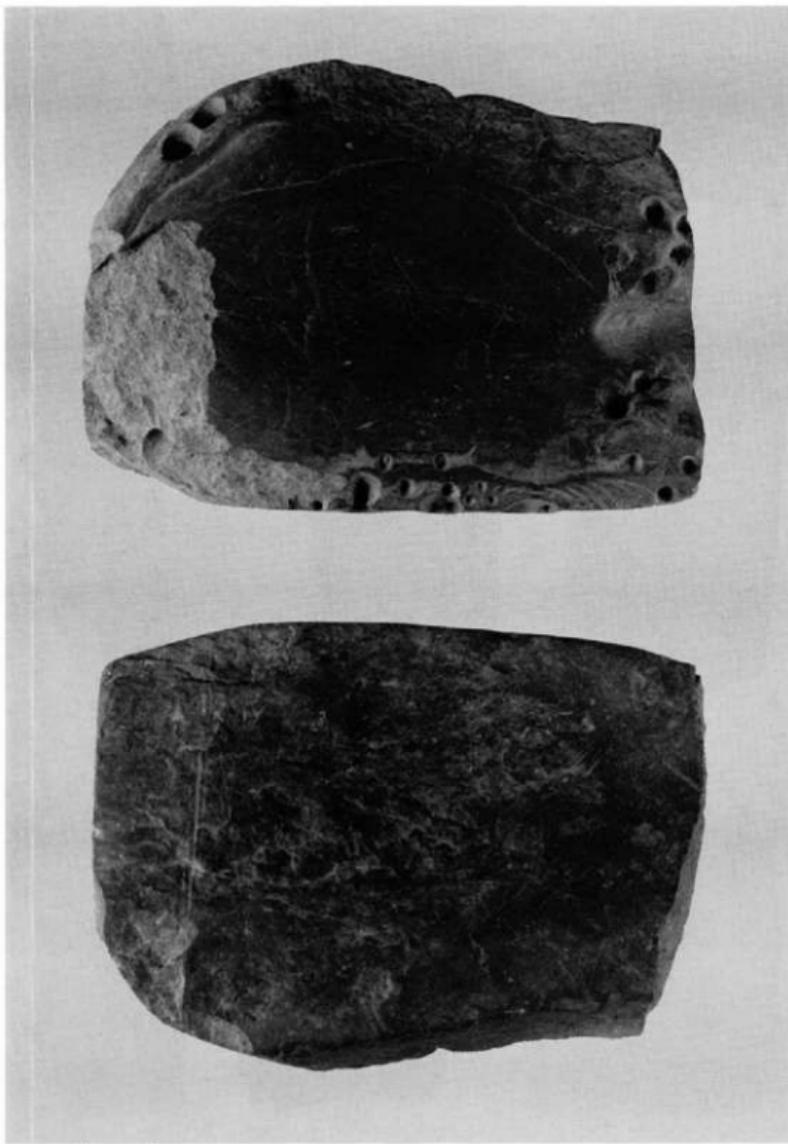
出土遺物IV（青磁器）



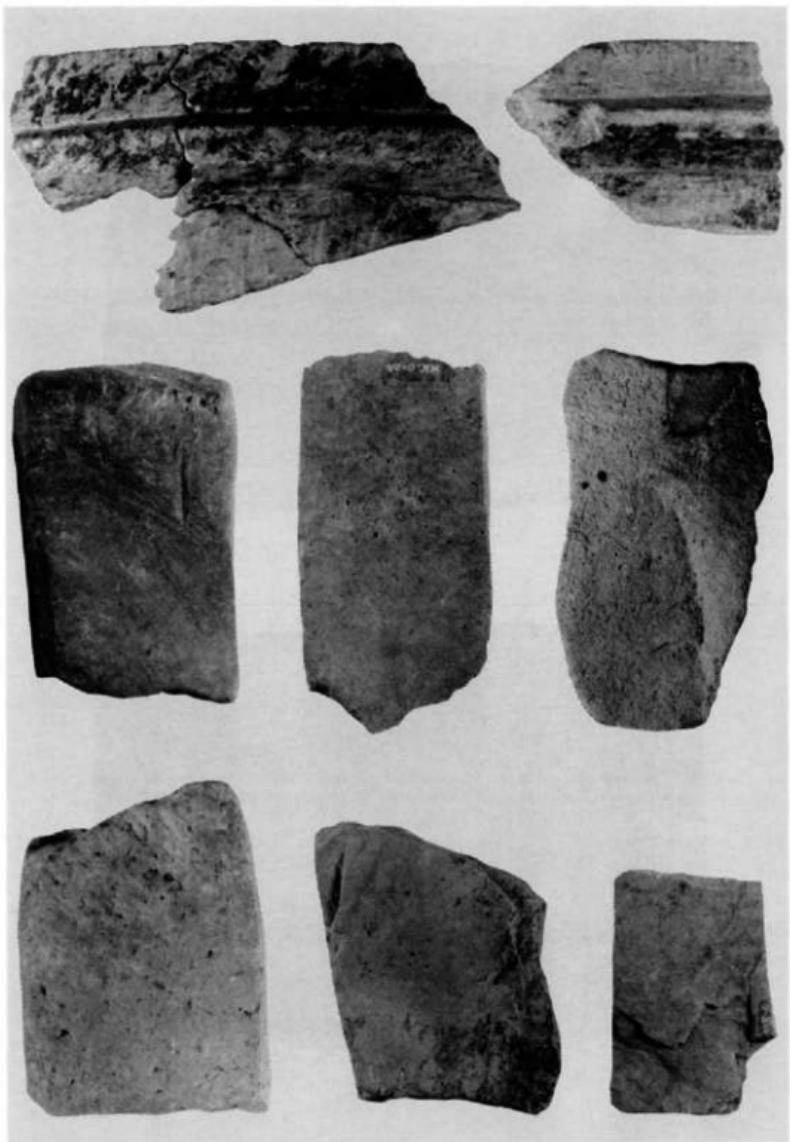
出土遺物 V (鐵釘)



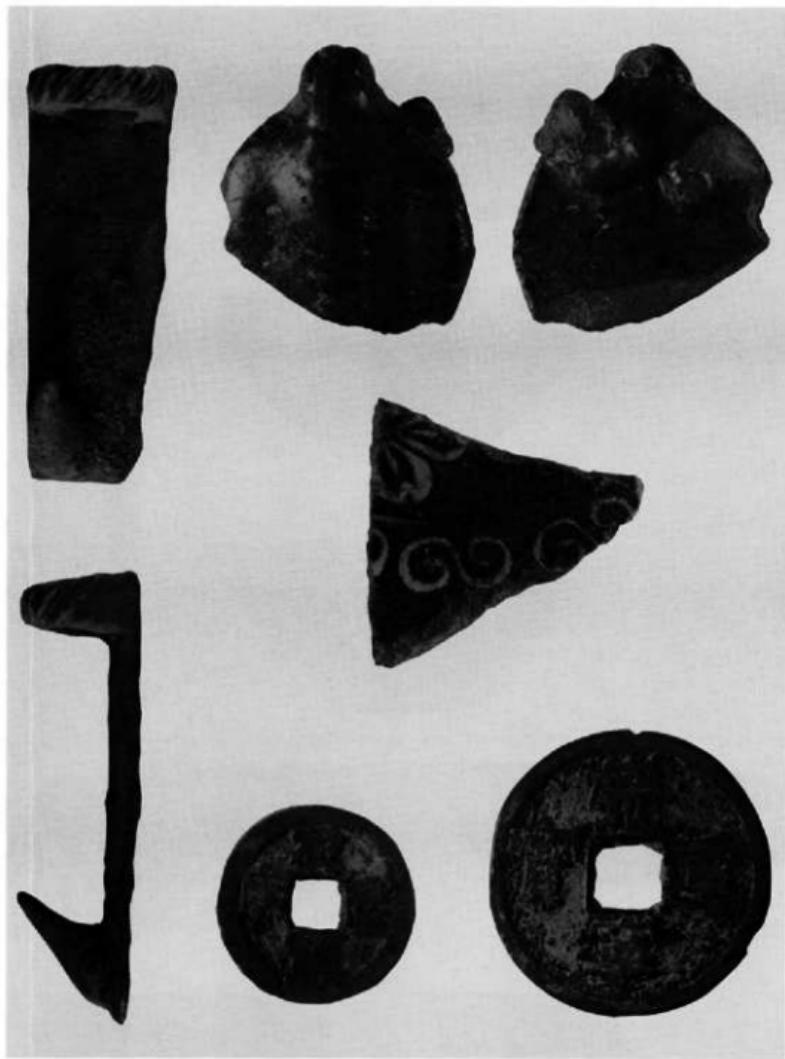
出土遺物VI（鐵製品）



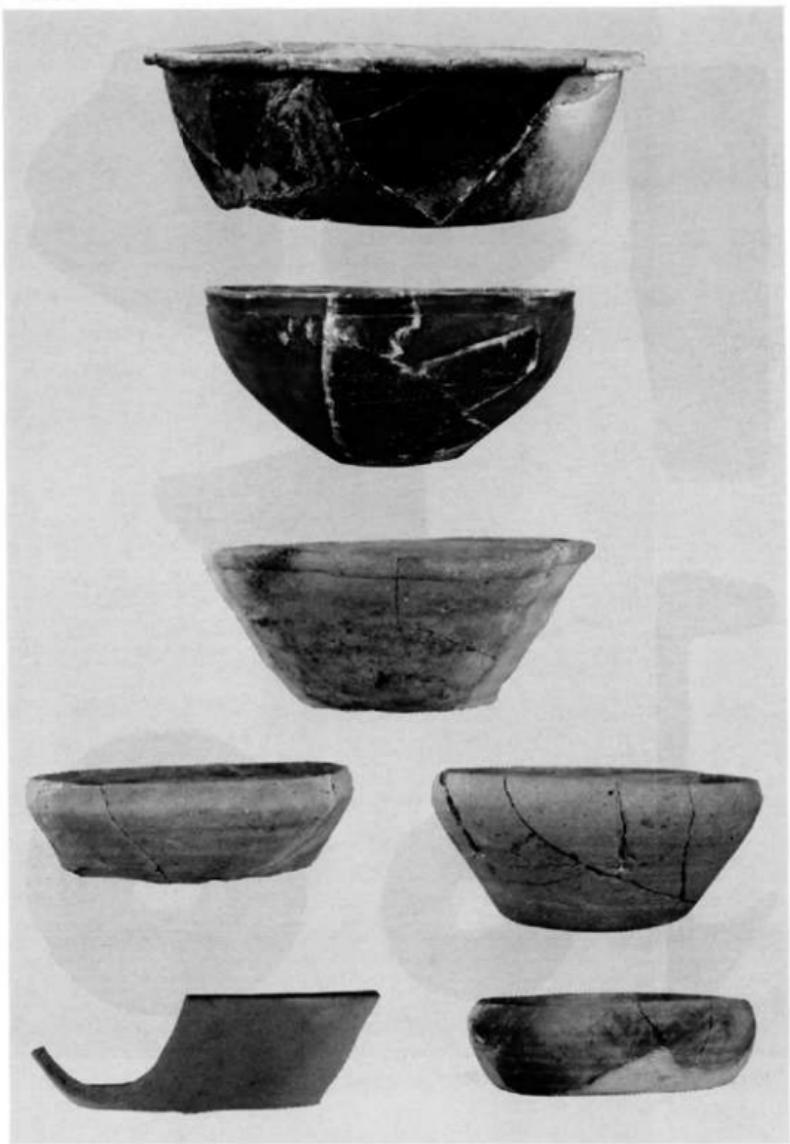
出土遺物四 (硯)



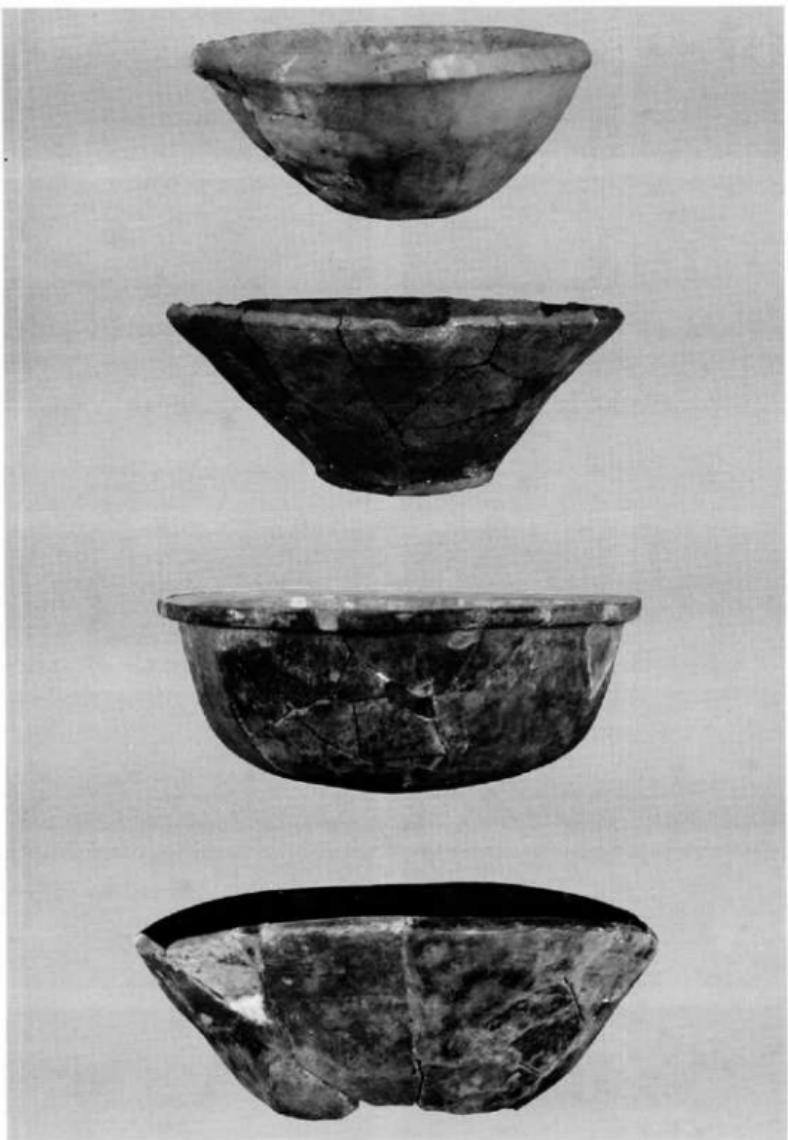
出土遺物四（石錠、砥石）



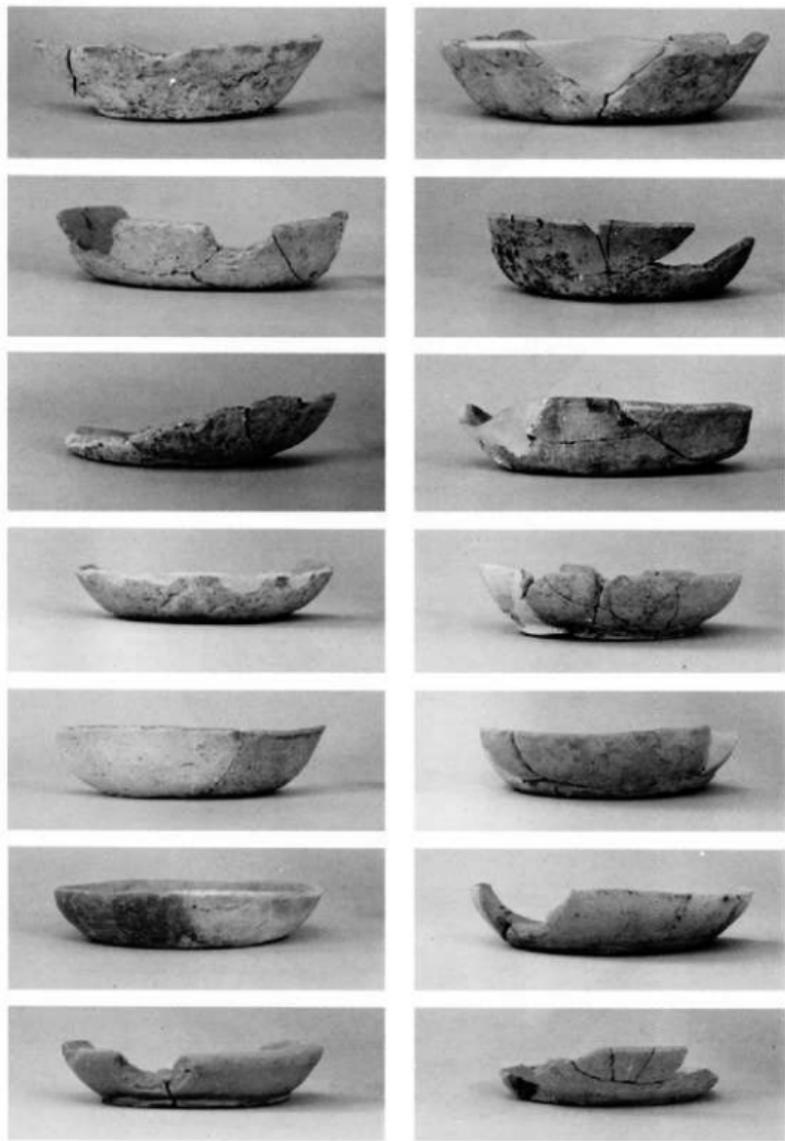
出土遺物 IX (銅製品、高麗青磁、貨幣)



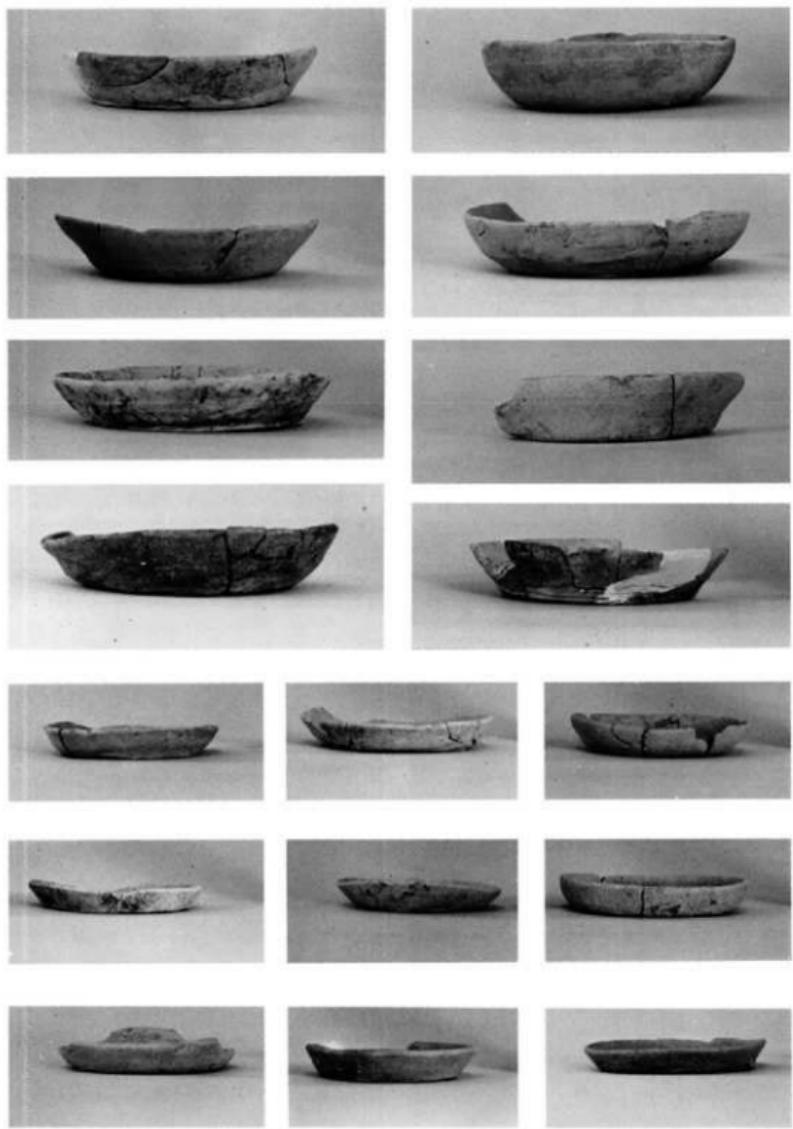
出土遺物X (擂鉢等)



出土遺物II (擂鉢等)



包含層出土土師質土器 I



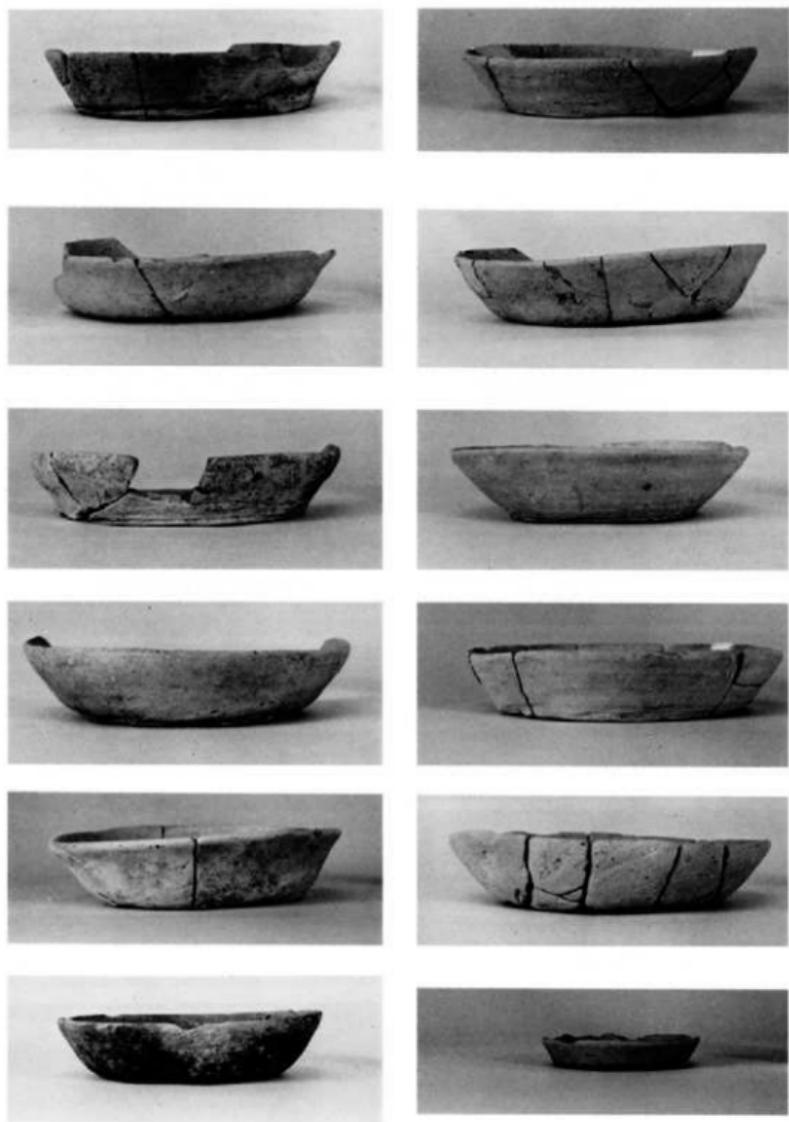
包含層出土土質土器 II



包含層出土土質質土器III



SD-02、SD-04出土土師質土器



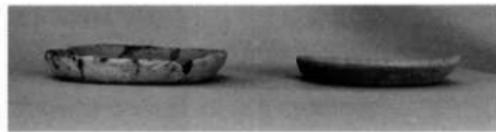
SD-04出土土師質土器



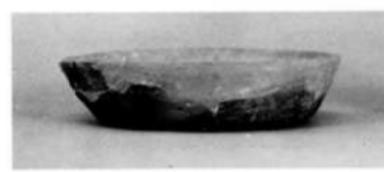
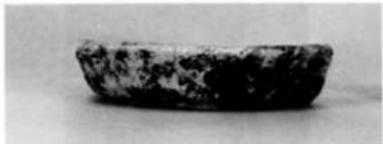
(1) SD-05出土土師質土器



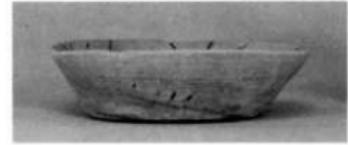
(2) SD-06出土土師質土器



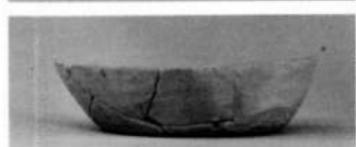
(3) 包含層出土土師質土器



(1) SE-01出土土師質土器



(2) SK-01出土土師質土器 I

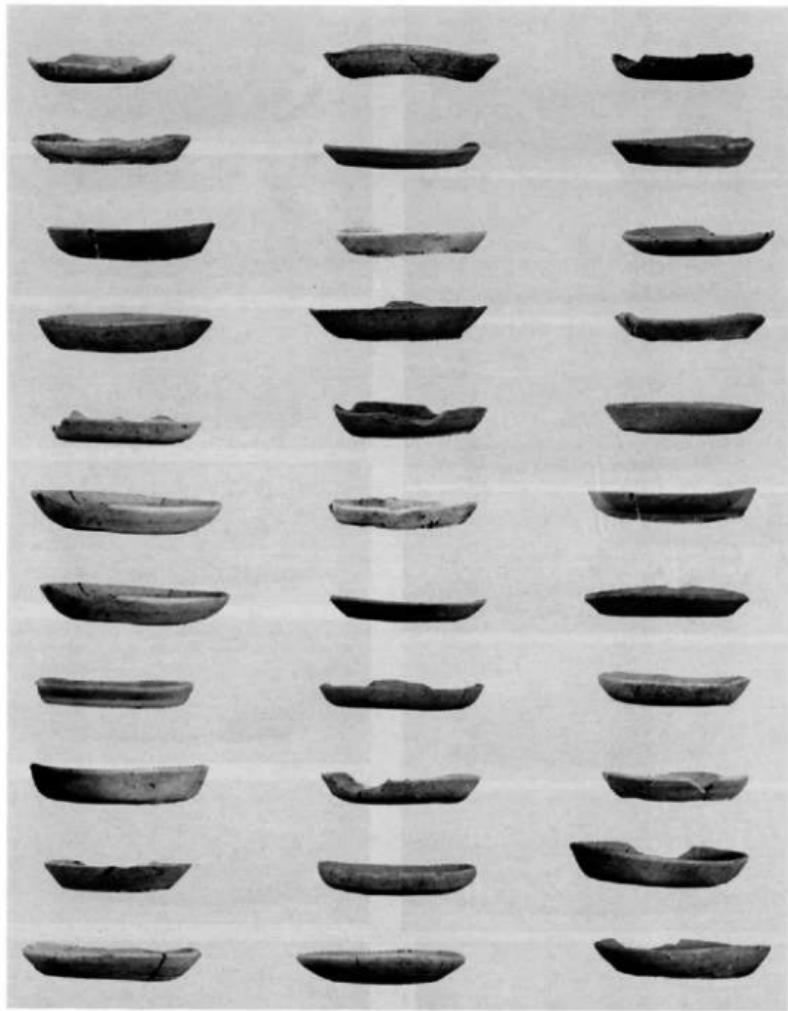




SK-01出土土師質土器III



SK-01出土土師質土器Ⅳ



SK-01出土土師質土器 V

柏原遺跡群 III

—柏原K・L遺跡・中世居館址と中世水田の調査—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第157集

1987年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10番29号
印刷 栄光印刷株式会社
福岡市東区箱崎下入道800

